

新約聖書注解シリーズ

新約聖書ハンディー注解

ウィリアム・マクドナルド 著

段落ごとの簡潔な解説

伝道出版社

POCKET
NEW TESTAMENT
COMMENTARY
Paragraph by Paragraph

William MacDonald

Everyday Publications

Ontario, Canada

EVANGELICAL PUBLISHERS

Tokyo, Japan

まえがき

この「新約聖書ハンディー注解」は、説明が明確で理解しやすく、読んでいて楽しい注解書です。段落ごとに要約された注解は簡潔なものですが、さまざまな問題や重要な教理はすべて取り上げられています。その意味や内容は伝統的な解釈に基づいており、霊的な示唆に事欠くことはありません。

本書は新約聖書を学び始めたばかりの人にとって最適の注解書です。全体をざっと大まかに、しかも、大切な神の真理を余すところなく把握できるからです。

また、新約聖書を学んでいる最中で、まだ全体の概略を完全には理解できていない人にとっても有益な書物です。そのために必要な知識はすべて提示されているからです。

さらに、新約聖書の教えにかなり通じている人にとっても、復習のための手引きとして用いることができます。新たな観点から各書巻のすばらしさを発見できることでしょう。

段落ごとの内容が簡潔に述べられているため、忙しい人でも比較的楽に読みとおすことができます。通勤時間や待ち時間、ちょっとした空き時間を利用してぜひ目をとおしてください。本書の学びをきっかけに、読者の方々が、新約聖書をさらに深く学んで行かれるよう願っています。

伝道出版社編集部

目 次

まえがき	3
マタイの福音書	7
マルコの福音書	51
ルカの福音書	81
ヨハネの福音書	126
使徒の働き	161
ローマ人への手紙	199
コリント人への手紙第一	220
コリント人への手紙第二	244
ガラテヤ人への手紙	261
エペソ人への手紙	270
ピリピ人への手紙	281
コロサイ人への手紙	289
テサロニケ人への手紙第一	295
テサロニケ人への手紙第二	304
テモテへの手紙第一	309
テモテへの手紙第二	319
テトスへの手紙	325
ピレモンへの手紙	329
ヘブル人への手紙	332
ヤコブの手紙	350

ベテロの手紙第一	357
ベテロの手紙第二	366
ヨハネの手紙第一	371
ヨハネの手紙第二	379
ヨハネの手紙第三	382
ユダの手紙	384
ヨハネの黙示録	388

マタイの福音書

はじめに

マタイの背景

ある日、マタイが税を集めていると、イエスがそのそばをお通りになった。救い主が「わたしについて来なさい」と言われると、マタイはすぐにすべてを捨てて忠実な弟子となった。後に彼はイエスによって12使徒のひとり選ばれ、さらにその後、選ばれて最初の福音書を書いた。

マタイの目的と構造

マタイがこの福音書を書いた目的は、ナザレのイエスがイスラエルの「王なるメシヤ」——ダビデの王位を正当に要求できる唯一の人物——であることを証明することであった。マタイは、キリストの誕生と幼年時代に2章、ガリラヤでの宣教に16章、ベレヤ（ヨルダン川の東方）での宣教に約2章、十字架に至る最後の週（場所はエルサレム）に約7章、復活された主の顕現に1章を充てている。イエスの言行がすべて完全に記録されているわけではないが、その生涯の出来事と教えが見事に組み合わされており、イエスが「神に油注がれた者」——救世主、キリスト——であることが明らかにされている。

マタイの概要

1. 「王であるメシヤ」の系図と誕生（1章）
2. 「王であるメシヤ」の幼年期（2章）
3. メシヤの宣教の準備と宣教開始（3, 4章）
4. 御国の憲法（5—7章）

5. 力と恵みあるメシヤの奇跡。それに対する様々な反応
(8章1節—9章35節)
6. 「王であるメシヤ」の使徒たち、イスラエルに遣わされる
(9章36節—10章42節)
7. あらし雲、たれこめる (11章)
8. 「ユダヤ人指導者たちによる拒絶」という決定的段階 (12章)
9. イスラエルが拒絶したことによる御国の暫定的な姿
(13章1—52節)
10. 高まっていく敵意にも変わることもないメシヤの恵み
(13章53節—18章35節)
11. エルサレムに向けて進もうとされる王 (19, 20章)
12. 「王であるメシヤ」のエルサレム到着 (21—23章)
13. 王なる主、再臨までの歴史の流れを示す (24, 25章)
14. 十字架直前の最終段階 (26章1—46節)
15. 王、十字架につけられる (26章47節—27章66節)
16. 復活とガリラヤでの再会 (28章)

1. 「王であるメシヤ」の系図と誕生 (1章)

イエスの系図 (1：1—17)

ヨセフの「息子」としてのイエスにはダビデの王位を正当に要求できる権利があったが、この系図はそれを明らかにしている。この系図は、ダビデからソロモンへ、さらにユダの歴代の王たちを経てマリヤの夫ヨセフへと続く。このマリヤがイエスを産んだのである。

イエスの誕生 (1：18—25)

マリヤは、ヨセフと婚約中、聖霊の奇跡によって身重になった。それを知らなかったヨセフは婚約を破棄しようとしていた。しかし、御使いが彼に次のことを確信させた。すなわち、マリヤが聖霊によって妊娠したこと、その子にイエスという名前をつけるべきであること

を。その子はやがて御民をその罪から救うことになるからである。その子が生まれるまで（イザヤ書7章14節の預言どおり）ヨセフと（処女であった）マリヤが肉体的に結ばれることはなかった。

2. 王であるメシヤの幼年期（2章）

東方の博士たちの訪問（2：1—12）

イエスが生まれてしばらくすると、東方から異邦人の博士たちが「王なるメシヤ」を拝むためにやって来た。ユダヤ教に改宗していたユダヤの王ヘロデは、ユダヤ人の王となるべき幼子が生まれたことを聞いた。彼は自分の王位が危うくなることを恐れ、ユダヤ教の指導者たちにメシヤが生まれる場所を尋ねた。その場所がベツレヘムだとわかると、幼子を見つけ出すために、「私も行って拝むから」と偽って、博士たちをベツレヘムに送り出した。しかし彼らは、イエスとその母を見つけ出して贈り物をささげた後、別の道から自分たちの国へ帰って行った。

エジプトへの避難（2：13—23）

御使いから警告を受けたヨセフは、イエスとマリヤを連れてエジプトへ逃げた（13—15）。ヘロデは、「幼子」の居場所をつきとめる努力が水の泡になったので怒り狂い、ベツレヘムとその近辺の2歳以下の男の子を皆殺しにするように命じた（16—18）。ヨセフは、ヘロデが死ぬと、それまでいたエジプトを出て、家族とともにナザレに行き、そこに定住した（19—23）。

3. メシヤの宣教の準備と宣教開始（3，4章）

バプテスマのヨハネの宣教（3：1—12）

2章と3章の間には28年から29年ほどの隔りがある。主イエスは30歳のとき、公に宣教を始めようとされた。しかし、主はまずバプテスマのヨハネの紹介を受けた。ヨハネはイスラエルの民に、「悔い改

めて『王』を迎える準備をせよ」と訴えていた。

人々は、ヨルダン川でバプテスマを受けることによって悔い改めを表現することになっていた。多くの者は心からそうしたが、パリサイ人やサドカイ人たちのように「芝居をする」だけの者たちもいた。ヨハネは言った。前者はやがて聖霊のバプテスマを授けられるが、後者は神のさばきという火のバプテスマを授けられると。

イエスのバプテスマ（3：13-17）

イエスがバプテスマを受けるためにヨハネのところに来られると、ヨハネは、「自分の『主』にバプテスマを授ける資格は自分にはない」と主張した。イエスにはもちろん悔い改めるべき罪はなかったが、「バプテスマを受けることによって、悔い改めた『イスラエルの残りの者』とひとつになるのだ」と説明された。また主は、このようなひとつの実例を示すことによって、次のことを教えておられたのである。すなわち、カルバリでの死という「バプテスマ」を受け、その後、復活することによって、ご自分が「すべての正しいこと」をどのように成し遂げられるのかを。

イエスが受けた誘惑（4：1-11）

イエスは道徳的に完全なお方であり、「王」として全く申し分のないお方であったが、サタンがイエスを誘惑したことによってそれが証明された。3つの誘惑は、(1)パンだけで生きること、(2)人目を引くスリル満点の離れわざで神を試みることに、(3)悪魔からこの世の国々を手に入れることであった。これらはエバが受けた誘惑に符合している。「その木は、まことに食べるのに良く、目に慕わしく、賢くするというその木はいかにも好ましかった」（創世記3：6）。そして、「肉の欲、目の欲、暮らし向きの自慢」（Ⅰヨハネ2：16）という、ヨハネの「この世の定義」とも符合している。イエスは、申命記からみことばを引用することによって、3つの誘惑すべてに立ち向かわれた。「すると

悪魔はイエスを離れて行った」。

イエスの初期の宣教（4：12—25）

主の大いなるガリラヤ宣教はここから始まる。イエスはナザレを去ってカペナウムに来られ、神の御国が（「王」という姿で）すでに到来したと説かれた。そして、ペテロ、アンデレ、ヤコブ、ヨハネを弟子として召された。そしてガリラヤ全土にわたって、いやしのみわざをなさった。マタイは、「ガリラヤの地に光が上る」というイザヤの預言がこうして成就したことにも言及している。

4. 御国の憲法（5—7章）

幸福な者と御国の民のたとえ（5：1—16）

「山上の垂訓」（5—7章）とも呼ばれる教えは御国の憲法と言える。「幸いについての教え」を読むと、御国の民の理想像がわかる（1—12）。彼らは塩と光にたとえられている（13—16）。このあとの17節から6章24節までには、御国の義がいかにもすぐれたものであるかが述べられている。

キリストと律法の関係（5：17—19）

キリストがまず第1に強調されたことは、ご自分は律法を廃棄するためではなく、成就するために来られたということである。主は、ご自分の生涯においてそれを完全に守られただけでなく、私たちに代わり、十字架の上でその刑罰を余すところなくお受けになることによって律法を成就されたのである。

真の義（5：20）

主は弟子たちに、律法学者やパリサイ人たちの義にまさる義を、身をもって示さなければならないと断言された。律法学者やパリサイ人たちの義はうわべだけの儀礼的なきよさにすぎず、決して彼らの心を

変えるものではなかった。

礼拝が受け入れられるために必要な和解（5：21—26）

律法には「人を殺してはならない」と記されているが、イエスは「兄弟に向かって腹を立てることさえしてはならない」と言われた（21, 22）。「人殺し」という名の種は、怒ることによってすでに芽生えているのである。したがって、「不和」が「怒り」にまで発展し、訴訟事件とならないうちに、信者は速やかに和解すべきである。兄弟姉妹との間に争いがあると、神は私たちの礼拝を受け入れてくださらない（23—26）。

情欲の源（5：27—30）

律法には「姦淫してはならない」と記されているが、イエスは「情欲を抱いて女を見てはならない」と言われた（27, 28）。みだらな思いをもって異性を見ることから姦淫は始まる。信者は、この「水源地」を制御するときのみ、そこから生じる悪しき流れをくい止めることができるのである。したがって、自分の目（見るもの）と手（すること）を制御する際に、きっぱりとした行動をとる必要がある（29, 30）。

イエスと離婚（5：31, 32）

律法には「妻を離別する者は、妻に離婚状（証明書）を与えなければならない」と記されているが、イエスは、「配偶者の不貞以外に離婚の理由となるものはない」と言われた。これ以外の理由で妻を離別することは妻に姦淫を犯させることであり、また、離別された女と結婚することも姦淫である。

イエス、誓いを禁じる（5：33—37）

律法には「もし宣誓して誓ったなら、その誓いを果たさなければならぬ」と記されているが、イエスは誓うことを全面的に禁じられた。

私たちの発言は首尾一貫した、うそ偽りのないものであるべきだから、誓いは不要である。ある人々は、この教えは将来のことを誓う場合に限られており、(通常は過去の出来事に関連している) 法廷で真実を述べることを誓う宣誓には当てはまらなないと考えている。

不当な仕打ちにどのように対処すべきか (5 : 38—42)

律法には「悪には自分が受けたのと同じ程度まで報復せよ」と記されているが、イエスは「悪には善で報いよ。右の頬を打たれたら、左の頬も向けよ。1 ミリオン行けと強いられたら、さらにもう1 ミリオン行け。どのような無礼にも親切で報いよ」と言われた。

人を愛する生き方 (5 : 43—48)

律法には「隣人を愛し、敵を憎め」と記されているが、イエスは「敵をも愛せ」と言われた。そうすれば、自分が神の子どもであることが証明されるだろう。神は、すべての人を心にかけてくださるお方だからである。

自己宣伝しない施し (6 : 1—4)

御国の義は、宗教的な偽善や人に見せるための善行を禁じている(1)。施しは人に見せびらかすべきものではない(2—4)。

祈りの手本 (6 : 5—15)

自分をさも敬虔らしく見せるために祈ったり、長々と繰り返し祈ったりすべきではない(5—8)。ふつう、祈りは、神への礼拝をもって始め、次に、神のみこころが行われることをとおして神が栄光をお受けになるよう祈り、最後に自分の必要を願い求めるべきである。その願いには、日々の必要が満たされること、他人を赦すこと、悪から救われることが含まれるべきである(9—13)。もし他人を赦さなければ、自分も「天の父」に赦していただくのを期待できない(14, 15)。

人に知られないように断食すること（6：16—18）

自分が断食していることを公表すべきではない。人に知られないように、神の御前でのみ断食すべきである。

天に宝を（6：19—24）

御国の民は、何が起こるか分からない未来のために金を蓄えておくような生き方をしてはならない。地上の富に対する関心と主に対する忠誠とは、決して両立するものではないからである。

主が与えてくださる（6：25—34）

御国の民には、主から与えられた一種の社会保障制度のようなものがある。それは次のようなものである。御国の民は、「いざという時」のために食べ物や着る物の備えをしておくといった取り越し苦労をしてはならない。神は、鳥に食べ物を与え、野の草花を美しく装ってくださるのだから、ご自分が一番心にかけておられる人間に良くしてくださらないはずがない。だから、神の国とその義とをまず第一に求めるべきである。そうすれば将来の必要は満たすと主は御民に約束してくださった。その結果、御民は将来のことを気づかう必要がなくなり、思い煩いから解放され、心を尽くして神に仕えることができるのである。

さばくな（7：1—5）

御国には、人を厳しく批判する精神が存在する場所はない。もし自分に他人以上の欠点（「目の中の梁ほどの」?!）があるなら、人を批判する権利がないのは当然のことである。

豚の前の真珠（7：6）

私たちは、神への冒瀆^{ぼうとく}と御民への暴力をもって応答し続ける人に、

御国の真理を分け与えよとは命じられていない。

祈りにおける忍耐（7：7—11）

神は私たちに良いものだけを与えようとしておられる。だから私たちは、揺るぎない確信をもってたゆまずに祈るべきである。

黄金律（7：12）

対人関係における黄金律は、自分がしてもらいたいように他の人にもすることである。

ふたつの道（7：13, 14）

キリストの弟子となるための門は狭く、その道は険しいが、豊かな人生へと続いている。訓練を避けてばかりいる人生には失敗と損失が待ち受けている。私たちは福音を伝えるときにもこの教えを適用しなければならぬ。

預言者の真偽を見分ける方法（7：15—20）

にせ預言者を見破る方法のひとつは、道徳的基準からその人物を判断することである。真の預言者は聖なる生活によって見極めることができる。

にせの信仰告白者（7：21—23）

「本物」の弟子は神のみこころを行う。「にせ物」の弟子は宗教用語を用いたり、宗教的な行いをしたりするかもしれないが、最後には化けの皮がはがれる。

賢い建築者と愚かな建築者（7：24—27）

賢い人はイエスのことばを聞くだけでなく、それに従って行動し、堅固な土台の上に自分の人生を築き上げる。愚かな人は自分勝手なや

り方を採用するため、逆境のときに自分を支えてくれるものが何ひとつない。

群衆の反応（7：28, 29）

イエスがこれらのすばらしい教えを語り終えられると、群衆は、主が権威をもってお語りになったことに大いに驚いた。無理もないことである！

5. 力と恵みあるメシヤの奇跡。それに対する様々な反応（8章1節—9章35節）

メシヤの奇跡のないやし（8：1—17）

8章1節から9章35節までには、力と恵みあるメシヤの奇跡と、それに対する様々な反応が記されている。イエスは、ただ手を触れるだけで、ひとりのらい病人（ユダヤ人）をいやされた（1—4）。次に、百人隊長のしもべ（異邦人）を、ご自分のことばによっていやされた（5—13。このとき、主ご自身はしもべのもとに足を運ばれなかった）。それから、手にさわっただけでペテロのしゅうとめ（ユダヤ人）の病をいやされた（14, 15）。最後に、大勢の人々の病をいやし、悪霊につかれた人々を自由にされた（16, 17）。これらのいやしは次のことを年代順に描写しているのかもしれない。

- （1）初臨の際、キリストがイスラエルに対してなされた宣教
- （2）現在、主が異邦人に対してなさっている宣教
- （3）再臨の際、主がイスラエルを回復されること
- （4）千年王国の期間に、主が大勢の人々に対してなさるみわざ

弟子志望者を試す（8：18—22）

キリストに従おうとすれば宿無しになることを覚悟しなければならぬし、この世の人間関係よりもキリストを優先させなければならぬ。ふたりの自称弟子はこのことを教えられたのである。

風と波を支配するお方（8：23—27）

自然の力もイエスに従った。主が命令されると、ガリラヤ湖の荒れ狂う嵐あらしも静まった。

従順な悪霊どもと豚（8：28—34）

悪霊どもも主に従った。イエスのことばを聞くと、悪霊どもは、それまでとりついていて、ふたりの人から出て行き、2千匹の豚の中に入った。その群れは即座に湖の中へ突進した。

このように、自然の力も悪霊どもも主に従った。ただ人間だけが従わなかったのである！

中風の人*の*いやし（9：1—8）

主が中風の人に「あなたの罪は赦された」と言われたとき、律法学者たちは、主にはそのようなことはできないと思ひ込み、腹を立てた。それで主は、ご自分にそうするだけの力があるという証拠を目に見える形で彼らに示すために、その中風の人をいやされた。律法学者たちはこの出来事に何の感銘も受けなかったが、群衆は感動した。

著者自身のあかし（9：9—13）

この福音書の著者は、ここで、自分自身の回心について述べている。彼は、自分の友人たちをイエスに紹介するために宴会を催した。イエスは、このような雑多な罪人たちの寄り集まりに参加された。彼らと親しく交わるイエスに対してパリサイ人たちは異議を唱えたが、主は、自分が来たのは、信心深いことを鼻にかけている者たちを招くためではなく、罪人を招いて悔い改めに導くためであると言われた。

断食についての問答（9：14—17）

ヨハネの弟子たちの質問に答えるために、主は時間を割いて次のように答えられた。第1に、イエスの弟子たちが断食しない理由は、イエスが彼らとともにおられるからである。主が去って行かれるときには彼らも断食するだろう。第2に、「律法」と「恵み」を混同してはならない。つまり、ユダヤ教という「古い皮袋」に、キリスト信仰という「新しいぶどう酒」を入れてはならないのである。

さらなるいやしの奇跡（9：18—35）

続く3つの奇跡は、罪人が回心する際の霊的な順序を示している。まず、死んでいた者が生き返る。会堂管理者の娘が生き返った記事のように（9：18, 19, 23—26）。2番目に、見えなかった目が見えるようになる。イエスをメシヤと認めたふたりの盲人の目が見えるようになった記事のように（27—31）。3番目に、回心した者は自由に口がきけるようになり、イエスをあかししはじめる。悪霊につかれたおしがいやされた記事のように（32—34）。予想どおり、キリストの敵たちは、これらの奇跡を見て激怒した。

会堂管理者の娘に対するイエスの働きは、ある女のために一時中断した。彼女は、群衆の中を強引に通り返し、主の着物のふさにさわることによっていやされた（20—22）。

6. 王であるメシヤの使徒たち、イスラエルに遣わされる（9章36節—10章42節）

迷える者たちへのあわれみ（9：36—38）

羊飼いのいない羊のような群衆をご覧になった救い主は、収穫のための働き手が起こされるように祈れと弟子たちに言われた。

イエス、12使徒を遣わす（10：1—15）

この章では話の流れが一時中断する。神は、宣教のために祈る者を

しばしば召される。主に働き人を送ってほしいと祈る信者は、自らも進んで出かけなければならない！ 王なるメシヤは12使徒を呼び寄せ（1—4）、彼らを「イスラエルの家の滅びた羊のところ」へ遣わされた（5、6）。彼らに命じられたことは、「王」という姿をとった天の御国の到来を告げ知らせること、しるしとしての奇跡を行うことによって、そのメッセージの確かさを立証すること、福音をただで聞かせることであった（7、8）。彼らは自分たちの必要を主にゆだねるべきであったし、人々のもてなしを（申し出られた所で）受けるべきであった。使徒たちを受け入れず、彼らのメッセージを拒んだ者は、さばきの日にそのための苦しみを被るだろう（9—15）。

イエス、「反対」が待ち受けていることを警告する（10：16—39）

主は、ご自分に従う者の前途には「憎悪」と「迫害」が待ち受けていると警告され、それらにどのように対処すべきかについて語られた（16—23）。彼らは主よりもひどい扱いを受けることを覚悟しておくべきであり、人を恐れるのではなく神を畏れるべきであり、御父が自分たちのことを大いに気づかっておられる事実を忘れてはならず、人々の前でキリストを大胆に告白すべきであった（24—33）。彼らは弟子であることの厳しい現実を主から教えられた。家族のだれかが主を信じたとたん、家族に分裂が生じ、信じた者はしばしば、主をとるか、家族をとるかを選択を迫られるだろう。主の弟子は、たとえ命を失うことになろうとも、すべてを捨ててキリストに従うべきである。キリストへの愛によって自衛本能に勝利しなければならない（34—39）。

キリストの代理人に対する報酬（10：40—42）

弟子たちは、自分たちがキリストご自身の代理人であることを忘れてはならなかった。彼らを受け入れた者は実はキリストを受け入れていたのであり、彼らに親切にしたことはすべて報われるだろう。

7. あらし雲、たれこめる (11章)

イエス、バプテスマのヨハネを励ます (11: 1—6)

この章ではあらし雲が群がりをはじめます。バプテスマのヨハネはずっと投獄されたままだった。彼は、もしイエスが本当にメシヤであれば、どうしてこのようなことが起こったのかと疑いはじめた。主は、メシヤに関して預言されていた奇跡がご自分によって行われている事実をヨハネに思い出させるよう命じて、使いの者たちを送り返された。

バプテスマのヨハネに対するイエスの賛辞 (11: 7—15)

次にイエスはヨハネに高い賛辞をお与えになった。ヨハネは預言者よりもすぐれた者であり、ご自分の先駆者であり、したがって、他のだれよりも偉大な者である。もし人々がヨハネを受け入れていたなら、彼はエリヤに関して預言されていた役割を果たしたことだろう。

拒絶と歓迎 (11: 16—30)

主は当時のイスラエルを気むずかしい「時代」だと言われた (16—19)。そして、ガリラヤにある3つの町を、その不信仰のゆえに非難された (20—24)。救い主は、激しい拒絶に遭われたにもかかわらず、父なる神のみこころを慰めとされた (25—27)。そして、疲れた者、重荷を負っている者をお招きになり、ご自分のもとに来て心の安らぎと良心の安らぎを得よと言われた (28—30)。

8. 「ユダヤ人指導者たちによる拒絶」という決定的段階 (12章)

安息日をめぐる論争——どうしても必要な働き (12: 1—9)

イエスの弟子たちが安息日に麦の穂を摘んでいるのを見て、パリサイ人たちは憤慨した。モーセの律法は、安息日に他人をあわれむ行為やどうしても必要な働きをすることを禁じてはおらず、イエスは旧約

聖書からそのことをパリサイ人たちに教えられた。あわれみは儀式を守ることよりも大切であり、また、ご自分こそ安息日の主であると語られた。

安息日をめぐる論争——いやし (12:10—13)

続いてパリサイ人たちは、イエスが安息日に片手のなえた男をいやされたことを非難した。彼らは穴に落ちた羊を安息日に引き上げていたが、主はそのことを指摘された。

イエスを滅ぼすための、安息日の陰謀 (12:14—21)

パリサイ人たちは安息日に主を殺すことをたくらんでいたが (14)、主はそのことを指摘することもおできになったのである！ しかし、主はそれを口にされなかった。主はただ宣教といやしのみわざを黙々と続けられた。イザヤ書41章9節と42章1—4節の預言——強制的な力にも派手な宣伝にもよらずに公義を勝利に導く、心優しい柔和な「しもべ」についての預言——が成就するために (15—21)。

聖霊に対する^{ほろとく}冒瀆 (12:22—30)

目も見えず、口もきけない、悪霊につかれた人をイエスがいやされたのを見て、群衆はイエスがメシヤかもしれないと思いはじめたが、パリサイ人たちは、主が悪霊どものかしらベルゼブルの力によって奇跡を行っていると言って、主を非難した。主は聖霊の力によって奇跡を行われたのだから、パリサイ人たちは聖霊をサタンと呼ぶことによって、聖霊を冒瀆していたことになる。主はまず、彼らの非難が矛盾に満ちたものであることを指摘された。すなわち、もし彼らの言うことが本当だとしたら、サタンは自分の力を自分に不利に働かせていることになるのではないかと。それから主は、ご自分が神の御霊によって悪霊どもを追い出しているのだから、神の国はすでに彼らのところに来ている、と指摘された。主は、悪魔のなわばりに攻め入り、悪魔

を縛り、その家財を奪い取るために来られたのである。

赦されない罪（12：31—37）

パリサイ人たちは聖霊に逆らうことを言ったので赦されない罪を犯したが、主はここでそのことを告げられた。彼らは、自分たちの心にあることを、そのことばによってさらけ出したのである。このときを境に、イスラエルに対するキリストのお取り扱いはいったん中断する。ユダヤ教の指導者たちが救い主を拒絶したことは、ユダヤ民族が主を拒絶することの前兆だった。事実、そのとおりになったのである。

パリサイ人、しるしを求める（12：38—42）

主がなさったあらゆる奇跡にもかかわらず、律法学者、パリサイ人たちのうちの何人かが厚かましくも主にしるしを求めた！ 主は、ご自分が死者の中からよみがえるというしるし以外に、彼らが得るものは何もないだろうと答えられた。ヨナがニネベに行ったとき、異邦人であるその地の住民たちは悔い改めた。異邦人であるシェバの女王は、ソロモンに会うためにはるばるイスラエルまで旅して来た。しかし、ユダヤ人たちは、彼らのうちにおられる神の御子を拒絶した。主は、しるしを求めるような信仰をお喜びにならない。

悪霊にとりつかれた人の状態の変化（12：43—45）

悪霊に取りつかれた人の状態が変化する話には、主の話を聞いているユダヤ人たちにとって特別な意味があった。「汚れた霊」とは偶像礼拝のことである。この「人」はイスラエルを表す。掃除して空っぽになった家は、偶像礼拝からの改心を物語っている。7つの「ほかの霊」は、最悪の状態に達した偶像礼拝を象徴している。

イスラエルという「家」は、バビロン捕囚の間、偶像礼拝から抜け出した。その家はきちんと片づいて空っぽだった。しかし、彼らは主イエスがその家に入るのを許さなかったので、将来さらに悪い形の偶

像礼拝——反キリスト崇拜——に陥るだろう。

イエスの眞の家族（12：46—50）

主の母と主の兄弟たちがやって来たとき、主はそこにいた弟子たちを指し示して、彼らこそご自分の「母」であり「兄弟たち」であると言われた。すなわち、霊的な人間関係が、生まれながらの血縁関係に優先することを教えられたのである。これもまた、イスラエルとの訣別を示していた。

アイアンサイドも次のように述べている。「これは、血筋に基づくあらゆる絆を放棄することであった。実際、イスラエルとの訣別は完全なものだった。主は全く新しい物事の秩序を待ち望んでおられたのである」。

9. イスラエルが拒絶したことによる御国の暫定的な姿 (13章 1—52節)

イエス、湖のほとりで教える（13：1，2）

前章において王と御国が拒絶された結果、御国は、再臨までの期間、新たな姿をとることになる。「天の御国」の奥義に関する一連のたとえ話によって、主は、ご自分が地上におられない間に何が起こるかを弟子たちに教えられたのである。

土壌のたとえ（13：3—9，18—23）

4種類の土壌のたとえは、御国のメッセージが4つの土壌のうちのひとつでだけ実を結ぶことを教えている。他の3つは、いわゆる「名だけの信者」のことを物語っている。良い地だけが眞の信者を象徴しているのである。

なぜイエスはたとえで話されたか（13：10—17）

主の教えを切に願い求めている人たちは悟るが、信じないと心に決

めている人たちは、真理に対して盲目のままだろう。

麦と毒麦のたとえ（13：24—30, 36—43）

麦と毒麦のたとえも、御国には「うわべだけの告白」と「内的な真実」とがある、つまり、「真の信者」と「名だけの弟子」がいるということを示している。「種を蒔く人」はイエスのことであり、「畑」はこの世界である（からだなる教会ではない）。「良い種」は御国の子どもたち、「毒麦」は悪い者の子どもたち、「敵」はサタンのことである。キリストが再臨されるとき、御使いたちが「麦」と「毒麦」とをえり分ける。御国の子どもたちは千年王国の時代を喜び楽しみ、他の者たちは滅ぼされる。

からし種のたとえ（13：31, 32）

からし種のたとえは次のことを示している。すなわち、御国の始まりは非常にささやかなものだが、やがて異常なほど発展し、あらゆる種類の偽りの教えがはびこるようになる。これは現在のキリスト教界のことであり、真のキリスト信仰の世界のことではない。

パン種のたとえ（13：33）

パン種が粉に混ざるたとえは、神の民の霊的食物の中に邪悪な教えが混じり込んでくることを描写している（聖書の中の「パン種」は常に「悪」を物語る）。パン種が小麦粉の中に広がっていくように、悪も御国の中に浸透して広がっていく。

たとえは預言の成就（13：34, 35）

マタイは話を一時中断し、主がたとえを用いられたのは、詩篇78篇2節のアサフの預言が成就したものであると述べている。

隠された宝のたとえ（13：44）

隠された宝のたとえは、キリストがイスラエルを「買う」ために、十字架でご自分の持ち物全部を「売り払われた」ことを教えている。

高価な真珠のたとえ（13：45, 46）

高価な真珠のたとえは、主イエスが教会を「買う」ために、カルバリでご自分の持ち物全部を「売り払われた」ことを思い出させる。

地引き網のたとえ（13：47—50）

7番目のたとえは、地引き網を海に下ろして、あらゆる種類の魚を集めることについて述べている。患難時代の終わりに、御使いたちが正しい者と悪い者とをえり分ける。正しい者は千年王国に入り、悪い者は火の燃える炉の中に投げ込まれる。

一家の主人のたとえ（13：51, 52）

これらのたとえの意味がわかったと答えた弟子たちに向かって、主は次のように言われた。旧約聖書からは古い真理を、イエスの教えからは新しい真理を取り出して、他の人々に分け与えなければならないと。

10. 高まっていく敵意にも変わる事のないメシヤの恵み（13章53節—18章35節）

イエス、ナザレで拒まれる（13：53—58）

宣教を終えてナザレに帰って来られたイエスは、ご自分が郷里では尊敬されない預言者であることに気づかれた。ナザレの人々は主を正しく評価しなかったため、主の奇跡の恩恵にあずかることができなかった。

ヘロデ、パプテスマのヨハネを殺す（14：1—12）

主の宣教のうわさがヘロデの耳に届いたとき、彼は良心に責めら

れ、自分が処刑したバプテスマのヨハネが死人の中からよみがえったのではないかと恐れた。3節から12節までには、ヨハネが殺されたいきさつが記されている。ヨハネは、ヘロデが自分の兄弟の妻と姦通していることを非難していた。ある日、ヘロデは、彼女の娘が踊りを踊ったとき、軽率な約束をした。このような機会を待っていた母親は、娘をおだててヨハネの首を求めさせた。ヨハネの弟子たちは自分たちの指導者の死体を葬り、より偉大な指導者イエスのところに行って、事の次第を報告した。

あわれみ深いキリスト（14：13—36）

ご自分に対する敵意と憎しみが高まっていくにもかかわらず、救い主は人々をあわれみ、宣教と奉仕をお続けになった。人々の病をいやし（13, 14）、5つのパンと2匹の魚で、男だけで5千人もいる群衆を満腹させ（15—21）、嵐のためガリラヤ湖上で絶望している弟子たちのために嵐を静められた（22—33）。ゲネサレでは、病人がみな主のみもとにきたため、その地の医者にはその日全く仕事がなかった（34—36）。

「人間の言い伝え」か「神の命令」か（15：1—9）

律法学者やパリサイ人たちは、イエスの弟子たちが先祖からの言い伝えに背いていると言って非難した。弟子たちが食事の前に入念に手を洗わなかったからである。これに対し、イエスは、伝承を重んじるパリサイ人たちのほうこそ神の命令に背いているとお答えになった。たとえば彼らは、「私のお金は神にささげられました」という決まり文句を唱えると、その者には貧しい両親を扶養する義務はない、と教えていたからである。

真の汚れは心の内から生じる（15：10—20）

それからイエスは、人を汚すものは口に入るものではなく、心から

出て来るものだという画期的な発言をされた。パリサイ人たちが腹を立てたのは、彼らに神のいのちがなく、神の観点から物事を見ることもないからだ、とも言われた。

食卓の下の小犬（15：21—28）

イスラエルが極度の不信仰に陥った中で、カナン人の女の信仰がひとときわ光り輝いた。彼女は、悪霊に取りつかれた娘を救ってもらうために、救い主のうわべだけの拒絶にあっさり引き下がることなく、取るに足りない異邦人の小犬にわが身をたとえた（この場合は家で飼われているペットを意味する）。主はその信仰を称賛され、娘をおいやしになった。

イエス、大群衆をいやす（15：29—31）

ガリラヤでイエスにいやされた大勢の人々は、おそらくデカポリス（パレスチナ北東部の地域）に住んでいた異邦人だろう。「彼らはイスラエルの神をあがめた」と、はっきり述べられているからである。

イエス、4千人以上の人々に食べ物を与える（15：32—39）

ガリラヤ湖よりさらに東に進んだ所で、イエスは7つのパンと数匹の魚をもって、男だけで4千人の人々に食べ物をお与えになったが、その残りを集めると7つのかごに一杯になった。

この章には、神の時代区分がいくつか現れている。パリサイ人や律法学者たちは主に対して絶えず押し問答と争いを仕掛けたが、それによってメシヤに対するイスラエルの拒絶が示唆されている。カナン人の女の信仰は、福音が現代において異邦人に広がっていることを描いている。大勢の群衆がいやされ、4千人の人々が養われたことは、千年王国——「健康」と「繁栄」という祝福が全世界にまで及ぶ未来——を指し示している。

天からのしるしを求める（16：1—4）

パリサイ人やサドカイ人たちが、厚かましくも天からのしるしを求めて、再び自分たちの不信仰をさらけ出した。彼らは、天候が変化する兆候を認めることはできたが、「時のしるし」を見分けることはできなかった。すなわち、メシヤが来られ、すばらしいみことばを与え、みわざをなさっておられたにもかかわらず、それを見分けることができなかったため、主は彼らを叱責された。彼らに与えられる唯一のしるしは主のよみがえりであり、やがてそれが彼らの滅びのしるしともなるだろう。

パリサイ人のパン種とイエスのパン（16：5—12）

弟子たちは湖の東岸で主と再会したが、食べ物を持って来るのを忘れていた。それで、パリサイ人やサドカイ人たちのパン種に気をつけるようにと警告されたとき、弟子たちは、主が食べるパンのことを言っておられるのだと考えたが、主は実際には邪悪な教義のことを述べておられたのである。何千人もの人々を養われたお方がそばにおられたにもかかわらず、弟子たちは依然として食べ物が足りないことに心を悩ましていた！ そこで主は、彼らを養われた奇跡についてもう1度、詳しく述べられ、「神の算術」と「神のやりくり上手」に関する教訓をお与えになった。主が5つのパンと2匹の魚で5千人を養われたとき、その残りは12かごもあった。7つのパンと数匹の魚で4千人を養われたとき、残りは7かごがあった。すなわち、主がお用いになる物が少なければ少ないほど、そして養うべき人数が多ければ多いほど、より多くの食べ物が残ったということである！

ペテロの大いなる告白（16：13—20）

弟子たちに対するイエスの教えは、ピリポ・カイザリヤで最も重要な段階に達した。イエスがだれであるかをはっきり知ることは、弟子

たちにとって最も重要なことであった。もしイエスが単に偉大な人物のひとりであるなら、イエスの主義主張は挫折するかもしれない、彼に従うことは愚かなことかもしれない。ペテロがイエスを「生ける神の御子キリスト」と告白したとき、主は次のように予言された。ご自分の教会はその偉大な真理の上に建てられ、ハデスもそれに打ち勝つことができず、ペテロが御国の扉を開けることになるだろうと（実際、ペテロは、ペンテコステを始め、様々な機会にそれを実行した）。

イエス、ご自分の死と復活を予告される（16：21—27）

弟子たちの信仰は、最悪のことと最善のこと——キリストが苦しみを受け、殺されることと、キリストが3日目によみがえること——を聞ける段階に達した。それを聞いたペテロは主に抗議した。主はペテロたちを、苦しみと拒絶と死の小道をたどってもなおご自分につき従うようにと召されたのに、彼はそのことを悟っていなかったからである。しかし、イエスは、死の向こう側には地上の王国の栄光があるだろう、と説明された。

特権を与えられた3人（16：28）

次の章でわかるとおり、3人の弟子たち——ペテロとヤコブとヨハネ——は生き長らえて、「人の子」が栄光に輝く御国とともに来られるのを見るようになるだろう。

キリストの変貌（17：1—8）

変貌の山で弟子たちが経験したことは、キリストが地上に君臨するために再び来られることの予告であった。後にペテロは次のように語っている。「私たちは、あなたがたに、私たちの主イエス・キリストの力と来臨とを知らせましたが、それは、うまく考え出した作り話に従ったものではありません。……私たちは聖なる山で主イエスとともにいたのです」（Ⅱペテロ1：16, 18）。主は、来たるべき千年王国のと

きのように、おおいを除いた栄光そのものの姿で出現されたのである。モーセ、エリヤ、ペテロ、ヤコブ、ヨハネは、御国の構成員の様々な分類を代表している。彼らが示すように、死をとおして御国に到達する者もいれば、天に引き上げられることによって御国に到達する者もあり、生き長らえて御国に入る者もいる。神の小羊は、インマヌエルの地の栄光そのものであり、モーセやエリヤよりもはるか高く引き上げられ、最高の地位をお占めになる。

エリヤに関する質問（17：9—13）

弟子たちは、マラキの預言に反してエリヤは来なかったのに、自分たちが御国を予見できたのはなぜだろうかと不思議がった。イエスは次のように説明された。エリヤはすでに来たが、人々が彼を殺したのであり、やがて彼らは「人の子」も殺すだろうと。それを聞いた弟子たちは、バプテスマのヨハネがエリヤの役割を果たしたのだと理解した。

祈りと断食の必要性（17：14—21）

信仰の高嶺^{たかね}を経験したあとで、人間の必要という谷に出くわす。イエスは、悪霊につかれた、ある男の息子をいやされた。弟子たちはいやそうとしたが、できなかった。主は弟子たちに、信仰が足りないからだと説明された。

イエス、再びご自分の死と復活を予告される（17：22、23）

救い主は、ご自分が裏切られ、殺され、よみがえることを再び予告された。弟子たちは、主がよみがえられるという約束を十分に理解していなかったので、非常に悲しんだ。

イエスとペテロ、自分たちの税を納める（17：24—27）

カペナウムに来たペテロは、自分の「先生」にも宮の納入金を支払

う義務があると誤解し、「半シェケルの税金」を集めている人たちに向かって、そうやってしまった（この税は神殿での奉仕のために用いられた）。イエスはペテロの誤りを正された。神の御子には自分の父の家を維持するために貢を納める必要などないからである。しかし、つまずきを与えないために、主はペテロをガリラヤ湖へ行かせた。ペテロはそこで1匹の魚をつり、その口の中にあった1枚のスタテル硬貨（シェケル硬貨と同価値）を宮の納入金として納めた。それはちょうど彼らふたり分の額であった。

謙遜（18：1—4）

マタイの18章は、『偉大さ』と『赦し』に関する説教と呼ばれてきた。この章に記されていることは、王であるキリストの従者にふさわしい行いの原則である。救い主が死と苦悩に直面しておられたにもかかわらず、弟子たちは御国で高い地位に就くことばかりを考えていた。主は弟子たちに、御国に入るためには、悔い改めて幼子のようにならなければならないことを思い出させた。

イエスを信じる小さい者たちに対する責任（18：5，6）

主の弟子を受け入れる者は主を受け入れるのである。しかし、（おそらくは弟子たちに罪を犯させることによって）彼らをつまずかせる者には、湖の最深部でおぼれ死ぬよりもさらにひどい運命が待ち受けていることだろう。

自己規制（18：7—9）

他人をつまずかせないために、必要ならば、どのような思い切った行動もとるべきである。

いのちの尊さ（18：10—14）

地位や身分が最もいやしい信者をも見下してはならない。なぜな

ら、神の御前では御使いたちがそのような信者の代理を務めているのであり、また彼らは、主がお救いくださる特別な対象だからである。優しい羊飼いなるお方は、迷った1匹の羊が減びることも望んでおられない。

罪を犯した者への懲らしめ（18：15—20）

もし、だれかが自分に対して罪を犯したら、まずふたりだけでその問題を解決するように努めるべきである。それがだめだったら、別のひとりかふたりを連れて行くべきである。それでもまだ、罪を犯した者が聞き入れない場合、その問題は集会（教会）に提出される。それでも聞き入れない場合、信者たちは彼との交わりを断つべきである。

無制限の赦し（18：21—35）

ペテロの質問に答えて、主は次のように言われた。すなわち、兄弟が罪を犯しても、彼が悔い改めるならそのつと赦すべきだと。それから、王に莫大な借金をして返せないでいるしもべのたとえ話をされた。彼のことをかわいそうに思った王は、彼の借金を免除してやり、その結果、そのしもべと彼の家族は奴隷にならずに済んだ。しかし、そのしもべには少額の金を貸していた友人がいたが、彼はその友人を赦してやるどころか、手荒く扱って彼を牢に投げ入れた。

このことを聞いた王は激怒し、そのしもべが借金を返すまで牢に閉じ込めておくよう命令した。すなわち、彼は終身刑を言い渡されたのである。

この教訓は明らかである。私たちは神によって無限の「借金」を免除された。だから、それに比べればほんのわずかな額にすぎない兄弟姉妹の「借金」など喜んで免除すべきなのである。

11. エルサレムに向けて進もうとされる王 (19, 20章)

ヨルダンの向こうの地でのイエスのいやし(19:1, 2)

主はガリラヤでの働きを終えられると、ヨルダン川の東側にあるペレヤに行かれた。ペレヤでの宣教は、19章1節から20章までに記されている。

離婚と再婚に関するイエスの教え(19:3-9)

パリサイ人たちは、イエスをわなにかけるために離婚に関する質問をした。主がどのようにお答えになろうと、主は見放されると考えたからである。イエスは次のことを彼らに指摘された。すなわち、結婚関係は親子関係に取って代わるべきものであること、結婚によりふたりの者が一心同体になること、旧約聖書では離婚が許されているが、それは決して神の理想ではないこと、これから先は配偶者の不貞だけが離婚できる唯一の正当な理由となることを。

独身生活に関するイエスの教え(19:10-12)

主の話を聞いた弟子たちは、それなら結婚しないほうがましだと結論づけた。それに対して、主は次のようにお答えになった。独身生活は、生まれつき性的能力を欠いている人や人為的に(外科的処置を施されたために)その能力を奪われた人、あるいは天の御国のために自ら進んで独身生活の道を選んだ人のためのものであると。

イエス、子どもたちを愛する(19:13-15)

弟子たちの抗議にもかかわらず、イエスは時間を割いて幼い子どもたちを祝福し、天の御国にふさわしい者として彼らを歓迎された。

金持ちの若い役人(19:16-26)

ある金持ちの青年が、永遠のいのちを得るには何をしなければならぬかと主に尋ねた。イエスはまず、その青年がご自分を神と認めるかどうか試されたが、彼はそのテストに失敗した。次に主は、モーセ

の律法を用いて、彼の心に罪の自覚を生じさせようとなさったが、その試みも失敗に終わった。もし彼が本当に隣人を自分自身のように愛しておれば、進んで持ち物を全部売り払い、貧しい人々に与えただろうが、彼はそれもできず、悲しみながら立ち去って行った。あまりにも多くの財産を持っていたからである。イエスはこの事例を用いて、金持ちが救われるのはどれほど難しいかを弟子たちに示された。ユダヤ人は伝統的に富を神の祝福と関連づけて考えたため、弟子たちは、それでは一体だれが救われるのかと不思議がった。その答えは、救いには神の御力という奇跡が必要だということであった。

御国で受ける報酬（19：27—30）

あの金持ちの青年とは対照的に、弟子たちはキリストに従うためにすべてを捨てたが、ペテロはそのことを自慢し、自分たちに与えられる報酬は何かと主に尋ねた。主は、千年王国における傑出した地位を約束なさり、そのうえ、この世の人生と永遠の人生における豊かな報酬も約束された。しかし、「取り引きの精神」を持たないようにと主はペテロに警告された。御国に早く入った者の多くは、報酬が与えられるとき、あと回しになることが多いからである。

「恩恵」か「公平」か（20：1—16）

ぶどう園で働く労務者のたとえ話は、キリストと「取り引き」しようとする精神を戒めたものである。早朝、何人かの労務者たちが、その日1日を1デナリで働くという契約を結んだ（これは、この当時、いなかの労務者が得ていた賃金の相場だった）。午前9時、午後3時、午後5時に雇われた労務者たちは、自分の賃金の決定を雇い主に任せ切った。1日が終わり、全員が1デナリずつ受け取ったとき、最初に雇われた者たちはひどく不平を言った。しかし彼らは、自分たちが取り決めた額を得たことに気づかされた。他の者たちはみな、恩恵にあずかったのである。「恩恵」は「公平」にまさる。最初に雇われた者

が最後に支払いを受け、最後に雇われた者が最初に支払いを受けた。

イエス、再びご自分の死と復活を予告される (20 : 17—19)

エルサレムに向かう旅の最終日となり、イエスは再び次のことを弟子たちに告げられた。すなわち、ご自分が裏切られ、死刑の宣告を下され、あざげられ、むち打たれ、十字架につけられると。しかし、ご自分はよみがえるのだと言って常に勝利を宣言された。主の復活によって事態は一変するだろう。それによって弟子たちは、自分たちが勝者の側にいることを確信するだろう。

野心を持つ母親 (20 : 20—28)

ヤコブとヨハネの母が、自分の息子たちを御国で栄誉ある地位に就けて欲しいと願ったとき、イエスは次のように説明された。すなわち、御父はえこひいきしてそのような地位をお与えになるお方ではなく、キリストのために苦しんだり、命を失ったりしたことへの報酬としてお与えになるのだと。ご自分の御国では、他人を支配することによってではなく、他人に仕えることによって「偉大さ」が測られるとも言われた。

イエス、ふたりの盲人をいやす (20 : 29—34)

イエスがエルサレムに向けてエリコを出て行かれると、ふたりの盲人が主をメシヤと認め、目が見えるようになることを願って執拗に叫び続けた。イエスが彼らにさわられると、彼らの目が開き、彼らは主に従って行った。

12. 王であるメシヤのエルサレム到着 (21—23章)

勝利の入城 (21 : 1—11)

オリブ山の東側で、イエスは、ろばの子とその母ろばを連れて来るために、ふたりの弟子をベタニヤに送り出された。イエスはそのろ

ばの子に乗ってエルサレムに入城されたが、これはイザヤとゼカリヤによる預言の成就だった。群衆は、上着と木の枝を道に敷いて大喜びで主を迎えた。

宮きよめ (21:12—16)

イエスはただちに神殿の庭に入って両替人を追い出し、神の家を強盗の巣にしていると言って彼らを非難された (12, 13)。主は、あわれみをもって病人たちをいやし、子どもたちがご自分をメシヤと呼んで迎えたときもそのままにしておかれたが、ユダヤ教の指導者たちがそのことを非難したとき、主は詩篇 8 篇 2 節——もし大人が賛美しないなら、子どもたちが主を賛美するだろう——を引用して、彼らの口を封じられた! (14—16)

いちじくの木をのろう (21:17—22)

主は、ベタニヤで一晩過ごされた後、再びエルサレムに戻られた。帰る途中、1本のいちじくの木を見て、永久に実がならないようにとのろわれると、それはたちまち枯れた。弟子たちが大変驚くと、彼らにこう教えられた。もし信仰があれば山に命じて動かすことさえでき、信じて祈れば祈りは無限に聞かれると。4月になっても小さな青い実がついていないということは、8月になっても間違いなく実を結ばないということである。

王の権威に対する異議 (21:23—27)

神殿の庭で、ユダヤ人の指導者たちがキリストの権威に異議を唱えた。主は、彼らのご自分をわなにかけようとしていることを知っておられたので、バプテスマのヨハネの働きは神からのものかどうか、彼らに問うことによって、彼らを窮地に追い込まれた。「神から来ている」と言えば、群衆が自分たちから離れ去ってしまうし、「神から来た」と言えば、なぜヨハネの言うことに従って悔い改め、キリスト

を信じなかったのか、ということになる。彼らがイエスの問いかけに応じなかったので、主も彼らの問いにお答えにならなかった。

ふたりの息子のたとえ (21：28—32)

ヨハネが「悔い改め」と「信仰」への招きをしたにもかかわらず、祭司長や長老たちがその呼びかけに応じなかったことを、イエスはこのたとえ話をとおして叱責しつせきされた。彼らはこの話の中の「兄」のようであった。ヨハネの奉仕を認めると公言しながら、その招きには決して応じなかったからである。反対に、取税人や遊女たちは、話の中の「弟」のように、最初は応じなかったけれども、最終的には従順に従った。

ぶどう園のたとえ (21：33—46)

この話の中の「家の主人」は神で、「ぶどう園」はイスラエル、「農夫たち」はユダヤの宗教的指導者たちである。収穫を受け取るために送られた「しもべたち」は預言者たちである。もちろん、主人の「息子」はイエスである。息子を見た農夫たちは、「あれはあと取りだ。さあ、あれを殺してしまおう」と言った。祭司長やパリサイ人たちは、たとえ話の中の農夫たちを、殺されて当然の悪者だと非難することによって、神の御子を殺した罪が自分たちにあることを自ら認めたのである。イエスは詩篇118篇22節を引用して、「家を建てる者たち」とは彼らのことであり、彼らは「石」であるイエスを見捨てたのだと告げられた。イエスは高く引き上げられ、彼らは引き下げられるだろう。彼らから御国が取り上げられ、主を信じる異邦人たちに与えられるからである。たとえ話の真意をつかんだ彼らは主を殺したいと思ったが、民はまだイエスを預言者として尊敬していた。

結婚披露宴のたとえ (22：1—14)

イエスは再び、特選の民であるイスラエルを「除外された者たち」

として、見下されている異邦人を「宴会の席に座っている客」として述べておられる。神は御子のために結婚披露宴を催され、パプテスマのヨハネと主の弟子たちを遣わすことによって「招待状」を送られた。食事の用意ができたときに、もう1度しもべたちが遣わされたが、これはおそらく「使徒の働き」の時代の、イスラエルに対する使徒たちの宣教を述べたものだろう。どちらの招待も拒まれた。神はご自分の「兵隊」、つまり、ティトゥスの軍隊を送り出して、紀元70年にエルサレムを滅ぼされた。それから神は、来る可能性のある者全員に「招待状」を出された。そのため、宴会場は信仰を持った異邦人で一杯になった。そのときでさえ、客は、主人が用意した礼服（すなわちキリスト）を身に着けていなければならなかった。

カイザルのものはカイザルに返せ（22：15—22）

パリサイ人たちとヘロデ党の者たちは、主をわなにかけようとして、カイザルへの忠誠心に関する質問を投げかけた。イエスは、カイザルの肖像が刻まれた硬貨を用いて、カイザルに貢ぎ物をする義務を否定することなく、神への忠誠心こそが最も必要であると主張された。

ひとりの花嫁に7人の夫（22：23—33）

復活を否定していたサドカイ人たちは、ひとりの女が7人の兄弟と次々に結婚した話をでっちあげ、天国では7人の兄弟のうちのだれがその女を妻にするのかと主に尋ねた。復活をバカげたことのように思わせようとしたのである。（復活という教えに基づいて）このような疑問に答えることは不可能だと考えていたからである。主は、彼らが聖書も神の力も知らないとお答えになった。聖書にはアブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神と記されているが、彼らは3人とも死んでいる。しかし、神は死んだ者の神ではなく、生きている者の神である。したがって、神は、これら族長たちのからだを墓からよみがえらせなければならないのである。

大切な戒め (22：34—40)

あるモーセの律法の専門家が、パリサイ人たちを代表して主に質問した。「律法の中で、大切な戒めはどれですか」。それに対してイエスは、知力、意志力、体力、精神力のすべてを尽くして神を愛せよ、また、隣人を自分自身のように愛せよ、と教えられた。

「神の子」と「人の子」(22：41—46)

それからイエスは、パリサイ人たちに、メシヤはだれの子かとお尋ねになった。彼らが「ダビデの子」と答えるやいなや、イエスは詩篇110篇1節のみことばを引用された。このみことばは一般にメシヤに関するものとして受け入れられていたが、その箇所ではダビデはメシヤを自分の「主」と呼んでいる。どうしてメシヤが「ダビデの子」であり、しかも同時に「ダビデの主」でもあるのか、彼らはその理由を説明できなかった！ イエスご自身がその答えである。つまり、人としてはダビデの子孫としてお生まれになったが、神としてはダビデの主なのである。

イエス、パリサイ人を評する (23：1—12)

救い主は律法学者とパリサイ人たちを公然と非難されたが、それは義憤から出たことばとも言えるものであった。彼らの教えは正しかったが、行いは間違っていた！ 彼らは他人に負いきれない荷を負わせたが、援助の手は全く差し伸べなかった。いかにも神を敬っているかのように見せかけ、他人よりも目立つ席を奪い合い、仰々しい肩書きを愛した。そのためイエスは、弟子たちに、「先生」とか「父」とか呼ばれてはならないと警告する必要をお感じになった。そのような称号は（三位一体の）神だけが有しておられるものであり、神だけがその役割を果たされるからである。偉大な人物になりたいと願うなら、自分を低くして人に仕えなければならない。

イエス、パリサイ人たちを公然と非難する (23:13—33)

それから主は、高慢な宗教的偽善者たちに対して「8つの災い」を浴びせられた。彼らは自分たちのために神の恵みを願わなかったばかりか、他人がそれを手にすることも望まなかった。彼らはやもめから奪い、長い祈りをしてはさも敬虔らしく見せかけた。また、改宗者をつくるのに異常なほどの熱意を示したが、彼らに教え込まれた改宗者たちは極めて悪い者になってしまった。彼らは、誤った解釈によって誓いから解かれる方法を教えた。彼らは、取るに足りない葉草や香草の十分の一を納めるときには細心の注意を払ったが、正義やあわれみや誠実はないがしろにしていた。社会的な体面を保つには注意深かったが、その心は貪欲と放縦で満ちていた。彼らは白く塗られた墓のようなもので、外側はきれいに見えるが、内側は退廃しきっていた。表面上は預言者たちに敬意を表したが、心の中では「最も偉大な預言者(イエス)」を殺そうとたくらんでいたのである。彼らは「蛇ども」であり、「まむしのすえども」であり、地獄に行くほかない者たちであった。

A (アベル) から Z (ザカリヤ) までの殉教者 (23:34—36)

これら律法学者やパリサイ人たちは、主イエスが彼らにお遣わしになる使者たちをむち打ち、迫害し、殺すだろう。最初の殉教者アベル(創世記)から(ヘブル語旧約聖書の配列順序による)最後の殉教者ザカリヤ(歴代誌第二)に至るまで、殉教の歴史は繰り返されてきたが、彼ら自身も、その罪の歴史を引き継ぐことになるだろう。

エルサレムに対するイエスの愛 (23:37—39)

主イエスは、記録に残っている中で最も厳しい非難のことばを述べられた後、エルサレムのために涙を流された。ご自分が遣わした使者たちが残忍な扱いを受けたにもかかわらず、主は愛をもって人々をご

自分のもとに引き寄せようとして来られた。しかし、民は主のみもとへ行きたがらなかったのである。その結果、彼らの神殿も、彼らの町も、彼らの国も荒れ果てるだろう。その状態は、信仰を持ったユダヤ人たちが王なるメシヤを迎える、主のご再臨のときまで続くだろう。

「神の目は、依然として下を向いたまま、
あちらこちらと移って行く。
このすさんだ荒野の中を、
『悲哀の子』がうろつき回る先を見つめて。
もし反逆の子が復讐ふくしゅうを選べば、
神はその不幸な運命を嘆き悲しむ。
神は心の底から悲哀のことばを洩らす。
『お前は私の願いを行おうとしない』と」。

13. 王なる主、再臨までの歴史の流れを示す (24, 25章)

神殿の崩壊 (24 : 1, 2)

オリーブ山における講話の中で、王である主は、ご自分が再臨されるまでの歴史の流れを明らかにされる。弟子たちは神殿の美しさに心を奪われていたが、イエスは、ローマ軍による破壊（紀元70年）が間近に迫っていることを考えておられた。

世の終わりの前兆 (24 : 3—14)

オリーブ山で弟子たちが尋ねた質問に答えて、主はまず、この時代を取り巻く状況について詳しく説明された。患難時代の前半、そのような状況は一層ひどいものになるだろう。にせの「キリスト」たち、戦争や戦争のうわさ、ききん、疫病、地震、信者への迫害、裏切り、にせ預言者たち……、人の愛も冷めきってしまうだろう。しかし、真の信仰は最後まで持ちこたえ、御国の福音は全世界に宣べ伝えられる

だろう。

「荒らす憎むべき者」(24:15—28)

ダニエルの預言どおり、患難時代の真っ最中に、忌むべき偶像がエルサレムの神殿に建てられるだろう。それは大患難時代の始まりを告げるしるしとなるだろう。それは、人類史上、最悪の時代となる。ユダヤにいる人々は大急ぎで逃げなければならない。にせキリストやにせ預言者たちが、驚くべき奇跡を行って人々を惑わすだろう。また、メシヤが「どこそこ(ある限定された地域)にいる」と報じられたとしても、それは真実ではない。キリストの再臨は、いなくともひらめくときのように、だれの目にも、また、どこからでも見えるような形で起こるからである。不信仰な者や邪悪な者は、差し迫るさばきからひとりも逃れられないだろう。

キリスト再臨のしるし(24:29—35)

患難時代の終わりには、天体に異変が起こり、再臨のしるしが現れるだろう。そのとき、「人の子」が、力と輝かしい栄光を帯びて地上に戻って来られる。御使いたちは、全世界に離散している選びの民(ユダヤ人)を再びイスラエルに集める。いちじくの木が芽を出しはじめると夏が近いように、イスラエルがこのような状況に置かれることによって、メシヤの再臨が近いことがわかる。これらのことがすべて起こるまで、ユダヤ民族はキリストを拒み続けるだろう。

再臨の際の描写(24:36—51)

キリストが再臨される正確な日時を知っておられるのは御父のみである。ノアの時代のように、人々がふだんどおりの生活を営んでいると、その日が突然やって来る。ある者はさばきによって取られ、ある者は御国に入るために残される(36—41)。主は全く思いがけないときに来られるので、人々は目を覚ましていなければならない(42—44)。

賢いしもべは自分の時間を割いて神の家族に食事を与える。悪いしもべは、「主人（キリスト）」の帰りが差し迫っていることを否定し、酒に酔い、他人を虐待する。王である主が来られると、これら不信仰なにせ者たちを罰し、他の偽善者たちと同じ運命に遣わせるだろう。

2種類の「花嫁の付き添い役」(25：1—13)

「目を覚ましている」ことの大切さが、10人の乙女（花嫁の付き添い役）のたとえ話によって、さらに強調されている。彼女たちがみな眠っていると、突然、花婿がまもなく到着するという叫び声がした！賢い娘たちはランプに油を入れていたので迎えに出たが、愚かな娘たちは準備ができていなかったため、婚礼の祝宴から締め出された。もちろん花婿はキリストのことであり、「婚礼」のためではなく「婚礼の祝宴」のためにこの地上に来られるのである。賢い娘たちは真の信者たちを表している。彼らは主とともに千年王国に入る。愚かな娘たちはにせの信仰告白者たちのことである。彼らは、メシヤ来臨の希望を抱いていると告白してはいるものの、聖霊を内に宿していない。

タラント（才能）は使うために与えられている (25：14—30)

王である主が戻られるとき、真のしもべの忠実な奉仕は報われるが、偽りのしもべの不正は処罰される。タラントのたとえ話はそのことを教えている。最初のふたりは、それぞれ違う金額を受け取ったが、ふたりとも元手を倍にしたのだから、実際には「同じ報酬」を受けたと言える。3人目の男は、自分のために言い訳をし、主人を侮辱したにすぎなかった。だから主人は、彼を「悪いなまけ者だ」と非難して、外の暗やみ、すなわち地獄に追い出したのである。

羊と山羊 (25：31—46)

キリストは、再び来られるとき、異邦人諸国をおさばきになる。それらの国々はこの箇所では「羊と山羊」にたとえられている。羊にあた

る諸民族は、患難時代に、キリストを信じるユダヤ人の兄弟姉妹たちに食べ物や着る物を与えたり、彼らを見舞ったりした人々である。山羊にあたる諸民族は、キリストの民を無視することによって、事実上キリストご自身を無視した者たちである。羊にあたる諸民族はキリストの栄光に輝く治世を楽しみ、一方、山羊にあたる諸民族は永遠の刑罰に入る。

この話を「大きな白い御座のさばき」と混同してはならない。「大きな白い御座のさばき」は千年王国の終わりに行われるものである。

14. 十字架直前の最終段階 (26章 1—46節)

イエスを殺す陰謀 (26：1—5)

イエスが、間近に迫った十字架のことを前もって弟子たちに通告しておられたとき、ユダヤ教の指導者たちは、どのようにして主を殺すかを相談していたのである。

ベタニヤでの香油注ぎ (26：6—13)

ひとりの女が、ベタニヤのらい病人シモンの家に来て、非常に高価な香油をキリストの頭に注いだ（この女はヨハネの福音書12章3節のベタニヤのマリヤと同一視されている）。弟子たち（特にユダ）はその行為を大変な浪費とみなした。しかし主は、福音が宣べ伝えられる所ならどこでも、このことも語られるだろうと言われ、愛と献身の思いから発した彼女の純真な行為に不朽の名声をお与えになった。だから今でも語り継がれているのである。

銀貨30枚 (26：14—16)

今度はユダが主を評価する番になった。彼は祭司長たちと取り引きし、銀貨30枚で主を裏切った。そして、それを行動に移す機会を待った。

過越の祭りを祝う (26:17-25)

種なしパンの祝いの第1日目に、イエスは、ある家の2階の一室で弟子たちと食卓に着かれた(主は、過越の祭りを祝う場所としてその部屋を指定しておかれた)。食事の途中、主は突然、衝撃的なことばを口にされた。弟子のうちのひとりがご自分を裏切ると言われたのである。それを聞いた弟子たちはみな自信を喪失した。その裏切り者は主とともに鉢に手を浸した者であった。主は、そういう者は生まれなかったほうがよかったとも言われた。裏切り者の名は主のことばによって判明したが、弟子たちの不安はそのときまで続いた。

主の晩餐の制定 (26:26-35)

それから、救い主は「主の晩餐(パン裂きの集会)」を制定された。パンをご自分のからだの象徴として、ぶどう酒をご自分の血の象徴としてお用いになった。主は、この地上を統治するために戻って来られるときまで、2度と弟子たちとともにぶどう酒を飲むことはないと言われた(26-29)。賛美の歌を歌った後、この小さな集団はエルサレムを出て、オリーブ山の西側の山腹にあるゲツセマネの園に行った。そこで、主は、弟子たちがみな数時間後にご自分を見捨てると言われた。ペテロは「決してつまずきません!」と言ったが、イエスは「今夜、……あなたは3度、わたしを知らないと言います」と答えられた。

ゲツセマネの園での苦悶 (26:36-46)

主は、ペテロとヤコブとヨハネを連れて園に入って行かれ、汗が血のしずくのようになるほどまでに苦しみもだえて祈られた(ルカ22:44)。主は、「もしみこころにかなうならば、この杯を過ぎ去らせてください」と3度願われた。3人の弟子たちは3度眠りに陥った。やがて、暴徒の群れに立ち向かう時がやって来た。

15. 王，十字架につけられる（26章47節—27章66節）

ゲツセマネでの裏切りと逮捕（26：47—56）

暴徒の一員としてやって来たユダは、イエスに近づき、口づけした。それは「犯人」を指し示すために前もって取り決められた合図だった。弟子のひとりが剣を抜き、大祭司のしもべの耳を切り落とした（ヨハネの福音書18章10節によると、この弟子はペテロだった）。イエスはペテロを叱責され、次のように言われた。ご自分は12軍団よりも多くの御使いを召集できるが、もしそうすれば、ご自分がこの世に来られた目的に反することになると。主は、暴動をあおったわけでもなく、ただ静かに教えを説いておられたにすぎないのに、そのような者を捕らえるために、剣やこん棒を携えてやって来る不合理さを群衆に向かって指摘された。この時点で、弟子たちは自分たちの師を見捨て、夜の暗やみの中に逃げて行った。

カヤパの前のイエス（26：57—68）

主イエスがお受けになった裁判は2種類あった。ひとつはユダヤ人による宗教裁判、もうひとつはローマ人による民事裁判だった。それぞれ3つの段階を踏んで行われた。マタイはユダヤ人による裁判の第2段階から始めているが、これは夜明け前に、カヤパと全議会（サンヘドリン）の前で行われた裁判だった。裁判の最後に、ふたりの証人が、「イエスは神殿を壊して3日のうちにそれを再建すると言って脅迫した」と証言した。しかし、裁判の席が最も緊迫の度を増したのは、救い主が次のように言われたときである。すなわち、ご自分は神の御子キリストであると証言され、いつかまた力と栄光のうちに戻ると誓われたのである。それを聞いた大祭司は、神に対する冒瀆ぼうとくだと言った。群衆は、イエスが死刑に値すると大声で叫んだ。

ペテロの3度の否認（26：69—75）

わが身に危険が降りかかることを恐れたペテロは、外の中庭で矢継ぎ早に3度も主を知らないと言った。近所の鶏が鳴いたとき、ペテロはわっと泣き崩れた。

サンヘドリンでのイエス (27: 1, 2)

夜間の裁判は正式なものとなされていなかったもので、ユダヤ教の指導者たちは、死刑判決を有効なものとするために、翌朝、議会を召集した。それから、彼らはポンテオ・ピラトに主イエスを引き渡した。ローマによる裁判の第1段階である。

良心の呵責^{かしやく}に駆られたユダの自殺 (27: 3—10)

自分の「師」を裏切ることによって罪を犯してしまったことを知ったユダは、祭司長や長老たちに金を返そうとした。その受け取りを拒否されると、ユダはその金を神殿に投げ込んで立ち去り、首をつって自殺した。祭司長たちはその金で陶器師の畑を買い、外国人を埋葬するための墓地とした。

ピラトの前のイエス (27: 11—26)

ピラトの下で行われた裁判は、まるで茶番劇のようなばかげたものだった。この総督はイエスの落ち着き払った態度に非常に驚いた。イエスに不利なことは何ひとつ見いだせなかったが、彼はユダヤ人の圧力に屈し、彼らのために犯罪者バラバを釈放し、イエスを十字架につけるために引き渡した。

兵士たち、イエスをあざける (27: 27—31)

ローマの兵士たちはイエスを官邸^{ひいろう}の中に連れて行き、緋色の上着を着せ、いばらの王冠をかぶせ、笏^{しやく}として棒を持たせてあざけた。そして、イエスを王と認めるふりをし、彼につばきをかけ、その棒でたたいた後、カルバリへ連れて行った。

イエス、十字架につけられる (27: 32—44)

事は急速に進展して行った。クレネ人シモンが無理やり十字架を運ばされた。兵士たちは苦痛を和らげるための飲み物をイエスに差し出したが、主はそれを飲もうとはされなかった。それから「史上最悪の犯罪」が行われた。いのちの君、栄光の主が「恥辱の十字架」に釘付けられたのである。兵士たちは主の着物を分けるためにくじを引き、十字架上に罪状書きを掲げた。それには「これはユダヤ人の王イエスである」と記してあった。

主とともに十字架につけられたふたりの強盗は、「自分を救うこともできないのか」と言ってイエスをののしった。ユダヤ教の指導者たちや道行く人々も同様であった。

不敬虔な者のために死なれたキリスト (27: 45—56)

暗やみの3時間——その間も、救い主は、私たちが受けるべき罪の刑罰を耐え忍んでおられたが——の後、イエスは大声で2度叫ばれた。そして、ご自分の霊をお渡しになった。まさにその瞬間、神殿の幕が真っぶたつに裂け、地が揺れ動き、岩が裂け、墓が開いた。イエスを見張っていた者たちは非常に恐れ、イエスが神の御子であると悟った。十字架の近くには、主に従い、主に仕えてきた忠実な女たちが何人もいた。

キリスト、ヨセフの墓に埋葬される (27: 57—61)

アリマタヤのヨセフは、ピラトからイエスのからだを埋葬する許可を得た。彼は岩を掘って作った自分の新しい墓を寄贈した。死体を布で包んでから墓の中に納め、墓の入口に大きな石を転がしておいた。

墓を見張る番兵 (27: 62—66)

翌日、祭司長とパリサイ人たちは墓に番兵を置く許可を得た。これ

は、弟子たちがイエスの死体を盗み出して、イエスがよみがえったという痕跡を作り出すのを防ぐためであった。もしそんなことになれば、イエスが「自分はメシヤであり、神の子である」と主張なされたときよりも、彼らにとって、さらに悪い事態になるからである。

16. 復活とガリラヤでの再会 (28章)

大変すばらしい知らせ (28：1—10)

日曜日の早朝、ふたりの「マリヤ」が墓へ行くと、激しい地震が起こった。御使いが天から降りてきて、石をわきへ転がしたのである。御使いは、キリストがすでによみがえられ、ガリラヤで弟子たちとお会いになることを女たちに確信させた。弟子たちにそのことを知らせるために、彼女たちが急いでその場を立ち去ると、主ご自身が彼女たちに会ってあいさつされたので、ふたりは主を礼拝した。主は、自分たちが見たことを他の者たちに語るように命じて、彼女たちを送り出された。

真っ赤なうそ (28：11—15)

この頃、意識を取り戻した番兵たちは、面目丸つぶれの報告を携えて祭司長たちのもとに向かっていた。祭司長たちは彼らを買収し、「自分たちが眠っている間に弟子たちが死体を盗んだ」と言わせた。こんなことはあり得ないことだが、それにもかかわらず、今日に至るまでそう主張されている（兵士たちは、眠っている間に起こった出来事をどのようにして知ることができたのだろうか）。

宣教の大命令 (28：16—20)

よみがえられたイエスは、ガリラヤで弟子たちに姿を現され、次のように命じられた。すなわち、全世界に出て行って、人々を弟子とし、バプテスマを授け、ご自分の命令をすべて守るように教えよと。そして、世の終わりまで彼らとともにいると約束された。

この宣教命令が取り消されたことは1度もない。主は、今なお、ご自分の民にこのことを命じておられるのである。

マルコの福音書

はじめに

著者

2番目の福音書はマルコによって書かれた（彼はヨハネとも呼ばれた）。彼は主のしもべとして順調に歩みはじめたが、やがて一時的に信用を失った（使徒15：38）。しかし、最終的には立ち直り、役に立つ者となった（Ⅱテモテ4：11）。

著者の目的

マルコは、完全なしもべとしての主イエスを描こうとしている。この書は「最も忙しい」福音書である。次から次へと立て続けに出来事が続く。「すぐに」といったようなことばが、話の合間にしばしば用いられている。文体は簡潔で力強い。物語はめまぐるしく展開していく。マルコは主の「ことば」よりも「行為」を強調している。奇跡が19も記されているのに対し、たとえ話は4つしか記されていない事実からも、このことがわかる。

カギとなる節

カギとなる節は10章45節である。「人の子が来たのも、仕えられるためではなく、かえって仕えるためであり、また、多くの人のための、贖いの代価として、自分のいのちを与えるためなのです」。

マルコの福音書の概要

1. 「しもべ」の宣教の開始（1章1—13節）
2. ガリラヤとその向こうの地における「しもべ」の働きと教え

(1章14節—9章50節)

3. ペレヤを経てエルサレムへ向かう途中でなされた「しもべ」の宣教(10章)
4. エルサレムでなされた「しもべ」の最後の宣教(11—13章)
5. 多くの人のための贖いの代価としての「しもべ」の死(14, 15章)
6. 「しもべ」の復活と昇天(16章)

1. 「しもべ」の宣教の開始(1章1—13節)

バプテスマのヨハネの宣教(1:1—8)

マルコは、イエスの系図、誕生、子どもの頃のことを省略している。それらは、しもべのことを記録するうえでは重要でないからである。その代わり、メシヤの先駆者であるバプテスマのヨハネのことを最初に紹介している。ヨハネは預言を成就する人物として現れ、悔い改めのバプテスマを説いた。苦行者のような生活を送りながら、自分の働きよりもメシヤの働きのほうがまさっていることを強調した。

イエスのバプテスマ(1:9—11)

イエスがヨハネからバプテスマをお受けになると、聖霊が鳩のようにイエスの上に下った。そして、イエスは「神の愛する子」とであると、神が天からお認めになった。

イエスが受けた誘惑(1:12, 13)

それから、救い主はただひとり荒野に行かれ、野の獣とともに40日間そこにいて、サタン誘惑を受けられた。このとき、御使いたちが主に仕えた。

2. ガリラヤとその向こうの地における「しもべ」の働きと教え（1章14節—9章50節）

イエスの初期の宣教（1：14，15）

マルコはユダヤにおける主の働き（ヨハネ1：19—4：54）を省略し、ガリラヤにおける大いなる宣教から始めている。イエスは次のように宣言された。神の国に入るよう、王である自分が誠意をもって招いているのだから、人々は悔い改めて福音を信じるべきだと。

イエス、4人の漁師を召す（1：16—20）

ガリラヤ湖のほとりで、主は4人の漁師——シモン、アンデレ、ヤコブ、ヨハネ——を召された。4人とも網を捨てて、「人間をとる漁師」になった。

メシヤの奇跡的ないやし（1：21—34）

カペナウムの会堂で、イエスは権威ある者のように教えられた。また、悪霊につかれた男をいやされたので、人々はその奇跡に非常に驚き、イエスの評判はガリラヤ中に広まった（21—28）。そのあとすぐに、ベテロのしゅうとめの熱病をいやされた。また、その家の戸口に集まって来た多くの人々をいやされ、多くの悪霊を追い出された（29—34）。21節から34節までに記されている奇跡はすべて1日のうちに行われたものである。

イエス、ガリラヤ全土に福音を宣べ伝える（1：35—39）

イエスは、朝早く祈られた後、ガリラヤ全土に福音を伝えるためにカペナウムを旅立たれた。

イエス、らい病人をきよめる（1：40—45）

ある所で、主は、ひとりのらい病人の熱心な願いに応え、彼に手を

触れていやされた。主は公言することを厳しく禁じられ、祭司のもとに行き命じられたささげ物をするよう指示された。しかし、彼の出来事を言い広めたので、イエスは町はずれに退かれた。しかし、そこにもまた群衆が押し寄せて来た。

中風の人のいやし（2：1—12）

主がカペナウムに戻られると、あまりにも大勢の人々が家の周りに群がって来たため、中風の人を連れて来た4人の人は近寄れず、屋根からその病人をイエスの前につり降ろした。主が中風の人に「あなたの罪は赦された」と言われたとき、律法学者たちは神への冒瀆ぼうとくだとつぶやいた。イエスは、不平を言った者たちに中風の人の罪が赦されているのをわからせるために、その人に、起きて、（わらで作った）寝床を持って歩いて行けと命じられた。彼はすぐにそのとおりに行動したので、人々はすっかり驚いた。

イエス、取税人マタイを召す（2：13—17）

ひとりの取税人がキリストの招きの声を聞き、すべてを捨ててキリストに従った。彼は、友人たちをイエスに紹介するために宴会を催した。律法学者たちは弟子たちに「あなたがたの先生は札つきの罪人たちといっしょに食事をする」と不平を言った。主イエスは彼らに「わたしは、独善的な人々を招くためではなく、罪人を招くために来た」と言われた。

断食についての問答（2：18—22）

ヨハネの弟子たちとパリサイ人の弟子たちが、なぜイエスの弟子たちは断食しないのかと問うと、主は次のように答えられた。自分が弟子たちのもとを去るまでは断食する必要はない。自分が弟子たちのもとを去ったら、そのときは彼らも断食するだろうと。さらに、ふたつのたとえを用いて、新しい時代がすでに始まっていることを示され、

その喜びと抑えきれない興奮は、かつての形式や儀式（これらは柔軟性がなく、融通の利かないものであった）と混ざることができないと教えられた。「律法」と「恵み」は相反する原理なのである。

安息日をめぐる論争——どうしても必要な働き（2：23—28）

続いて記されている出来事は、「ユダヤ教の伝統」と「福音の自由」との対立を説明している。パリサイ人たちは、弟子たちが安息日に麦の穂を摘んだことを非難した。それに対して、イエスは、ダビデと彼の部下たちが「供えのパン」を食べたことを思い出させた（そのパンは祭司だけが食べるようになっていた）。王（ダビデ）が拒まれたので、神がそうすることを彼に許されたのである。主は、安息日が（人間を縛るためではなく）人間に利益をもたらすために設けられたものであることと、安息日の主は「人の子」なるご自身であることを指摘された。

安息日をめぐる論争——いやし（3：1—6）

安息日に新たな事件が起こった（この出来事も、後に続く様々な事件の先例となった）。その日、イエスは会堂で片手のなえた男と出会われた。その男をいやす前に、イエスはパリサイ人たちに、「安息日に関する律法は善を行うことを禁じているか」とお尋ねになった。彼らは、イエスが安息日に人をいやすのは悪いことだと考えていた。しかし、自分たちは安息日にもかかわらずイエスを殺そうとたくらんでいたのに、それを悪いことだと考えていなかったのである！ 彼らが自分たちの非を認めず、答えることもできないでいると、イエスはその男をいやされた。そこでパリサイ人たちは、従来、敵であったヘロデ党の者たちのところに行き、彼らと主を殺す相談をした。

さらなるいやしの奇跡（3：7—12）

イエスがガリラヤ湖のほうに行かれると、大勢の人々が集まって来

たため、主は多くの人々をいやされた。汚れた悪霊どもはイエスを神の御子と認めたが、主はそのことを明らかにしないよう彼らに命じられた。ご自分の時がまだ来ていなかったからであり、また、悪霊どもにはその資格もなかったからである。

イエス、12使徒を送り出す（3：13—21）

次にイエスは12使徒を任命された。彼らを身近に置き、また、彼らを遣わして福音を宣べさせ、病をいやし、悪霊を追い出させるためであった。主が行っておられることを耳にした身内の者たちは、イエスは気が狂ったのだと思い込み、連れ戻しにやって来た（20, 21）。何と悲しいことだろう！ ご自分の家族にも真価を認めてもらえなかったとは。

聖霊に対する冒瀆^{ぼうとく}（3：22—30）

律法学者たちは、イエスがベルゼブルの力によって悪霊どもを追い出しているのだと言って非難した。それによって彼らは赦されない罪を犯したのである。もし彼らの非難が本当だとすれば、サタンは自分に不利なように働いていることになる。イエスはそう説明することによって、彼らの非難を論破された。実際、キリストの奇跡はサタンが没落する引き金となった。イエスこそ「強い人の家から家財を略奪している人」だったからである。律法学者たちは、聖霊による奇跡を悪霊どものかしらのせいにするという罪を犯した。そのため、彼らは決して赦されることがないだろう。

イエスの真の家族（3：31—35）

イエスは、母マリヤと兄弟たちが自分と話をするためにやって来たとき、「神のみこころを行う者たちが新しい神の家族である」と告げられた。

土壌のたとえ（４：１—２０）

小舟を説教壇として、イエスは神の国のたとえを教えられた。最初のたとえは４種類の土壌に関するものであり、それぞれ、みことばを聞く者の心の状態とその受容力を表している。

〈道ばたに落ちた種〉 土が固すぎて根を下ろすことができない。鳥が来て食べてしまった。

〈岩地に落ちた種〉 土の層が薄いために、根づくに至らない。

〈いばらの中に落ちた種〉 いばらの茂みに光と養分を奪われ、枯れてしまった。

〈良い地に落ちた種〉 好条件のそろった深くて肥沃な地に落ちたため、収穫量はそれぞれ違うものの、すべてが実を結んだ。良い地は真の信者たちを表している。彼らだけが神のために実を結ぶことができる。

燃えている明かりのたとえ（４：２１—２５）

神の真理を聞く者には、それを他の人々と分かち合う責任がある。燃えている明かりのたとえはこのことを教えている。こうした真理は^{ます}柝の下に隠しておくべきではない。つまり、主に仕えるための時間を、この世の仕事のためだけに用いてはならない。また、こうした真理を寝台の下に隠しておくべきではない。つまり、快適さ、安楽、怠惰によって福音の前進が妨げられてはならない。もし、真理を受け入れることのできる人を見つけたら、いつでも、どこでも、主の弟子はその人に真理を解き明かすべきである。新たな真理を受け入れ、それを自分の生活の一部とするたびに、主の弟子はさらに多くの真理を与えられるだろう。反対に、真理に答えないと、それまで手にしていたものまで失う羽目になるだろう。

生長する種のたとえ（４：２６—２９）

ひそかに育つ種のたとえはマルコの福音書にだけ記されている。こ

のたとえば、人間の力や技能とは全く関係のない、神秘的かつ奇跡的な過程を描いている。そのような過程をとおして、みことばは人の心のうちに効力を発し、神のために実を結ぶ。ふさわしい時が来ると、実った作物は刈り取られる。

からし種のたとえ（４：３０—３４）

からし種のたとえは、小さな始まりから異常な大きさにまで発展する御国の成長を描いている。からしの木が、鳥が巣を作れるほどの大きさにまで生長するのは異常なことである。同様に、真のキリスト信仰も口先だけのキリスト教にまで発展するだろう。その場合、キリスト教界は、あらゆる種類のにせ教師たちが巣くう、ねぐらとなるであろう。

嵐と波を支配するお方（４：３５—４１）

イエスと弟子たちが、ガリラヤ湖を東岸に向けて渡っていたとき、激しい嵐あらしが起こった。死ぬかもしれないと恐れた弟子たちは、眠っておられた主を起し、主が自分たちのことを全く気遣っておられないように思えたために主を非難した。イエスが起き上がり、嵐をしっかりとつけられると、嵐はすぐに静まった。そして、主は弟子たちの信仰の欠如をおしかりになった。弟子たちは、主の御力の前にただ呆然ぼうぜんとするだけだった。嵐や波までが言うことを聞くとは！

従順な悪霊どもと豚（５：１—２０）

ゲラサ人（ガダラ人）の地で、イエスは、きわめて凶暴な男から悪霊どもを追い出し、その悪霊どもが豚の大群の中に入るのをお許しになった。その結果、２千匹の豚が山腹を駆け降り、湖に落ちておぼれ死んだ。豚を飼っていた者たちがこの知らせを町に持ち帰ったので、正気に返ったその男を見るために大勢の者たちがやってくる。彼らは最初、恐ろしくなったが、やがて、イエスに、その地を去ってほしい

と願った。いやされた男は主のお供をしたいと願ったが、主は彼を郷里に帰された。神から御力とあわれみを受けた生き証人として。

健やかな12年と苦しみの12年（5：21-43）

ヤイロという名の会堂管理者が、自分の娘をいやしてほしいと主に嘆願した。12歳になる彼女は死に瀕ひんしていた。ヤイロの家に行く途中、ひとりの取り乱した女がイエスの歩みを止めた。彼女は12年の間、出血する慢性の病に苦しんでいた。彼女は、群衆の間をすり抜け、イエスの着物のふさにさわった。すると、ただちに病がいやされた。彼女が群衆の中へ姿を消す前に、イエスは彼女に名乗り出るようにと言われた。彼女は人々の前でイエスを救い主と認めた。それからイエスは彼女を平安のうちに去らせた。

ちょうどそのとき、使いの者たちが到着し、ヤイロの娘が死んだという知らせを伝えた。彼らは、もうイエスに来ていただく必要はないと言った。しかし主は、ペテロ、ヤコブ、ヨハネを連れてその家に行き、その少女に起きよう命じられた。すると娘はいやされ、主はその子を両親に返された。主は、この奇跡のことをだれにも言わないようにと命じられた。群衆の気まぐれな評判によって十字架への道が妨げられないためである。

イエス、ナザレで拒まれる（6：1-6）

イエスはナザレに帰って会堂で教えられたが、人々は、イエスがだれであるかを正しく認識することができなかった。彼らはイエスのことを、ほかの青年たちと何ら変わらない人物だと思っていたのである。預言者は（郷里以外の所では歓迎されるものの）郷里ではたいてい軽んじられるものだと救い主は言われた。民が不信仰であったため、ナザレの地は主のみわざの恩恵を受けることができず、神の御子もその不信仰に驚かれた。主はそこを去って、周囲の村々へ行かれた。

イエス、12使徒に権限を委託する（6：7—13）

弟子たちに権限を委託する時が来た。彼らは、悪霊どもを追い出す権威をもってふたりずつ出かけることになった。彼らは、神が自分たちの必要を満たしてくださると信じて、何も旅支度をせずに出かけなければならなかった。もてなしは（申し出られた限り）どこでも受け、その地方を去るまではその家にとどまらなければならなかった。もし人々が拒むなら、その場所にとどまる義務はなかった。このようにして弟子たちは出かけ、悔い改めを説き、悪霊どもを追い出し、病人に油を塗っていやした。彼らを拒むことは、彼らを遣わされた主を拒むのに等しかった。そのような者たちには厳しいさばきが待ち受けているだろう。

ヘロデ、バプテスマのヨハネを殺す（6：14—29）

イエスの奇跡のことを聞いたヘロデは、自分が処刑したはずのバプテスマのヨハネが生き返ったのではないかと恐れた（14—16）。

話は突然過去に戻り、ヨハネの死をめぐる周囲の事情が記される。ヨハネは、ヘロデヤと不法な結婚をしたとってヘロデを非難していた。ヘロデヤはヘロデの義理の姉だったからである。ヘロデヤは、王の誕生日に催された祝宴の場で復讐ふくしゅうの機会を得た。ヘロデヤの娘の踊りを見て大いに喜んだヘロデは、欲しいものは何でも、たとえ王国の半分でも与えてやるとその少女に約束した。母親にあやつられ、その娘はバプテスマのヨハネの首を求めた。ヨハネの弟子たちは遺体を引き取って葬り、イエスのもとに行って報告した。

5千人を養う（6：30—44）

使徒たちが休息を取るためにカペナウムに帰って来たので、イエスはガリラヤ湖の岸辺の人里離れた所に弟子たちを連れて行かれた。しかし、いつものように群衆があとをついてきたため、イエスは夕方遅くまで彼らを教えられた。それから、弟子たちのいらだちにもかかわ

らず、主は5つのパンと2匹の魚で5千人の男に食べ物をお与えになり、しかも、その残りは12のかごに一杯になった。

水の上を歩く（6：45—52）

弟子たちを舟で西岸に送り返された後、イエスは祈るために山のほうへ向かわれた。向かい風のため、弟子たちが暗やみの中で四苦八苦して舟を漕いでいるのをご覧になった主は、水の上を歩いて彼らに近づいて行かれた。彼らは最初、幽霊だと思い、おびえた。しかし、主が彼らを安心させようとして話しかけられ、舟に乗り込まれると、風がやんだ。5千人もの人々に食べ物をお与えになった奇跡を目の当たりにしたにもかかわらず、弟子たちはまだあっけにとられていた。主が何でもおできになることを、まだ悟っていなかったのである。

群衆、カペナウムまでイエスのあとを追う（6：53—56）

主が湖の西岸に戻られると、多くの病人たちが押し寄せて来た。主がどこへ行かれたとしても、人々は病人を床に載せて運んで行った。主に（たとえ着物の端であろうとも）触れた者はみないやされた。

「人間の言い伝え」か「神の命令」か（7：1—13）

パリサイ人と律法学者たちは、イエスの弟子たちが食前の儀式（食事の前に入念に手を洗うこと）を行わないと言って主を非難した。主は彼らに、「神のことばよりも自分たちの言い伝えを優先させる偽善者」の烙印らういんを押された。一例として主が引き合いに出されたのは、「自分のお金は主に（もしくは神殿に）ささげられた」と言うだけで、両親に対する義務を免除されるという彼らの言い伝えであった。このようにして彼らは「両親を敬え」という神の戒めを無にしているのだと主は言われた。

真の汚れは人間の内側から生じる（7：14—23）

それからイエスは次のように付け加えられた。人を汚すのは人の心から生じるもの（たとえば、神のこぼれを無視した言い伝え）であり、人の口に入るもの（たとえば、洗わない手で食べた食べ物）ではない。こう言って、イエスは、食べて良いものと悪いものとを区別した旧約聖書の律法を廃止され、すべての食物をきよいと宣言された。実際に人を汚すものは、性的な不道徳、盗み、殺人、欺き、高ぶりといった罪なのである。

主が「すべての食べ物はきよい」と言われるのを聞いたユダヤ人の弟子たちは、かなりのショックを受けたに違いない。

食卓の下の小犬たち（7：24—30）

ツロとシドンを目指し、北西に向かって旅しておられたとき、イエスはひとりの異邦人の女に出会われた。彼女は、悪霊につかれ娘を助けて欲しいと必死になって嘆願した。主は最初、彼女の願いを拒んでおられるように見えた。彼女は異邦人であり、ご自分のおもな使命はユダヤ人に対するものだと言われたからである。ユダヤ人は異邦人を犬とみなしていた。しかし、主が彼女の信仰を試せば試すほど、彼女の信仰は輝きを放った。ついに主は（遠く離れた場所におられたにもかかわらず）その娘をいやすことによって、彼女に報いられた。女が家に帰ると、娘は正気に返っていた。

イエス、ろうあ者をいやす（7：31—37）

ガリラヤ湖の東岸に帰られると、主は、耳が聞こえず、口もきけない人に会われた。主はその人だけを群衆の中から連れ出し、その耳と舌に触れ、「開け」と命じられた。すると、彼は元どおりのからだになった。主はこの奇跡を公言しないよう人々に言われたが、彼らはかえってますます主の言いつけにそむき、主のすばらしさと御力に対する驚きをことばで表現した。

イエス、4千人以上の人々に食べ物を与える（8：1—9）

主は再び大勢の空腹な人々に食べ物をお与えになった。今回は7つのパンと数匹の小魚を増やして4千人の人々に食べさせ、その残りのパン切れは7つのかごに収まった。デカポリスは異邦人の地だったので、ここに記された人々もおそらく異邦人だったのであろう。

天からのしるしを求める（8：10—12）

湖の西岸で、パリサイ人たちは天からのしるしを要求した。イエスは深く嘆息して、さらなるしるしは何ひとつ与えられないと彼らに告げられた。

パリサイ人のパン種とイエスのパン（8：13—21）

再び東に向かう舟の中で、主は弟子たちに、パリサイ人のパン種（偽善）とヘロデのパン種（不信仰、不道德、世俗主義）に気をつけるようにと言われた。弟子たちは、パンを持って来るのを忘れたので、主はそのことを言われたのだと思った。それで主は彼らに9つの質問をされた。最初の5つは彼らの霊的な鈍さを叱責するもので、あとの4つは、主がともにおられるにもかかわらず自分たちの必要について心配することを戒めるものであった。

イエス、ベツサイダで盲人をいやす（8：22—26）

主イエスはすでにベツサイダを非難しておられたので（マタイ11：21—24）、盲人を町の外に連れ出してから目が見えるようにされた。彼の視力は、徐々にではあったが、完全に回復した。イエスはその男に、町でこのことを言わないようにと口止めされた。ベツサイダが、もはや回復不可能なまでに墮落しきっていたからである。

ペテロの大いなる告白（8：27—30）

ピリポ・カイザリヤで、イエスが弟子たちとじかに話し合われたと

き、ペテロは、イエスが（「バプテスマのヨハネ」や「エリヤ」や「預言者のひとり」といった偉大な人間ではなく）キリストであると告白した。再び主は、このことをだれにも言ってはならないと弟子たちに命じられた。

イエス、ご自分の死と復活を予告される（8：31—33）

それからイエスは、ご自分が苦しみを受け、捨てられ、殺され、よみがえらなければならないことを、はっきりと弟子たちに告げられた。それを聞いたペテロは主をいさめたが、反対にしかりつけられる結果となった。彼がサタンのように語った、すなわち、神のみこころに反対したからである。

十字架を負うこと（8：34—38）

主は次のように説明された。キリストに従おうとする弟子は、自分を捨て、恥と苦しみと死に通じているかもしれない小道を（あらかじめよく考えたうえで）歩みはじめなければならない。もし自分のために生きるならば、人生で最もすばらしいものを手にする機会を失うだろう。もしキリストに仕えるために自分のいのちを失うならば、最もすばらしい人生を実際に経験するだろう。たとえ全世界を得たとしても、永遠に価値ある人生を送る機会を失えば、それは「損な買い物」というものである。キリストを信じるゆえに受ける恥辱を避けようとする者は、主が御力と大いなる栄光のうちに地上に戻って来られるときに、もっと恥ずかしい思いをすることになるだろう。

キリストの^{へんぼう}変貌（9：1—10）

「キリストの変貌」として知られているこの出来事は、前章の最終節の思想を引き継いでいる。すなわち、「人の子」がこの世に帰って来られるとき、それがどのようなものなのかを示しているのである。山上の光景はキリストが統治される千年王国の縮図であった、それ

は、ベールが完全に取り払われたキリストが、どれほど栄光に満ちたお方であるかを明らかにしていた。千年王国には旧約時代の聖徒たちも新約時代の聖徒たちもいるだろう（1—4）。ペテロは、軽率な提案をして、キリストの栄光をモーセやエリヤが受ける栄誉と同じ程度にまで引き下げてしまい、栄光に満ちた雲と天の御父の御声によって叱責された。山を降りながら、主は彼らに、ご自分が復活するときまで、いま見たことをだれにも話してはならないと命じられた（5—10）。主の変貌によって、3人の弟子たちは、キリストに忠実に従った人生に約束されている栄光のすばらしさを前もって味わった。キリストの弟子であるがゆえに、彼らはこの世で大きな犠牲を払うことになったが、来たるべき世では栄光という報いを受ける。それは犠牲を払う値打ちのあるものなのである。

エリヤに関する質問（9：11—13）

弟子たちは、なぜメシヤの先駆者としてのエリヤが（マラキの預言どおり）来なかったのか不審に思った。イエスは次のように答えられた。エリヤは（バプテスマのヨハネという姿をとって）すでに来たが拒まれたのだと。ヨハネが拒まれたことによって、「人の子」は苦しみを受け、さげすまれると記されている旧約聖書のみことばの正しさが立証されたのである。

祈りと断食の必要性（9：14—29）

イエスと弟子たちが山のふもとに戻って来ると、主は、悪霊につかれた息子のことでひどく取り乱している父親を目にした。その息子は激しい発作に見舞われていた。弟子たちには、その悪霊を追い出す力がなかったのである。イエスが悪霊に子どもから出て行くよう命じられると、子どもは激しいけいれんを起こした後、まるで死んだように横たわった。救い主は優しくその子を立ち上がらせ、父親に返された。弟子たちが、どうして自分たちにはできなかったのかを尋ねると、主

は、奇跡の中には一定期間の祈りと断食が必要なものもあるとお答えになった。

イエス、再びご自分の死と復活を予告される（9：30—32）

救い主は今やエルサレムに向かって、つまり、十字架に向かって南へ進んで行かれた。主は再び、何が待ち受けているのかを弟子たちにはっきりと告げられた。

謙遜（9：33—37）

しかし、弟子たちは、主のことを心配するどころか、自分たちの中でだれが一番偉いかを論じ合っていた。カペナウムに着いたとき、イエスは弟子たちに、偉大さへの道はへりくだって人に仕えることだということを思い起こさせた。そして、幼子に対して示したどのような親切も、主ご自身に（あるいは父なる神に）示したものとみなされると説明された。

イエスを信じる小さい者たちに対する責任（9：38—41）

次にヨハネが、「イエスの名によって悪霊を追い出している男がいたのでやめさせた」と主に報告した。主は、キリスト者の奉仕においては、キリストに反対しない者はみなキリストの味方であると説明された。キリストの名においてなされたどんなに小さな親切でも報いられるだろうと主は弟子たちに言われた。

自己規制（9：42—50）

一方、小さい者を迷わせ、真理ときよさに至る道からそらせる者がいれば、そのような者は力づくで溺死させられたほうがまだましである。弟子として真の小道を歩みはじめる者は、生まれつきの欲望とたえず戦わなければならない。体の一部が、あることによってつまずき、地獄に行くことになるなら、むしろその一部を失ってしまったほうが

ましである。罪深い欲望を思いきって断ち切ることができず、自分の塩気をなくしてしまう信者がいたとしたら、その一生は味気も価値もない、無意味なものとなるだろう。

3. ペレヤを経てエルサレムへ向かう途中でなされた「しもべ」の宣教(10章)

離婚と再婚に関するイエスの教え(10:1—12)

主がペレヤ(ヨルダン川の東方)に到着されるとすぐに、パリサイ人たちが「離婚は律法にかなったことかどうか」と主に尋ねた。救い主は、神のみことば——モーセが許したことではなく、神の本来の意図——に立ち返って考えるべきだと彼らに言われた。みことばは「結婚の絆きずとを断ってはならない」と教えている。弟子たちでさえ主が言われたことに困惑していると、主は、離婚したあとで再婚することは姦淫を犯すことだと厳しい口調で言われた(しかし、マタイの福音書19章9節では、ひとつだけ例外を設けられた)。

イエス、子どもたちを愛する(10:13—16)

弟子たちは、イエスに祝福していただくとうちの子どもたちを連れて来た親たちを追い返そうとしたが、主はそうならなかった。そして、神の国は子どもたちのものであり、子どものような純真な信仰と謙虚さを持つ人のものであると説明された。

金持ちの若い役人(10:17—22)

ある裕福な男が、永遠のいのちを自分のものとして受けるためには何をしたらよいかと尋ねると、救い主は彼の注意を律法に向けられた。彼には重大な必要があることを自覚させるために、そして、行いによっては神の国を相続できないことを教えるために。彼は(おもに人間関係を扱っている)5つの律法を守っているかのように言った。しかし、彼が隣人を本当に自分自身のように愛していたならば、持ち

物をすべて売り払って、貧しい人々に与えたことだろう。彼は悲しそうに立ち去って行った。多くの財産を持っていたからである。

御国で受ける報酬（10：23—31）

それからイエスは、裕福な人々が御国に入ることの難しさについて述べられた。金持ちが神の国に入るよりは、らくだが針の穴を通るほうがもっとやさしい、と主は言われた。それを聞いた弟子たちは非常に驚いた。富を神の祝福のしるしとみなしていたからである。イエスは、人にはできないことでも神にはできる、つまり、神は金持ちを（自分の富に頼ることから）救うことができになるとお答えになった。

ペテロが、「すべてを捨てた報酬として自分たちには何がいただけるのか」と尋ねると、イエスは、この世では百倍の報酬を受け、次の世では永遠のいのちを受けると約束された。しかし、取り引きするような心があれば、報酬を受けるとき、最後に回される可能性があるとお警告された！

イエス、再びご自分の死と復活を予告される（10：32—34）

救い主は、自分がユダヤ教の指導者たちに引き渡され、死刑に定められ、異邦人に引き渡され、あざけられ、むち打たれ、つばをかけられ、殺され、3日目によみがえることを知っておられたが、弟子たちの先頭に立ってエルサレムへの道を進んで行かれた。弟子たちは、主が恐れることなく、断固として神のみこころを行おうとされていることにひどく驚いた。

野心を持つ母（10：35—45）

ヤコブとヨハネが、御国の榮譽ある地位について論じ合っていたのは、確かに時をわきまえない言動であった！ イエスは、そのような地位は「ひいき」によって割り当てられるものではなく、受けた苦しみの度合いやキリストに対する忠実さに基づいて授けられるものだ

説明された。その話を耳にしたほかの弟子たちはヤコブとヨハネに腹を立てた。おそらく、ふたりが榮譽ある地位を、自分勝手な思いからむやみに欲しがったからであろう！ イエスは、ご自分の御国で偉くなるための方法は人に仕えることであると、もう1度、弟子たちに思い起こさせた。完全なしもべであるイエスは最高の模範である。

イエス、バルテマイの目を開ける（10：46—52）

主と弟子たちがヨルダン川を渡り、エリコに来ると、そこにバルテマイという盲人がいた。彼は肉体の目は見えなかったが、イエスをメシヤと認め、目が見えるようになることを主に願った。その明確な願いに対して明確な答えが与えられた。彼は目が見えるようになり、イエスについて行ったのである。

4. エルサレムでなされた「しもべ」の最後の宣教 (11—13章)

勝利の入城（11：1—11）

イエスの生涯における最後の週の記録がここから始まる。主はオリブ山の東側斜面のあたりに来られ、イスラエルの王なるメシヤとして公に名乗り出ようとしておられた。弟子たちは、救い主が指示されたとおりのろばの子を見つけた。主はそのろばに乗り、じゅうたんのよう敷き詰められた上着としゅろの葉の上を通してエルサレムに入られた。イエスがろばに乗って町に入り、神殿の中庭まで来られると、人々は熱狂的に叫んだ。その夜はベタニヤに戻られた。

いちじくの木をのろう（11：12—14）

その翌日、イエスは1本のいちじくの木をのろわれた。若い実がひとつもなっていなかったからである。早生の実がなければ、その木にはいつまでも実がならないことを主は知っておられた。この木はイスラエルを象徴している。それには葉（信仰告白）はあったが、神のた

めの実はなかった。イスラエルの民のうち信じない者たちはのろわれ、永久に実を結ばない。しかし、信じる者たちは救われるだろう。

宮きよめ（11：15—19）

イエスは、公生涯の初めになさったのと同じように、両替人たちを神殿の中から追い出された。律法学者やパリサイ人たちは激怒し、すぐにその場で主を殺したいと思ったが、民衆の機嫌を損ねることを恐れ、そうしなかった。

いちじくの木が枯れる（11：20—26）

あのいちじくの木が一晩ですっかり枯れたのを見て、弟子たちは主にそのわけを尋ねた。主は、困難を取り除く手段は信仰であると言われた。しかし、それに加えて、祈りが答えられるための基本的条件のひとつは他人を赦す心であるとも言われた。

王の権威に対する異議（11：27—33）

ユダヤ教の指導者たちはキリストの権威に異議を唱えた。主はそれに直接お答えになる代わりに、バプテスマのヨハネの権威は神からのものかどうかと尋ねられた。もし否定すれば、民衆の怒りを招くだろうし、同意すれば、悔い改めよというヨハネの呼びかけに従うべきだったということになる。彼らが答えようとしなかったので、主もご自分の権威について論じることを拒まれた。

ぶどう園のたとえ（12：1—12）

ぶどう園のたとえ話によって、主イエスは、神の御子を拒んでいるユダヤ人の権威者たちを告発された。「ぶどう園の主人」は神を、「ぶどう園」はイスラエルが占めている特権ある立場を表している。「垣」はモーセの律法、「農夫たち」はユダヤ教の指導者たちのことである。彼らは神のしもべたちも、預言者たちも殺し、ついには神の愛するひ

とり子さえも殺した。それゆえ、神は彼らを滅ぼし、異邦人たちに特権ある立場をお与えになるだろう。これらすべてのことは、イスラエルがメシヤを拒み、神が御子を高く引き上げられることを預言した旧約聖書のみことばの成就であった。たとえ話の意味がわかったユダヤ人の指導者たちは主を殺したいと思ったが、できなかった。まだ時が来ていなかったからである。

カイザルのものはカイザルに返せ (12: 13—17)

パリサイ人とヘロデ党は、ふだんは憎み合い、敵対していたが、イエスをわなにかけるために手を結び、「ローマ政府に税金を支払うことは律法にかなっているかどうか」と主に尋ねた。もし、かなっているとすれば、多くのユダヤ人が遠ざかって行くだろうし、かなっていないとすれば、反逆者として引き渡されるだろう。主は、銀貨を実物教育の実例としてお用いになり、カイザルのものはカイザルに、神のものは神に返せと教えられた。彼らは前者についてはすでに実行していたが、後者については実行していなかったのである。

ひとりの花嫁に7人の夫 (12: 18—27)

サドカイ人たちが、7人の兄弟と次々に結婚した女の話を持ち出して、からだのよみがえりという考え自体を笑いものにしようとした。やがて彼女自身も死んでしまうが、そうしたら、よみがえりのときには、その女はだれの妻になるのかと彼らは尋ねた。イエスは彼らに、「あなたがたは復活を教えている聖書も、死人をよみがえらせる神の力も知らない」と言われた。結婚関係は天国まで続くものではないと言われ、また、神は生きている者の神だから、アブラハム、イサク、ヤコブをよみがえらせなければならぬと教えられた。

大切な命令 (12: 28—34)

ひとりの律法学者がイエスに、一番大切な命令はどれかと尋ねる

と、(要するに)「全身全霊で神を愛せよ」であると答えられた。2番目は、「あなたの隣人をあなた自身のように愛せよ」であると付け加えられた。その律法学者が心から同意すると、救い主は、「あなたは神の国から遠くない」と言われた。

「神の子」と「人の子」(12:35—37)

イエスは神殿の中庭で人々に次々にお尋ねになった。もし、律法学者たちが言っているように(この件に関して彼らが言っていることは正しかった)、メシヤがダビデの子であるならば、どうしてダビデは(詩篇110篇1節で)メシヤを「私の主」と呼んでいるのかと。その答えは、「ダビデの子」はメシヤの人間性をもとに表現したことばであり、「ダビデの主」はメシヤの神性をもとに表現したことばであるというものである。

イエス、律法学者たちを非難する(12:38—40)

それから救い主は律法学者たちを公然と非難された。彼らが、自分を見せびらかすために長い衣をまとって歩き回ったり、仰々しい肩書きを愛し、上座に着くことや、社会的地位によって人間を区別したが、やもめから金品を巻き上げ、偽善の祈りをしていたからである。

貧者の一灯(12:41—44)

貪欲な律法学者たちとは対照的に、持っていたものを全部、主のために神殿の献金箱に投げ入れた献身的なやもめがいた。ほかの者たちはあり余る中からささげたが、彼女は極貧の中からささげたのだとイエスは言われた。救い主の計算では、彼女はだれよりも多い額をささげたのである。

神殿の崩壊(13:1, 2)

弟子のひとり^が、神殿の建物のすばらしさに主の興味を向けようと

したとき、主は次のように述べられた。神殿はやがて完全に破壊され、石が積まれたまま残ることは決してないと。

世の終わりのしるし（13：3—8）

主は、オリーブ山で、近い将来に起こることと遠い未来に起こることとを弟子たちに教えられた。この話の中では、紀元70年に起こった神殿の崩壊と、それよりずっとあとに起こる患難時代から主の再臨までの出来事が二重に語られている。「産みの苦しみの初め」のときに、主の民は、にせのメシヤたちにだまされてはならないし、「戦争のことや戦争のうわさ」を終わりのしるしと考えてはならない。その先にもまだ恐るべき苦難の期間が待ち受けているだろう。

イエス、敵対する者に気をつけるよう警告する（13：9—13）

主に従う者は宗教裁判や民事裁判にかけられるだろう。そして、御国の福音はあらゆる民族に宣べ伝えられるだろう。迫害され、裁判にかけられた信者たちには、弁明の際に神の助けが与えられるだろう。救い主に忠実な人々は身内にさえ裏切られるだろう。しかし、真の安全は、キリストに対する信仰を捨てることにあるのではなく、最後まで耐え忍ぶことにある。

「荒らす憎むべきもの」（13：14—23）

14節に記されていることは患難時代の真っただ中の出来事であり、そのとき、忌むべき巨大な偶像が神殿の中に建てられるだろう。そのとき人々は、足手まといになる物はすべて放っておき、着の身着のままユダヤから逃げ出さなければならない。それは世界が始まって以来、最悪の時代になるだろう。あまりにもひどい時代なので、神がその日数を少なくされなかったら、主の選びの民は生き残ることができないだろう。奇跡を行う「メシヤたち」が現れるだろうが、信者たちは彼らにだまされないようにすべきである。

キリスト再臨のしるし (13: 24—27)

患難時代の終わりには、天に激しい異変が起こるだろう。それは、人の子が力と偉大な栄光を帯びてこの世に戻って来られるしるしである。御使いたちは主の選びの民を世界中から集め、彼らはすばらしい王国の祝福を楽しむだろう。

いちじくの木のとえ (13: 28—31)

いちじくの木に葉が出て来ると夏が近いように、これまで述べられた出来事が起こると主の来臨は近い。これらのことが全部実現するまでは、キリストを拒んでいるユダヤ民族が死に絶えることはないだろう。

再臨の時期についての説明 (13: 32—37)

主がいつ来られるのかはわからない。完全なしもべである主イエスでさえ、その情報を与えられなかった (すなわち、他の者たちに啓示してもよい情報を何ひとつお持ちではなかったということである)。長旅に出かけた人と同じく、救い主もいつ帰って来られるかわからない。だから、主の民は目を覚まして、祈っているべきである。

5. 多くの人のための贖いの代価としての「しもべ」の死 (14, 15章)

イエスを殺す陰謀 (14: 1, 2)

それは最後の週の水曜日のことだった。祭司長と律法学者たちは主イエスを殺したいと思ったが、逾越の祭りの間に実行することはためらった。

ベタニヤでの香油注ぎ (14: 3—9)

らい病人シモンがイエスのために催した祝宴の席で、名もないひと

りの女がイエスの頭に高価な香油を注いだ。客の中にはそれを浪費と考える者もいたが、主は彼らのつぶやきを非難された。彼女はこの機会を捕らえて、埋葬の用意にと、主のからだに油を塗ったのである。そのため、彼女のことは世界中で記憶されるだろう。

銀貨30枚（14：10、11）

この時点で、ユダは、金で自分の師を裏切るということで祭司長たちと同意した。

過越の祭りを祝う（14：12—21）

ここからは、おそらく木曜日の出来事だろう。ふたりの弟子は救い主の指示に従い、2階の広間を見つけた。彼らは全員その場所で最後の過越の食事をした。その席でイエスはご自分を裏切る者を特定された。ご自分が、鉢の中の肉汁に浸した一切れのパンを与える者だと。

主の晩餐の制定（14：22—26）

ユダがその場を立ち去った後（ヨハネ13：30）、イエスは主の晩餐を制定された。その晩餐の最後に賛美の歌を歌ってから、彼らはオリブ山へ出かけて行った。

イエス、ペテロの否認を予告する（14：27—31）

オリブ山へ行く途中、救い主は弟子たちに、「今晚、あなたがたは全員、わたしを見捨てるだろう」と警告された。しかし、主は彼らを見捨てることなく、よみがえった後、ガリラヤで彼らと再会される。ペテロは決して主を否定しないと断言したが、イエスは「決して言わない」を「3度言う」に訂正された。ほかの弟子たちもペテロといっしょになって、自分たちが主に忠実であることを強く主張した。

ゲツセマネの園での苦悶（14：32—42）

やがて、この世の罪を負われることになるイエスは、ゲツセマネの園で、ご自分の前途に待ち受けている恐るべき苦しみと恐怖に直面された。その杯が過ぎ去るよという主の祈りは答えられなかった。したがって、主が十字架に進んで行かれる以外に罪深い人間が救われる道はなかったのである。主が祈りから戻って来られるたびに、ペテロ、ヤコブ、ヨハネは眠っていた（それは3度繰り返された）。そして、いよいよその場を立ち去る時が来た。

ゲツセマネでの裏切りと逮捕（14：43—52）

主を捕らえるために差し向けられた群衆とともに園の外で待機していたユダは、前もって決めておいた合図で主を指し示した。つまり、大げさな態度で主に口づけしたのである。それを見て、武装した者たちは主を捕まえた。弟子のひとり（ペテロ）が、イエスを守ろうとして、大祭司のしもべの耳を切り落とした（ルカの福音書によると、イエスはその耳をもとの状態に戻された）。この場に及んで彼らが力づくで主を捕まえることは非常に不自然なことだった！ 主は長い間、何事もなく神殿で彼らとともにいて、教えておられたのに、なぜあのようにイエスを捕らえなかったのだろうか。しかし、それは聖書のことばが実現するためだった。ある青年が、武装した群衆の手から逃れようとして、彼らの手に亜麻布の上着を残したまま、半狂乱状態で裸のまま走り去ったが、その青年はマルコだったのかもしれない。

カヤバの前のイエス（14：53, 54）

主がお受けになった宗教裁判は3つの段階を経て行われた。第1段階は大祭司の前で行われ、その間ペテロは、外の庭で役人たちといっしょに座って火にあたっていた。

サンヘドリンでのイエス（14：55—65）

第2段階は55節から始まるようである。サンヘドリン（ユダヤ人最

高議会)が真夜中に召集された。証人たちの証言は事実を歪曲わいぎよくしたものであり、互いに矛盾していた。イエスは最初、大祭司に何もお答えにならなかった。しかし、自分はメシヤだと誓って証言するのかと大祭司に尋ねられると、救い主はそのとおりだとお答えになった。そして、ご自分はいつかこの地上に戻って来ると述べられ、ご自分が神であることを公の場ではっきりと証言された。大祭司は言われたことを理解し、神を冒瀆ぼうとくした罪でイエスを告発した。議会はイエスに死刑を宣告した。信じられないことだが、彼らは救い主につばきをかけ、御顔を覆って目隠しをし、「自分に危害を加えている者の名を言い当ててみる」と要求した。

ペテロの3度の否認(14:66-72)

大祭司の官邸のすぐ下の庭で、ペテロは立て続けに3度主を知らないと言った。鶏が2度目に鳴いたとき、ペテロは主のことばを思い出し、激しく泣き崩れた。罪の意識に打ちひしがれたのである。

ピラトの前のイエス(15:1-5)

1節には翌朝開かれた議会のことが記されているが、これはおそらく、その前夜下された判決を法的に有効なものにするためであった。これが「宗教裁判」の第3段階であった。「民事裁判」も3段階を経て行われた。すなわち、ピラトの前、ヘロデの前、そして再びピラトの前で。マルコは、ヘロデによる裁判には言及せず、ピラトの前で行われたあとのほうの裁判だけを記している。イエスはピラトに対し、ご自分がユダヤ人の王であることをお認めになったが、祭司長たちの訴えに対しては何もお答えにならなかった。それにはピラトも非常に驚いた。

バラバの釈放(15:6-15)

総督が、イエスかバラバかのどちらかを釈放しようと言ったとき、

群衆は、バラバを釈放し、イエスを殺すよう求めた。^{おくびよ}臆病者のピラトはそれに同意した。

兵士たち、イエスをあざける（15：16—23）

兵士たちは、イエスを総督官邸の中庭に連れて行き、主をあざけるために「戴冠式」^{たいかんしき}を執り行い、イエスに紫の衣を着せ、いばらの冠をかぶせてその芝居を締めくくった。彼らはイエスを虐待し、さんざん笑い物にした後、カルバリへと連れ出した。そして、クレネ人シモンに無理やり主の十字架を運ばせた。

処刑される者には麻酔作用のある飲み物が与えられたが、イエスは飲もうとはされなかった。

イエス、十字架につけられる（15：24—36）

彼らは午前9時にイエスを十字架につけた。頭上には「ユダヤ人の王」と書かれた罪状書きが掲げられ、両側にも強盗がひとりずつ十字架に釘づけられた。主をののしった者たちは3種類に分類できる。通りがかった者たち、祭司長や律法学者たち、両わきにいたふたりの無法者である。正午から午後3時までの間、全地は暗やみで覆われた。苦しみの最後に、救い主は「わが神、わが神。どうしてわたしをお見捨てになったのですか」と叫ばれた。人々の中には「エリヤを呼んでいる」とうそぶく者もいた。ある者は海綿に酢を含ませて主に差し出した。

不敬虔な者のために死なれたキリスト（15：37—41）

それからイエスは大声で叫び、ご自分の霊をお渡しになった。その瞬間、神殿の幕が上から下まで裂けた。非常に驚いたローマの百人隊長は、イエスは神の子であると言って自分の信仰を表明した。ずっとイエスに従って来た忠実な女たちも何人かその場において、群衆の後ろのほうに立っていた。

キリスト、ヨセフの墓に埋葬される（15：42—47）

アリマタヤのヨセフは、ピラトのところに行き、救い主の死体を埋葬する許可を得た。彼は愛を込めて、主のからだを香料といっしょに亜麻布で包み、自分が所有する新しい墓に納めた。そして、墓の入口を大きな石でふさいだ。ふたりの女がその場において、イエスのからだはどこに安置されるかを見届けた（彼女たちの名前は両方ともマリヤであった）。

6. 「しもべ」の復活と昇天（16章）

大変すばらしい知らせ（16：1—8）

土曜日の日没後、3人の女の弟子たちは、イエスのからだに塗るための香料を買った。日曜日の朝、彼女たちは、どのようにして石を取りのけようかと相談しながら墓にやって来た。しかし、彼女たちが見ると、石はずでに転がしてあった！ 墓の中にはひとりの御使いがいた（彼女たちにはその御使いが青年のように見えた）。その御使いは彼女たちに、「イエスはガリラヤであなたがたとお会いになるだろう」と告げた。女たちはショックを受け、気が動転し、その場から逃げ出した。そして、恐ろしさのあまり、起こったことをだれにも言うことができなかった（新約聖書の古い3つの写本には、9節から20節までの記事が省略されている。しかし、そのほかのギリシャ語の写本とラテン語の聖書には記されている）。

復活後のイエスの顕現（16：9—13）

よみがえられた主はマグダラのマリヤにご自分を現された。彼女は悲しんでいる弟子たちにそのことを知らせたが、弟子たちは信じなかった。主は、エマオへ向かっていたふたりの弟子にもご自分を現された（ルカ24：13—31）。彼らはエルサレムに引き返し、ほかの弟子たちにそのことを告げたが、そのときもほかの弟子たちは信じようとは

しなかった。

宣教の大命令（16：14—18）

その日（日曜日）の晩に、イエスは弟子たちの前に姿を現され、彼らがマリヤの証言や、別のふたりの弟子の証言を信じようとしなかったことを叱責しつせきされた。そして、すべての造られた者に福音を宣べ伝え、信じる者にバプテスマを授けるよう命じられた。また、信じる者にはある種の奇跡が伴うと言われた。「使徒の働き」には、こうしたしるしが実際に起こったことが記されている。

昇天（16：19, 20）

主イエスは、よみがえられてから40日後に天に昇られ、神の右の座に着かれた。弟子たちは、主の命令に従って出て行き、「キリストを信じる信仰のみによって救われる」という良き知らせを宣べ伝えた。彼らの宣教の働きには約束された奇跡が伴っていた。

ルカの福音書

はじめに

著者と執筆年代

この福音書の著者ルカは、愛された医者であり、パウロとともに旅をした同労者だった。この書は紀元60年頃、おそらくカイザリヤで記されたものだろう。

ルカの福音書の強調点

ルカの福音書が描いている主イエスは、「人の子」であり、取税人や罪人たちの友であり、人類の救い主である。私たちの主の人間性は確かに卓越したものである。たとえば、主が祈っておられることへの言及が最も多いのは、このルカの福音書である。主の同情とあわれみについても、しばしば触れている。女や子どもが顕著な位置を占めているのはそのためだろう。ルカの福音書は伝道的な福音書としても知られている。「良い知らせ（福音）」が異邦人に向かって発信されている。世界の救い主としてのイエスを描いているからである。最後に、この福音書は弟子のための入門書である。私たちは、弟子が歩むべき小道を主の生涯のうちにたどる。主は、12使徒を訓練する際にも、それについて詳しく説明された。私たちが完全な人（イエス）の生涯のうちに見いだすものは、すべての人にとって理想的な人生を成り立たせる様々な要素である。主の比類なきことばのうちに、私たちが召された十字架への道を見いだす。そのことばを聞き、それに応える者は、いのちを——本物のいのちを——見いだすのである。

ルカの福音書の概要

1. 序文（1章1—4節）
2. イエスの誕生と少年時代（1章5節—2章52節）
3. 「人の子」の先駆者、バプテスマ、系図、誘惑（3章1節—4章13節）
4. ガリラヤにおける「人の子」の教えとみわざ（4章14節—9章50節）
5. ガリラヤからペレヤを経てエルサレムに至る救い主の宣教（9章51節—19章27節）
6. エルサレムでの最後の週。その頂点となる主の死（19章28節—23章49節）
7. キリストの埋葬、復活、昇天（23章50節—24章53節）

1. 序文（1章1—4節）

ルカは聖霊の靈感によってこの福音書を書き記したが、彼自身はこれらの出来事の見聞者ではなかった。彼は、実際に目撃者だった人々を書き記した記事や、口頭で伝えられた報告を用いてこの福音書を書いたのである。テオピロという名の男性は主の生涯に関してすでに教えを受けていたが、ルカは、そのすべてが信頼できるものであるということを確認させるために「報告書」を差し出そうとしたのである。

2. イエスの誕生と少年時代（1章5節—2章52節）

ガブリエル、ヨハネの誕生をザカリヤに告げる（1：5—25）

ルカの福音書は、バプテスマのヨハネの敬虔な両親（ザカリヤとエリサベツ）を紹介することから始まる。ある日、ザカリヤが神殿で祭司の務めを果たしていると、御使いが現れ、「エリサベツは男の子を産むだろう。その子をヨハネと名づけなさい」と告げた。彼らの息子は、人間的にも、霊的にも、身分の上からも、あらゆる面において偉大な者、すなわちメシヤの先駆者となるだろう（5—17）。ザカリヤ

が疑いの気持ちを言い表すと、その御使い（ガブリエル）は、「その子が生まれるまであなたは話せなくなる」と言った。ザカリヤは、神殿の外で待っている人々のところに戻ったが、口がきけなかったので、身振り手振りで彼らと話した。予告されたとおり、エリサベツは身ごもり、人里離れた場所に5か月の間引きこもった（18—25）。

ガブリエル、キリストの誕生をマリヤに告げる（1：26—38）

6か月後、その御使いは、ナザレにいる、マリヤという名の処女に現れた。彼女はヨセフという人のいいなずけだった。御使いはマリヤに、「あなたは男の子を産むだろう。その子をイエスと名づけなさい。その子は約束されたメシヤになる」と断言した。マリヤは、どうしてそのようなことが起こり得ようかと不思議に思ったが、御使いのことはによって、それが聖霊の奇跡であることを確信した。御使いは、彼女の親類のエリサベツが妊娠6か月であることも告げた。マリヤは、主のすばらしいみこころが成就するために、すべてを主にゆだねた。

マリヤ、エリサベツを訪ねる（1：39—45）

マリヤがエリサベツを訪ねたとき、不思議なことが起こった。エリサベツの胎内にいた子どもが小踊りして喜んだのである！ エリサベツはマリヤを「私の主の母」として迎え、彼女とその胎の子を祝福した。

マリヤの賛歌（マグニフィカト）（1：46—56）

マリヤは、主が自分にしてくださったことのゆえに心から主を賛美した。また、主を畏れる者に対する代々にわたる主のあわれみのゆえに、そして、アブラハムとその子孫への約束を守ってくださる真実のゆえに主をあがめた。マリヤは、エリサベツと3か月ほど暮らした後、ナザレに帰って行った。

バプテスマのヨハネの誕生と割礼（１：５７—６６）

御約束どおり、エリサベツは男の子を産んだ。親族や友人たちはザカリヤと名づけるのが当然だと思ったが、エリサベツはヨハネという名にしなければならぬと言った。彼らはその子の父親に最終的な決断を求めた。彼は、「ヨハネ」と書くやいなや、再び物が言えるようになった。

ザカリヤの賛歌（ベネディクトゥス）（１：６７—８０）

雄弁かつ感銘的なこの賛歌は、神がなされたこと、成就しつつある預言、誓いを果たされる神の真実に対して神をほめたたえている。また、ヨハネの使命を王なるお方の先駆者だと述べ、キリストの来臨を日の出にたとえている（６７—７９）。イエスは、いと高き所から私たちに照らす夜明けの光である。

この章は、ヨハネが成長し、イスラエルの民の前に公に出現する日まで隠棲していた話で終わっている（８０）。

イエスの誕生（２：１—７）

住民登録をするために、ヨセフはマリヤを連れてナザレからベツレヘムへ行った。どこにも宿が見つからなかったため、結局、ある宿屋の馬小屋に泊まった。そこでマリヤは男の子を産み、飼葉おけに寝かせた。

「いと高き所に、栄光が、神にあるように」（グロリア・イン・エクセルシス・デオ）（２：８—２０）

主の使いが、丘の中腹で野宿していた羊飼いたちにイエスのすばらしい誕生を告げ知らせた。御使いは、彼らが、布にくるまって飼葉おけに寝ている救い主を見つけるだろうと言った。すると、突然、おびただしい数の御使いが現れ、熱烈に神を賛美しはじめた。羊飼いたちはベツレヘムに行き、親子３人のその家族を見つけ、御使いたちの訪

れを告げた。彼らは礼拝の思いで満ちあふれ、大喜びで自分たちの羊の群れのもとに帰って行った。

イエスの割礼と奉獻（2：21—24）

生後8日目、幼子に割礼が施され、その子は正式にイエスと名づけられた。生後40日目、マリヤは、出産に伴う自分自身のきよめのために、家鳩のひな2羽をささげ物として神殿に携えて来た（レビ記12章参照）。マリヤのきよめが終わると、マリヤとヨセフは、子どもを神にささげるためにイエスを神殿に連れて来た。

シメオンの賛歌（ヌンク・ディミッティス）（2：25—35）

ちょうどそのとき、シメオンという名の敬虔なユダヤ人がイエスを腕に抱き、有名な賛歌を歌った。約束されたお方が来られたゆえに神を賛美したのである。

アンナ、贖い主の到来を証言する（2：36—38）

アンナというかなり高齢の女預言者も、突然、贖い主の到来を神に感謝しはじめた。エルサレムには贖いを待ち望んでいた信仰深い人々がいたので、彼女は彼らにイエスのことを語った。

イエスの少年時代と最初の過越の祭り（2：39—52）

イエスを神にささげた後、ヨセフとマリヤは彼を連れてナザレに帰った。そこでイエスは肉体的に、知的・精神的に、霊的に成長した(39, 40)。

さて、記録はイエスが12歳になられたときまで一気にとんでいる。その年、イエスは初めて過越の祭りを祝うためにエルサレムに行かれた。ナザレに帰る途中、イエスが一行の中にいないことが判明した。両親がエルサレムに引き返すと、イエスは神殿の庭で教師たちの話を聞いたり、質問したりしておられた。ヨセフとマリヤは、少年イエス

にとって御父の用件が最優先事項であることを理解できなかった。しかし、主は、この貧しいユダヤ人家庭に生まれた従順な子どもとしての立場を守り、知的・精神的にも、身体的にも、霊的にも、社会的にも、成長していかれた（41—52）。

3. 「人の子」の先駆者、バプテスマ、系図、誘惑 （3章1節—4章13節）

バプテスマのヨハネの宣教（3：1—17）

その後18年間、イエスは大工の息子としてナザレで過ごされたが、ルカはその間のことを省略し、バプテスマのヨハネの宣教が開始されたことについて述べている。イザヤの預言が成就し、人々にメシヤ来臨の心備えをさせるために先駆者がやって来た。ヨハネは、悔い改めた者たちにヨルダン川でバプテスマを授けた。しかし、悔い改めたふりをするだけの者たちを叱責し、もし本当に悔い改めたならば、生き方を変えることによってそれを証明せよと命じ、さもなければさばきが下るだろうと言った。ヨハネは、自分はキリストとは比べものにならないと述べ、自分のバプテスマは外面的かつ肉体的なものだが、キリストのバプテスマは内面的かつ霊的なものと説明した。彼は主をほめたたえ、自分には主の靴のひもを解く値打ちもないと言った。

バプテスマのヨハネの投獄（3：18—20）

それからおよそ1年半後、ヨハネはヘロデによって投獄された。義理の姉と姦通していると言ってヘロデ王を非難したからである。

イエスのバプテスマ（3：21, 22）

イエスは、ヨルダン川でバプテスマをお受けになることによって公に宣教を開始された。聖霊が主の上により、御父が御子を公にお認めになったのは、まさにこのときだった。

イエスの系図（3：23—38）

この福音書の目的は主イエスを「人の子」として描写することだから、イエスがアダムの子孫であることを示すことは重要である。ここに記された系図は、イエスがアダムの子孫であることを証明している（38）。一般にこの系図はマリヤの先祖、つまり、母方の家系をたどったものだと信じられている。ヘリ（23）はヨセフの義父だったに違いない。イエスはマリヤの「本当の息子」であり、ヨセフにとっては養子のような存在だった。

イエスが受けた誘惑（4：1—13）

荒野でサタンの誘惑を受けられたイエスは、ご自分が道徳的に完全なお方であることを実証された。悪魔の試みは、肉の欲・目の欲・暮らし向きの自慢、つまり、食欲・権力欲と所有欲・人に認められたいという欲望にねらいを絞ったものだった。この3つのどれにおいても、サタンは宗教的な言い回しを用いて語りかけ、時々聖書さえ引用した。私たちの主は、聖書を正しく用いて対抗された。

4. ガリラヤにおける「人の子」の教えとみわざ （4章14節—9章50節）

イエスの初期の宣教（4：14, 15）

13節と14節との間には約1年の隔りがある。その間、主はユダヤで宣教された（ヨハネ2—5章参照）。ルカは、ガリラヤ大宣教へと一気に場面を移す。

イエス、ナザレで拒まれる（4：16—30）

ナザレの会堂に行かれた主イエスは、イザヤ書の61章1、2節（前半）を読まれ、イザヤが語ったメシヤはご自分であると宣言された。主がこの世に来られた目的は、人類を苦しめ悩ませてきた、途方もなく大きな問題を解決するためであり、また、新しい時代の到来を告げ

知らせるためでもあった（16—21）。最初、人々は好意的な反応を示したが、主がナザレの町からも、イスラエルの国からも拒まれることを予言され、異邦人のほうへ向かわれることをほのめかされると、彼らは主をがけから投げ落とそうとした！ 主はナザレを去り、（私たちの知る限りでは）そこに再び定住されることはなかった（22—30）。

メシヤの奇跡的ないやし（4：31—41）

ある安息日に、主はカペナウムで悪霊を追い出し、ペテロのしゅうとめをいやし、大勢の人々の病をいやし、それによって、ご自分が病気も悪霊も支配なさるお方であることを示された。追い出された悪霊どもはイエスが神の子であることを知っていたが、主は悪霊どもがそれを証言するのを禁じられた。主は悪しき霊どものあかしをお認めにならなかったのである。

イエス、ガリラヤ全土に福音を宣べ伝える（4：42—44）

その翌日、主がカペナウムの近くの人里離れた所に退かれると、群衆は主を探し出し、自分たちのもとを立ち去らないようにと願った。しかし、主は、ガリラヤのほかの町々にもみことばを伝えるために、そこを去って行かれた。

イエス、4人の漁師を召す（5：1—11）

イエスは、沖に漕ぎだしたペテロの小舟の中に座って人々に教えられた。その後、熟練した漁師であるペテロに釣りに関する教訓をお与えになり、「人間をとる漁師」へと召された。ペテロは、ヤコブとヨハネとともに、すべてを捨てて主に従った。

イエス、らい病人をきよめる（5：12—16）

全身らい病に冒された男をいやされた後、イエスはその男に次のように言われた。祭司のところに行って規定の供え物をするように、た

だし、この奇跡を公にしてはならない、と。しかし、男はそのことを言いふらしたので、多くの群衆がいやしを求めて主のみもとに集まって来た。そのためイエスは祈るために荒野に退かれた。

中風の人のいやし（5：17—26）

主の宣教のうわさが広まり、ある日、主に敵意を抱くパリサイ人と律法の教師たちが集まって来たが、彼らは多くの人々がいやされるのを見た。イエスが人々をいやしておられた家に、4人の男が中風の人を床のままで運んで来た。しかし、群衆のために主のみもとに行くことができなかったので、屋根の瓦をはがし、そこから病人をつり降ろした。イエスは「あなたの罪は赦された」と言われたが、それを聞いたパリサイ人や律法学者たちは激怒した。彼らはそれを、神を汚すことだと言った。その男の罪が本当に赦されたことを証明するために、主は彼に、寝床をたたんで歩けと言われた。すると、中風だったその人が主の言われたとおりに歩きはじめたので、群衆はひどく驚いた。

イエス、取税人マタイを召す（5：27—32）

レビ、すなわちマタイはキリストの召しにただちに応えた。彼は、旧友たちをイエスに引き合わせるために宴会を催した。ユダヤ教の指導者たちが、イエスが名だたる「罪人ども」と食事されるのを非難したとき、主は、ご自分が来たのは正しい人を招くためではなく、罪人を招いて悔い改めさせるためだと答えられた。

断食についての問答（5：33—39）

次に彼らは、主の弟子たちが断食しないと行って主を非難した。すると主は、「わたしが弟子たちとともにいる間は、弟子たちが断食する理由はないが、わたしが死んで取り去られたら、弟子たちは断食するだろう」と答えられた。

新しい着物と新しいぶどう酒のたとえによって、イエスは、新しい

恵みの時代にはパリサイ人たちのいのちのない宗教と混じり合うものは何もないことを教えられた。彼らの伝統と儀式は、あまりにも融通のきかないものに成り下がり、キリストを信じる喜びも力も祝福も手に行うことができなかつたのである。

安息日をめぐる論争——どうしても必要な働き（6：1—5）

再びパリサイ人たちは弟子たちを非難した。今度は、安息日に麦の穂を摘んだことに対してだった。主は彼らに、ダビデとその供の者たちが供えのパンを食べたことを思い起こさせた（そのパンは祭司以外の者は食べてはならないのに、神がそれをお許しになったのである）。ちょうどこのとき、主イエスが拒まれていたように、正当な王（ダビデ）が拒まれていたので、神が例外を設けられたのである。さらに、キリストは安息日の主であり、したがって、安息日の真の霊的意味を解き明かすのに最もふさわしいお方なのである。

安息日をめぐる論争——いやし（6：6—11）

別の安息日に、イエスは片手のなえた人をいやされた。ユダヤ教の指導者たちは、主が安息日に善を行ったと言って非難しておきながら、一方で、自分たちは同じ安息日に主を殺すことをたくらんでいたため、主はそれがどれほど矛盾したことであるかを指摘された！ 安息日は神が人間のためにお与えになったものである。安息日は、どうしても必要な働きや、あわれみから発したわざを禁じてはいないのである。

イエス、12使徒を送り出す（6：12—16）

イエスは、徹夜で祈られた後、12使徒をお選びになった。主は彼らを送り出された。富める者としてではなく貧しい者として、食べあきた者としてではなく飢えている者として、「笑っている」（軽薄な）者としてではなく「泣いている」者として、評判の良い者としてではな

く迫害されている者として。彼らの「損失」はすべて「人の子」のためであった。

「幸福な者」と御国の民のたとえ（6：17—26）

イエスは山を下り、平地で大勢の人々をいやされる一方、弟子たちに御国の原則を教えはじめられた。主は、富んでいる者、満ち足りている者、軽薄な者、みなから人気のある者に降りかかる災いについて明言された。

人を愛する生き方（6：27, 28；31—36）

弟子たる者の愛は、単なる人間的な愛情を超えたものでなければならない。単なる人間の愛は、自分を愛してくれる者を愛したり、自分に親切にしてくれる者に親切にしたり、利益になるから貸したりするにすぎない。弟子たる者の愛は、神の愛のようであらなければならない。つまり、分け隔てなく、すべての人に及ぶ愛である。

不当な仕打ちにどのように対処すべきか（6：29, 30）

主は、「この世界に向かって新しい種類の愛を示すように」と弟子たちに教えられた。その愛とは、自分の敵に、自分をののしる者に、自分を迫害する者に注ぐ愛である。その愛が現れるのは、報復を考えないとき、求められた以上のものを与えるとき、何の見返りも期待しないときである。その愛は、相手が望むとおりにしてやる愛である。

さばくな（6：37—42）

この愛は、あわれみ深く、批判的なものでなく、赦す心に満ち、寛大である。イエスは、「弟子が他の人々への祝福となり得る程度は、その弟子自身の霊的状态に比例する」と説明された。自分が実行していない事柄について学ぶ兄弟の学びには少しも説得力がない。自分が達してもいないところまで他人を導いたり、自分が知りもしないこと

を他人に教えたりすることなどできないからである。教える者は、自分の弟子が自分以上に成長するのを期待できない。同時に、自分自身もまだ解決できていない人生の問題に関して弟子を助けることもできない。

預言者の真偽を見分ける方法（6：43—45）

人がどのような実を結ぶかは、その人の人格次第である。したがって、預言者の場合も、その人物の発言や行動以上に、「その人物は何者であるか」のほうにさらに重要なのである。

賢い建築者と愚かな建築者（6：46—49）

イエスを主と呼びながらイエスに従わないとしたら不合理なことである。賢い人は、キリストのみもとに来て、そのみことばを聞くだけでなく、そのみことばに従う。彼は人生の嵐あらしに耐えることができる。愚かな人は、弟子に対するキリストの教えを聞いたあとでも、自分の好きなように歩み続ける。そのような人は、人生の危機が訪れたとき、自分に確固たる基盤がないことに気づく。たとえ、その人のたましいは救われたとしても、その人の人生は失われてしまう。

イエス、百人隊長のしもべをいやす（7：1—10）

ユダヤ人に愛され尊敬されていた、ある異邦人の百人隊長が、病気のしもべのためにイエスにとりなしてほしいとユダヤ人の長老たちに頼んだ。イエスが彼の家に向かっておられたとき、百人隊長からの伝言が届いた。主がことばをかけてくださればいやされるから、わざわざおいでくださる必要はないと。それを聞いたイエスは驚かれた。ユダヤ人の中にもそのような信仰を見いだしておられなかったからである。百人隊長のことばどおり、そのしもべは、離れた所におられた主によっていやされた。

イエス、ナインのやもめの息子を生き返らせる（7：11—17）

イエスは、ナインの町に近づかれたとき、葬儀の行列に出くわされた。あるやもめのひとり息子が死に、埋葬場所へと向かうところだった。主がその青年に起きよと命じられると、彼はすぐに生き返り、主はその若者を母親に返された。人々は大変驚き、神が訪ねてくださったという知らせをその地方全体に広めた。

イエス、バプテスマのヨハネを励ます（7：18—23）

バプテスマのヨハネは、イエスが様々な奇跡を行われたという知らせを聞き、ふたりの使者を遣わして、イエスが本当にメシヤかどうか尋ねさせた。「もしそうだとしたら、どうして私は獄の中にいるのですか」というのが彼の真意だった。主は、それに対する返答として、ご自分がメシヤについて預言された奇跡を行っていることを告げられ、信仰を持ち続けるよう励まされた。イエスに全幅の信頼を寄せる人には祝福がある。

バプテスマのヨハネに対するイエスの賛辞（7：24—35）

それからイエスは人々の前でご自分の先駆者を賞賛された。そして、ヨハネは、揺れ動く^{おし}葦のような日和見主義者^{ひよりみ}でもなければ、流行を追う宮人でもないとされた。それどころか、彼は預言者よりもすぐれた者だったのである（メシヤの先駆者だったのだから）。民衆はヨハネからバプテスマを受けることによって神の義を認めたが、ユダヤ教の指導者たちは神の使者（ヨハネ）を拒むことによってそのご計画を拒んだのである（24—30）。

主は、その当時のユダヤ人たちのことを気難しい者たちだと言われた。ヨハネが「苦行者」として来ると、彼らは「悪霊につかれている」と言った。イエスが来て、普通に食べたり飲んだりなされると、今度は「食いしん坊の大酒飲み」だと言った。

しかし、次に起こった出来事に見られるとおり、イエスの弟子たち

が主の主張とその知恵の正しさを証明したのである（31—35）。

イエス、罪深い女を赦す（7：36—50）

イエスがパリサイ人シモンの家を訪ねられたとき、ひとりの罪深い女がやって来て、涙で御足をぬらし、髪の毛でぬぐい、御足に口づけして、香油を塗った。それを見たシモンは、もし真の預言者なら罪人たちから離れているべきだ、と心の中で抗議した。すると、主は彼に、破産したふたりの債務者の話をされた（彼らの借金の返済はすべて免除された）。シモンは、最も多く赦された者が、最も多くその金貸しを愛するようになるということを確認した。そう言うことによって、彼は自分で自分の非を認めたのである。シモンは主に対して当然の礼儀すら示さなかったが、その女は主に愛の雨を降らせたのである。イエスは、その女の罪が赦されていることを公に宣言された。罪を赦すイエスの權威に疑問を持つ者もいたが、主は再び彼女に救いを保証され、彼女を平安のうちに送り出された。

多くの女がイエスに仕える（8：1—3）

主がガリラヤで伝道を続け、御国の福音を宣べ伝えておられたとき、主によって救われた女たちが主に仕えた。

土壌のたとえ（8：4—15）

4種類の土壌のたとえから教えられることは、御国には純粋な信仰（4番目の土壌）だけでなく、口先だけの信仰告白（最初の3つの土壌）も含まれるということである。したがって、私たちは、神のみことばに厳粛に耳を傾け、それに従わなければならない。

燃えているあかりのたとえ（8：16—18）

あかりのたとえは次のことを意味している。弟子は仕事（器や[※]杓）や怠惰（寝台）が主の真理を広める妨げにならないようにすべきであ

る。怠慢や不履行はいつか必ず暴露されるからである。もし私たちが真理を忠実に他人に伝えるなら、神は私たちに新たな真理を示してくださるだろうが、もし自分が持っているものを使わないなら、それさえ失ってしまうだろう。

イエスの眞の家族（8：19—21）

ご自分の母と兄弟たちが訪ねて来た機会を捕らえて、イエスは次のことを強調された。すなわち、ご自分との眞の結びつきは、みことばに従うかどうかによるのであり、生来の絆じすなによるのではないと。

風と波を支配するお方（8：22—25）

イエスは、この章の残りの部分で、自然の力、悪霊、病気、死を支配する主として描かれている。人間だけがイエスに従うことを拒んでいる。主は、ガリラヤ湖の激しい嵐あらしと、弟子の心の中の恐怖というふたつの嵐をお静めになった。

従順な悪霊どもと豚（8：26—39）

主は、あるゲラサ人（ガダラ人）から多くの悪霊を追い出され、その悪霊どもが豚の群れに入るのをお許しになった。すると、豚の群れはがけを駆け下り、湖に入っておぼれ死んだ。ゲラサ人たちがキリストにその地方を立ち去ってほしいと願ったので、主は彼らの言うとおりにされたが、ご自分のことをあかしさせるために、いやされた男を置いて行かれた。

健やかな12年と苦しみの12年（8：40—56）

ヤイロの病める娘のもとへ行く途中、救い主は、押し寄せる群衆のためになかなか前へ進むことができなかった。出血する病で長年悩んでいたある女が、雑踏を押し分け、やっとのことでイエスの着物のふさに触れた。すると、ただちに病がいやされた。彼女はこっそり立ち

去ろうとしたが、主は群衆の中から彼女を呼び出された。勇気と呼び起こされた彼女は人々の前ですべてを告白した。主は彼女の信仰を称賛され、彼女を平安のうちに立ち去らせた（40—48）。その間に、使いの者がやって来て、ヤイロの娘が死んだことを報告し、もうイエスを煩わせる必要はないと告げた。しかし、主はその家に行かれ、少女を生き返らせ、この奇跡を公言してはならないと両親に告げられた。主はご自分の評判に無関心だったのである（49—56）。

イエス、12使徒を遣わす（9：1—6）

公生涯の3年目に入ると、キリストは宣教といやしのために12使徒を遣わされた。彼らが命じられたことは、必要な物は主が備えてくださると信じること、質素に暮らすこと、最初に申し出があった家でもてなしを受けること、メッセージを拒む町はどの町であろうと立ち去ることだった。

神のしもべは信仰によって生きるべきであるし、その生活も簡素なものでなければならぬ。また、居心地の良い場所を捜し求めるのではなく、神が働いておられる所に出かけて行かなければならぬ。これらの教えは今日の信者にも当然当てはまる。

ヘロデ、バプテスマのヨハネを殺す（9：7—9）

ヘロデは、力ある奇跡を行っている人物（イエス）のことを聞いて、ひどく当惑した。それがバプテスマのヨハネではないことは知っていたが、だれであろうと、ぜひ会ってみたいと思った。

あわれみ深いキリスト（9：10—17）

弟子たちから宣教報告を受けた後、主は、弟子たちに休息をとらせ、彼らをくつろがせるために人気のない所に連れて行かれたが、群衆がついてきたため、その望みはくじかれてしまった。イエスは人々に教えを説き、病人をいやし、男だけで5千人もいる群衆に5つのパンと

2匹の魚で食事をお与えになった。このことから教えられることは、もし私たちが自分の持ち物を主に差し出せば、たとえそれが何であろうとも、主はそれを何倍にも増やすことができになり、霊的に飢えている大勢の人々の空腹を満たされるということである。

ペテロの大いなる告白（9：18—21）

神はこの奇跡を用いて、イエスが生ける神の御子、メシヤであることをペテロに教えられたのかもしれない。弟子たちは、イエスがほかの偉大な人物たちとは全く違う特別なお方であることを知った（主は今でもそのようなお方である）。しかし主は、そのことをだれにも話してはならないと彼らに言われた。上っ面だけの評判が広まることによって十字架への道が妨げられないために。

イエス、ご自分の死と復活を予告される（9：22—27）

弟子たちは、イエスが苦しみを受け、拒まれ、殺され、よみがえれることを知った。主は彼らに、自分を捨て、自分の十字架を負い、主のために自分を犠牲にしてついて来るようにと言われた。主は最後に、主とともに治めるという栄誉が未来に待ち受けていることを彼らに約束された。27節はペテロ、ヤコブ、ヨハネのことを指している。そのみことばは28節から36節において実現した。

キリストの^{へんぼう}変貌（9：28—36）

主の変貌を目撃したペテロ、ヤコブ、ヨハネは、来たるべき栄光、すなわち、千年王国におけるキリストの統治の縮図をかいま見た。さんぜんと輝くキリストの栄光の前では、いかなるものも輝きを失う。主はすべてにまさるお方であり、御父も御子を公にお認めになった。

祈りと断食の必要性（9：37—42）

山上での出来事の後、イエスは悪霊に取りつかれた少年に出会われ

た。その子は必死に助けを求めていたが、弟子たちにはどうすることもできなかった。イエスは弟子たちの無力を叱責され、その悪霊を追い出し、その子を父親に渡された。

イエス、再びご自分の死と復活を予告される（9：43—50）

イエスは、ご自分の死が近づきつつあることを再び警告されたが、弟子たちにはそれが理解できず、質問する勇氣もなかった。彼らが、自分たちの中でだれが一番偉いかについて議論しはじめたとき、主は彼らに次のように教えられた。すなわち、最も偉大な者は、自分自身を神の子どもたちの中で（地位や身分が）最も低い者とみなす者だと。主は、（キリスト者の奉仕においては）キリストに反対しない者はみなキリストの味方であるとも言われた。

5. ガリラヤからペレヤを経てエルサレムに至る救い主の宣教（9章51節—19章27節）

イエス、偏狭な心を叱責する（9：51—56）

主が（ユダヤ人の）エルサレムに向かっておられたために、サマリヤ人たちは主を受け入れなかった。弟子たちが彼らの町を滅ぼしたいと思ったとき、主は弟子たちの雅量のなさを戒められた。主は、滅ぼすためではなく、救うために来られたのである。

弟子志望者を試す（9：57—62）

3人の男が「弟子として主について行きたい」という意向を表明したが、彼らには犠牲を払う覚悟ができていなかった。最初の人には、生活を快適にするものや便利にするものをなかなか捨てるようしなかった。2番目の人は、キリストの召しよりも生来の絆を優先させたために弟子入りできなかった。3番目の人は、「ただちに完全に従うこと」よりも「いとまごい」（当時は長々と続くものだった）を優先させた。彼は、手を鋤につけてから、うしろを見たのである。

イエス、70人を派遣する（10：1—12）

以前、主は12使徒を北方の地域に遣わされた。今度は南方エルサレムに向けて、ご自分が通って行かれるつもり道の筋に70人を派遣された。彼らの使命はそのとき限りのものだったが、主が彼らに命じられたことには永続的な価値がある。これらの指示は、9章1節から5節に記されていた12使徒への指示に似ている。

拒絶と歓迎（10：13—16）

主は、ご自分の宣教に応えなかったガリラヤの3つの町、コラジン・ベツサイダ・カペナウムにさばきを下された。主は「もしツロとシドンが同じ恩恵にあずかっていたら、彼らは荒布をまとい、灰の中に座って悔い改めただろう」と言われた。

70人、喜んで帰って来る（10：17—20）

使命を終えて帰って来た70人は有頂天になっていた。悪霊どもでさえ彼らに従ったからである！ 主のお答えは高慢に対する警告だったのかもしれないし、あるいは、「あなたがたの成功は、サタンが最終的に天から落ちることの前兆である」と言っておられたのかもしれない。彼らは、自分たちの働きが終わるまで死ぬことはないと保証された。しかし、彼らは、自分たちの力が悪霊どもにまさっていることを喜ぶのではなく、自分たちの名が天に書き記されていることを喜ぶべきであった。

安らぎを与えるイエス（10：21—24）

主イエスは、純真かつ素朴な、ご自分の従者たちをお喜びになった。御父はすでに御子にすべてのものを渡しておられた。御子は御父を知らしめた。御子ご自身を人間の力で知ることはできないが、主は弟子たちに、彼らがかつてない恩恵の時代に生きていると言われた。彼ら

はメシヤが来られた時代に生きていたのである。

良きサマリヤ人のたとえ (10:25-37)

ある律法の専門家が、どうしたら永遠のいのちを受け継ぐことができるかと尋ねると、イエスは、神を心から愛し、自分の隣人を自分自身のように愛せよ、と言われた。彼は自分の正しさを示そうとして「私の隣人とはだれのことですか」と尋ねた。イエスはそれに答えて、良きサマリヤ人の話をされた。そのサマリヤ人にとっては、助けを必要としていたユダヤ人が彼の隣人だった。したがって、そのユダヤ人の律法学者にとっては、困っている人はだれでも彼の隣人だったのである。

イエス、マリヤとマルタから尊敬ともてなしを受ける (10:38-42)

ある日、主は、ベタニヤにある彼女たちの家を訪ねられた（主はその家に何度も足を運ばれた）。マリヤは主の足もとに座してみことばに聞き入っていたが、マルタは台所仕事で心を取り乱していた。主は、手伝いをしないマリヤをしかることはなさらず、より優先すべきほうを選んだと言って彼女を称賛され、いらいらして腹を立てたマルタを叱責された。

祈りの手本 (11:1-4)

ある弟子が祈りに関する教訓を求めたため、主イエスは祈りの手本を示された。それは、機械的に繰り返し唱えられるべきものではなく、祈りのための基本的な主題を説明するためのものだった。

祈りにおける忍耐 (11:5-13)

それから主は「客をもてなそうとした主人の話」を付け加えられた。彼は、自分が必要とするものを、気が狂ったかのように、とことんずうずうしく、しつこく求めた結果、手に入れた。だから、私たちは忍

耐強く求め続け、探し続け、たたき続けるべきである。神は私たちに良いものだけをお与えになるのだと確信すべきである。そうすれば、神は私たちに最も必要なもの——聖霊の御力——を与えてくださるだろう。

聖霊に対する冒瀆^{ぼうとく}（11：14—23）

イエスが口のきけない人をいやされると、ある者たちは、悪霊どものかしらベルゼブルの力によるものだと言って主を非難した。天からのしるしを求める者たちもいた。その言いがかりに対する答えは17節から26節までに記されており、しるしを求めた者たちに対する答えは29節に記されている。もし、イエスがベルゼブルによって悪霊どもを追い出していたとしたら、悪魔は自分の味方を攻撃していたことになる。また、ユダヤ教徒の中にも悪霊を追い出している者たちがいたから、彼らも同罪ということになる。実際には、イエスは「神の指」、すなわち聖霊によって悪霊どもを追い出されたのである。これは、神の国がすでに来ているという確かなしるしだった。そのときまで、サタンは、とりこにした者たちを思うままに支配してきた。しかし、主はサタンを打ち負かしつつ、その犠牲者たちを解放しておられたのである。キリストを告発した者たちは主の味方ではなく、主に敵対する者たちだった。

赦されない罪は少なくとも3つある。すなわち、聖霊に対する冒瀆、背教、キリストを拒んだまま死ぬことである。

悪霊にとりつかれた人の状態の変化（11：24—26）

ユダヤの民は、かつて偶像礼拝という悪霊にとりつかれていた。しかし、この悪しき霊は、バビロン捕囚によって彼らから取り除かれた。彼らの家はきれいに掃除され、飾りたてられたが、彼らは、主イエスが家に入り、その家を所有なさることを拒んだ。したがって、主は、彼らがかつてないほどの悪しき偶像礼拝に陥るだろうと警告された。

これは、彼らが将来、反キリストを崇拜するようになることを指している。この罪に対する罰は、ユダヤの民がそれまでに耐えた罰よりも、もっと重いものとなるだろう。

神のみことばどおりに実践する者をイエスは祝福する(11:27, 28)
名もないひとりの女が、マリヤをイエスの母であるゆえに祝福したとき、主は、神のみことばを聞いてそれに従う人はもっと祝福されると説かれた。

パリサイ人、しるしを求める(11:29-32)

天からのしるしを求める声(16)に答えて、イエスは、ヨナのしるしのほかには、しるしは与えられないと言われた(それは主ご自身の復活を指していた)。主はソロモンよりも、ヨナよりも偉大なお方なのだから、その当時の人々は、シェバの女王よりも、ニネベの人々よりも、より大きな特権を与えられていたのであり、したがって、責任もより大きかったのである。

からだのあかり(11:33-36)

次にイエスは、聴衆たちに次のように注意された。あかりのついたランプを穴倉の中や柵の下に置く者はいない。燭台の上に置く。入って来る人に光を提供するためである。その真意はこうである。つまり、神はランプにあかりをつけたお方である。神は、主イエスご自身とのみわざをとおして、この世の暗やみを照らされた。もし人がその光を見ようとしなくても、それは神のせいではない(33)。

もしある人の目が健康なら、つまり、真理を知ろうと心から望んでいるなら、神はその人に真理を示される。もし、その人の動機が不純なら真理を見落としてしまう。イエスは聴衆たちに、自分たちの光が暗やみにならないように気をつけなさいと警告された。世の光である主に心を開く人には霊的な光がみなぎると主は言われた。ランプの光

に身をさらすと、全身が明るく輝くのと同じように (34—36)。

イエス、パリサイ人を批評する (11: 37—44)

あるパリサイ人は、イエスが「きよめの洗い」(食事の前に入念に手を洗う儀式)をなさらないことに驚いた。すると、主はそのパリサイ人を貪欲・邪悪さ・不正・神に対する愛の欠如・高慢・内面的な墮落のゆえに叱責された。

イエス、パリサイ人たちを公然と非難する (11: 45—54)

ある律法の専門家が、自分たちも侮辱されたことになると言って抗議したので、イエスは彼らの罪も列挙された。彼らはとても守れそうもない規則を人々に押しつけていた。彼らは神のしもべたちを殺害する偽善者だった。彼らは神のことばを人々に知らせもしなかった (45—52)。救い主の、齒に衣着せぬ非難に腹を立てたパリサイ人と律法の教師たちは、主を目の敵にしはじめ、一層、主をわなにかけようと努めるようになった。

人間を恐れるのではなく、神を畏れよ (12: 1—12)

主は先ほどの出来事を用いて、弟子たちに警告をお与えになった。パリサイ人のパン種 (偽善) に気をつけるようにという警告である。主は、暗やみで行われたことはみな暴露され、神の真理は必ず勝利すると言われた。パリサイ人たちに殺される可能性があったとしても、弟子たちは肉体的な死を恐れてはならなかった。むしろ神を畏れるべきであった。雀でさえみこころに留めておられる神は、ご自分のしもべたちのことはさらに気遣っておられる。人前で主を認める者は、神の御使いたちの前で主に認められる。主を否認する者は、神の御使いたちの前で主によって否認される。また、聖霊を汚す者 (ユダヤ人のある者たちはそうした。11章15節) は決して赦されないだろう。弟子たちは「答弁」を前もって準備しておく必要はない。聖霊が適切な答

えを教えてくださいからである。

愚かな金持ちのたとえ (12: 13—21)

群衆の中からひとりの男が進み出て、自分と自分の兄弟との間の遺産に関する争いを解決してほしいと主に頼んだ。イエスはもっと重要な仕事を抱えておられたので、その男の貪欲^{どんよく}を戒めるために愚かな金持ちのたとえを話された。ある金持ちの畑が豊作だったので、彼は納屋や穀物倉をもっと建てて、遊んで暮らそうとした。ところが神は、「お前は今晚死ぬ。すべてを残してこの世を去るのだ」と言われた。彼は神の御前に富むべきだったのだとイエスは述べられた。

主が備えてくださる (12: 22—34)

弟子は思い煩いのない生活を送るべきである。何が起こるか分からない未来のために備えることは不必要であり、不可能だからである。もし神のことを第1に考えるなら、神は、私たちが食べ物や着る物に不自由することがないように必ず取り計らってください。彼らは神の国を受け継ぐことを確信しているから、そこに至る道について心配する必要はない。彼らは長旅の途中なのだから、身軽に旅をすべきである！

その人の宝のある所に、その人の心もある。宝は天にあるか、それとも銀行にあるかだが、銀行にあれば損失を受けやすい。

だれもその日、その時を知らない (12: 35—40)

弟子は主のご再臨を絶えず待ち望んで生きるべきである。主は全く思いがけない時に来られるからである。そのとき、目をさましているところを主に見られる者たちは幸いである。

要求される忠実な奉仕 (12: 41—48)

「目を覚ましていること」について述べられたこのすぐ前の話は、「神の管理人」全員に向かって語られたものである。主が帰って来ら

れたとき、あるしもべが他の人々の霊的な幸いに心からの関心を持っているのをご覧になったとしたら、主はその弟子に豊かに報いてくださるだろう。しかし、しもべのふりをしながら神の民を虐待し、神の民から奪い、自堕落な生活をしている者がいれば、そのような者は他の不信者たちといっしょに処罰されるだろう。与えられた特権が大きければ大きいほど、その責任も大きい。天国で与えられる報酬にも、地獄で受ける処罰にも、それぞれ等級がある。

キリスト、剣をもたらず（12：49—53）

キリストが来られた以上、分裂・争い・迫害・流血が起こるのは避けられない状況だった。しかもそれはすでに始まっていた。主ご自身は十字架上の死という「バプテスマ」を受けようとしておられた。贖いのみわざをなし逃げることを切に願っておられたのである。弟子が主とつながっていれば、家族が分裂することは十分あり得る。

天からのしるしを求める（12：54—59）

不信者たちは天気の変化は予測できるのに、人類史上、重大な時代がやって来たことを悟れないでいる、とイエスは言われた。もし彼らが、自分たちが生きている時代の重要性に気づいたら、急いで神と和解するだろう。「悔い改め」か「滅び」か、どちらか一方を選ばなければならないのである。

イエス、悔い改めの必要性を説く（13：1—5）

悔い改めという主題はさらに続く。人々は、ふたつの地方に降りかかった災難に驚いた。ピラトによるガリラヤ人たちの虐殺と、シロアムの塔が倒れ落ちて18人が下敷きになって死んだ事件である。イエスは、「こうした人々が肉体的に滅びたように、あなたがたも悔い改めなければ霊的に滅びる」と人々に警告された。

実を結ばないいちじくの木のとえ (13: 6—9)

実のならないいちじくの木のとえにおける「木」はイスラエルの民、「ぶどう園」はパレスチナの地のことである。その木は3年もの間（主の公生涯の間）実を結ばなかったので、園の所有者（神）はそれを切り倒すよう命じた。しかし「番人」（キリスト、または聖霊）は、もう1年（ステパノの死までの期間のことかもしれない）の猶予を願った。もし、そのときが来ても実がならなかったら、その木は切り倒されるだろう。実際、そのとおりになった。エルサレムは破壊され、人々は散り散りになったのである。

イエス、ある女を安息日にいやす (13: 10—17)

イエスが安息日に、ある会堂で腰の曲がった女をいやされると、その会堂の管理者はそれに抗議した。主はその偽善者に、「あなたは安息日でも平気で自分の家畜に水を飲ませているではないか」と言われた。それなら、主が、神を信じているユダヤ女をいやされたからといって、一体何が悪いのか？ 主を非難した者たちは恥じ入り、一般の民衆は喜んだ。

もし、その偽善者が病気だったら、週のどの日であろうと、喜んでいやしのみわぎを受け入れたことだろう。

からし種のたとえ (13: 18, 19)

主は神の国をからし種にたとえられた。それは異常なまでに成長して、鳥が巣を作るほどの木になる。そのように、キリスト教界も、異常なまでに巨大化し、評判の良いものとなり、(教義上および道德上の) あらゆる種類の悪がはびこる場所となった。

パン種のたとえ (13: 20, 21)

主は御国をパン種にもたとえられた。女がそれを粉に混ぜるのである。そのようにして、悪い教えが神の民の「食物」の中に紛れ込み、

教義全体を損なったのである。

ふたつの道（13：22—24）

エルサレムへ向かう途中、だれかがイエスに「わずかな者しか救われないのですか」と尋ねた。それに答えて主は、「必ず狭い門から入れ」と命じられた。

にせの信仰告白者たち（13：25—30）

「もう遅すぎる」という時がいつか来る。そのとき、人々は、「ずっと主と交わってきた」と言って中に入ろうとするが、主は「不正を行う者たち」として彼らを追い返されるだろう。不信仰なユダヤ人たちは、御国にいる族長たちを遠くから眺めるだけになってしまうが、主を信じる異邦人たちは御国のすばらしい祝福を楽しむことだろう。このように、先の者があとになり、あとの者が先になるのである。

イエスに対するヘロデの陰謀（13：31—33）

何人かのパリサイ人がイエスに（おそらく口先だけで）次のように警告した。「ヘロデはあなたを殺すつもりだから、ここを立ち去るように」と。主は「あの狐」に次のように知らせるようにと言われた。「わたしはもうしばらく自分の働きを続ける。そして3日目にそれをなし終える。その日、わたしはエルサレム——神の預言者たちを殺すことで悪名高い町——で殺されるだろう」と。

エルサレムに対するイエスの愛（13：34, 35）

エルサレムのことをこのように話された後、主はエルサレムのほうを向き、この都のために涙を流された。主はエルサレムを救いたいと願われたが、今やその運命も定まった。神殿も国土も荒れ果てることだろう。ご再臨のとき、ユダヤ人たちが主を「王」として受け入れるときまで。

イエス、ある男を安息日にいやす（14：1—6）

あるパリサイ人の家で、主はある男を安息日にいやされた。イエスは律法学者やパリサイ人たちに向かって（彼らの批判を見越したうえで）「あなたがたは、牛が安息日に溝に落ちたら、それを引き上げてやるだろう」と言われた。もしそうだとしたら、水腫すいしゅをわずらっている人にはもっと多くのあわれみを示すべきではないか！

イエス、謙遜けんそんともてなしについて教える（14：7—14）

招かれた客たちがわれがちに食卓の上座に座ろうとしているのに気づかれたキリストは、彼らの利己主義を戒められた。もっと上席に座るよう勧められるまで末席に着くべきであると、主は彼らに注意された（7—11）。それから主は、ご自分を招いた主人（パリサイ人）に向かって、御国におけるもてなしのしきたりについて教えられた。すなわち、見返りを期待できない人々——貧しい人・不具の人・足なえ・盲人——を招くようにと。その報いは復活のときに受けるだろう（12—14）。

結婚披露宴のたとえ（14：15—24）

客のひとりが、御国の祝福にあずかるのは何とすばらしいことだろうと言うと、イエスはたとえを話して彼に答えられた。それは、御国に入るよう招かれた者たちが、次々と愚かな言い訳をしてその招待を拒む話だった。もし、最初の招待客名簿に載っている者たち（ユダヤ人）が辞退すれば、そのときには、神はご自分のもとに来るよう、他の者たち（異邦人）を説得されるだろう。

弟子が払う犠牲（14：25—33）

大勢の群衆がついて来るのをごらんになった主は、キリストの弟子となるための厳しい要求を突きつけることによって、彼らをふるいに

かけはじめられた。主に従う者は主をこの上なく愛さなければならぬ。また、真の弟子は主ご自身の十字架を負って主について行かなければならぬ。主に従いはじめる前に、それに伴う犠牲を勘定に入れておかなければならぬ。その必要性がふたつの例によって強調されている。ひとつは、塔を築く人、もうひとつは、数の上で優勢な敵軍と戦うために出かける王の話である。弟子はキリストに従うためにすべてを捨てなければならぬ。

信者は塩であり光である（14：34，35）

塩と同様、信者にも存在理由がある。もしその目的を果たさない者がいれば、そのような者は軽蔑とさばきの対象となる。

いなくなった羊のたとえ（15：1—7）

律法学者とパリサイ人たちは、イエスが社会的、道徳的な「のけ者たち」といっしょに食事をなさる事実を腹を立てた。主は、彼らの非難に応じて3つのたとえを話され、次のように教えられた。神は、罪人が悔い改めるのをご覧になると、心から喜び、満足されるが、独善的な偽善者たちには何の喜びも見いだされないと。彼らはあまりにも高慢なために、自分の罪深さを認めることができないのである。

いなくなった羊のたとえの中の「羊飼ひ」はイエス、「いなくなった羊」は悔い改めた極悪な罪人、「99匹の羊」は悔い改めの必要を感じていない律法学者やパリサイ人たちのことである。

失われた銀貨のたとえ（15：8—10）

2番目のたとえの中の「失われた銀貨」は悔い改めた罪人、「女の人」は聖霊、「あかり」は神のことば、「残りの9枚の銀貨」は律法学者やパリサイ人たちを始めとした多くの者たちを表している。彼らはあまりにも高慢なために、自分が「失われた者」であることを認めることができないのである。

ほうとう 放蕩息子のたとえ (15: 11—32)

放蕩息子 (つまり、浪費癖のある息子) のたとえ話の中で、神はふたりの息子を持つ父親として描かれている。弟息子は自分の罪を認めた罪人を表している。兄息子は律法学者やパリサイ人たちを始めとしたすべての宗教的偽善者たちを表す。彼らは、神が不敬虔な罪人たちをあわれまれることに腹を立てる。悔い改めない者が神に喜びをもたらすことは絶対にない。

不正な管理人のたとえ (16: 1—13)

パリサイ人に向かって語っておられたイエスは、今度は弟子たちに「管理者としての職務」に関する教訓をお与えになった。このたとえ話の中の「金持ち」は神ご自身のことである。この管理人は明らかに不正な男だったが、解雇されたときのことを前もって考えた。彼がほめられたのは「先見の明」があったからである。彼は、クビになってからも友人を持てるようにと手段を講じた。同様にキリスト者も、天国に行ったとき、間違いなく歓迎会が設けられるようなやり方で、主人 (神) の所有物や財産を用いるべきである。もし私たちが非常に小さなもの (お金) を扱うのに忠実であれば、大きなもの (霊的財産) を扱うのにも忠実だろう。主のお金を不正に用いるような人物に、まことの富の管理が任されることなどあり得ない。「金銭」と「神」、このふたつのために生きることは不可能である。

御国と律法 (16: 14—18)

パリサイ人たちがこれらの教えを聞いてあざ笑ったとき、イエスは貪欲かつ独善的な彼らの本性を暴露された。新たな時代がすでに始まり、人々——特に取税人や罪人たち——がその中になだれ込もうとしていた。しかし、新たな時代に入ったからと言って、道徳上の基本的真理——たとえば結婚に関する律法——が廃棄されるわけではなかつ

た。

金持ちとラザロ（16：19—31）

「管理」に関する話の締めくくりとして、主は金持ちとラザロの話がされた。ここにはふたつの人生とふたつの死、それにふたつの死後の世界が描かれている。金持ちはハデスに行き、あわれなこじきはアブラハムのふところに行った。金持ちは、その富のゆえに「有罪」とされたのではない。彼が有罪とされたのは、救いに至る信仰がなかったからである。そのことは、あわれなラザロを気にも留めなかったことからわかる。富は神の祝福と恩寵みんちようのしるしであると旧約聖書は教えていた。それでは、なぜ金持ちのユダヤ人はハデスに行ったのだろうか。主イエスは、このすぐ前の個所で、新たな時代に入ったことを告げられたばかりだった。富はもはや祝福のしるしではなく、信仰の試金石なのである。

16章は、パリサイ人たちを始め、金のために生きている者たち全員に対する厳粛な警告で終わっている。彼らはたましいの危険を冒して金のために生きる。だれかが言ったとおり、「地獄で水を請い求めるより、この世でパンを請い求めたほうがよい」のだが。

イエス、つまずきを与えないようにと戒める（17：1—3前半）

イエスは、人に罪に犯させることの重大さを弟子たちに警告され、そのようなことをするくらいなら、無理やり溺死でこしさせられたほうがましだと言われた。

限りない赦し（17：3後半—6）

私たちは兄弟を（彼が悔い改めるたびに）何度でも赦すべきだが、そうしようとしなないことはもうひとつの危険である。1日に7度も赦すのは大変だと思った弟子たちは、「信仰を増してください」と主に願った。それは信仰の量の問題ではなく、質の問題であり、自分が持

っている信仰を用いるかどうかの問題だと主は答えられた。

信仰と義務（17：7—10）

キリストの奴隷は、仕事を言いつけられるなどと考えずに、次々と与えられる仕事をいとわずになすべきである。どれほど精力的に主に仕えたとしても、私たちは、自分の義務を果たしただけの「役に立たないしもべ」にすぎない。

イエス、10人のらい病人をいやす（17：11—19）

10人のらい病人の話は、「恩知らず」という罪を浮き彫りにしている。10人全員がいやされたにもかかわらず、主に感謝するために戻って来た者はたったひとりしかいなかった。しかも、それはユダヤ人ではなく、サマリヤ人だった。あとの9人はらい病がいやされただけだったが、引き返して来た者は罪からも救い出された。

神の国の本質（17：20、21）

パリサイ人たちの質問に答えて、主は次のように言われた。神の国は目に見える形で来るのではなく、彼らのただ中にある。すなわち、御国の王が彼らとともにおられるのだと。

イエス、終末に、にせキリストが現れることを予告する

（17：22—25）

それから主は弟子たちに次のように言われた。主が地上で彼らとともにいて、彼らと親しく交わっておられた頃をまた1日でも見たいと願うときが来るだろうと。にせキリストが現れ、メシヤが到来したというにせの知らせが広く伝わるだろう。実際は、キリストの再臨は稲妻のように目に見え、見間違えることはない。しかし、キリストはまづ苦しみを受け、捨てられなければならない。

再臨の時期の描写（17：26—37）

キリストが再臨されるときまで、人々は、ノアやロトの時代と同様、突然破滅がやって来ることにも気づかず、ふだんどおりの生活を営むことだろう（26—29）。

その日、何か物を運び出そうとするといのち取りになる。後ろを振り向かずには逃げる者だけが逃げおおせる。真の安全はキリストのため、に自分のいのちを捨てることにある。それは区別される時ともなる。ある者はさばきによって取り去られ、ある者は救われてキリストの王国に入る。神に対するあらゆる形態の不信仰と反逆の上にさばきが下る。「はげたか」は神のさばきを表し、「死体」は、キリストに背くユダヤ教と背教したキリスト教界の両方を表している（30—37）。

しつこいやもめのたとえ（18：1—8）

うるさくせがむやもめのたとえは次のことを教えている。すなわち、祈るときには、ずうずうしいほどまでに根気強く祈るべきこと、そして、しいたげられている者たちがこのように祈るなら、神はそのような者たちに必ず報いてくださることを。イエスは、ご自分が戻って来られたとき、このやもめのような信仰が果たして見られるだろうかと言われた。今日の霊的衰退を見るとき、主の疑いがそのとおりになってしまったことに気づく。

パリサイ人と取税人のたとえ（18：9—14）

パリサイ人と取税人のたとえは、他人を見下した態度をとる独善的な人々に向けて語られたものである。パリサイ人は真に祈ったのではなく、祈るふりをしたにすぎない。取税人は、自分が罪人であることを認め、あわれみを求めて神に向かって叫んだ。その結果、義と認められて家に帰った。

イエス、子どもたちを愛する（18：15—17）

弟子たちは、母親たちが子どもたちをイエスのもとに連れて来たことにいらだち、彼女たちを追い返そうとしたが、イエスはこの出来事を用いて次のように教えられた。子どものような純真な信仰と謙遜こそ御国に入る秘訣だと。

金持ちの若い役人（18：18—23）

ある金持ちの若い役人が、永遠のいのちを受け継ぐには何をしなければならないかとイエスに尋ねた。主は律法を用いて彼に罪を自覚させようとしたが、その若い男は常に律法を守っていると行って自慢した。イエスは（要するに）「もしあなたが自分の隣人を自分自身のように愛しているなら、あなたの持ち物を売り払い、貧しい人々に分け与えなさい。それからわたしについて来なさい」と答えられた。その若者は非常に悲しんだ。大変な金持ちで、自分の財産を分け与える気になどなれなかったからである。

御国で受ける報酬（18：24—30）

それから主は、裕福な人々が御国に入るのは（ほかの人々と比較した場合）不可能なことだと言われた。金銭に対する愛と信頼が、救い主に頼ることを妨げるからである。弟子たちはすべてを捨てて主に従った。ペテロがそのことを主に告げると、救い主は彼に次のように保証された。そのような犠牲の生涯を送った者は、今の世でも後の世でも必ず「配当」を手にする。

イエス、再びご自分の死と復活を予告される（18：31—34）

イエスは弟子たちをそばに呼び、ご自分の死と復活をはっきりと予告された。しかし、どうしたことか彼らには理解できなかった。

イエス、物乞いをしていた盲人の目を開ける（18：35—43）

主イエスはペレヤを去り、ヨルダン川を渡ってエリコに近づかれた。

物乞いをしていたある盲人がイエスをメシヤと認め、目が見えるようにしてほしいと執拗しつように願った。救い主がことばをかけられると、その男の目は見えるようになった。彼は主の従者となり、神を賛美した。

イエス、ザアカイの家を訪ねる（19：1—10）

ザアカイの回心は18章27節の真理を裏づけている。すなわち、神には金持ちを回心させることもできるのである。この型破りな男は、背が低かったので、イエスを見るために木に登った。主はその取税人をご覧になり、「ザアカイ。あなたの家を訪ねよう」と言われた。ザアカイは主を信じ、救われた。その結果、彼は、財産の半分を貧しい人たちに施すことと、それまでにだまし取った物をすべて賠償することを決心した。主に敵対する者たちは、主がザアカイのような罪人たちとともに食事をなさることを非難した。主は、わたしは失われた人を捜して救うために来たのだと言われた。

ミナのたとえ（19：11—27）

ミナのたとえにおいて、イエスは「身分の高い人」、弟子たちは「10人のしもべ」であり、「国民たち」はユダヤの民のことである。10ミナは、すべての弟子が共通に持っているもの——時間・福音・キリストをあかしする責任など——を表す。ユダヤの民（「国民たち」）は、王なるメシヤとしてのキリストを拒んだ。「しもべ」たち（弟子たち）は、そのミナをどれほど投資したかによってさばかれている。最初のふたりは、それぞれが得たもうけに応じて権威ある立場を与えられている。3番目の悪い弟子はすべてを失っている。「国民たち」は「敵ども」だと公然と非難され、死刑を宣告される。このたとえは、神の国がすぐに現れるような印象（11節参照）を正し、キリストの初臨と再臨の間には一定の期間があって、その間に主の弟子たちは活発に主に仕えるようになることを示している。

6. エルサレムでの最後の週。その頂点となる主の死 (19章28節—23章49節)

勝利の入城 (19: 28—40)

十字架直前の日曜日、イエスはオリーブ山のふもとに着かれ、ろばの子を手に入れるためにふたりの弟子を遣わされた。主はそのろばに乗ってエルサレムに入られた。人々は自分たちの着物をろばの背に敷いて座布団を作り、道にも衣服を広げて敷いた。主がエルサレムの町に入られたとき、主の従者たちは突然神を賛美しはじめた。パリサイ人たちは腹を立てたが、イエスは、もし弟子たちが自分を歓呼して迎えなかったら石が叫ぶだろうと答えられた！

イエス、エルサレムのために泣く (19: 41—44)

エルサレムに近づいたとき、キリストは、その町が機会を逃したことを思って涙を流された。もし人々が主を受け入れていたら、平和がもたらされたであろう。しかし、もう遅すぎたのである。彼らは主を拒んだ結果、破滅を宣告された。このさばきは、西暦70年、ローマ皇帝ティトゥスがエルサレムを破壊したときに実現した。

宮きよめ (19: 45—48)

生涯もほぼ終わりに近づいた頃、救い主は神殿の庭に入り、再び両替人たちを追い出された (公生涯の始め頃にも同じことをされた。ヨハネ 2: 13—17)。

ユダヤの指導者たちはイエスを殺す口実を探していたが、民衆は、依然、奇跡を行うこの「ナザレ人」を称賛していた。

王の権威に対する異議 (20: 1—8)

祭司長、律法学者たちは無礼にもイエスの権威に異議を唱えた。主は彼らに、バプテスマのヨハネの宣教は神がお定めになったものか、

それとも、単なる人間の権威によるものかどうかとお尋ねになった。もし前者だと言え、悔い改めたうえでヨハネが告げ知らせたメシヤを受け入れるべきだったということになる。もし後者だと言え、民衆が激怒するだろう。彼らはヨハネを神の預言者と認めていたからである。彼らが答えようとしなかったので、イエスもお答えにならなかった。

ぶどう園のたとえ (20 : 9—19)

このたとえの中の「ぶどう園の主人」は神のことである。彼は「ぶどう園」(イスラエル)を「農夫たち」(イスラエルの指導者たち)に貸して、ぶどうを作らせた。収穫の分け前を徴集するために「主人」が遣わした「しもべたち」とは預言者たちのことである。指導者たちが「しもべたち」を拒んだので、神はご自分の御子を遣わされたが、指導者たちは御子を「ぶどう園」の外に追い出し、殺してしまった。イエスは、「このような邪悪な農夫どもは滅ぼされるだろう。そして、神は異邦人に特権ある立場をお与えになるだろう」と明言された。「家を建てる者たち」(ユダヤ人たちは「石」(キリスト)を見捨てたが、神はキリストを「礎の石」にすることによって、他に比類なき地位を彼に与えようと決めておられた。主を襲う者はみな破滅する(ユダヤの国はローマによって滅ぼされた)。主が戻って来られたら、不信者たちはちりのように散らされるだろう。

カイザルのものはカイザルに返せ (20 : 20—26)

ユダヤ教の指導者たちのもとから送られてきた問者たちが、主をわなにかけてやうとして、「ユダヤ人にとってカイザルに税金を納めることは正しいことかどうか」と主に尋ねた。「正しくない」と言えば反逆罪になるし、「正しい」と言えば、ヘロデ党の者たちを始め、大半のユダヤ人の心がイエスから離れてしまうだろう。すると主は、デナリ銀貨を1枚借りて、「カイザルに支払わなければならないものはカ

イザルに支払え。神に支払わなければならないものは神に支払え」とお答えになった。それは完璧な答えだった。

ひとりの花嫁に7人の夫(20:27-38)

サドカイ人たちは、ある話を持ち出すことによって、「からだのよみがえりはない」という自分たちの主張を裏づけようとした。その話は、復活がとてもあり得ないばかげたことだという印象を与えるものだった。夫に先立たれたある女が(子どもができないために)夫の弟たちと次々に結婚したが、やがて彼女自身も死んだ。「復活の際、その女はだれの妻になるのか」と彼らは質問した。イエスは、結婚関係は天国では存続しないと答えられた。そして、出エジプト記3章6節を引用され、「生きている者の神」としての神のご性質が復活を要求するのだと教えられた。

「神の子」と「人の子」(20:39-44)

主の議論には説得力があったが、律法学者たちがそれを認めたように見えたとき、主は詩篇の110篇1節を引用して、彼らに次のように尋ねられた。どうしてメシヤがダビデの「主」であり、同時にダビデの「子(子孫)」であり得るのかと。その答えは主ご自身だった。すなわち、神としての主はダビデの「主」であり、人としての主はダビデの「子」だったからである。

イエス、律法学者たちに降りかかる災いについて告げる

(20:45-47)

主は「律法学者たちに気をつけるように」と群衆に向かって公然と警告された。彼らは敬虔なふりをし、仰々しい肩書きを好み、目立つ場所を手に入れるために巧みに振る舞うが、その一方で、やもめを食いものにし、いつも長い祈りをしていると主は言われた。彼らの偽善は厳しく処罰されるだろう。

貧者の一灯（21：1—4）

人々が神殿の献金箱に献金を投げ入れるのをご覧になっていた救い主は、ある貧しいやもめが他のだれよりも多く投げ入れたと言われた。彼女が持ち物全部をささげたからである（彼女はレプタ銅貨——ほんの小額にすぎない硬貨——の1枚を自分自身の必要のために残しておくこともできたのに、そうしなかったのである）。

世の終わりのしるし（21：5—33）

5節から33節までにおいて、イエスは未来の出来事のあらましを述べておられるが、それによると、エルサレムの崩壊は主の再臨に合流するように思える。

- ・エルサレムの崩壊（5，6）
- ・再臨に先立って起こる出来事のあらまし（7—19）
- ・エルサレムの陥落とそれに伴う大患難（20—24）
- ・主の到来に先立って現れるいくつかのしるし。イスラエル（全体）が贖われる時が近づくこと（25—28）
- ・「いちじくの木」と「すべての木」のしるし。すなわち、国家としてのイスラエルの再建と全世界にわたる国家主義・民族主義の台頭（29—33）

主が来られるのを待ち構えていること（21：34—38）

この章は、「不意打ちを食わされないように」という警告と、「主の到来を待ち構えて、そのために祈れ」という訴えで終わっている。

救い主は毎日神殿で教え、オリーブ山で野宿された。人々はもっと教えを聞くために毎朝みもとに集まってきた。

イエスを殺す陰謀（22：1，2）

ユダヤ教の指導者たちは、民の感情を刺激せずにイエスを殺す方法

を探していた。

銀貨30枚 (22: 3—6)

過越の祭りが近づいた頃、ユダは、一定の額でイエスを裏切るといふ恐ろしい取り引きをした。

過越の祭りを祝う (22: 7—20)

主はペテロとヨハネをエルサレムの町に遣わし、過越の食事をする準備をさせた。2階の大広間で、主と弟子たちは最後の「過越の祭り」と最初の「主の晩餐」を執り行った。

イエス、ユダの裏切りを予告する (22: 21—23)

ユダは過越の食事の場にはいたが、一切れのパン（これには特別な意味があった）を手渡されたあとで立ち去ったのだから（ヨハネ13: 30）、主の晩餐には居合わせなかったことになる。イエスが裏切られ、苦しみを受け、死なれることは避けられないことだった。しかし、ユダは自らの意志で裏切り者の役を選んだのである。

弟子たち、「だれが一番偉いか」について論じ合う (22: 24—30)

救い主の死が近づいた、このきわめて重大なときに、弟子たちはなんと、自分たちの中でだれが一番偉いかについて議論していた！ イエスは、ご自分に従って来る者は、年の若い者、仕える者の立場をとることによって偉大さを示すようにと根気よく諭された。それから、弟子たちが困難なときにも主のそばを離れなかったことをほめ、御国での権威ある地位を約束された。

イエス、ペテロの否認を予告する (22: 31—34)

ユダが裏切り、弟子たちが利己的な野心を抱いたばかりか、ペテロも主を否認することになる。サタンはペテロをふるいにかけることを

願ったが、イエスはすでにペテロのために祈っておられた。ペテロは失敗から立ち直り、最終的には他の弟子たちを力づけるようになるだろう。

財布と袋と剣 (22: 35—38)

主は新たな進軍命令を発せられた。主は弟子たちを残して去ろうとしておられたのだから、彼らはまもなく必要となるもの——財布、食糧を入れる袋、剣——を用意しなければならない。弟子たちは、主が剣に言及されたのを誤解して、主のいのちを守るために剣を用いるべきだと考えた。現代の注解者たちも、イエスが剣に言及されたこと(36)には頭を悩ましている。

ゲツセマネの園での苦悶 (22: 39—46)

主の晩餐の後、救い主は弟子たちとともにゲツセマネの園に行かれた。そして、弟子たちを残して少し離れた所に行き、3度次のように祈られた。「この杯が過ぎ去りますように。しかし、何よりもまず神のみこころがなされますように」と。主が弟子たちのところに戻られるたびに、彼らは眠っていた。

ゲツセマネでの裏切りと逮捕 (22: 47—53)

それから、ユダが、神の御子を捕らえるための一隊とともにやって来て、大げさに口づけすることによって主を指し示した。弟子のひとり(ペテロ)が主を助けようとして大祭司のしもべの耳を切り落としたが、主はペテロをおしかりになり、そのしもべをいやされた。それからイエスは、凶暴な反逆者でもない、穏やかな教者にすぎない自分を、このような形で逮捕することの矛盾を指摘された。しかし、主は、彼らの時が来たことを知っておられたので、抵抗なさらなかった。

カヤパの前のイエス (22: 54—65)

暴徒は、イエスを偽りの裁判にかけるために大祭司のもとに連れて行った。その中庭で、ペテロは主の予告どおり主を3度否認した。

神殿に配属されていた守衛たちは、イエスをからかい、むち打ち、目隠しをしてたたいた。そして、「だれがやったか、当てられるものなら当ててみる」と言った。

サンヘドリンでのイエス (22: 66—71)

夜が明けると、イエスはサンヘドリン (ユダヤ人最高議会) に連れて行かれた。議員たちがイエスに「あなたはメシヤか」と尋ねた。主はこの問題を論じ合ってもむだだと知っておられたが、ご自分がいつか神の右の座に着くと彼らに警告された。「あなたは神の子なのか」と尋ねられると、主はそのとおりだとお答えになった。彼らにとって、それは神への冒瀆^{ぼうとく}であり、極刑に値するものだった。

ピラトの前のイエス (23: 1—12)

サンヘドリンによる宗教裁判の後、金曜日の朝、主イエスはピラトの前に連れて来られ、告発された。ローマに反抗すべきだと主張し、ユダヤ人が税を納めることを禁じ、自分を王としたとして。イエスは、ご自分がユダヤ人の王であると言われた。ピラトはイエスが無罪だと考えたが、暴徒たちの要求^{しつよう}が執拗^{しつよう}だったために、イエスをヘロデのもとに送った。主はヘロデの横柄な質問に何もお答えにならなかったの^で、この邪悪な王は主をあざけったうえで、ピラトに送り返した。

バラバの釈放 (23: 13—25)

ピラトはイエスが無罪であることを確信していたが、暴徒たちをなだめるために悪名高い犯罪者バラバを釈放し、十字架につけるためにイエスを彼らに引き渡した。

イエス、十字架につけられる (23: 26—43)

主が引いて行かれるとき、女たちの群れが主のために泣いたが、主は彼女たちに次のように言われた。自分自身と自分の子どもたちのために、そして、自分たちの町に迫り来る恐るべき破滅のために悲しめと。

カルバリに着くと、兵士たちはいのちの主、栄光の主を十字架につけた。犯罪人のひとりをご右に、ひとりをご左に。主は「彼らをお赦しください」と神に祈られた。主の着物が分けられ、指導者たちと兵士たちはあざ笑い、主の頭上には罪状書きが掲げられた。十字架につけられた犯罪人のひとは回心した。

不敬虔な者のために死なれたキリスト (23：44—49)

正午から午後3時まで、全地は暗やみで覆われた。神殿の幕は上から下まで裂けた。イエスはご自分の霊を御父にゆだねた後、死なれた。出来事はきわめて簡潔に述べられているが、その深い意味を明らかにするには無限の時間が必要となるだろう。

7. キリストの埋葬、復活、昇天 (23章50節—24章53節)

キリスト、ヨセフの墓に埋葬される (23：50—56)

アリマタヤのヨセフという名前の議員がピラトのもとに行き、イエスのからだを引き取って埋葬する許可を得た(彼はひそかに主を信じていた)。彼は、主のからだを上等の亜麻布で包み、硬い岩に掘られた新しい墓の中に納めた。ガリラヤ以来の忠実な女たちがヨセフに同行した。彼女たちは、愛するお方のからだにもっと香料と香油を塗るために戻って来ようと思った。

大変すばらしい知らせ (24：1—12)

安息日を守った後、女たちは香料をたずさえて墓に戻った。すると、石が転がしてあり、主のからだはなくなっていた！ ふたりの御使い

のことばによって彼女たちは、主が約束どおりよみがえられたことを確信した。主が彼女たちとともにガリラヤにおられた頃、約束されたとおりに（1—8）。

彼女たちは急いでエルサレムに帰ったが、11人の使徒たちは彼女たちの言うことを信じなかった。ペテロは、自分で確かめに行ったにもかかわらず、まだ戸惑っていた（9—12）。

エマオへの道（24：13—27）

ちょうどその日（そのことがあった後）、復活の主が、エマオに帰る途中のふたりの弟子に姿をお見せになった。それが主だと気づかなかった彼らは、その数日間に起こった衝撃的な出来事を主に告げた。すると主は彼らに次のように教えられた。起こったことはすべて預言者たちがメシヤに関して預言したとおりだと。

エマオの弟子たち、イエスだとわかる（24：28—35）

家に着き、救い主といっしょに食事をするまで、彼らはそれがイエスだとわからなかった。わかったとたん、主の姿は見えなくなった。ふたりの弟子はエルサレムに戻り、起こったことをすべて11使徒に話した。

宣教の大命令（24：36—49）

日曜日の夜、イエスが部屋の中に姿をお見せになったとき、弟子たちはパニックに陥った。主が手足の傷跡をお示しになったとき、ようやくのことで彼らは状況を理解しはじめた。主は、ご自分であることを確信させるために、焼き魚とハチミツを彼らといっしょにお食べになった（訳注：英語欽定訳による）。そして、次のように説明された。ご自分のよみがえりは、彼らにすでに語られたことと、旧約聖書に書いてあることの成就だと。弟子たちは「復活の証人」であり、したがって、あらゆる国で「悔い改め」と「罪の赦し」を宣べ伝える責任が

あった(36—48)。しかし、その前に、まず聖霊が来られるのをエルサレムで待たなければならなかった(49)。

昇天(24:50—53)

復活から40日後、主は弟子たちをオリーブ山の東のふもとに連れて行き、彼らを祝福した後、天に昇られた。彼らはイエスを礼拝し(訳注:英語欽定訳による)、その知らせを持ってエルサレムに帰った。彼らは、それからの10日間、神殿の庭で神をほめたたえていた。

このようにして、あのルナン(フランスの懐疑論者)が「世界で最も美しい書物」と呼んだこの書は終わる。

ヨハネの福音書

はじめに

執筆の目的

ヨハネはゼベダイの子であり、「イエスが愛された弟子」であった。彼はこの福音書を執筆した目的を次のように記している。「これらのことが書かれたのは、イエスが神の子キリストであることを、あなたがたが信じるため、また、あなたがたが信じて、イエスの御名によっていのちを得るためである」(20:31)。このため、ヨハネの福音書は、特に宣教を目的として書かれた唯一の福音書となった(もちろん、福音書はすべて、救い主としてのキリストに導くものだが)。神の子、世の救い主としてのイエスが、全体をとおして特に強調して描かれている。

ヨハネの福音書の独自の内容と執筆年代

本書の内容の9割以上は、本書にだけ記されており、他の福音書にはない。彼は1世紀の終わり頃(紀元85年から95年までのいずれかの時期)に執筆し、マタイ、マルコ、ルカには記されていない記事を意図的に採用した。たとえば、ユダヤの地における主の宣教は、ヨハネの福音書にのみ記されている(1:15—4:54)。

7つの「わたしは……である」

この福音書に登場する7つの「わたしは……である(I AM)」は、よく知られている。すなわち、いのちのパン・世の光・門・良い牧者・よみがえりでありいのち・道であり、真理であり、いのち・まことのぶどうの木。これに比べ、イエスがただ単に「I AM」(「わたし

はある」とか「わたしがそれである」と言っ、ご自分のことを述べられた7つのほうは、さほど知られていない(4:26, 6:20, 8:24, 28, 58, 13:19, 18:5, 8。最後のは2度言及されている)。この「称号」を用いることによって、主は、ご自分が旧約聖書の神(「主」〈エホバ。あるいはヤハウエ〉)であることを主張されたのである(ヘブル語のYHWH〈ヤハウエ〉はヘブル語の「ある」という動詞から派生したことばである)。

7つのしるし

イエスが神であることを示す証拠としての奇跡、すなわち「しるし」は7つある。水をぶどう酒に変えられたこと・王室の役人の息子をいやされたこと・5千人の群衆に食事を与えられたこと・ガリラヤ湖上を歩かれたこと・生まれつきの盲人をいやされたこと・死んだラザロを生き返らせたこと・復活の後、弟子たちに奇跡的な大漁を経験させられたことである。

ヨハネの福音書の文体と資料

本書で用いられている用語と構文はおおむね簡単なものである。しかし、表されている思想は限りなく深い。

ヨハネの福音書の概要

1. 序言。永遠のことば、人となる(1章1—14節)
2. イエスについてのバプテスマのヨハネの証言(1章15—34節)
3. イエスの宣教の1年目(1章35節—4章54節)
4. 2年目のエルサレム宣教(5章)
5. 3年目のガリラヤ宣教(6章)
6. 3年目のエルサレム宣教(7章1節—10章39節)
7. 3年目のペレヤ宣教(10章40節—11章57節)

8. 最後の公的宣教 (12章)
9. 2階の広間での教え (13—16章)
10. イエスの「大祭司の祈り」 (17章)
11. 裏切り, 裁判, 十字架 (18, 19章)
12. 復活 (20章)
13. 復活のキリストが弟子たちとともにガリラヤでなされたこと (21章)

1. 序言。永遠のことは、人となる (1章1—14節)

イエスは永遠のことは (ロゴス) である。ことは神とともにあった。ことは神である。ことは創造主であり、いのちであり、光である。バプテスマのヨハネは、イエスが真の光であると証言した。ことは受肉され、この世に住まわれた。このお方はご自分の民 (ユダヤ人) に拒まれたが、このお方を受け入れる者は、ユダヤ人であろうと異邦人であろうと、超自然的な靈的誕生によって神の子どもとなるのである。

2. イエスについてのバプテスマのヨハネの証言 (1章15—34節)

キリストは神を説き明かす (1:15—18)

ヨハネは次のように告げ知らせた。「ことは」は永遠の昔から存在しておられる。律法ではなく恵みとまこと (真理) をもたらされる。ことは神の御子であり、完全に神をおろわされるお方であると。

祭司やレビ人たちに対するヨハネの証言 (1:19—28)

サンヘドリン (ユダヤ人最高議会) はヨハネがだれなのかを知るために派遣団を遣わした (彼はヨルダン川でバプテスマを授けていた)。ヨハネは次のように言った。自分はメシヤではなく、エリヤでもなく、モーセが約束したあの預言者でもない。ヨハネはメシヤの先駆者と

して水でのみバプテスマを授けていたのであり、メシヤご自身とは比べる価値もない者であった。

キリストがバプテスマを受けたときのヨハネの証言（1：29—34）

その翌日、ヨハネは次のように公言した。イエスは神の小羊、イスラエルのメシヤ、聖霊によってバプテスマを授けるお方、そして神の御子であると。イエスがバプテスマをお受けになったとき、聖霊が彼の上を下ったが、ヨハネはそのとき初めてイエスをメシヤと認めたのだった。

3. イエスの宣教の1年目（1章35節—4章54節）

イエスの最初の弟子たち（1：35—51）

その翌日、ヨハネのふたりの弟子は、イエスと出会い、そのあとについて行った。そのうちのひとりアンデレは、自分の兄弟ペテロのもとに行き、彼を連れて来て、イエスに紹介した。その翌日、イエスはピリポを召された。すると、彼もナタナエルを連れて来た。ナタナエルは初めは懐疑的だったが、イエスが神の御子であり、イスラエルの王であることをすぐに認めた。主は、彼の信仰が、さらにすぐれた光景を見ることによって報われると約束された。

カナの婚礼（2：1—11）

イエスの最初の奇跡は、カナにおける婚礼で水をぶどう酒に変えたことだった。それは最上のぶどう酒で、しかも多量に造られた。

キリストの宮きよめ（2：12—22）

主は、カペナウムにしばらく滞在された後、過越の祭りを祝うためにエルサレムに上られた。そして、神殿の庭から両替人たちを追い出された。ご自分の「父」の家を思う熱心を表明されたのである。ユダヤ人たちがイエスにしるしを求めると、主は「この『神殿』を壊して

みなさい。わたしは3日でそれを建てよう」と言われた。彼らはヘロデが建てた神殿のことだと思ったが、イエスはご自分のからだのことを言われたのである。弟子たちは、主が復活されたあとになって、主が言われたことを思い出し、初めてその意味を理解したのである。

すべての人を知っておられるキリスト（2：23—25）

過越の祭りのとき、多くの人々がイエスの奇跡を見て、彼を信じるに公言した。しかし主は、彼らが名ばかりの信者であり、真の弟子ではないことを知っておられた。

人は新しく生まれなければならない（3：1—21）

ニコデモは筋金入りのパリサイ人で、ユダヤ人の指導者だった。イエスは彼に「もし、神の国に入りたければ、新しく生まれなければならない」と言われた。ニコデモは、肉体上の誕生をもう1度経験することは不可能だと考えた。そこで、主は次のように説明された。「新生」は、聖霊による神秘的かつ奇跡的な驚くべきみわざであり、罪人が神のひとり子を信じる時に起こることだと。信じる者は永遠のいのちを持つが、信じない者はすでにさばかっている。「信じたくない」というのが人々の率直な気持ちだろう。彼らは「光」（正しさ）よりも道徳的な「やみ」（罪）のほうを愛しているからである。

バプテスマのヨハネ、イエスをほめたたえる（3：22—36）

しばらくの間、イエスとバプテスマのヨハネはユダヤの地で並行して宣教を続けた。ユダヤ人たちがヨハネに「イエスのほうが、より多くの人々を引きつけているようだ」と告げたとき、ヨハネは（要するに）それこそあるべき姿だと言った。イエスはメシヤだったが、ヨハネはそうではなかった。イエスは「花婿」であり、ヨハネは「その友人」にすぎなかった。イエスは栄え、ヨハネは衰えなければならなかった。イエスは天から来られたお方であり、ヨハネは単なる人間にす

ぎなかった。それにもかかわらず、救い主の教えを受け入れようとする者はほとんどいなかった。しかし、主を信じた者は、神の御救いにあずかることが保証され、永遠のいのちを得る。信じない者は神の怒りの下に自分の身を置いたことになる。

サマリヤの女、ユダヤ人のメシヤ（そして、彼女自身のメシヤ）に出会う（4：1—30）

イエスはご自分の弟子たちをとおしてヨハネ以上にバプテスマを授けておられたが、そのことをヨハネの弟子たちが嫉妬しつとしていたのかもしれない。理由は何であれ、イエスはユダヤの地を去り、北のガリラヤへ向けて出発された。その途中、主は、サマリヤにあるヤコブの井戸に立ち寄り、ひとりの女に水を飲ませてほしいと頼まれた。一連の対話の中で、主は永遠に渴くことのない生ける水のことを彼女に話され、彼女がその水を必要としていることを明らかにされた（彼女は罪の中に生きていた）。そして、真に礼拝する方法を明かされた。用事を済ませて戻って来た弟子たちは、主が女と、それもサマリヤの女と話しておられるのを見て非常に驚いた！ それから、その女はスカルの町に帰り、メシヤに出会ったと人々に知らせた。その結果、その町の人々は主を見ようとやって来た。

たましいの収穫（4：31—38）

イエスの食事がまだだったことを弟子たちが気遣ったとき、イエスは、神のみこころを行うことの喜びは食欲を満たすことにまさると説明された。それから、主は彼らに、すでに熟している「畑」の中のたましいを刈り取ることによって、この大きな喜びを味わうようにと言われた。ほかの人々が種をまいた。弟子たちは、他人が労苦した実を刈り取る特権にあずかったのである。

世の救い主（4：39—45）

多くのサマリヤ人がその女の証言を聞いて信じたが、主ご自身のことばを聞いて信じた者たちもいた。主は彼らのもとに2日間滞在され、それからガリラヤに行かれた。主はそこで、ユダヤの地よりもさらに好意的に迎えられた。

王室の役人の息子をいやす（4：46—54）

カナでは王室の役人が自分の息子をいやしてほしいとイエスに頼んだ。その王室の役人には（信じるための）しるしは必要なかった。彼がそのことを明らかにしたとき、イエスは「あなたの息子は直っている」と言われた。そのあと、その役人は、主がそう言われたのと全く同じ時刻に息子がいやされたのを知った。

4. 2年目のエルサレム宣教（5章）

ベテスダの池でのいやし（5：1—9）

イエスは、ユダヤ人の祭りのためにエルサレムに行かれたとき、38年間、足が不自由だった男をいやされた。その男はいやしを求めてベテスダの池に入ろうと試みたが、1度もうまくいかなかった。いつもほかの人が先に入ってしまうからである。イエスが床を取り上げるように命じられると、彼はただちにいやされた。

否定的な反応（5：10—16）

あるユダヤ人たちは、その男が安息日に床を取り上げたことを非難した。彼を1度も助けてやることができなかつたばかりか、もしそれが自分だったら、たとえ安息日であろうと、いやしを歓迎したであろうに。その男は自分をいやしてくださったお方がだれだか知らなかった。しかし、神殿の庭で主に会った後、自分をいやされたのはイエスだとユダヤ人たちに告げた。それを聞いて激怒したユダヤ人たちは、イエスが安息日を破ったものと思い、彼を殺そうとした。

御父と等しい御子（5：17—27）

神を自分の父と呼ぶことによって、イエスが「わたしは神と等しい」と主張されたとき、彼らはさらに主を殺す決意を固めた。主は彼らに次のようにお答えになった。父がなさることはわたしもそのとおりにする。知識において、また、死人を生き返らせることにおいて、わたしは神と等しい。父はすべてのさばきをわたしにゆだねられた。父と同じようにわたしも敬われるべきである。父と同様、わたしも永遠のいのちを与える。父と同様、わたしも独自に存在している。

ふたつの復活（5：28—30）

イエスはさらに続けて次のように言われた。いつか、死んだ者がみな主の声を聞いて、墓からよみがえるだろうと（よみがえりは明らかに2種類あるが）。また、次のように断言された。わたしは道徳的に完全な者だから、自分の意志では行動できず、ただ御父のみこころに従うだけだと。

イエスについての4つの証言（5：31—40）

この章の残りの部分で、主イエスは、ご自分の神性に関する様々な証言について述べておられる。主は、ご自身に関するご自分の証言は（真実には違いないが）適切なものとはみなされないということに同意された。しかし、主には、バプテスマのヨハネの証言、ご自分のみわざという証言、御父の証言、旧約聖書の証言があった。

「人からの榮譽」と「神からの榮譽」（5：41—47）

ユダヤ人たちの欠点は彼ら自身の意志にあった。彼らはキリストのもとに来たがらなかったのである。彼らは神よりも自分自身を愛した。神に認められることよりも人に認められることに、より関心があった。彼らはキリストを受け入れたいと思わなかったが、やがて反キリストを受け入れるだろう。イエスは彼らを御父に訴えようとはなさ

らなかった。彼らを訴えるにはモーセが書いたものだけで十分だったからである。

5. 3年目のガリラヤ宣教（6章）

5千人を養う（6：1—14）

主は、ガリラヤ湖の東岸（もしくは北東岸）のあたりで、5つのパンと2匹の小さな魚を増やして、男だけで5千人の人々に食事をお与えになり、しかもその残りは12のかごに一杯になった。その結果、大勢の人々がイエスのことを「約束された預言者」だと信じ、主によってローマの支配から救い出されることを望んだ。

水の上を歩く（6：15—21）

人々は現世的な願いからイエスを王にしようとしたが、主はそれから逃れるために、ひとりで山に行かれた。弟子たちが舟でカペナウムへ戻ろうとしているとき、嵐が起った。イエスは湖の上を歩いて彼らのもとに來られ、嵐を静め、ご自分が偉大な「わたしはある（わたしだ）」であることを示された。舟はただちに岸に着いた。

群衆、カペナウムまでイエスのあとを追う（6：22—24）

その翌日、群衆はイエスを追ってガリラヤ湖を渡り、カペナウムに來た。彼らが質問したので、主は「いのちのパン」の話がされた。イエスの話は最初のうちは単純で理解しやすいものだったが、彼らの不信仰が明らかになるにつれて、主の教えも次第に難解なものとなった。

なくなる食物と永遠のいのち（6：25—27）

彼らは「先生。いつここにおいでになりましたか」と尋ねた。このことは、彼らが主に關心を持っている証拠のように思えたが、彼らは食べ物を与えられたから興味を持ったにすぎないと主は言われた。彼らは、永遠のいのちを保証する靈的な食べ物のために働くべきだった。

キリストを信じるのが神のわざ（6：28, 29）

彼らは「それは一体どのような働きだろうか」と知りたがった。主の答えは「わたしを信じなさい」だった。

イエスは天からのパン（6：30—33）

彼らは、モーセが与えたマナのようなしるしを求めた。主は、いのちを与えるのはマナではなく、まことの「神のパン」であるとお答えになった。

イエスはいのちのパン（6：34—40）

彼らが「そのパンをください」と願ったのに対し、主は「来て……信じなさい」とお答えになった。しかし主は、彼らに信じる気がないので知っておられた。けれども、（彼らの不信仰にもかかわらず）神のみこころが勝利を収めることも知っておられた。

イエスのもとに行くことによって永遠のいのちがもたらされる

（6：41—51）

ユダヤ人たちは、主が「わたしは天から下って来た」と言われたことに憤慨した。そのため、イエスは彼らに、救いにはふたつの側面があることを告げられた。まず、神が人を引き寄せなければならない。そのあとで、（永遠のいのちを持つために）人がイエスを信じなければならない。これは、「生けるパン」であるお方を食べることで、そのお方の「肉」を食べることと同じである。

イエス、ご自分のからだと血について教える（6：52—59）

イエスが「わたしの肉を人に食べさせる」と言われたとき、群衆はとまどった。「永遠のいのちを得る唯一の道は、わたしの肉を食べ、わたしの血を飲むことである」と主は（説明されたというよりはむしろ

ろ) 主張された。これは「主を心から信じる」という意味であると私たちは知っているが、主は彼らの不信仰のゆえにその意味を明らかにされなかった。

多くの「従者」たちがイエスのもとを去る（6：60—66）

人間の肉を食べ、その血を飲むという考えに、多くの者が腹を立てた。主は、ご自分が天に上られるときには、それを行うことがさらに難しくなるだろうとお答えになった。しかし、主は、文字どおりの「肉」のことを言われたのではなく、主のこぼを食べる、つまり、主が言われたことを信じるという意味で言われたのである。

ペテロの信仰告白（6：67—71）

それ以来、名ばかりの弟子たちの多くがイエスのもとを去って行った。しかし、ペテロは、「私たち（12使徒）は、あなたがメシヤであり、神の御子であることを信じます」と言った。主は（要するに）「12人ではない。……11人だけである」とお答えになった。主はユダが裏切ることをご存じだったからである。

6. 3年目のエルサレム宣教（7章1節—10章39節）

イエスの兄弟たちの不信仰（7：1—9）

仮庵かりいせの祭りが近づいた頃、イエスの兄弟たちは「ユダヤに行って自分を誇示したらどうだ」と、あざけるような調子で提案した。イエスは、ご自分を世に現す「神の時」はまだ来ていないとお答えになった。兄弟たちは神のみこころもかえりみず、気の向くままに生きていた。彼らは世に属していたので、「世の憎しみ」に立ち向かう必要がなかったのである。

イエス、仮庵の祭りで教える（7：10—24）

兄弟たちがエルサレムへ行った後、イエスもひそかに行かれた。あ

るユダヤ人たちは主を捜し、主をほめる者もいれば、非難する者もいたが、公然と主に味方しようとする者はひとりもいなかった。

祭りの中頃、主は神殿の庭で教えはじめられた。主は、ご自分の教えは神からのものであり、もし心から真理を知りたいと望む者がいれば、神はその人に真理を示してくださると言われた。主は、ユダヤ人たちが、ご自分を殺そうとたくらむことによってモーセの律法を破っていると非難された。彼らはそれを否定し、主が悪霊に取りつかれていると答えた。しかし主は、安息日に人をいやされたとき、彼らが腹を立てたことを告げられた。彼らは安息日にその子どもたちに割礼を施していたにもかかわらず。

イエス、庶民にとって謎となる（7：25—29）

イエスは公然と語り続けておられたが、指導者たちは、イエスを殺そうとたくらんでいたにもかかわらず、その行動を許していた。エルサレムの人々はそのことを不思議に思った。指導者たちは、イエスがメシヤであるという結論をすでに下したのだろうか、と彼らは思った。彼らは、イエスがメシヤであるはずがないと考えた。イエスが「だれか」、「どこから来たのか」を知っていたからである。イエスは、「あなたがたは【人】としてのわたしを知っているが、わたしが神から来た者であり、神性を主張できる者であることを知らない」と答えられた。

イエス、逮捕を回避する（7：30—36）

イエスがメシヤかどうか、人々が当惑していたため、ユダヤ教の指導者たちはイエスを捕らえるために神殿の番人たちを遣わした。イエスが「わたしはまもなくあなたがたのもとを去り、あなたがたは永遠にわたしから引き離される」と言われたので、指導者たちは当惑した。

イエス、聖霊を与えることを約束する（7：37—39）

祭りの最終日、主は、やがて聖霊が下って来て、主を信じる者に宿ると公に約束された。この約束はペンテコステの日に成就した。

イエスに関して意見が分かれる（7：40—44）

人々は、もう1度、イエスに関してそれぞれ違う意見を述べた。

指導者たち、イエスを拒否する（7：45—52）

神殿の番人たちは、キリストを捕らえないまま戻って来たい、主のことを好意的に話した。それを聞いたパリサイ人たちは「お前たちもだまされている」と言って彼らを非難した。ニコデモが主の言い分も公平に聞くべきだと主張すると、パリサイ人たちはニコデモをあざ笑い、「あなたも無知なガリラヤ出身者なのか」と尋ねた。

「世の光」を前にした姦淫の女（7：53—8：11）

古い写本の多くが7章53節から8章11節までを欠いているが、大多数の写本にはこの記事が記されている。アウグスティヌスは「不道徳を助長することのないように、だれかがこの記事を削除したのだ」と述べている。8章の冒頭の節は7章53節とつながっている。つまり、「群衆は家に帰ったが、帰る家のないイエスはオリブ山に行かれた」のである。

翌朝、イエスは神殿に戻られた。そこにパリサイ人たちが、姦淫の場で捕らえたひとりの女を連れて来て、イエスをわなにかけるために主の判定を求めた（なぜ彼らは相手の男も連れて来なかったのだろうか）。主は、律法の命令を支持され、その女を石打ちにすることに同意されたが、罪のない者がその刑を執行するようにと要求された。しかし、進み出る者はだれひとりなく、主はその女に「行きなさい。もうこれ以上、罪を犯さないように」と言われた。私たちの救い主は罪人に対してこれほどまでに慈しみ深い。この記事も実際にあった出来事だと私たちは信じている。

イエス、ご自分の証言を擁護する（8：12—20）

主の発言がもとで、ユダヤ人たちとの口論が始まった。イエスが「わたしは世の光である」と告げられると、彼らはその発言を否定し、「本人が自分のことを自分で証言するのは真実として受け入れられない」と言った。主は、「わたしの場合はわたしの証言が有効であり、御父もその証言を確証しておられる」と主張された。彼らは冷笑して、「御父はどこにいるのか」と尋ねた。すると主は、「あなたがたが御父を知ることができないのは、わたしを神の御子と認めないからだ」と答えられた。

イエス、自分が去って行くことを予告する（8：21—29）

イエスは、ご自分がユダヤ人たちを置き去りにすることを予告された。そして、彼らは主を捜すが見いだせないこと、彼らが罪の中で死ぬこと、天国から永遠に切り離されてしまうことを告げられた。何と彼らは主が自殺するつもりなのかと考えた！ 主は彼らの霊的無知を叱責され、彼らの上にさばきが下ることを繰り返し述べられた。彼らが主に「あなたはだれなのか」と尋ねると、主は「いつもあなたがたに言ってきたとおり、わたしはメシヤである」と言われた。主が彼らに言うべきことはたくさんあったが、御父に示されたことだけを話された。彼らは主を十字架につけた後、主がだれであるかを知るようになるだろう。すなわち、主がメシヤであり、大いなる「わたしはある」というお方であり、御父と最も親しい交わりのうちにお住みになるお方であることを。

真理はあなたがたを自由にする（8：30—32）

主は、信仰告白した多くの者たちに向かって次のように言われた。「わたしのことばに従い続けることこそ真の弟子である証拠であり、そうすることによって罪と過ちから守られ、自由になれる」と。

信じないユダヤ人は靈的な意味においてはアブラハムの子孫ではない（8：33—47）

その結果、不信仰なユダヤ人たちとの争いが再開した。彼らは、自分たちがアブラハムの子孫であり、1度も奴隷になったことがないのを自慢した。イエスは、ご自分が与えようとしておられる自由について繰り返し述べ、彼らは「アブラハムの子孫」ではあっても「アブラハムの子ども」ではないと言われた。彼らのからだにはアブラハムから受け継いだ血が流れていたが、彼らの心にアブラハムの信仰はなかったからである。イエスを殺したいという彼らの願いが、彼らの本当の父（サタン）を示していた。彼らは、自分たちは不品行によって生まれたのではなく（おそらく、イエスはそうだという意味も含めて）、神が自分たちの父だと言った。イエスは、もし彼らが神を愛しているなら、イエスをも愛するだろうと言われた。しかし、彼らには、イエスが語られたことばの比喩的な用法が理解できなかった。イエスの教えに我慢ならなかったからである。彼らは人殺しであり、偽り者であり、彼らの父である悪魔そっくりの者だった。イエスが罪のないお方であるとわかって、決して彼を信じようとはしなかった。彼らは、真理を拒むことによって、自分たちが神に属していないことを自ら証明したのである。

イエスの正体、明らかにされる（8：48—59）

ユダヤ人たちは主イエスのことを悪霊につかれたサマリヤ人だと言って非難した。しかし、主は（ご自分ではなく）御父の栄誉をたたえておられたのである。主に従う者は決して（永遠の）死を見ることはない。ユダヤ人たちはこの最後のことばに異議を唱え、アブラハムも預言者たちも死んだと告げた。イエスは「わたしはアブラハムよりも偉大だ」と主張しておられたのに違いない！ イエスは、「あなたがたが【私たちの神】と呼んでいるお方こそ、わたしに栄光をお与えに

なるお方である」と答えられた。主は「わたしは神を知っており、神と等しいものであり、わたしがそれを否定したとしたら、わたしはうそをつくことになる」と言われた。また、主は「アブラハムはこの日、つまり、メシヤの日を見たいと待ち望んでいたし、その日を見て喜んだのだ」とも言われた。このようにしてイエスは、ご自分がメシヤに関するすべての預言の成就だと主張された。最初、ユダヤ人たちは主をあざ笑っていたが、やがて主に石を投げつけようとした。しかし、主は神殿の庭から出て行かれた。

生まれつきの盲人をいやす（9：1—12）

生まれつきの盲人がきっかけとなって、イエスはいやしの奇跡を行われた。救い主がつばきで泥を作ってその男の目に塗り、それを洗い落とすよう命じて送り出されると、奇跡が起こった。すぐに彼の目が見えるようになったのである。近所の人々が次々と繰り出す質問に、その男はできる限り答えた。

パリサイ人たち、その回心者を詰問する（9：13—17）

いやしが安息日に行われたのを知って取り乱したパリサイ人たちは、その男を厳しく追及した。彼は事の次第を語り、そのような奇跡を行う人が罪人であるはずがないと断言し、「イエスは預言者だ」と言った。

パリサイ人たち、回心者の両親を詰問する（9：18—23）

ユダヤ人たちは、イエスが盲人の目を開けたことを疑い、今度はその男の両親に聞いた。両親は奇跡が行われたことは認めたが、ユダヤ人社会から追い出されるのを恐れ、それ以上事件に巻き込まれるのを拒んだ。

パリサイ人たち、回心者を追放する（9：24—34）

そこで、ユダヤ人たちはその男のところに戻り、もう1度厳しく尋問した。彼は、自分は盲目だったが、今は見えると証言した。彼を脅そうとしたユダヤ人たちの試みは失敗した。彼はイエスのことを大胆に語り、簡潔な論理で彼らの主張に反駁した。気を悪くした彼らはその男をしっかりとつけ、追放した。

イエス、回心者の信仰を強める（9：35—38）

彼らがその男を追い出したとき、彼を迎えようとして待っておられたイエスは、ご自分が神の御子であることを明らかにされた。その男は主のことばを信じ、主を礼拝した。

イエス、靈的な盲目について教える（9：39—41）

「わたしがこの世に来た以上、さばきは必ず行われる」と主は言われた。自分が靈的に盲目であることを認める者は見えるようになり、その必要を感じない者はいつまでも盲目のままだろう。もしパリサイ人たちが、自分が盲目であることを認めさえすれば、彼らの罪の刑罰は比較的軽いもので済んだだろう。しかし、彼らは、自分たちの真ん中に立っておられる神の御子を見ることができなかつたし、見ようとしなかつた。だから、彼らの（靈の）目が開かれるという奇跡は起こらなかつたのである。

良い牧者（10：1—18）

良い羊飼いの話は、9章の主題を受け継いだものである。「牧者」とは主イエスのことである。「羊の囲い」とはイスラエルの民のことである。「門番」とはバプテスマのヨハネをとおして働かれた聖霊のことである。門以外のところから羊の囲いに入る者とは、パリサイ人たちのように、ユダヤの民をさばく権威を主張しながら、その資格を持たない者たちのことである。彼らは「盗人」であり、「強盗」であり、「（見知らぬ）ほかの人」であり、「雇い人」である。「この囲いに属さ

ないほかの羊」とは異邦人のことである。「ひとつの群れ」とはからだなる教会のことで、主を信じるユダヤ人と異邦人から成る。イエスはメシヤの資格をすべて備えて来られたのであり、本物の「羊」はイエスがメシヤだとわかる。主はご自分の羊を導き、養い、彼らのために死に、よみがえり、そのうえ、さらに豊かないのちを彼らにお与えになる。

ユダヤ人たちの間の分裂（10：19—21）

ユダヤ人たちは、イエスを支持する側と排斥する側とに分かれた。中立の立場はなかったようである。

宮きよめの祭りのとき、イエス、ご自分の神性を宣言される

（10：22—30）

宮きよめの祭りのとき、ユダヤ人たちがイエスに「あなたはメシヤなのか」と尋ねると、主はそのとおりだと断言されただけでなく、ご自分の「羊」に永遠のいのちを与えるという点においても、ご自分が（父なる）神と等しいと主張された。

イエスの主張、拒まれる（10：31—39）

それを聞いたユダヤ人たちは、「神を冒瀆する」主張をしたとして、イエスを石打ちにしようとした。イエスは（要するに）次のように答えられた。もし神が、旧約聖書において、単に神の代理人にすぎない、この世の裁判官や権力者たちのことを述べるのに「神々」ということばを用いておられるのなら、主がご自分のことを神の子と呼ばれるのは当然のことであると。主を天からこの世にお遣わしになったのは御父なのだから。また、たとえ彼らが主のことばを信じられなくとも、主が力において御父と等しいことを示されたのだから、彼らはその奇跡によって確信すべきである。

7. 3年目のペレヤ宣教（10章40節—11章57節）

多くの人がイエスを信じる（10：40—42）

再び彼らはイエスを捕らえようとしたが、主はヨルダン川の東へ逃れた。そこでは多くの人々が主を信じ、主に関するヨハネの証言が真実であることを認めた。

ラザロの死（11：1—16）

マリヤとマルタはイエスのもとに使いを送り、自分たちの兄弟ラザロが病気であることを知らせた。そのとき、主は弟子たちに、その病気は死で終わるだけのものではなく、神の栄光を現すためのものだとされた。2日後、主はユダヤに戻ろうと言われた（そこにはラザロがいた）。弟子たちは、ユダヤ人たちがついこの前もその地で主を石打ちにしようとしたことを告げた。イエスは「わたしの働きが終わるまでは、わたしの身に危険が及ぶようなことはない」とお答えになった。主は、ラザロが死んだことをすでに知っておられた。最初は「眠る」ということばを（「死ぬ」と同意語で）用いられたのだが。

イエスはよみがえりであり、いのちである（11：17—37）

ラザロが死んで4日後に到着されたイエスは、ラザロが（終わりの日はもちろん、今すぐにでも）よみがえることを保証し、マルタを励まされた。そして、ご自分が来られるとき、信仰を持って死んだ者は生き返り、まだ生きている信者は死を経験することなく天に行くというすばらしい啓示をお与えになった。マルタはイエスがメシヤであり、神の御子であると告白し、家に走って帰り、マリヤを連れて来た。マリヤは主が遅れて到着されたことを嘆き悲しんでいたようである。

ラザロ、生き返る（11：38—44）

墓の入口をふさいでいた石がイエスの命令で取りのけられると、主

はラザロに出て来るよう命じられた。ラザロは（歩いてではなく）死体を包む布で巻かれたまま出て来た。布がほどかれるとすぐに歩いて帰って行った。

イエスを殺す陰謀（11：45—54）

ユダヤ人議会は、ユダヤ人の中にイエスを信じる者たちが出てきたことに不安を感じるようになった。もし、このような動きがこれ以上続けば、ローマ人が神殿を破壊し、国民を追い散らすのではないかと恐れた。大祭司カヤパは、自分が意図したよりもさらに深い意味のあることばで答えた。彼は預言して次のように言った。ユダヤの民はイエスが原因で滅びることはなく、イエスは国民のために死のうとしておられるのであり、また、異邦人の中からご自分の選びの民を集めるためにも死のうとしておられるのだと。この預言は、主を殺そうというユダヤ人たちの陰謀を助長するように思えたので、イエスは弟子たちを連れて荒野の近くの町に退かれた。

イエスを捜す人たち（11：55—57）

過越の祭りが近づくと、人々はイエスに会いたい一心でエルサレムに上って来た。ユダヤ教の指導者たちも主を捜していた。主を捕らえて殺すために。

8. 最後の公的宣教（12章）

ベタニヤでの香油注ぎ（12：1—8）

過越の祭りのためにエルサレムに行く途中、イエスはラザロ、マリヤ、マルタの家に立ち寄られた。マリヤが主の足に高価な香油を注ぎかけると、イスカリオテ・ユダがその行為に異議を唱えた。彼は、自分自身の貪欲は棚とんよくに上げ、貧しい人々のことを気遣うふりをしたのである。しかし、主はマリヤを弁護して次のように言われた。「このようにしてわたしに仕える機会に限られているが、貧しい人たちの世話

をする機会は常にある」と。

ラザロを殺す陰謀（12：9—11）

一方、祭司長たちはラザロを殺そうと図っていた。ラザロが生き返ったために、多くのユダヤ人がイエスを信じるようになったからである。

勝利の入城（12：12—19）

人々はイエスを温かくエルサレムに迎え入れたかのように見えた。彼らは道にしゅろの枝を敷き、イエスに向かって「イスラエルの王」と叫んだ。しかし、彼らの多くがもうすぐ「イエスを殺せ」と叫ぶようになる。最初は「われらの王にホサナ！」と叫んでおきながら、ついには「十字架につけろ！」と口をそろえて叫んだのである。彼らはイエスの死を心から望んだのである。

収穫の法則（12：20—26）

何人かのギリシャ人が主にお目にかかりたいと言ってピリポとアンデレのもとにやって来た（彼らは主に、ギリシャ哲学の新しい学派の長になってもらいたいと思ったのかもしれない）。救い主は、豊かに実を結ぶためには死ななければならないとお答えになった。主が栄光をお受けになるのは、単なる（精神的）指導者としての恵まれた人生によってではなく、犠牲的な死によってであった。主のしもべは、自己犠牲の生涯を送られた主を見習わなければならない。

イエス、来たるべき出来事を予告する（12：27—33）

イエスは、近づきつつある「時」から救い出されるためにではなく、その時に神の栄光が現されることを祈られた。そのとき、「イエスの祈りは答えられる」と天から御声が聞こえた。すると、イエスはただちに、この世の罪と、サタンの敗北と、十字架によるご自分の死と、

あらゆる人々をご自分のもとに引き寄せることをお告げになった。

「人の子」とはだれか (12:34—36)

イエスがメシヤであるならば、どうして死ななければならぬのか不思議に思う者たちもいた。メシヤはいつまでも生きていることを聖書によって知っていたからである。彼らは「その人の子とはだれですか」と尋ねた。主はご自分が「光」であると言われ、光の中を歩くようにと彼らに言われた（機会のある間に主を信じるべきであるという意味で）。

だれが私たちの知らせを信じたか (12:37—43)

イエスがなされた多くの奇跡にもかかわらず、主を信じる者はほんのわずかしかなかった。それはイザヤの預言どおりだった。大部分の者は正しく判別できず、不信仰のゆえに盲目だった。これもまたイザヤの預言どおりだった。ユダヤ教の指導者たちの中には主に対する信仰を告白する者もいたが、ユダヤ人社会から追放されることを恐れて信仰を公にしようとはしなかった。

イエス、不信仰を戒める (12:44—50)

そのため、救い主は、不信仰がもたらす危険を大声で警告された。主を信じることは御父を信じることでもある。主イエスを見ることは神を見ることである。主が来られた目的は光となるためであり、さばくためではなかった。主を拒む者は、来たるべき日、主の教えによってさばかれるだろう。主は「永遠のいのち」に関するメッセージを忠実にお伝えになった。そのメッセージは、神が主におゆだねになったものである。

9. 2階の広間での教え (13—16章)

師であるイエス、しもべの立場をとる (13:1—11)

十字架の前夜、イエスと弟子たちはエルサレムの「2階の広間」に集まった。夕食のとき、悪魔は主を裏切るようユダに合図をした。主はご自分の使命と行き先をよく知っておられたので、しもべの立場をとり、弟子たちの足を洗いはじめられた。ペテロが異議を申し立てると、イエスは霊的な教訓をお与えになった。弟子は1度だけ全身を洗ってもらう必要がある（すなわち新生の洗い）。しかし、主と交わるためには、繰り返し足を洗う必要がある。すなわち、みことばによって何度も「洗う」ことによって、汚れたこの世で身についた汚れを洗いよめるのである。弟子たちは、ユダを除いては、全員きよい（すなわち全身を洗われた）者たちだった。

イエス、示した手本について説明する（13：12—20）

それから主は、もうひとつの教訓をお与えになった。弟子たちは主を「師であり主であるお方」として認めていたのだから、互いに足を洗い合うことによって主の模範を見習うべきだった。文字どおりの意味においてではなく、霊的な意味において、つまり、水によってではなく、みことばによって（12—17）。主は、話の途中で、この教えの対象からユダを除外された。イエスはユダの正体を前もって弟子たちに明らかにされた。それは、主の予告が実現したとき、主が「わたしはある」——旧約聖書の聖なる神——であることを彼らが知るためだった（18—20）。

イエス、ユダの裏切りを予告する（13：21—30）

イエスが、「弟子たちのひとりがわたしを裏切る」と繰り返し言われたとき、弟子たちはそれがだれであるのか、はっきりとは知らなかった。ついに主は、肉汁にパンを浸し、それをユダに手渡すことによって、はっきりとその人物を指し示された。裏切り者ユダはすぐに立ち去った。

新しい戒め（13：31—36）

主はカルバリの丘を思い描きながら次のように言われた。「わたしは栄光を受けたし、神も栄光をお受けになった。また神は、わたしを死人の中からよみがえらせることによって、すぐにわたしに栄光を与えてくださるだろう」と。それから次のように告げられた。「わたしはあなたがたから去って行くが、あなたがたは今はまだわたしのあとについて来ることはできない」と。しかし、主は彼らに新しい戒めを残された。互いに愛し合いなさいと。これこそ主の弟子である紛れもない証拠となるだろう。

イエス、ペテロの否認を予言する（13：36—38）

ペテロは、たとえいのちを捨てることになったとしても主について行きたいと嘆願した。ところが、イエスは、ペテロが（主に従うどころか）明け方までに主を知らないと3度言うことを明らかにされた。

イエス、弟子たちを励ます（14：1—11）

「2階の広間での教え」は続き、救い主は、ご自分の民を天に連れ帰るために再び来ると約束された。トマスが「道」について質問すると、イエスは、ご自分が「道」——御父のみもとに通じる唯一の道——であると言われた。それを聞いたピリポは、自分たちを父なる神のみもとに連れて行ってほしいとイエスに頼んだ。イエスは、「わたしと父とはぴったり結びついているのだから、わたしを見た者は父を見たのだ」と説明された。主が話されたことばも、主がなされた奇跡も、御父のことばでありわざであった。こうした奇跡によって、弟子たちは、ともに神であられる御父と御子の密接な結びつきを確信すべきだったのである。

イエスの名による祈り（14：12—14）

キリストは弟子たちに、「わたしの名によって祈るなら、あなたが

たはさらに大きな奇跡、すなわち、さらに世界的な、さらに多くの人々に影響を及ぼす奇跡を行うことができるだろう」と言われた。

もうひとりの助け主（14：15—21）

救い主は、御父をお願いして「もうひとりの助け主」（すなわち聖霊）を送ってもらうと約束された。聖霊が弟子たちとともに（弟子たちの内に）おられるだろう。このようにイエスは（聖霊という位格において）弟子たちのところに戻って来られるのであり、彼らを捨てて孤児とはなさないのである。彼らは信仰によって主にお会いし、主との親しい交わりを楽しむことだろう。彼らは従順によって主に対する愛を示し、その結果、御父と御子の愛を知ることだろう。

イエスおよび御父との交わり（14：22—24）

（裏切り者でないほうの）ユダが「私たちにはご自分を現そうとしながら、なぜ世には現そうとなさらないのですか」と尋ねると（19を参照）、主は「わたしを愛し、わたしに従う者だけが御父および御子との交わりを楽しむことができるのだ」とお答えになった。

イエスが残して行く平安（14：25—27）

キリストがおられない間は、助け主が弟子たちを教え、救い主のことばを思い起こさせるだろう。イエスは、彼らが心を騒がせたり恐れたりしないように、ご自分の平安を残して行かれた。

イエスが御父のふところに戻ることを喜ぶ（14：28—31）

もし弟子たちが主を愛しているなら、主が天に帰って行かれるのを喜ぶことだろう。そうすればもう主が迫害されることはないからである。イエスが地上におられる間、御父は御子よりも偉大なお方だった（28。しかし、これは「御父が御子をこの世に遣わされた」という意味においてであり、位格や神性に関してではなかった）。主が天に帰

られたとき、弟子たちは信じるだろう。しかし、悪魔はすでに未ようとしていたし、主は御父のみこころを行うために出かけて行かなければならなかった(29—31)。サタンはこの世の支配者であり、私たちもテレビや新聞をとおして毎日この事実を確認できる。

まことのぶどうの木(15: 1—8)

ここでは文脈を把握することが非常に重要である。すなわち、ぶどうの木とその枝についてのこの話は「奉仕」に関するものであり、「救い」に関するものではない。イエスが「まことのぶどうの木」であり、父なる神がその手入れをする「農夫」である。実を結ばない枝は、主の懲らしめを受ける世俗的な信者のことである。実を結ぶ枝、つまり霊的に成長しつつあるクリスチャンは、さらに多くの実を結ぶために刈り込まれる。枝が実を結ぶための唯一の手段は、ぶどうの木につながっていることである。「とどまっていなない」クリスチャンは自分のあかしを失ってしまう。人々が彼の評判を取り上げ、それを火の中に投げ込むのである。信者は、キリストにとどまることによって、実りある祈りの生活を送る。また、御霊の実を結ぶことによって神の栄光を現し、自分がキリストの真の弟子であることを証明する。

従順をとおして得る愛と喜び(15: 9—17)

愛と従順と喜びは互いに関連し合っている。キリストに対する愛によって、その戒めを守るよう駆り立てられる。また、戒めを守ることによって、主の愛にとどまることが保証される。それはやがて、満たされた喜びへと続く。戒めを守るとは、相手のためにはいのちも捨てるほどまでに互いに愛し合うことを意味する。そのとき信者は、単なるしもべではなく、キリストの友となる。友として「主人」の仕事を知るようになる。キリスト者は永遠に残る実を結ぶために、そして力ある祈りをささげるために選ばれたのである。とはいえ、互いに愛し合うことこそ基本的な戒めである。

この世から憎まれること（15：18—25）

弟子はこの世に属していないのだから、この世から憎まれ迫害されることを覚悟しておくべきである。しもべは「自分の主人よりはましな扱いを受けるだろう」などと期待すべきではない。もし、イエスがこの世に来て、この世に向かって話し、比類ない奇跡を行われなかったなら、人々の罪は（比較の上では）小さなものだっただろう。しかし、彼らはイエスばかりか御父までも理由なしに憎むという罪を犯している。彼らに弁解の余地はない。

キリストのためのあかしの継続（15：26, 27）

やがて来る助け主はキリストについてあかしするだろう。弟子たちも、自分たちが初めから見たり聞いたりしたことを証言しなければならない。

来たるべき迫害（16：1—4）

イエスは、人々がご自分の弟子たちを会堂から追放し、殺しさえすることを前もって告げられた。その迫害は、人々がイエスを、ひいては御父を拒絶することから生じる。あらかじめその事実を知っていたなら、弟子たちが幻滅を感じることもないだろう。

聖霊の働き（16：5—15）

イエスはまもなく弟子たちのもとを去ろうとしておられた。だから、たとえ弟子たちを悲しませることになろうとも、その事実を彼らに告げなければならなかった。しかし、主はやがて聖霊を遣わされる。この世に臨在する聖霊によって、「キリストを拒むことは罪である」ということが、この世に明らかにされる。聖霊は、主イエスが正しいお方であったことを世に認めさせる。そして、サタンと不信者全員に対するさばきについて告げる。主が弟子たちに話しておきたいこ

とはほかにもあったが、彼らにはそれに耐える力がなかった。しかし、聖霊が来ると、彼らをすべての真理に導き入れるだろう。聖霊は、御父に導かれたことだけを語り、キリストの栄光を現すだろう。

悲しみは喜びに変わる（16：16—22）

弟子たちはやがて悲嘆に暮れるだろう。イエスが死なれるからである。また、天に帰られるからである。しかし、やがて弟子たちは喜ぶだろう。よみがえられた主にお会いするからである。聖霊が来られるからである。また、やがて主が再び来られるからである。主がそばにおられないことから生じる悲しみは、主と再会するとき、すぐに忘れ去られるだろう。

世に勝った者、キリスト（16：23—33）

イエスがともにおられた間、弟子たちは自分たちの願いをすべて主に申し出た。今や彼らはイエスの名によって御父に直接祈ることができた。祈りの答えを得て喜びに満たされることを確信できた。このときまで主イエスは、それぞれに意味のあるたとえで話してこられた。やがて主は、来たるべき聖霊をとおして、はっきりと話されるだろう。弟子たちは主の御名によって御父に祈るだろう。御父は彼らを愛された。彼らが御子を愛し、御子が御父から来られたことを信じたからである。弟子たちはこれらのことを理解したようだったが、イエスは次のように言われた。まもなく来る暗黒の数時間、御父以外のすべての者が主を見捨てるだろうと。また主は、「わたしはすでに世に勝ったのだから、あなたがたは患難の真ただ中でも平安を持つことができる。わたしはそれを教えるためにこのことを話したのだ」とも言われた。

10. イエスの「大祭司の祈り」（17章）

主は大祭司として、世のためにではなく、ご自分のもののために祈

られた。ご自分の従者たちに対する非難のことばは（その罪や過ちにもかかわらず）何ひとつ見当たらない。主は、彼らが物質的ではなく、霊的に繁栄するために祈っておられる。この祈りには7つの願いが含まれている。主ご自身のためのものが2つ、弟子たちのためのものが3つ、将来、主を信じるようになる者たちのためのものが2つ。

最初の願い（17：1—4）

最初の願いは、「わたしを死からよみがえらせることによって、わたしの栄光を現してください」というものだった。それは主が、神から与えられた者たちに永遠のいのちを与えることによって、御父の栄光を現すためだった。

2番目の願い（17：5）

次にイエスは、「受肉する前に持っていた栄光で、わたしを天において輝かせてください」と祈られた（主は、神であると同時に人でもあるお方として栄光をお受けになったのである）。

イエス、御父を^{あらわ}顕す（17：6—10）

主イエスは、ご自分がどのようにして弟子たちに御父を顕してきたかについても話された。また、神から与えられたことばをどのようにして彼らに与えてきたか、また彼らは、主が御父のもとから来られたということをご自分のふに知っているかについても語られた。主は、大祭司として、世のためではなく、ご自分のものために祈られた。しかし、これによって、失われた全人類に対するイエスの愛が否定されるわけではない。

3番目の願い（17：11, 12）

3番目の願いは、「弟子たちを守ってくださるように」というものだった。これは、「弟子たちが真実な信仰を持ち続けるように」とい

う意味だったのだろう。このすぐあとでユダが離反者として言及されているからである。

イエス、喜びをもたらす(17:13, 14)

イエスがこの世でこれらのことを話されたのは、弟子たちが、たとえ世から憎まれたとしても、喜びに満たされるためであった。

4番目の願い(17:15, 16)

4番目の願いは、「弟子たちが『悪い者』から守られますように」というものである。彼らはサタンの領域、すなわち、この世に属していないからである。

5番目の願い(17:17-19)

5番目の願いは、「弟子たちが神の真理において聖別されますように」というものである。

6番目の願い(17:20-23)

6番目の願いは、「未来の信者がみなキリストに似た、敬虔な者となり、彼らがひとつとなることによって、主イエスを遣わされたのは神であることを世が信じるように」というものである。

7番目の願い(17:24)

キリストは最後に、「信者がやがてみな天に引き上げられ、主とともにおり、主のすべての栄光を見ることができるよう」と祈られた。

結びの祈り(17:25, 26)

最後の2節は結びの部分となっており、その中で主は、弟子たちの内に成し遂げてくださった(そして、今なお成し続けておられる)ご自分のみわざについて語っておられる。

11. 裏切り、裁判、十字架 (18, 19章)

ゲツセマネでの裏切りと逮捕 (18: 1—11)

イエスと弟子たちが川を越えてゲツセマネの園まで来ると、ユダが、イエスを捕らえるために武装した一隊を引き連れて到着した。主がご自分のことを「それはわたしです (I AM)」, すなわち、旧約聖書の神、主 (ヤハウエ) であると言われたとき、兵士と役人たちは一時的に気を失った。ペテロは大祭司のしもべを剣で撃ち、彼らの暴挙をやめさせようとしたが、主から思いとどまるようにと命じられてしまった。

カヤパの前のイエスとペテロの3度の否認 (18: 12—27)

派遣された一隊は、救い主を逮捕した後、カヤパのしゅうとであるアンナスのもとに連れて行った。これが「宗教裁判」の最初の局面である。大祭司の中庭でペテロは、自分がイエスの弟子であることを否認した (12—18)。

大祭司の尋問に答え、主がご自分の潔白を主張されたとき、役人のひとりが主の御顔を平手で打った。主は、有罪と立証されていない者を打つ権利があるのかと言われた (主を訴えるだけの証拠は何ひとつなかったのである)。それでアンナスは、大祭司カヤパのもとに主を送った。これが「宗教裁判」の第2の局面である。しかし、その場面はヨハネの福音書には記されていない。この夜明け前の裁判が行われている間に、ペテロはさらに2度、主を知らないと言った (19—27)。第3の局面はサンヘドリン (ユダヤ人最高議会) の前で行われた朝の裁判だった (マタイ27: 1)。

ピラトの前のイエス (18: 28—40)

「民事裁判」の最初の局面はピラトの前で展開された。このローマの総督は、この件をユダヤ人の側に差し戻そうとしたが、ユダヤ人には犯罪人を処刑することが許されておらず、ピラトは彼らからそのこ

とを指摘された。イエスを取り調べた後、ピラトは「彼は無罪である」と宣言し、過越の祭りの際に恒例となっていた恩赦のことに言及し、彼を釈放したらどうかと提案した。しかし群衆は、イエスの代わりにバラバという名のテロリスト（暴力主義者）を釈放せよと大声で叫んだ。

兵士たち、イエスをあざける（19：1—16）

ピラトが「被告人」の無実を主張すればするほど、群衆はますますイエスを十字架につけるよう要求した。兵士たちによるむち打ち、いばらの冠、紫の上着、あざけりと虐待。被造物にすぎない人間が、自分たちの創造主であるお方をこのように扱ったのである。総督ピラトは、イエスが「わたしは神の子である」と主張されるのを聞いて恐れたが、暴徒たちが「イエスはカイザルに敵対する王だ」と主張したために、最終的には彼らの圧力に屈した。

イエス、十字架につけられる（19：17—27）

兵士たちはイエスをゴルゴタに連れて行き、ふたりの強盗にはさむようにして十字架につけた。総督ピラトが「ユダヤ人の王イエス」と明記した罪状書きを掲げるよう命じると、祭司長たちは抗議したが、ピラトは罪状書きの文句を決して変えようとはしなかった。兵士たちは救い主の上着を分け、縫い目のない下着のためにくじを引いた。十字架から見おろしながら、イエスのご自分の母親の世話を使徒ヨハネにゆだねた。

不敬虔な者のために死なれたキリスト（19：28—30）

主が「渴く」と叫ばれたのを聞いた兵士たちは、酸いぶどう酒を主の口もとに差し出した。主はそれをお受けになった後、「完了した」と叫ばれた。これは、主が罪人たちの救いのために犠牲の死を遂げられたことを意味する。それから主はご自分の霊をお渡しになった。

救い主のわき腹が刺される（19：31—37）

兵士たちは（安息日が来るまでに死ぬよう）強盗たちの死期を早めるために彼らのすねを折ったが、イエスはすでに死んでおられたため、その足は折らなかつた。だが、ひとりの兵士が主のわき腹を突き刺した。すると、「すぐ血と水とが流れ出た」（口語訳）。

キリスト、ヨセフの墓に埋葬される（19：38—42）

アリマタヤのヨセフは、ピラトの許可を得て、イエスのからだを引き取り、香料といっしょに布で巻き、ヨセフ自身の新しい墓に納めた。

12. 復活（20章）

空っぽの墓（20：1—10）

日曜日の早朝、マグダラのマリヤが墓に来てみると、墓の中は空になっており、マリヤはそのことを知らせるためにペテロとヨハネのところに走って行った。ふたりはともに墓まで走って行ったが、ヨハネが先に着いた。しかし、墓の中に最初に入ったのはペテロで、彼は、死体を包んでいた亜麻布が置いてあるのを発見した。それからヨハネが入り、見て、信じた。

マグダラのマリヤが経験したすばらしい瞬間（20：11—18）

ペテロとヨハネは家に帰ったが、マリヤは墓のそばにとどまっていた。すると、ふたりの御使いが現れ、それに続いて主ご自身も姿を現された。イエスが彼女の名を呼ばれるやいなや、マリヤはそれがイエスだとわかった。どうやら彼女は主の御足にすがりつきたいと願ったようである（訳注：新改訳はマリヤがすでに主の御足にすがりついているようにも読める）。しかし、主はご自分が御父のもとに戻って行かれることを告げられた。聖霊が来ると、彼女はそれまで以上に主を知るようになるが、主はそのことも示唆されたのかもしれない。マリ

ヤは主のことばに従い、胸躍らせる知らせを携えて弟子たちのもとへ行った。

弟子たちに託された任務（20：19—23）

その日の夕方、主イエスは、弟子たちの前に現れ、彼らの恐れる気持ちをお静めになり、お受けになった傷をお見せになった。そして、聖霊の権威、臨在、力を、ペンテコステに先立って弟子たちに授け、彼らを遣わされた。しかし、聖霊が「永久的な助け主」として授けられたのはペンテコステのときが初めてである。

疑い深いトマス、見て信じる（20：24—29）

トマスは、起こった出来事を耳にしたとき、懐疑的だった。しかし、1週間後、イエスが再び弟子たちの前に姿を現されると、トマスはキリストの十字架の傷跡を見て、主の復活が事実であることを確信した。もちろん彼は、証拠を見ずに信じたほうがさらによかったのである。

ヨハネが福音書を書いた目的（20：30, 31）

この福音書の目的が次のように記されている。「イエスが神の子キリストであることを、あなたがたが信じるため、また、あなたがたが信じて、イエスの御名によっていのちを得るためである」。このため本書は伝道的な書と言えるのである。

13. 復活のキリストが弟子たちとともにガリラヤでなされたこと（21章）

イエスとの朝食（21：1—14）

その後、復活された主が弟子たちの前に姿を現された。弟子たちは、ガリラヤ湖で漁をしたものの、何も捕れないまま一夜を過ごしたばかりだった。主の命令どおり小舟の右側に網をおろし、引き上げてみると大漁だった。153匹もの大きな魚が捕れたのである！ 弟子たちが

岸に上がってみると、イエスが彼らのために朝食を準備しておられた。

イエス、ペテロを回復する (21:15-23)

朝食の後、イエスは、ペテロの心を探るために、ご自分に対する彼の愛について優しく質問された。ペテロが「愛します」と断言するたびに、主はご自分の小羊と羊を飼うようにと命じられた（このことは3度繰り返された）。主は、ペテロが殉教の死を遂げることを予告され、他の弟子たちの将来を案じてはならないと命じられた。ペテロのなすべきことは、キリストご自身に従うことだと主は言われたのである。これは私たちにも当てはまることである。

「愛された弟子」の結論 (21:24, 25)

ヨハネは、イエスがなされたことを完全に記録したとは言っていない。もし主がなされたことをすべて記録したとしたら、書かれた書物をこの世界に納めきれないだろう。アーメン！

使徒の働き

はじめに

ルカの2冊目の書

ルカは、「ルカの福音書」を書き終えたところから、つまり、キリストが昇天する場面から「使徒の働き」を書きはじめている。ルカは、キリスト信仰という炎が、その後約34年間にわたって燃え広がっていくあとをたどっている。

精選された霊的な歴史

本書は初代教会の歴史を完全に記したものではなく、その霊的な発展を示すために、聖霊が特別に選んだ出来事を記録したものである。本書には、「ユダヤ人を始め、異邦人にまで福音を宣べ伝えよ」というキリストの命令が歴史的に遂行されていく様子が描かれている。話の展開は、「エルサレム、ユダヤとサマリヤの全土、および地の果てにまで……」(1：8)という主のことばに符合している。12章までは、ユダヤ人への使徒であるペテロが重要な役割を演じているが、それ以降は、無割礼の者(つまり、異邦人)への使徒であるパウロがおもな役割を果たしている。

イスラエルに対する神の呼びかけ

「使徒の働き」の時代も、神の聖霊は、主イエスを「王なるメシヤ」として受け入れるようイスラエルに呼びかけている。しかし、彼らがかたくなに拒んだために、国家としてのイスラエルは一時除外され、異邦人に恩恵ある立場がもたらされたのである。

「イスラエル」から「教会」への過渡期

教会は最初、ユダヤ人社会と密接につながっていたが、そのつながりは徐々に薄れ、本書の終わり頃までには、教会は、ユダヤ教という「死者に着せる着物」を脱ぎ捨て、新しい共同体としての独自性を示した（その共同体の中ではユダヤ人も異邦人もキリストにあってひとつである）。

「使徒の働き」の概要

1. 聖霊を与えるという、復活の主の約束（1章1—5節）
2. 昇天する主、使徒たちに命令する（1章6—11節）
3. 弟子たち、ひたすら祈りながらエルサレムで待つ（1章12—26節）
4. 聖霊降臨の日と教会の誕生（2章）
5. 足の不自由な男のいやしと、イスラエルに対するペテロの非難（3章）
6. 迫害と教会の成長（4—8章）
7. タルソのサウロの回心（9章1—31節）
8. ペテロ、異邦人に福音を伝える（9章32節—11章18節）
9. アンテオケ集会の設立（11章19—30節）
10. ヘロデ王による迫害と王の死（12章1—23節）
11. パウロの第1次伝道旅行——ガラテヤ（12章24節—14章28節）
12. エルサレム会議（15章1—35節）
13. パウロの第2次伝道旅行——小アジアとギリシャ（15章36節—18章22節）
14. パウロの第3次伝道旅行——小アジアとギリシャ（18章23節—21章25節）
15. パウロの逮捕と裁判（21章26節—26章32節）
16. ローマへの航海と難破（27章1節—28章16節）

17. パウロの自宅軟禁とローマのユダヤ人たちに対する証言 (28章17—31節)

1. 聖霊を与えるという、復活の主の約束 (1章1—5節)

キリストが復活されて40日が経った。場所はエルサレム。主イエスは弟子たちに、約束された「聖霊のバプテスマ」が起こるまで、そこにとどまるように命じられた。

2. 昇天する主、使徒たちに命令する (1章6—11節)

弟子たちはオリーブ山で、イスラエル王国の再興に関する質問をした。救い主は彼らに、「まず、あなたがたが世界の果てにまで出て行って、わたしの証人とならなければならない」と言われた。

主イエスは、そのあとすぐに天に昇って行かれた。そのとき、ふたりの御使いが現れ、「主は、あなたがたがいま見たのと同じ有様で再び戻って来られる」と言って、弟子たちを安心させた。

3. 弟子たち、ひたすら祈りながらエルサレムで待つ (1章12—26節)

弟子たちはエルサレムの町に帰り、ともに祈っていた。そのときペテロは、イスカリオテ・ユダの後任を選ばなければならないことに(旧約聖書のみことばをとおして)気づいた。その人物は、主イエスが公生涯を送られた間、主と行動をともにし、復活の主を目撃した者でなければならなかった。くじが引かれ、マッテヤが選ばれた。

4. 聖霊降臨の日と教会の誕生 (2章)

ペンテコステの奇跡 (2:1—13)

キリストの昇天から10日後、五旬節の日がやって来た。弟子たちが

集まっていると、激しい風のような響きが起こり、炎のような舌が現れ、約束どおり聖霊が与えられた。そして、(1度も学んだことのない)外国のことばをただちに話す不思議な賜物も与えられた。エルサレム周辺の15の地域から来ていたユダヤ人たちは、弟子たちが神のすばらしいみわざを詳しく語るのを聞いた。それも、ガリラヤ人である彼らがそれまで1度も話したことのない他国のことばで!

五旬節のメッセージ(2:14-21)

ペテロはこの機会をとらえて次のように説明した。すなわち、この不思議な現象が起こったのは、酒に酔ったためではなく、聖霊の注ぎに関するヨエルの預言と(いくつかの点で)関連していると(ヨエルの預言のすべてが五旬節に成就したわけではなく、キリストの地上再臨まで成就しないものもある)。

ペンテコステの訴え(2:22-36)

ペテロは、「あなたがたがナザレのイエスを殺したのだ」と言って、イスラエルの人々を大胆に非難した。また、神がイエスをよみがえらせたという衝撃的な知らせも告げた。ペテロは、「ダビデは復活について語ったとき、彼自身について語ったのではなく、メシヤについて語ったのだ」と説明した。ダビデの預言はすでに成就していた。イエスこそメシヤだったのである。彼は死からよみがえり、神の右に上げられた。そして、聖霊をこの世に遣わされたのである。

ペンテコステの成果(2:37-47)

「あなたがた自身のメシヤを十字架につけたのだ」という告発は、イスラエルの人々の心に痛切な罪の自覚をもたらした。彼らが助言を求めて必死に懇願したとき、ペテロは次のように答えた。「悔い改めなさい。そして、……罪を赦していただくために、……バプテスマを受けなさい」と。そうすれば聖霊を受け、「救い主を十字架につけた

時代」から救われると告げた。3千人ほどの者がそれに応え、教会が誕生した。回心者たちは忠実に集い、使徒たちが行う奇跡を目撃し、必要があればいつでも自分たちの（物質的な）持ち物を分け合い、与えられた信仰のゆえに神を賛美した。

彼らは使徒たちの教えを忠実に守り、交わりをし、パンを裂き、折りをしていた。これら4つのことは、新約時代の集會が実践すべき大切な事柄である。

5. 足の不自由な男のいやしと、イスラエルに対するペテロの非難（3章）

足の不自由な男のいやし（3：1—11）

ある日、ペテロとヨハネは、神殿に行く途中でひとりの足なえに出会った。その男は彼らに施しを求めたが、彼らは金銭よりもさらに良いものを彼に与えた。イエスの御力によって彼はいやされたのである！ ある注解者は、その男は「alms（施し）」（訳注：arms〈両腕〉との掛けことば）を求めたのに、ふたりは彼に「legs（両足）」を与えたとユーモアたっぷりに述べた。この奇跡のため、大勢の人がびっくり仰天し、彼らのところに集まって来た。

ペテロの福音宣教（3：12—26）

その結果、ペテロは彼らに福音を伝える機会を得た。ペテロは「彼をいやしたのは私でもヨハネでもない」と説明した。彼をいやされたのは神——主イエスの御父——だったからである。ユダヤの民はイエスを異邦人に引き渡した。イエスを拒み、バラバの釈放を要求し、ローマ人にイエスを殺させた。しかし、神はイエスを死者の中からよみがえらせた。その結果、この奇跡が、その御名を信じる信仰のゆえに行われたのである。ペテロは「あなたがたは知らずにそのように振る舞ってしまったのです。しかし、まだ望みはあります」と告げた。もしイスラエルが悔い改めるならば、神はその罪を赦し、イエスを再び彼

らのところに遣わしてくださる。さもなければ、主は、地上にご自分の王国を打ち立てるために戻って来られるときまで、(イスラエルに関する限り) 天にとどまられる。やがて、モーセを始め、すべての預言者たちが預言した、平和と繁栄の黄金時代がやって来る。その王国は、ペテロの話聞いていた人々のために約束されたのであった。もし彼らがメシヤを受け入れるならば、主は彼らを邪悪な生活から立ち返らせてくださる。「神の預言者」(イエス・キリスト)に聞き従わない者は滅ぼされる。

6. 迫害と教会の成長 (4—8章)

ペテロとヨハネ、逮捕される (4：1—4)

「反対だ！」ユダヤ教の指導者たちは激怒して叫んだ、ペテロとヨハネが「イエス」と「復活」を宣べ伝えていたからである。弟子たちは捕らえられ、翌日まで一種の自宅軟禁状態に置かれた。このときまでにクリスチャンの交わりに加わった男の数は5千人ほどに達した。

議会での弁明 (4：5—12)

翌日、使徒たちはサンヘドリン (ユダヤ人最高議会) に引き出され、何の力と権威によって行動しているのかを説明するよう求められた。キリストをあかしする絶好の機会がペテロに訪れたのである！ ペテロは、「私とヨハネの行いはイエスの御名によるものである」と大胆に告げ知らせた。イエスはユダヤの支配階級によって殺された。しかし、神は彼をよみがえらせた。その彼が足の不自由な男をいやしたのである。イエスはユダヤの指導者たちによって拒まれたが、神の御座の右に引き上げられた。彼こそ、人間が救いに至ることのできる唯一の道である。

議会、イエスの名によって宣教することを禁じる (4：13—18)

議会の議員たちは使徒たちの振る舞いに感心し、いやしの奇跡を否

定することができなかった。彼らは、「イエスの従者たちは、もうこれ以上イエスのことを人々に語ってはならない」と取り決めた。

人ではなく、神に聞き従う（4：19—22）

ペテロとヨハネは、「私たちは人よりも神に従わなければならない」と説明した。メッセージを宣べ伝えることは、神の御前でどうしてもしなければならないことだったからである。議会は彼らをおどした後釈放した。人々が使徒たちに味方することを悟っていたからである。

大胆さを求める祈り（4：23—31）

他のクリスチャンたちがペテロとヨハネからその出来事について聞いたとき、彼らはそのことを主に祈った。彼らは、詩篇の第2篇と、その頃に起こったいくつかの出来事との間に類似点を見だし、次のように神に求めた。すなわち、「あなたのしもべたちに大胆さをお与えくださり、しもべたちをとおして奇跡を行い続けてください」と。すると、その場所が揺れ動き、弟子たちは聖霊に満たされ、大胆に語りはじめた。

すべての物を共有する（4：32—37）

エルサレムの信者たちは自分たちの持ち物に執着することなく、それぞれ財産を売り払って仲間の必要のために役立てた。バルナバもそのうちのひとりだった。彼は、自分の土地を売り払い、その代金を使徒たちのところに持って来て、「貧しい信者たちに分け与えてほしい」と申し出た。

聖霊を欺く（5：1—16）

アナニヤとサツピラも自分たちの土地を売り、その「全額」を使徒たちのもとに差し出した。しかし、実際は代金の一部を自分たちのために取っておいたのである。ペテロがその事実をアナニヤに突きつけ

ると、アナニヤは倒れて死んだ。サッピラが入って来たとき、ペテロは彼女にも真偽を問いつめた。彼女も自分の非を認めず、倒れて死んだ。人々は、神が教会の中の罪を（しばしば劇的な方法で）さばかれることを知った。そして、クリスチャンの交わりに加わるということは厳粛なことなのだと気づいた。それにもかかわらず、大勢の人々が信じ、さらに多くの人々がいやしを求めて使徒たちのもとにやって来た。

宣教、迫害、投獄（5：17—28）

ユダヤ教の指導者たちは、使徒たちが福音を語り続けていることに憤慨した。彼らは使徒たちを捕らえて留置場に入れ、翌日、裁判にかけようとした。ところが、ひとりの御使いがその夜のうちに牢の戸を開き、「神殿に戻って語り続けなさい」と彼らに告げた。そのため、翌日の朝、役人たちが彼らを連れ出すために来たとき、何ひとつ異常がなかったにもかかわらず、囚人たちだけが姿を消していたのである！ 指導者たちが不満と当惑を表明していると、使いの者がやって来て、「犯人たち」が神殿の庭で再び宣教していることを告げた。使徒たちは議会に連れ戻され、議会の命令に背き続ける理由を説明するよう求められた。

人に従うより、神に従う（5：29—32）

その結果、再び宣教のための絶好の機会が訪れた！ ペテロは（何の準備もないまま）即座にその宣教演説を行った。ペテロは、「神の命令と人の命令が相いれない場合、信者は神の命令に従わなければならない」と主張した。彼は、「神の御子を殺したのはあなたたちだ」と言って、恐れることなく再び指導者たちを告発した。そして、神がイエスをご自分のみもとに引き上げ、「君」とし「救い主」とされたことを告げた。そして、イエスの名による「悔い改め」と「罪の赦し」を説いた。

ガマリエル、議会に忠告する（5：33—42）

非常に立腹した指導者たちが使徒たちを殺そうと図ったとき、ガマリエルという名高いパリサイ人が、もっと穏健に対処すべきだと忠告した。彼は、もしこの新たな宗教が神からのものでないなら、すぐに消滅するだろうと主張した。しかし、もし神から出たものであれば、指導者たちは神に敵対してしまう恐れすらあった。彼の助言は功を奏した。使徒たちはむち打たれ、「イエスの名によって2度と語ってはならない」と戒められた後、釈放された。使徒たちは喜びながら、議会から出て行った。そして、少しも脅しに屈することなく、イエス・キリストを教え続け、宣べ伝え続けた。

集会内部のもめごと（6：1—7）

集会内部の「もめごと」が初めて起こったのは、金銭と食料の配給のことからだった。「ギリシャ語を使う」ユダヤ人たちの中に、次のように感じる者たちがいた。すなわち、彼らのうちのやもめたちの配給が、（エルサレムやユダヤ出身の）「ヘブル語を使う」やもめたちの配給よりも少ないと。そこで使徒たちは、毎日の配給を指揮すべき兄弟を7人指名するよう集会に勧めた。こうして選出された7人の大部分はギリシャ語を話すユダヤ人だったようで、苦情を申し立てたグループに対して寛大な心で臨んだことがうかがえる。信者の数はますます増し、それにつれて教会も大きく前進していった。

ステパノ、^{ほうとく}冒瀆罪で告発される（6：8—15）

ステパノは、集会の財務を担当する執事として選ばれた者たちのひとりである。彼は不思議なわざを伴う目ざましい働きをしていたので、ある会堂に属する人々が、議論によって彼を黙らせようとした。しかし、それに失敗したため、彼らはステパノを逮捕させ、議会にひっぱり来させた。そして、彼が「神殿」と「モーセの律法」に逆ら

うことを語っていると告発した。

ステパノの説教（7：1—53）

ステパノはアブラハムの生涯の概要を述べることによって弁明を始めた（1—8）。彼は続いてヨセフに言及した。ヨセフは、自分の民には拒まれたが、神によって高く引き上げられ、その民を救う者とされた（9—19）。モーセも、民に拒絶されることの何であるかを知っていた。彼もまた、神によって高く引き上げられ、民を解放する者とされたには違いなかったが（20—43）。「神殿に逆らうことを語った」という訴えに対しては、ステパノは議会に次のことを思い出させた。すなわち、神が幕屋において民とともに住んでおられたまさにそのとき、イスラエルの民が星を拝むという罪を犯したことを。彼はヨシュアやダビデの時代にまで幕屋の歴史をさかのぼり、「建物は、人間の道徳的、霊的状态ほどには神にとって重要ではない」と説明した（44—50）。「律法に逆らうことを語った」という訴えに関しては、彼らのほうこそ、聖霊をかたくなに拒み続け、律法を守ることができない者たちであった。彼らは神が遣わされた指導者たちを拒んできたが、その罪は、正しいお方、主イエスを裏切り殺したことによって頂点に達した。彼らは律法——御使いたちの手によって与えられた律法——を守ったことのない者たちだった（51—53）。

最初の殉教者（7：54—60）

ステパノが「天が開けて、イエスが神の右に立っておられるのが見える」と告げると、議員たちは怒り狂い、彼を町の外に追い出した。彼はそこで石打ちにされて死んだ。自分を殺す者たちのために祈りながら。サウロという青年が傍観者たちに混じってその現場にいた。彼の名はやがて再び登場する。

教会の迫害（8：1—4）

ステパノの死が引き金となって、教会に対する迫害のうねりが高まった。エルサレムの信者たちはユダヤとサマリヤの地に散らされた。彼らは福音を伝えつつ、巡り歩いた。サウロは迫害する者たちの先頭に立っていた。

ピリポのサマリヤ伝道（8：5—25）

ピリポは6章で選ばれた執事のひとりである。彼は北方のサマリヤに行き、キリストを宣べ伝え、多くの奇跡を行った。シモンという魔術師が信仰を告白してバプテスマを受けた（5—13）。エルサレムにいた使徒たちは、多くのサマリヤ人が主に立ち返ったことを聞き、ペテロとヨハネを遣わした。それは、起こっていることに対して何か交わりの手をさしのべたいという心の現れだったに違いない。ペテロとヨハネは新たな信者たちのために祈り、彼らの上に手を置いた。すると、すぐにそのサマリヤ人たちは聖霊を受けた（14—17）。シモンは、手を置くことによって聖霊を授けるというその賜物を金で買いたいと思った。しかし、ペテロに非常に強い調子で叱責されてしまった（18—24）。ペテロとヨハネはエルサレムに帰ったが、それ以後はサマリヤ人の村々でも宣教し続けた（25）。

ピリポとエチオピヤ人（8：26—40）

神はピリポに「サマリヤを去って、エチオピヤの高官に会え」と命じられた。その高官は、礼拝のためエルサレムに上った後、家に帰る途中だった。ピリポがその馬車に近寄ったとき、その高官はイザヤ書の53章を読んでいた。ピリポは彼に、「イザヤはイエスについて——イエスご自身と、その身代わりのみわざについて——語っているのです」と説明した。そのエチオピヤ人は信じ、バプテスマを受けた後、喜びながら帰って行った。ピリポのからだは奇跡的にアゾト（旧約聖書のアシュドデ）に運ばれた。彼はそこからカイザリヤに行った。

7. タルソのサウロの回心（9章1—31節）

天からの光（9：1—9）

タルソのサウロは、信者たちを捕らえて投獄するためにダマスコに行く途中だった。彼らは、あえぎながら身を寄せ合い、ちぢこまっている群れに等しかったが、その唯一の罪状は「キリストを信じている」であった。サウロは突然、地面にぱったりと倒れ、何も見えなくなり、自分を戒める復活の主の御声を聞いた。サウロは自分の罪を悟り、自分の救いと奉仕をキリストにゆだねた。その結果、罪から救い出され、主に奉仕することを許された。それから、彼はダマスコに行った。今度は聖徒たちを迫害するためではなく、聖徒のひとりとして。

サウロのバプテスマと最初の宣教（9：10—22）

主がサウロの目を開けるためにアナニヤという弟子を遣わされたとき、アナニヤは当然のこ^{ちゆうぎよ}のよう^に躊躇した。サウロがクリスチャンたちに危害を加えたことを知っていたからである。しかし、彼はサウロのもとに行って、彼の上に手を置いた。すると、サウロの目が見えるようになった。彼は聖霊に満たされ、バプテスマを受けた。まもなくサウロはダマスコの諸会堂に行き、「イエスはメシヤであり、神の子である」と宣べ伝えた。人々は、キリスト信仰に敵対するかしらだ^つた人物が、それを擁護する側の筆頭になったことにひどく驚いた。世界中の人々が、サウロのこの変化を説明しようと心を砕いている。しかし、満足のいく答えはひとつしかない。すなわち、「彼は新しく生まれた」のである。

サウロの脱出とエルサレムでのあかし（9：23—31）

ユダヤ人たちがサウロを殺そうと謀ったため、サウロはやむを得ず夜中に町の城壁を越え、ダマスコを脱出した（23—25）。彼がエルサレムに着いたとき、信者たちから疑われたのは当然のことだった。し

かし、心の広いバルナバは彼の味方となった。信者たちは、サウロが主の御名によって大胆に語るのを見て、彼が本物の信者であることをすぐに悟った。彼らは、サウロのいのちがギリシャ語を話すユダヤ人たちからねらわれているのを知り、彼をカイザリヤまで送り届けた。サウロはそこからタルソへ出航した。その後、教会に対する迫害は一時中断した。教会の土台は確かなものとなり、信者の交わりは霊的にも数の上でも大いに発展した（26—31）。

8. ペテロ、異邦人に福音を伝える （9章32節—11章18節）

ペテロ、男をいやし、女を生き返らせる（9：32—43）

話はペテロに戻る。彼はルダで、8年間、病床に着いていたアイネヤという中風の男に出会った。ペテロはイエス・キリストの名によって彼をいやした。ヨッパにドルカスという名の女がいた。彼女はその親切な行いでよく知られていたが、病気で死んだ。彼女の死は多くの人々に大きな悲しみをもたらした。ペテロが「ドルカス。起きなさい」と言うと、たちまち彼女は生き返った。このふたつのいやしの奇跡の結果、大勢の人々が主に立ち返った。ヨッパにいる間、ペテロは皮なめしのシモンの家に滞在した。

コルネリオの幻（10：1—8）

福音はユダヤ人とサマリヤ人にはすでに告げ知らされていた。今度は異邦人に福音が伝えられる番である。まず、カイザリヤに住んでいたコルネリオというローマの百人隊長に福音が伝えられた。彼は異邦人だったが、神をずっと求めていた。また祈りと施しに励んでいた。御使いが幻の中で彼に現れ、次のように指図した。「人を遣わしてヨッパにいるペテロを招きなさい。そうすれば、彼があなたになすべきことを教えてくれる」と。

ペテロの幻（10：9—16）

使徒ペテロはユダヤの伝統に染まっていたため、異邦人を、まるで触れてはならない物のように避けていた。だから彼は、やがて経験する「カルチャーショック」に備える必要があったのである。彼は、皮なめしのシモンの家の屋上にいたとき、大きな敷布が天から降りて来る幻を見た。その中にはあらゆる種類の動物、地をはうもの、鳥などがいた。「これらを殺して食べよ」と命じられたとき、ペテロは「(おきてに反する) 汚れた食物を食べたことは1度もありません」と主張した。天からの声は、「神がきよめた物を、きよくないと言ってはならない」と彼に告げた。このようなやり取りが3回あって後、敷布は天に引き上げられた。もちろんその意味は、異邦人は決して汚れていないということ、そして、ペテロは彼らを受け入れるべきであるということだった。

カイザリヤへの呼び出し（10：17—23）

ペテロがなおも幻の意味を知ろうとしていたとき、コルネリオから遣わされた人々が到着した。彼らはペテロに、「私たちの主人があなたにカイザリヤに来ていただきたいとのことです」と告げた。ペテロは彼らを宿泊させ、翌日、聖霊の指示どおり、彼らとともにカイザリヤへ出かけた。

ペテロ、異邦人に宣教する（10：24—43）

コルネリオは彼らの到着を見越して、親族や友人たちを多数呼び集めた。ペテロが到着すると、ペテロとコルネリオは、「神が私たちのもとを訪れ、私たちを引き合わせてくださったのだ」と語り合った。ペテロは福音を説き、主イエスの生涯、死、よみがえりを回顧し、信じる者に与えられる「罪の赦し」を提示してメッセージを終えた。

信じた異邦人に聖霊が下る（10：44—48）

ペテロが話している最中に、信じた人々に聖霊が下り、彼らは異言を話した。それで、その場にいたユダヤ人たちはひどく驚いた。ペテロは、神がユダヤ人に聖霊を下さったのと同じように、異邦人にも聖霊を下さったのだと悟った。そこで、コルネリオとその家の者たちにバプテスマを受けるように命じた。異邦人が改宗した際のこの順序に注目せよ。彼らは信じた。そして聖霊を受けた。それからバプテスマを受けたのである。

ペテロ、異邦人に対する神の恵みについて弁明する（11：1—18）

エルサレムにいるユダヤ人信者たちの中には、ペテロが異邦人たちと親しく交わったことを聞いて動揺した者たちがいた。そこでペテロは、起こった出来事を順を追って彼らに説明した。天から敷布が降りて来た幻、聖霊が「カイザリヤへ行くように」と命じたこと、「ペテロに使いを送れ」とコルネリオに命じた幻、コルネリオとその家族の者たちが信じたとき、聖霊が彼らの上を下ったことを。それを聞いたエルサレムの聖徒たちは、神がユダヤ人を救われたのと同様、異邦人も救われたことを知った。

9. アンテオケ集会の設立（11章19—30節）

福音の広まり（11：19—21）

話は、ステパノの殉教以降も続いた迫害時代のことに戻る。散らされた人々はフェニキヤ、キプロス、クレネにいるユダヤ人たちに福音を伝えた。それからアンテオケにいる異邦人にもメッセージが伝えられた。やがて、このアンテオケを出発点として、パウロとその同労者たちが異邦人伝道に旅立つことになる。

アンテオケ集会におけるバルナバとサウロ（11：22—26）

エルサレム集会は、アンテオケで福音が祝福されていることを聞き、事実を調査するためにバルナバを遣わした（彼は心の温かい人物

だった)。彼は、神がその地で力強く働いておられることをすぐに悟り、「主のために忠実に前進し続けるように」と信者たちを励ました。彼は、サウロがこの新しい集会の助けになれると考え、タルソに向かった。そして、サウロをアンテオケに連れて来た後、彼とともに1年間そこで働いた。弟子たちはアンテオケで初めてキリスト者と呼ばれるようになった。

アンテオケからエルサレムへ救援物資を送る（11：27—30）

その頃、預言者たちの一団がエルサレムからアンテオケへやって来た。その中のひとり、アガボという人物が大ききんを預言した。それが実際に起こったとき、異邦人の信者たちは、救援物資をバルナバとサウロの手に託してユダヤにいるユダヤ人信者たちに送った。これは、ユダヤ人と異邦人との間にあった昔からの反目が、キリストにあって消え去ったことを証拠立てる感動的な出来事である。

10. ヘロデ王による迫害と王の死（12章1—23節）

ペテロ、死を逃れる（12：1—17）

ヘロデ王（ヘロデ・アグリッパ1世）は、キリスト信仰に敵対する者たちを喜ばせるためにヨハネの兄弟ヤコブを処刑した。彼はペテロも殺そうと考えた。ペテロの処刑が予定されていた日の前夜、彼のそばにひとりの御使いが現れた。御使いは彼を牢の外に導き出した後、姿を消した。ペテロはそこから直接、マリヤ（マルコの母）の家に行った。弟子たちはその家でペテロのために祈っていた。彼らは最初、入り口に立っているのがペテロだとは信じなかったが、それが確かに彼だとわかると、彼を家の中に入れた。その場は一変して大きな喜びに包まれた。ペテロは不思議な脱出のことを手短かに説明した後、その場を立ち去った。

ペテロの番兵たちの運命（12：18, 19）

ペテロが脱獄したのを知ったヘロデは激怒した。彼は、番兵たちを厳しく取り調べた後、彼らを処刑するよう命じた。

ヘロデ王の死（12：20—23）

ヘロデは自分がまもなく死ぬとは思ってもいなかったことだろう。その後すぐに、彼はカイザリヤに行った。すると、ツロとシドンの人々が王の好意を得ようと訪ねて来た。その地方はユダヤから輸入する穀物に依存していたからである。ヘロデが公の集会を開いて彼らを招いたとき、彼らは王に神の栄誉を与えた、王がそのような栄誉をそのまま受け入れたので、主の使いが恐ろしい病で王を打った。その結果、ヘロデ王は死んだ。

11. パウロの第1次伝道旅行——ガラテヤ (12章24節—14章28節)

福音、さらに前進する（12：24, 25）

反対や妨害にもかかわらず福音は広がり続けた。エルサレムでの任務を終えたバルナバとサウロは、ヨハネと呼ばれるマルコといっしょにアンテオケに帰った。

バルナバとサウロ、遣わされる（13：1—3）

聖霊によって、アンテオケ集会の預言者や教者たちに次のことが示された。すなわち、聖霊がバルナバとサウロに特別な使命を備えておられることを。そこで彼らはふたりの上に手を置き、彼らを送り出した。このようにして、パウロの「第1次伝道旅行」が始まった。パウロはこの旅でバルナバとともに小アジアの中南部に福音を伝えた。

キプロスでの伝道（13：4—12）

一行はセルキヤから船に乗り、キプロス島のサラミスへ向かった。彼らはその地のユダヤ人の諸会堂で宣教した。彼らはそれから島全体

を巡り、パボスに着いた。そこでは地方総督のセルギオ・パウロが、バルイエスという魔術師の反対にもかかわらず回心した。

ヨハネ（マルコ）、エルサレムに帰る（13：13—15）

一行は北西に向けて出帆し、小アジアの南沿岸にあるパンフリヤのペルガに着いた。この地でヨハネ（マルコ）は開拓伝道者たちから離れ、エルサレムに帰った。それから伝道者たちの一行は、ペルガの北約160キロ地点にあるピシデヤのアンテオケに行った。そこでは会堂管理者たちが、彼らに話をしてほしいと要請した。

パウロ、ピシデヤのアンテオケで福音を語る（13：16—41）

パウロはメッセージの中でイスラエルの歴史を振り返った。すなわち、神がイスラエルを選ばれたこと、エジプトから彼らを救い出されたこと、荒野で彼らを養われたこと、彼らがカナンを所有したこと、さばきつかさたちの時代、サウルやダビデの王国、バプテスマのヨハネの働きなどについて。彼は徐々にキリストへと話を向けた。すなわち、人々がキリストに有罪の判決を下したこと、キリストの死、埋葬、すでに立証された復活などについて。パウロは、「神は（律法ではなく）信仰による義と、罪の赦しを提供しておられる」と述べてメッセージを終えた。そして、神の救いを拒まないようにと警告した。

福音に対する反応（13：42—52）

ユダヤ人の多くは好意的に反応し、次の安息日にもさらにみことばについて話してほしいと頼んだ（42, 43）。しかし、1週間後には、信じようとしないユダヤ人たちから激しい反対運動が起きた。パウロとバルナバは彼らに率直に次のように告げた。「あなたがたが自分たち自身を『永遠のいのちにふさわしくない者』と断定したので、今や福音は異邦人のほうに向けられようとしている」と。それを聞いて異邦人たちは喜んだが、ユダヤ人たちはふたりにその地方から追い出し

た。パウロとバルナバは足のちりを払い落とし、再びイコニオムに向けて旅立った（44—52）。

パウロとバルナバ、イコニオムで襲撃される（14：1—7）

ふたりがイコニオムの会堂で福音を語ると、大勢のユダヤ人やギリシャ人たちが信じた。しかし、信じようとしないうダヤ人たちは異邦人たちを扇動して、ともにふたりを攻撃しはじめた。石打ちにされそうな事態にまで発展したとき、パウロとバルナバは、小アジアの中心部にあるルステラとデルベに逃れた。

パウロとバルナバ、ルステラで神だと思われる（14：8—18）

パウロはルステラでひとりの足なえをいやした。そのため、その地は大騒ぎになり、人々はふたりをギリシャの神々に祭り上げて拝もうとした。ゼウス神殿の祭司でさえ、ふたりに盛大ないけにえをささげようとした。使徒たちは、起こっていることを理解するやいなや、そのような愚行に対して抗議し、人々を戒めた。彼らは、自分たちはただの人間であり、自分たちの任務は人々を偶像から生ける真の神に立ち返らせることだけだと説明した。ようやくのことで、人々はふたりにいけにえをささげるのを断念した。

パウロ、石打ちにされるが逃れる（14：19, 20）

それからまもなく、ユダヤ人たちが、ピシデヤのアンテオケとイコニオムからやって来た。彼らは異邦人たちをそそのかし、使徒たちに反抗させた。以前、ふたりを偶像視したのと同じ群衆が、今度は彼らをいけにえにしようとした。群衆はパウロを石打ちにし、死んだものと思って、町の外に引きずり出した。けれども、パウロは立ち上がり、その翌日、バルナバとともにデルベに向かった。

回心した者たちへの手助け（14：21—28）

ふたりはデルベから帰途についた。ルステラ（そこで、つい先頃、パウロは石打ちにされた）、イコニオム、そしてアンテオケと、来た道をそのまま引き返し、回心者たちを手助けし、迫害に備えて彼らを励まし、集会ごとに長老たちを選んだ。それから、ピシデアとパンフリヤを通してアタリヤまで下り、そこから船でアンテオケに帰った。そこでふたりは宣教報告をし、特に、福音がどのようにして異邦人にまで広まっていったかを説明した。これで第1次伝道旅行は終わる。

12. エルサレム会議（15章1—35節）

割礼に関する意見の衝突（15：1—6）

教会が誕生した当初から、「キリストに対する信仰だけでは救われない」と教えるユダヤ人の弟子たちがいた。彼らは「割礼」と「律法を守ること」も絶対に必要だと主張した。この「割礼派」は、エルサレムとその周辺を本拠地としていた。そのうちの何人かがアンテオケにやって来て、その教えを押しつけようとしたとき、信者たちは、この問題をはっきり解決するために、パウロとバルナバを含む数名の人々をエルサレムに派遣することにした。

ペテロ、「恵みにより信仰のみによって与えられる救い」を擁護する（15：7—11）

使徒たちと長老たちが協議したとき、ペテロが口火を切って演説した。彼は、異邦人であるコルネリオとその家の者たちが信仰によって救われたことを思い出させ、「なぜあなたがたは負いきれないびきを異邦人たちに負わせようとするのか」と尋ねた。神はユダヤ人も異邦人も同じ原則に基づいて——すなわち、信仰によって——救っておられたのである。

パウロとバルナバの証言（15：12）

それから、バルナバとパウロが、異邦人に福音を伝えたときに経験

したことを語った。

ヤコブの勧告（15：13—21）

ここで、主の「兄弟」ヤコブが次のように述べた。すなわち、この時代に対する神の目的は、異邦人の中から「御名をもって呼ばれる」民を召し出すことであると。このことはアモス書9章11、12節のことばと一致した。つまり、そのみことばは次のふたつのことを述べていたのである。すなわち、この時代が過ぎ去った後、キリストが統治者として再び来られるときに、神は主を信じる「イスラエルの残りの者たち」を回復される。そして、イスラエルの回復に続き、神は、主の御名によって召されるすべての異邦人を救われるということ。そこでヤコブは次のように勧めるにとどめた。異邦人の信者たちに忠告すべきことは、偶像に供えられた食物と、不品行と、絞め殺したものと、血とを避けることだと。

エルサレム会議の決定（15：22—35）

その勧告は受け入れられ、エルサレムの指導者たちは、パウロとバルナバとともに代表団を派遣した。そして、異邦人の信者たちに「割礼は不必要である」と保証し、「ヤコブが述べた4つの事柄を控えるべきである」と伝えた（22—29）。会議の決定の知らせがアンテオケに届くと、大変な喜びが沸き起こり、その場は温かい交わりの雰囲気包まれた（30—35）。

13. パウロの第2次伝道旅行——小アジアとギリシャ （15章36節—18章22節）

マルコ（ヨハネ）をめぐる意見の衝突（15：36—41）

パウロとバルナバが第2次伝道旅行に旅立つ時が来た。彼らが以前、伝道した地域の聖徒たちを手助けし、その信仰をさらに強めるためであった。けれども、マルコを連れて行くかどうかをめぐる激し

い論争が起り、その結果、バルナバはマルコを連れて、パウロはシラスを連れて旅立った。この時点からバルナバの記録は現れなくなる。パウロとシラスはシリアとキリキヤを通過して旅をし、諸集会をさらに強めた。

福音、ヨーロッパにまで達する（16：1—15）

パウロとシラスがデルベとルステラに来たとき、テモテも加わった。彼らは、聖霊に導かれ、福音を伝え、信者たちの信仰を強めながら、小アジアを横断してトロアスまで行った（1—8）。パウロはトロアスで、ひとりのマケドニア人がマケドニア（ギリシャ北部）に来てほしいと懇願する幻を見た。それで、パウロはエーゲ海を渡り、内陸へ進んでピリピにまで行った。その地のルデヤという名の女が、ヨーロッパにおける最初の回心者となった。そして、ヨーロッパにおける最初の集会がその地に設立された（9—15）。

牢の中のパウロとシラス（16：16—24）

ある日、悪霊に取りつかれた女占い師がパウロとその一行のあとについて来て、大声で叫び続けた。パウロがイエスの御名によってその悪霊を追いつくと、彼女の主人たちは激怒した。彼らはパウロとシラスを無理やり法廷に連れて行き、むちで打たせ、厳戒体制を敷いて牢につないだ。

回心した看守（16：25—34）

パウロとシラスが真夜中に賛美の歌を歌っていると、地震が起り、獄舎が揺れ動いた。看守は、責任を問われて殺されるのではないかと恐れ、自殺しようとした。パウロとシラスは看守の質問に答え、彼に（後には彼の家族たちにも）救いの道を説明した。彼らはみな信じてバプテスマを受けた。そして、宣教者たちに食事のもてなしをした。

パウロとシラス、正式に釈放される（16：35—40）

朝になると、長官たちは、自分たちが裁判で誤りを犯したことに気づき、謝罪の意を表しながら、パウロとシラスに黙って町を立ち去ってくれるように頼んだ。クリスチャンであるふたりは最初にルデヤの家を訪れ、兄弟たちに会った。それから、その地を去って行った。

テサロニケに集会が設立される（17：1—9）

パウロとシラスは、ピリピを去った後、西南のアムピポリスとアポロニヤに行き、それから西方のテサロニケに行った。そこでパウロは3回の安息日にわたって会堂で伝道した。その結果、多くの人々が救われ、集会がおこされた。信じようとしないユダヤ人たちは、暴動をあおって、パウロに宿を提供していたヤソンを始め、信者たちを襲わせた。信者たちは捕らえられたが、保釈金を取られたうえで釈放された。

ベレヤでの聖書研究（17：10—15）

テサロニケのキリスト者たちは、パウロたちがその地を立ち去ったほうが賢明だと判断した。そこで、彼らは夜のうちにパウロたちをベレヤに送り出した。ベレヤに着くとすぐに、パウロとシラスは会堂に向かった。その会衆は福音と聖書（旧約聖書）を熱心に比較検討したため、多くのユダヤ人たちが信じた。しかし、テサロニケの扇動者たちがそれを聞きつけ、ベレヤにやって来て、そこでも騒動を起こしはじめた。パウロはアテネに向けて旅立ったが、シラスとテモテはその地にとどまった。

パウロ、アテネで福音を語る（17：16—21）

使徒パウロは、アテネの町が偶像で満ちているのを見て心を痛めた。彼は会堂や広場で、自分の話を聞こうとする人々に教えを説いた。ふたつの派の哲学者たちは、彼のことを「おしゃべり」で外国の神々の

支持者だと考えた。それで「マース（アレス）の丘」の上にあるアレオパゴス（一種の最高裁判所のようなもの）で彼の言い分を聞いてみることにした。

アレオパゴスでのパウロの演説（17：22—31）

パウロは演説の中で、「あなたがたは宗教心に富んでいるが、『知らない神』を拜んでいる」と言った。彼はさらに話を進め、真の神について彼らに語った。すなわち、天地万物の造り主、最高位におられる「主」、人間が造った神殿に住まわれることも、人によって仕えられる必要もない神、あらゆる祝福の源である神について。そして、ひとりの人から人類を創造されたのは神であり、時を数えるための年月や、人間が住む境界を定めたのも神であると説明した。神がこれらのことをなされたのは、人類が神を捜し求めるためである。人は神の子孫なのだから、神を「彫んだ像」（人間が製作したもの）と考えるべきではなく、人格的な生ける神と考えるべきである。神は、異邦人の無知を何世紀にもわたって見過ごしてこられたが、今やすべての人に次のように呼びかけておられる。すなわち、キリスト（神がよみがえらせたお方）によって世界がさばかれる前に悔い改めよと。

パウロの演説に対する反応（17：32—34）

話が死者の復活のことに及ぶと、聴衆の反応は、はっきりと分かれた。ある者はあざ笑い、ある者は決断を延ばしたが、信じた者たちもいた。その中にはその町の名士たちも含まれていた。パウロは、「哲学」と「知的軽薄」の中心地であるアテネに再び戻ることはなかった。

コリントの会堂での宣教（18：1—6）

パウロが次に立ち寄ったのはコリントであった。パウロはそこでアクラとプリスキラに出会った。このとき成立した彼らの間の協力関係はパウロの生涯にわたって続くものとなった。シラスとテモテがベレ

ヤからやって来て、パウロの働きに加わった。ユダヤ人たちが会堂で福音に反対したので、パウロは彼らに「流血の罪」を宣告し、その地の異邦人に注意を向けた。

コリントにおける「家の集会」(18：7—11)

パウロの宣教は非常に祝福され、ユストの家で続けられた。彼は、幻の中で主に励まされた後、1年半にわたってコリントで宣教し続けた。

パウロ、ガリオの前に立つ(18：12—17)

信じようとしないうダヤ人たちがパウロをガリオ（アカヤの地方総督）の前に連れて行き、律法に背く教えを説いていると告発した。ガリオは、この件をユダヤの律法の問題——自分にはさばく権限も興味もない問題——とみなし、法廷で取り上げないことにした。打ちたたかれたのは、今度はパウロではなく、会堂管理者であった。

パウロ、アンテオケに帰る(18：18—22)

アンテオケへの帰途につく時が再び来た。パウロはまずエベソに立ち寄り、その会堂で好意的に迎えられた。そこにはアクラとプリスキラがとどまった。パウロはそこからカイザリヤ、そしてエルサレムへと向かい、ついにアンテオケに帰った。

14. パウロの第3次伝道旅行——小アジアとギリシャ (18章23節—21章25節)

パウロ、ガラテヤとフルギヤの信者たちを力づける(18：23)

アンテオケでしばらく過ごした後、パウロは再びガラテヤとフルギヤに向けて旅立った。

18章23節から第3次伝道旅行の記録が始まる。この旅行で、パウロの一行は西方に向かい、小アジアを横断してトロアスに行き、エーゲ

海を渡ってギリシャ北部に行き、海路によりギリシャ南部に到着した。それから陸路をとってギリシャ北部に戻り、再び海を渡って小アジアの西海岸に行った。そして、海路でカイザリヤに帰り、そこから内陸を進んでエルサレムに帰り着いた。

アポロの宣教（18：24—28）

場面はエペソに移り、アポロという人物が登場する。彼は雄弁な説教者だったが、クリスチャンとしての知識は不十分だった。彼はプリスキラとアクラからさらに多くのことを教えられた後、コリントへ向けて旅立ち、そこで大いに用いられた。この力ある説教者が天幕作りの夫婦の教えを喜んで受けたのは立派なことである。

エペソにいた、バプテスマのヨハネの12人の弟子たち（19：1—7）

その頃、エペソに来ていたパウロは12人ほどの弟子たちに出会った。彼らはバプテスマのヨハネからバプテスマを受けていたが、聖霊は受けていなかった。パウロが、キリストにある信仰が必要であることを話すと、彼らは信じて（クリスチャンが受けるべき）バプテスマを受けた。パウロが彼らの上に手を置くと、彼らは聖霊を受けた。

講堂で福音を語る（19：8—12）

パウロは会堂で3か月間、教えを説いたが、ユダヤ人たちがますます心をかたくなにし、敵意さえ抱くようになったのを見て、ツラノの講堂に退いた。そして、そこで2年間宣教し続け、みことばを宣べ伝え、病人をいやした。その結果、アジヤ州全土に福音が広まった。

悪の軍勢の敗北（19：13—20）

ユダヤ人の魔よけ祈祷師たちがイエスの御名によって悪霊を追い出そうとしたが、反対に悪霊から「お前たちのことは地獄ではだれも知らない」と言われてバカにされた。そして、その悪霊につかれた人が

祈祷師たちに襲いかかり、彼らを追い払った。この話が広まった結果、大勢の人々が救い主を信じ、自分たちが持っていた魔術に関する本を焼いた。

パウロの最終的な旅行計画（19：21，22）

テモテとエラストをマケドニヤに送り出した後、パウロはエベソにとどまった。彼の願いは、ギリシャに行ってからエルサレムに行き、最終的にはローマに行くことだった。

宗教をめぐる騒動（19：23—41）

エベソでは多くの人々がキリストに立ち返ったので、偶像を製作する仕事が急速に衰えた。デメテリオという銀細工人が同業の職人たちを集めて次のように警告した。すなわち、パウロは女神アルテミス（ディアナ）の評判を落とし、自分たちの仕事を無くそうとしているのだと。その結果、暴動が起こり、パウロの一行の中のふたりも捕らえられた。パウロは仲裁に入ろうとしたが、弟子たちや地方の役人たちが思いとどまらせた。現場は騒然となった。アレキサンデルというユダヤ人が発言しようとしたが、群衆にやじり倒され、弁明できなかった。結局、町の書記役の発言によって騒動は治まった。彼が、エベソは大いなるアルテミスの守護者だとほめそやし、アルテミス礼拝は永遠に滅ぼされることがないと主張し、暴動を起こした罪をローマの当局から問われることのないようにと警告したからである。

パウロ、マケドニヤとギリシャとトロアスで宣教する（20：1—12）

パウロはエベソからマケドニヤへ向かい（トロアスを経て。Ⅱコリント2：12，13参照）、そこで3か月を過ごした。それからギリシャ南部に行き、マケドニヤに引き返してトロアスに戻った。トロアスの信者たちは主の日にパンを裂くために集まった。パウロがその日、教えを説いていると、3階の窓の縁に腰掛けていたひとりの青年がそこ

から落ちて死んだ。

パウロは下に降りて行き、彼を生き返らせた。そして夜明けまで集会を続けた。

パウロ、エペソの長老たちに説き勧める (20：13—35)

パウロは、計画どおり、小アジアの西海岸を下ってミレトに着いた。彼はエペソ集会の長老たちを自分のもとに呼び寄せた。

パウロは、この見事なメッセージの中で、彼らとともに過ごした自分自身の奉仕と生活を振り返った。そして、エルサレムへ向かうことを告げた。パウロはもう2度と彼らに会えないことを知っていた。彼は、内外から押し寄せてくる危険から群れを守るよう彼らに命じた。そして、彼らを神の恵みにゆだねた。彼は、自分がどのようにして彼らに仕えてきたかを思い出させた。彼らからいっさい報酬を受け取らず、自分自身の必要と、自分とともに旅する人々の必要のために働いてきたことを。

パウロ、長老たちに別れを告げる (20：36—38)

メッセージを終えたパウロはひざまずき、長老たちとともに祈った。それは涙の別れとなった。パウロが「あなたがたはもう2度と私に会うことはないだろう」と言ったので、その悲しみは一層深まった。

エルサレムへの途上で忠告される (21：1—14)

パウロを乗せた船は小アジアの西南部を過ぎ、それから東南に針路をとった。やがてキプロスの南を通過し、ツロの港に着いた。パウロがそこに7日間滞在していたとき、信者たちの幾人かがパウロに「エルサレムに行かないように」と忠告した。

旅は続けられ、一行はトレマイ、そしてカイザリヤに到着した。そこでアガポという名の預言者が、自分の両手両足を縛り、「パウロもエルサレムでこのように縛られ、異邦人に引き渡される」と預言した。

パウロは、自分の身の安全に対する周囲の気遣いをすべて払いのけ、エルサレムへ向かう陸路を進み続けた。そこが彼の第3次伝道旅行の終点だった。

パウロとエルサレムの集会 (21:15-25)

ユダヤ人の兄弟たちは、神が異邦人の間でどのように働かれたかを聞いて喜び、感動した。しかし、ユダヤ人信者たちの中から騒動を起こす者が出ないかと恐れていた。ユダヤ人信者たちは、「パウロはモーセと律法に背くことを語っている」と聞いていたからである。それで兄弟たちはパウロに、「誓願を立てている4人の仲間に加わるように」と勧めた。パウロへの非難が誤りだという証拠になるからである。

15. パウロの逮捕と裁判 (21章26節—26章32節)

兵士たち、暴徒からパウロを救い出す (21:26-40)

誓願の期間が満了する直前、アジヤ州からやって来たユダヤ人たちが神殿の庭にいるパウロを見た。彼らはパウロに反抗して暴動を起こし、「パウロはユダヤ人と律法と神殿に逆らうことを語っている」と言って告発した。また、異邦人を神殿に（「異邦人の庭」を越えた所まで）連れ込んでいるとも告げた。暴徒たちがパウロを打ち殺そうとしたとき、到着した兵士たちが彼を救い出し、兵営の中に連れて行くとした。その途中、パウロは暴徒たちに話す許可を求めた。千人隊長は、パウロがエジプト人テロリストでないことを知り、それを許可した。パウロがヘブル語で話しはじめると、騒ぎは治まった。

クリスチャンになる以前のパウロ (22:1-5)

パウロは、自分がキリキヤのタルソでユダヤ人として生まれたことから話を始めた。そして、有名なユダヤ人教師ガマリエルのもとで教育を受け、ユダヤ教を教え込まれたことを告げた。彼は、自分が熱心なユダヤ教徒であったことを強調した。彼はかつてキリスト信仰を迫

害し、イエスを信じる人々を次々と牢に放り込んだ。大祭司とサンヘドリン（議会）は、パウロのやり方が徹底していたことを証言することができた。なぜなら、彼らこそ、パウロにあの「権威」を与えた者たちだったからである。すなわち、ダマスコに行ってキリスト者たちを捕らえ、エルサレムに連れ戻して処罰する権威を。

パウロの回心（22：6—21）

それから彼は自分の回心について次のように詳細に語った。すなわち、天からのまばゆい光のこと、栄光を受けられたイエスが自分に呼びかけられたこと、キリストに自分自身を明け渡したこと、ダマスコでアナニヤが自分を助けてくれたこと、バプテスマを受けたこと、エルサレムに上ったこと、夢心地になっていると、主が「あなたを異邦人に遣わすから、エルサレムを離れよ」と命じられたことを。

パウロ、ローマの市民権に救われる（22：22—30）

パウロが「私は異邦人に福音を伝えに行く」と言うと、聴衆の心に異常なまでの憎悪と嫉妬心が芽生えた。暴徒は「パウロを殺してしまえ」と怒り狂って叫び続けた。これを見た千人隊長は、パウロが何か重大な犯罪を犯したせいだと解釈した。そのため、パウロを兵営の中に連れて行ってむち打ち、白状させるように命じた。パウロは、縛られながら、「有罪と宣告されたわけでもない一般のローマ市民をむち打つことは法にかなったことなのか」と穏やかに尋ねた。そこで百人隊長は千人隊長に「あの男はローマ市民です」と報告した。これを聞いた千人隊長は急いでパウロのもとに行き、その結果、パウロへのむち打ちは取りやめとなった（その夜、パウロは一晩中拘束されたが）。翌日、千人隊長は、パウロが何を非難されているのかを知るために、彼を祭司長たちと全議会との前に立たせた。

議会に立つパウロ（23：1—5）

議会に立ったパウロは、「私はいつも神の前にきよい良心をもって生きてきた」と断言した。これを聞いた大祭司は彼の口を打てと命じた。パウロは激しいことば遣いで言い返したが、その後すぐに、出エジプト記22章28節を引用して謝罪した。

パウロ、パリサイ人に訴える (23: 6—10)

サドカイ人とパリサイ人が法廷で意見を戦わせているのを偶然耳にしたパウロは、「私はパリサイ人であり、死者の復活を信じているがゆえに裁判にかけているのだ」と言った（「進歩的」なサドカイ人たちはもちろん死者の復活を否定していた）。その結果、パリサイ人とサドカイ人の意見が衝突し、法廷が大混乱に陥った。そのため、千人隊長はパウロを兵営に連れ戻すよう兵士たちに命令した。

パウロに対する主の恵み (23: 11)

その夜、主がパウロに現れ、「あなたはエルサレムであかししたように、ローマでもあかしをするようになる」と言われた。

パウロ、殺害の陰謀を逃れる (23: 12—32)

翌日、40人以上のユダヤ人たちが、パウロを殺すまでは飲み食いしないと誓い合った。彼らの計画は、パウロの言い分を聞くために議会を開くよう手配し、彼がそこに来る途中で殺害しようというものであった。この陰謀が当局に知れたとき、千人隊長は囚人パウロを嚴重に警備してカイザリヤに追い払ってしまおうと決めた。そこで、千人隊長は、カイザリヤにいるローマの総督ペリクスに手紙を送り、この事件の背景を知らせた。

パウロ、ペリクスに引き渡される (23: 33—35)

カイザリヤに到着するやいなや、パウロは手紙といっしょにペリクスに引き渡された。ペリクスはパウロのローマ市民権に関してあらか

じめ尋問しただけで満足した。そして、エルサレムから原告たちが到着し次第、言い分を聞こうと約束した。それまでの間、パウロはヘロデの官邸に留置された。

パウロに対する告発（24：1—9）

5日後、大祭司と議会の議員たち数人がエルサレムから到着し、パウロは裁判のためにペリクスのもとに呼び出された。「検察官」テルトロはパウロに対して4つの罪状を挙げた。パウロは公益を脅かす危険人物であり、ユダヤ人を扇動して反乱をたくらんでおり、「ナザレ人という一派の首領」であり、神殿を汚そうとしていると。

ペリクスの前でのパウロの弁明（24：10—21）

パウロは訴えに対してひとつひとつ、几帳面に答弁した。パウロは「危険人物」であるどころか、礼拝のためにエルサレムに来てから、まだ12日しか経っていなかった。ユダヤ人を扇動して反乱を起こそうとしたことなど1度もない。彼は「ナザレ人という一派」の指導者であることは否定しなかったが、「ユダヤ人の神に仕え、旧約聖書の教え（特に死者の復活）を信じている」と言った。神殿を汚したこともなかった。アジア州から来た数人のユダヤ人たちが、「パウロは異邦人たちを神殿の中の立入禁止の区域にまで連れて行った」と偽って告発したが、そのとき彼は供え物をささげようとしていたのである。

ペリクス、裁判を延期する（24：22, 23）

ペリクスはパウロが無罪であることを悟ったが、ユダヤ人たちの感情を損ねたくなかったので、千人隊長がカイザリヤに来るまで裁判を延期することにした。それまで、パウロに対する厳しい監視態勢は解かれた。

ペリクス、キリストのことでなかなか決断しない（24：24—27）

数日後、ペリクスと彼の妻はパウロと個人的に話し合った。パウロはキリスト者の信仰について、恐れることなく忠実にあかしした。しかし、ペリクスは決断するのを延ばした。パウロが賄賂かくろをくれるかもしれないと思い、その後2年にわたって、たびたびパウロを呼び出した。ペリクスは、フェストが自分の後任になるまで、ユダヤ人の機嫌をとるためにパウロを監禁しておいた。

フェストの前のパウロ (25: 1-8)

フェストがエルサレムを訪れたとき、ユダヤ人たちは「裁判のためにパウロを呼び寄せてほしい」と頼んだが、フェストは「彼を訴えたのならカイザリヤに来るように」と答えた。フェストが帰った翌日、法廷が開かれた。ユダヤ人たちはパウロに対して多くの罪状を申し立てたが、どれひとつ立証できなかった。彼らの言い分が不十分なことを見抜いたパウロは、「律法、神殿、カイザルに背くどのような罪も犯していない」と述べるだけで満足した。

パウロ、皇帝に訴える (25: 9-12)

フェストがパウロに「裁判を受けるためにエルサレムに行きたいか」と尋ねると、パウロはそれを拒み、「カイザリヤの法廷こそ裁判にふさわしい場所だ」と主張した。パウロは「私はカイザルに上訴します」と付け加えた。それで話が決まった。フェストは彼をローマに送る以外になかった。

フェスト、パウロの一件をアグリッパに語る (25: 13-21)

しばらく経ってから、アグリッパ王（ヘロデ・アグリッパ2世）とその妹ベルニケがフェストの総督就任を祝うためにカイザリヤにやって来た。フェストはその機会を利用し、パウロの一件をアグリッパに語った。すなわち、ユダヤ人たちの殺気だった要求、カイザリヤでの手順どおりの裁判、パウロがローマに対して何ひとつ罪を犯していな

いこと、イエスの復活についてのパウロの話、エルサレムに行くことを彼が拒否したこと、彼がカイザルに上訴したことを。

パウロの言い分を聞くための準備 (25:22-27)

翌日、アグリッパとベルニケが公式の聴聞会を開いたとき、フェストは再び事件の概要を述べた。フェストは「法的に有効な訴訟事実のないまま、パウロをカイザルのもとに送らなければならない」と説明した。

アグリッパの前のパウロ (26:1-23)

アグリッパはパウロに弁明の機会を与えた。パウロは丁重に前置きを述べた後、自分が若い頃、厳格なパリサイ人であったことを述べた。彼が裁判を受けていたのは、死者の復活を信じているからだった(死者の復活は、族長たちに対する神の約束が成就するためには絶対に必要なものだった)。パウロは、かつて自分がクリスチャンたちを熱心に迫害していたことを述べた。そして、ダマスコへの途上で自分が回心したことについて語り、異邦人に福音を伝える使命をゆだねられたことを告げた。彼が神殿の中で福音を語っていたとき、ユダヤ人たちが彼を殺そうとした。しかし、彼は神によって守られ、その結果、なおも次のことを語り続けていたのである。メシヤが苦しみを受けなければならないこと、死者の中から復活しなければならないこと、そしてユダヤ人にも異邦人にも光が示されるようになることを。

パウロ、アグリッパに直接訴える (26:24-32)

このとき、フェストがパウロの話をさえぎり、「お前は気が狂っている」と彼に告げた。パウロはその非難を穏やかに打ち消し、「アグリッパ王は私が言っていることを理解しているはずだ」と述べた。そして、王に向かって「あなたは預言者たちを信じているか」と鋭い質問を浴びせた。王はどっちつかずのふざけた返事をして、その質問か

ら逃げた。アグリッパとベルニケとフェストは自分たちだけで協議した後、「パウロは死刑に値する罪は犯していない」と判断した。アグリッパは「もしカイザルに上訴しなかったら、パウロは釈放されただろうに」と付け加えた。

16. ローマへの航海と難破 (27章1節—28章16節)

航海中の嵐 (27: 1—20)

ローマへの旅はカイザリヤから始まった。ユリアスという名の百人隊長がパウロの警護にあたった。シドンに一時寄港したとき、パウロは信者たちを訪ねることができた。それから船はキプロス島の北側を航行し、小アジアの西南にあるミラに入港した。百人隊長を始め、ローマに向かう乗客たちはミラで船を乗り換えた。船はクニドに向けて海岸沿いに西に航行し、それから南方のクレテ島に向かい、「良い港」に着いた。パウロは、冬の悪天候を理由に、航海を中止するよう乗組員たちに警告したが、船長(船主)はピニクスまで行くことにした。その途中、激しい「北東風」が船に打ちつけ、船は南西に吹き流され、クラウダという小さな島に漂着した。乗組員たちは曳航えいこうしていた小舟をもう少しで失うところだった。彼らは本船を補強するために備え網をその船体に巻き付けた。そして、残った帆や索具をすべて下ろし、積み荷を船外に捨てはじめ、3日目には船具さえ投げ捨てた。嵐は荒れ狂い、最後の望みも消え失せたかに見えた。

パウロ、同船者たちを安心させる (27: 21—26)

そのとき、パウロが立ち上がって希望のメッセージを語った。彼は「積荷は失われるが、いのちが失われることはない」と彼らに告げた。御使いが彼に現れ、パウロが無事ローマに着くことと、同船している人々が全員助かることを保証したからである。

陸に近づく (27: 27—32)

14日間、あてもなく漂流した後、乗組員たちは陸に近いように感じるので、4つの錨いかりを投げ下ろした。ある者たちは小舟で上陸しようとしはじめたが、パウロがそれを戒めた。そこで兵士たちが小舟の綱を断ち切り、そのまま流れ去るのに任せた。

生き延びるための食事 (27: 33—37)

パウロは、乗組員と乗客たちに食事をとるよう、しきりに勧めた。2週間、何も食べることができなかったからである。パウロは「全員無事に岸に着ける」と再び彼らに保証した。そして、パンを取り、彼らの前で感謝をささげた後、食べはじめた。それに勇気づけられて、全員が食事をとった。

難破 (27: 38—44)

彼らは残っていた積荷を海に投げ捨てて船を軽くした。ところが彼らは船を座礁させてしまった。人々は泳ぐか、粉々になった船尾の破片につかまるかして陸に上がった。

マルタ島で奇跡的に守られる (28: 1—6)

彼らは（どこであるか分からないまま）マルタ島に上陸した。その地の住人たちは、漂着した人々のために浜辺で火をおこした。パウロがその手伝いをしていると、毒ヘビが彼の手からみついで離れなくなった。これを見た人々は、最初、パウロが人殺しだからこのようなことが起こったのだと解釈したが、彼に少しも異変が現れないので、彼は（人殺しどころか）神に違いないと決めてかかった！

マルタ島でのいやしの奇跡 (28: 7—10)

マルタの首長ポプリオは、難破した人々に（冬のための手はずが整うまで）宿を提供した。彼の父親が熱病と下痢にかかったとき、パウロは彼のもとに行って祈り、彼の上に手を置き、彼をいやした。その

知らせが広がると、大勢の人々がいやしを求めてやって来た。

ローマへの旅 (28 : 11—16)

冬の終わり頃、百人隊長は囚人たちを引き連れて再び出発した。一行はシシリー島を経て、イタリアの南西部にあるレギオンに着いた。そこから北上し、ナポリ湾に臨むポテオリに入港した。そこからは陸路をとり、ローマに到着。パウロは番兵付きで自分だけの家に住むことを許された。

17. パウロの自宅軟禁とローマのユダヤ人たちに対する証言 (28章17—31節)

パウロ、ローマのユダヤ人たちに証言する (28 : 17—22)

パウロは、その地のユダヤ人の指導者たちを自分の家に招き、自分が訴えられた訴訟事件について説明した。彼らはパウロのことについて何も知らないと言ったが、さらに詳細に聞きたいという願いを暗に示した。

福音に対する様々な反応 (28 : 23—29)

著名なユダヤ人たちとの2度目の会合の席で、パウロは彼ら自身の聖書(すなわち旧約聖書)からイエスについて語り告げた。ある人々は信じたが、残りの人々は福音を拒んだ。それを知ったパウロは彼らに次のように語った。「あなたがたは、目も見えず耳も聞こえない民のことを述べたイザヤの預言を成就している。だから、私は福音を異邦人に宣べ伝えているのだ。彼らは耳を傾けるだろう」と。

パウロ、ローマで妨げられることなく宣教する (28 : 30, 31)

パウロはローマで(「自費で借りた家」で)2年間を過ごし、その間、神の国を宣べ伝え、主イエスのことを教えた。パウロは2年後、皇帝ネロの法廷に出頭し、釈放されたと一般に信じられている。それ以降

の足どりは、彼がその後に書き記した何通かの書簡から推測できるだけである。

ローマ人への手紙

はじめに

ローマにある集会の起源

ローマ集会を創立したのは、五旬節の日にエルサレムに来た後、ローマに帰って行ったユダヤ人回心者たちかもしれない（使徒2：10参照）。

本書簡の起源と執筆年代

パウロは、この手紙を書いたとき、1度もローマに行ったことがなかった（すぐに行きたいと願ってはいたものの）。彼は、第3次伝道旅行の際、ギリシャで3か月を（その大半をおそらくコリントで）過ごした。パウロは、紀元56年から58年頃、コリントからローマの信者たちに宛ててこの手紙を書いたのである。

本書簡の概略

本書は聖書の他のどの書巻よりも福音の教理が明らかにされている書巻である。パウロが取り上げた主題は、罪深い人間の失われた状態から、信仰による義認、聖化、さらには最終的な栄光（栄化）にまで及んでいる。預言的な箇所は、昔からの神の民（イスラエル）に対する神の現在のお取り扱いが正しいことを証明しており、最終的には彼らが回復されることを強調している。終わりの数章には、義と認められた者たちに対する実践的な教えが記されている。

本書簡の概要

1. 福音の紹介と定義（1章1—17節）

2. 全人類が必要とする福音（1章18節—3章20節）
3. 福音の根拠と条件（3章21—31節）
4. 福音と旧約聖書との調和（4章）
5. 福音の実際的な恩恵（5章1—11節）
6. キリストのみわざ、アダムの罪に勝つ（5章12—21節）
7. きよい生き方へと続く福音の道（6章）
8. 信者の人生における律法の役割（7章）
9. きよく生きるための力を与える聖霊（8章）
10. 福音の見地から見たイスラエルの過去、現在、未来（9—11章）
11. 信者にふさわしい振る舞い（12章1節—15章13節）
12. 結びの説明、勧告、あいさつ（15章14節—16章27節）

1. 福音の紹介と定義（1章1—17節）

パウロは、自分の名前と受取人（聖徒たち）の名前を賛美のことでとともに書き記した後、いきなり主題——福音——に入っていく。それは神からの「良い知らせ」であり、旧約聖書において約束されたものであり、神の御子、主イエスに関することである。福音は救いを得させる神の力である。そして、その救いはすべての人が手に入れることのできるものであり、信仰によってのみ受けることのできるものである。

2. 全人類が必要とする福音（1章18節—3章20節）

失われた異邦人たちの必要（1：18—32）

福音は、「失われ、墮落した人々」のための神の救済策である。全人類が失われ、道に迷っている。まず第1に、福音を聞いたことのない異邦人たちが失われている。彼らは創造の驚異をとおして神の存在を知っている。それにもかかわらず、神に関する知識をかたくなに拒み、偶像礼拝に心を向ける。偶像礼拝にふければふけるほど、ますます

す墮落し、同性愛などのみだらな振る舞いに明け暮れるようになる。彼らは、そのような恥ずべき行為を自ら行い続けるだけでなく、他の者たちをそそのかして自分たちの仲間にならうとする。

失われた道徳家たちの必要（２：１—１６）

独善的な道徳家たちも（ユダヤ人であるか異邦人であるかにかかわらず）失われ、道に迷っている。彼らが他人を非難できるのは、善悪の区別を知っているからである。それにもかかわらず、彼らは、他人に向かって非難したのと同じことをしている。彼らは神のさばきについての確かな事実を知るべきである。神のさばきは真実に基づいて行われる。それを逃れることは絶対にできない（たとえ、その時が延ばされたとしても）。さばきには、どれほど罪を犯したかによって段階がある。そのさばきがどれほど公正なものであるかはやがてわかる。各自がその行いに従ってさばかれる。また、各自に与えられた特権や受けた光（知識）に従ってさばかれる。さばきはえこひいきなしで行われる。また、公然と犯した罪だけでなく、秘密裏に犯した罪もさばかれる。

失われたユダヤ人たちの必要（２：１７—２９）

ユダヤ人たちには律法が与えられたが、彼らも失われ、道に迷っている。彼らは「私たちにはいろいろな特権と優れた知識が与えられており、神に特別扱いされている」と考えている。しかし、単に律法を持っているだけでは十分ではない。律法は「服従」を要求する。割礼に価値があるのは、きよい行いが伴うときだけである。神が興味を持っておられるのは、外面的な儀式ではなく、むしろ内面的な真実である。したがって、従順な（無割礼の）異邦人のほうが、不従順な（割礼を受けた）ユダヤ人よりも神を喜ばせることができる。真のユダヤ人とは、割礼を受けているというだけではなく、内面的にもきよい人物のことである。

神のさばきは正しい（3：1—8）

ユダヤ人に対する非難（2章）は「ユダヤ民族の優越性」と「割礼の益」に疑問を投げかけたかもしれない。実際、彼らには「旧約聖書」というすばらしい特権が与えられていた。それにもかかわらず、彼らの大部分は不信仰をもって応えたのである。彼らの不真実によって神の約束が取り消されることはない。神は正しいさばきをなさる。神が人間の罪に勝利されるのは確かだが、だからといって、人間が罪を犯し続けてもいいということにはならない。人間の不義によってますます神の義が光り輝くのは確かだが、だからといって、人間の罪を黙認したり、助長したりしてもよいということにはならない。

すべての人が罪を犯した（3：9—18）

したがって、「人はみな罪人である」というのが結論である。異邦人も、独善的な道徳家も、ユダヤ人も、神の完全な基準に達していない。罪の影響は「人の子（人間として生まれた者）」全員に（10—12）、人間のからだのあらゆる部分に及んでいる。

律法によって義と認められることはできない（3：19, 20）

神はイスラエルを律法の下で試され、その「サンプル」から得られた結果に基づいて「全人類が罪を犯した」と宣言された。律法がなし得ることは、人を義と認めることではなく、罪の知識を人にもたらしただけである。

3. 福音の根拠と条件（3章21—31節）

恵みにより信仰をとおして与えられる義（3：21—25）

神は、不敬虔な罪人たちを義と認めるための、神の義なる方法をお示しになった。その方法は、旧約聖書に前もって示されていたものであり、「律法を守ること」とは全く別のものである。神は、自分が罪

人であることを認め、主イエスを信じる者をみな（ユダヤ人であるか異邦人であるかにかかわりなく）義と認めてくださる。「義認」は無代価で与えられる恵みの賜物であり、カルバリの丘でなしとげられたキリストの贖いのみわざに基づいている。このみわざによって旧約時代の信者たちも救われるのであり、それによって神が義であることが証明される。「信じる者を義と認める」ための正当な根拠が、キリストの死と復活によって備えられた。

恵みは誇りを取り除く（3：26—30）

福音は次のことを明らかにする。すなわち、神がどのようにして不敬虔な罪人たちを義と認めることができるのかを（すなわち、キリストの贖いに基づいて）。しかも、それが公正なことであるということ（なぜなら、完全な「身代わり」が罪の刑罰を受けたからである）。信仰による義はすべての誇りを取り除く。律法による義は決してそうではない。義認は、「律法を守ること」によるのではなく、信仰による。そのうえ、ユダヤ人だけではなく、異邦人のためのものでもある。

確立された律法の目的（3：31）

だからといって、律法が「価値のないもの」として廃棄されるわけではない。律法はその違反者に死を要求する。福音は、律法の要求がどのようにして十字架の上で完全に満たされたかを物語る。キリストは罪人の代わりに死なれた。だから、神は信じる罪人を救うことができになるのである。その代価がすでに支払われたからである。

4. 福音と旧約聖書との調和（4章）

信仰によって義と認められたアブラハムとダビデ（4：1—8）

福音が旧約聖書の教えと完全に一致することを証明するために、パウロはアブラハムとダビデの経験に言及する。旧約聖書には「アブラハムは信仰によって義と認められた」とはっきり記されている。これ

は、「行い」が「義認」と無関係であることを意味する。「恵み」と「行い」とは相反する原理だからである。ダビデの経験も同じであった。彼は、(行いについては何ひとつ言及されることなく) 神によって義と認められた罪人の幸いについて語っているからである。

アブラハムの信仰の本質(4:9—25)

神は(信仰のある)異邦人たちを(信仰のある)ユダヤ人たちと同じように義とみなしてくださる。この事実は、アブラハムが割礼を受ける前に(つまり、彼が「ユダヤ人」となる前に)義とみなされたという事実に示されている。アブラハムは今や(ユダヤ人であるか異邦人であるかにかかわらず)すべての信者の父である。もし義が律法を守ることによって得られるとすれば、信仰は締め出される。しかし、実際はそうではなく、義は恵みにより信仰によって与えられる。だから信者は、自分が神に受け入れられていることを確信できるのである。アブラハムが真の信者たち全員の父であることは、創世記17章5節からわかる。そこで彼は「多くの国民の父」と呼ばれている。彼は神の約束を信じたのでひとりの息子を得た。彼と妻(サラ)は老齢に達していたため、人間の力では不可能であったにもかかわらず、彼は信仰のゆえに義と認められたのである。このことについて書いてあるのは、彼のためだけではなく、私たちのためでもある。私たちのために贖いを成就してくださったお方を信じるならば、私たちも義とみなされるのである。

5. 福音の実際的な恩恵(5章1—11節)

「神との平和」を始めとした様々な祝福(5:1—5)

義認は信者に多くの恩恵をもたらす。すなわち、神との平和、筆舌に尽くしがたいほど恵まれた立場、来たるべき栄光を待ち望む喜び、患難さえも喜ぶ力を。患難は忍耐を生み出し、忍耐は品性を生み出し、品性は、決して失望に終わることのない希望を生み出す。

永遠の安全（5：6—10）

義認の5番目の恩恵は、私たちの安全がキリストにあって永遠に保障されることである。私たちはかつて無力な者であり、不敬虔な者であり、罪人であり、敵であった。しかし、私たちがそのような者であったときにキリストは私たちのために死なれた。だから、私たちが義と認められ、救われ、神と和解させられた以上、キリストが私たちを見捨てられることは絶対にあり得ないことである！

神との和解（5：11前半）

義認の6番目の恩恵は「神との和解」である。かつては敵対し、遠く離れていた私たちと神との間に調和がもたらされたのである。

主を喜ぶ（5：11後半）

最後の恩恵は神を——神の賜物だけでなく、与え主ご自身をも——喜ぶことができるということである。

6. キリストのみわざ、アダムの罪に勝つ （5章12—21節）

5章の後半は、これまで述べられてきたことと、続く3章（6—8章）との架け橋となっている。キリストのみわざは、アダムの罪がもたらしたものを補って余りあるものである（アダムの罪は「有罪」の判決と苦悩と死をもたらしたが、それらは祝福のうちに取り去られた）。アダムの罪によって多くの人が死んだが、キリストのみわざによって多くの人に恵みが増し加えられた。アダムの罪はさばきをもたらしたが、キリストのみわざは義認をもたらした。アダムの罪によって、死が残酷な暴君のように支配したが、キリストのみわざによって、信じる者はいのちにおいて支配する。アダムの違反は、アダムにあるすべての者に「有罪」の判決をもたらしたが、キリストのみわざは、

キリストにあるすべての者に義認と（その結果である）いのちをもたらしした。アダムの不従順によって多くの者が罪人とされたが、キリストが死に至るまで従順に従われたことによって、多くの者が義とされた。罪の増し加わるところには、恵みもさらに満ちあふれた。

7. きよい生き方へと続く福音の道（6章）

罪に対して死に、神に対して生きる（6：1—10）

「恵みが増し加わるために、私たちは罪の中にとどまるべきか？」という問いが生じる。もちろん、答えは絶対に「ノー（いいえ）！」である。私たちは罪に対して死んだのだから、その中にとどまることはできない。キリストが死なれたとき、私たちも死んだ。主は罪に対して死なれたのだから、私たちも罪に対して死んだのである。バプテスマは、古い「自分自身」がキリストとともに死んで葬られ、新しいいのちにあって歩むためによみがえることを描写している。

「推測航法」（6：11—14）

「立場」に関して私たちに当てはまることは、実生活においても私たちに当てはまるべきである。「死んだからだ」は罪の誘惑に反応しないのだから、私たちも同様にすべきである。また、今後は、神のみこころを行うために自分自身を神にゆだねるべきである。私たちは恵みによって罪の支配から救い出される。

「罪の奴隷」から「神の奴隷」へ（6：15—23）

一方、「私たちは（律法の下にではなく）恵みの下にあるのだから罪を犯してもよい」ということにはならない。かつて私たちは罪に身をゆだねてその奴隷となり、今では恥じているようなことをしていた。今後は、義と聖潔に身をゆだねてその奴隷とならなければならない。私たちは、罪という主人から解放され、自ら進んで神の奴隷となった。罪の報酬は、「いのち」という神の賜物に取り替えられた。

次の対照に注意せよ。「罪」という主人と「神」という主人、「報酬(罪の報い)」と「賜物」、「死」と「永遠のいのち」。

8. 信者の人生における律法の役割 (7章)

律法からの自由 (7:1-6)

死は律法の支配を終わらせる。たとえば、死は結婚に関する律法を無効にする。夫が活着している間は、妻は律法によって夫に結ばれている。しかし、夫が死ねば、彼女は他の男と自由に結婚できる。同様に、信者はキリストの死によって律法から解放されている。また、信者はキリストと結ばれているのだから、神のために実を結ぶことができる。回心する前の私たちは死のために実を結んだ。今や私たちは律法に対して死んだ者であり、もはや束縛されて仕えているのではなく、自由に仕えているのである。

律法には正当な役割がある (7:7-14)

だからといって、律法に何か悪いところがあるというわけではない。パウロはそれを証明するために、律法が彼の回心前の人生において果たした重要な役割に言及している。彼はあるときまではそれほど罪を意識することはなかった。しかし、律法の力によって罪を自覚させられたとき、彼の罪の性質が頭をもたげた。そのとき彼は、自分が独善に陥り、大きな思い違いをしていたことに気づいた。律法に落ち度があったわけではない。そうではなく、律法が「むさぼってはならない」と告げたとき、内に住み着いている罪の性質が活動しはじめたのである。墮落した性質は、禁じられたことを何でもしてみたいと願うのである。

律法は人をきよくすることができない (7:15-25)

律法には、回心後の信者を聖潔に導く力もない。ここでパウロは、「キリストとともに死に、キリストとともによみがえった」という真

理を知らない信者のうちに絶えず繰り広げられる戦いについて記している。古い性質は絶えず新しい性質と戦っている。善を行いたいという願いはあるが、実行が伴わない。勝利どころか、常に敗北しているように見える。肉の性質はどうしようもない悪である。それは背中に縛り付けられた死体のようなものである。キリスト・イエスによって救い出されるよりほかに、一体どのような方法があるだろうか。

9. きよく生きるための力を与える聖霊（8章）

御霊によって歩む（8：1—4）

7章の人称代名詞（「私」「私の」「私を」）は8章の御霊に道を譲る。勝利は自分の内にあるものではなく、御霊の力によって得るものである。

御霊は主イエスの復活のいのちを与え、信じる者を罪と死の原理から解放する。内に住み着いている罪は、重力の法則のように、人を引きずり下ろす。人は、内住するキリストのいのちによって、高いところまで達することができる。御霊によって歩む人は義を全うする。律法はその義を要求したが、それを生み出すことはできなかった。

「肉」か「御霊」か（8：5—14）

肉は未信者たちを支配する。彼らは肉的なことに関心を持っている。それは神に対して反抗し、神の律法に服従しない態度であり、死に導く態度である。一方、御霊は信者たちを支配する。彼らに関心を持っているのは、いのちと平安を保証する「永遠の事柄」であり、「からだの復活」である（からだは今に死に服従している）。信者は肉に対して何ら負債を負っていない。しかし、あらゆる罪の誘惑に対して「ノー（いいえ）」と言うことによって、からだの行いを殺すべきである。真の神の子はみな御霊によって導かれる。

子としてくださる御霊（8：15—18）

信者が恐怖にとらわれて生きることはない。むしろ、自分が神の子どもであり、神の相続人であり、キリストとの共同相続人であるという自覚が聖霊によってもたらされる。彼らはたとえ今は苦しんでいても、やがて栄光とともに受ける。将来の栄光と比べれば、今の様々な苦しみなど何でもない！

苦しみから栄光へ（８：19—25）

罪がこの世界に入って来たために今は苦しんでいる全被造物も、もっと良い日の訪れを切実な思いで待ち望んでいる。その日、信者は神の子として明らかにされ、被造物自体も苦しみから解放される。信者もうめきながら「栄光のからだ」を待ち望んでいる。これは救いに伴う望みである。

御霊のとりなし（８：26, 27）

私たちがどう祈ったらよいかわからないとき、聖霊が私たちのために父なる神に祈ってくださる。その祈りは常に神のみこころにかなったものである。

すべてのことが働いて益となる（８：28—39）

神は、そのご計画の中で、ご自分を愛する私たちのためにすべてのことを働かせて益としてくださる。神の壮大なご計画の全体は、神が永遠の昔に私たちに関して予知しておられたときから、私たちが最終的に栄化されるときにまで至るものである。こういうわけで、私たちに敵対できる者はひとりもない。しかも、神はすでに最高の「賜物」を私たちに下さったのだから、それより小さな贈り物を惜しまれることはあり得ない。私たちを（正当に）訴えたり非難したりできる者はひとりもない。また、私たちをキリストの愛から引き離すことのできるものもこの世界には何ひとつない。

10. 福音の見地から見たイスラエルの過去、現在、未来 (9—11章)

キリストを拒んだイスラエル(9:1—5)

福音はユダヤ人だけではなく異邦人のためのものでもある。この事実は、神が昔からの御民(イスラエル)との約束を破られたという印象を与えたかもしれない。9章から11章にかけては、神のご計画における、イスラエルの過去、現在、未来というテーマが取り上げられている。

パウロは、自分の同胞であるイスラエル人たちのために心から嘆き悲しんでいる。この上ない特権が与えられたにもかかわらず、彼らが信じなかったからである。

イスラエルの拒絶と神の計画(9:6—13)

イスラエルがキリストを拒絶したからといって、神が失敗されたわけではない。神の主権的な選びは常に約束に基づいたものであった(単に直系の子孫であるかどうかということに基づくのではなく)。このことは、イシュマエルではなくイサクが、エサウではなくヤコブが選ばれたことから明らかである。

イスラエルの拒絶と神の正しさ(9:14—33)

神は、ある者たちにはあわれみを示され、別の者たちの場合には(たとえばパロのように)その心をかたくなにされる。神の主権はこのことのうちに見いだせる。神がパロの心をかたくなにされたのは気まぐれからではなかった。この暴君は自らその事態を招いたのである。このことについて神に異議を唱えることはだれにもできない。陶器師が粘土を自分の思いどおりにできるのと同様、神にはユダヤ人だけではなく異邦人をも選ぶ権利がある。ホセアは異邦人の召しを預言したし、イザヤは、イスラエルが(「残された者」を除いて)みな拒絶す

ることを預言したではないか。

同胞に対するパウロの愛（10：1—4）

パウロは祖国の民を裏切るどころか、彼らのためなら死んでもよいと思うほどまでにユダヤ人を愛していた。ユダヤ人は神に対して熱心であったが、過ちを犯してしまった。キリストを信じる信仰によってではなく、律法を守ることによって義を得ようという過ちを。

「行い」か「信仰」か（10：5—10）

「律法のことば」と「信仰のことば」は全く異なる。律法は「行わなければならない」と告げる。信仰は「しなさい」とは告げずに「信じなさい」と告げる。信仰は、キリストを引き降ろすためにあなたを天に上らせたりはしない。キリストはすでに受肉され、この世に來られたのだから。また、あなたに「キリストを引き上げるために墓に行け」とも言わない。キリストはすでによみがえられたのだから。信仰はあなたに「イエスを主と告白し（子なる神の受肉）、彼をよみがえらせた父なる神を信じなさい（復活）」と告げる。これを信じる者は義とみなされる。それから人は自分の救いを他人に告白する。

救いに関する良い知らせを宣べ伝える（10：11—15）

この救いは、ユダヤ人と異邦人の区別なく「すべての人」のために備えられたものである（11, 12）。しかし、そのメッセージは宣べ伝えられなければならない。そこで、神はご自分のしもべたちを遣わされる。彼らはその良い知らせを宣べ伝える。罪人たちは、神が無代償で与えてくださる救いについて聞く。ある者たちはそのメッセージを信じる。彼らは主を呼び求め、救われる。

イスラエルのかたくなな反応は預言されていた（10：16—21）

不幸なことに、すべてのイスラエル人がそのメッセージを信じたの

ではなかった。世界中に宣べ伝えられたにもかかわらず、イスラエルの民の多くはそれに応えなかった（異邦人は信じて救われたが）。主は1日中、手を差し伸べて招かれたが、イスラエルの民は不従順で反抗的な態度をとった。

イスラエル全体が神を拒んだのではない（11：1—10）

神は、昔からの御民を退けてしまわれたのではない。パウロ自身も「救われたユダヤ人」である。エリヤの時代も同様であった。民の大部分が神に背を向け、偶像を拝んだが、なお神を信じる「残りの者」がいた。同様に、今日も、（行いによってではなく）主権的な恵みによって選ばれた「残りの者」がいる。不信仰なイスラエルは、旧約聖書の預言どおり、盲目にされている。

イスラエルの違反は究極的なものではない（11：11, 12）

イスラエルが「倒れた」のは確かだが、それは究極的なもの、永遠に続くものではない。彼らの違反によって、祝福が異邦人に及んだ。しかし、その祝福も、イスラエルの回復によってこの世界にもたらされる祝福（千年王国）とは比べものにならない！

イスラエルが退けられた目的（11：13—16）

パウロの願いは、神が異邦人を祝福されたことによってイスラエル人の間にねたみが生じ、その結果、その中の幾人かでも救われることであった。異邦人は次のことを悟るべきである。すなわち、「イスラエルが退けられること」がこの世界にとって「和解」を意味したように、「イスラエルの回復」は「全世界が新たに生まれ変わるような出来事」となる。そして、アブラハム（「初物」「根」）が神によって聖別されたのと同様に、彼の子孫（「粉の全部」「枝」）も神によって取り分けられるのである。

良いオリーブの木——特権ある立場（11：17—24）

イスラエル（「枝の中のあるもの」）は特権ある立場から「折られ」、異邦人（「野生種のオリーブ」）が接ぎ木された。しかし、異邦人は誇ってはいけない。なぜなら、もし神が異邦人を取り除き、代わりにイスラエルを再び元の台木に接ぎ木されたとしても、その行為は、以前の「自然の法則に反した」行為に比べればずっと自然な行為だからである。

イスラエルの回復の約束（11：25—27）

不信仰な「イスラエル人の一部」がかたくなになったのは、からだなる教会に最後の異邦人が加えられるときまでである。それから、つまり再臨のとき、信仰のある「（イスラエルの）残りの民」は、イザヤとエレミヤの預言どおり、みな救われる。

遠ざけられているが愛されている民、イスラエル（11：28—32）

福音が異邦人に宣べ伝えられている間、イスラエルは神の恩寵おんじょうから遠ざけられている。しかし、彼らは依然として族長たちのゆえに愛されており、神は最終的にはご自分の約束を果たされる。不信仰な異邦人が最終的にはあわれみにあずかったように、イスラエルも、異邦人に示された恩寵をねたむようになるとき、あわれみにあずかる。このようにして、あわれみはすべての人に及ぶのである。

驚くべき神の知恵（11：33—36）

恵みある神の驚くべきお取り扱いに思いをめぐらすと、賛美と礼拝をささげずにはおれなくなる。神の富と知恵と知識は底知れず深く、そのさばきは知り尽くしがたく、その道は測り知れない。みこころを（神と同じようなレベルで）知る者はなく、神には相談相手も不要であり、また、神が借り手になられることなどあり得ない。神は全被造物の源であり、「動作主」であり、目的である。

11. 信者にふさわしい振る舞い (12章1節—15章13節)

神と集会と社会に対する責任 (12章)

「ローマ人への手紙」の12章以降には、信仰によって義と認められた人々への実践的な教えが記されている。

神のあわれみに対して「霊的な」(直訳は「合理的な」)。すなわち「人間として当然なすべき」答えを返すためには、自分自身を神に完全にさげること、この世の慣例にばかり従って行動するのを避けること、一新された心を持つことが必要である(1, 2)。「キリストのからだ」の「器官(構成員)」には、みなそれぞれに「働き(御霊の賜物)」があるのだから、優越感や劣等感が入り込む余地はない(3—5)。神から与えられた能力と賜物をすべて活用すべきである(6—8)。しかし、賜物だけでは十分ではない。信者は「賜物」と「キリストに似た人格」とを兼ね備えなければならない。その人格とは、9節から21節までに生き生きと詳細に述べられているとおりのものである。

政治に対する責任 (13: 1—7)

この世の政権は、秩序を保ち、法に背く者を処罰するために神によって立てられたものだから、信者はそれに従わなければならない。たとえ支配者が神を個人的に知っていないとしても、彼らは神によって公に立てられた「神のしもべ」である。支配者に逆らうことは神に逆らうことであり、処罰を招くことである。政治的権力に従うことには税金を納めることや、ふさわしい敬意を払うことも含まれる。私たちは彼らに従い、彼らに税を納め、彼らのために祈るべきである。けれども、政治的権力に従うことが神に背くことになる場合には、信者は従うことを拒否し、(権力に反抗するのではなく)その結果を甘んじて受けるべきである(使徒5:29参照)。

隣人に対する責任 (13: 8—10)

もうひとつの重要な義務は愛である。隣人を愛する者は律法を全うする。

主イエス・キリストを着ること (13: 11-14)

残された時間はわずかである。私たちが最終的に救われる時、つまり、私たちが栄光に輝く時が今まで以上に近づいている。だから、私たちは不道徳な「やみのわざ」を打ち捨て、主イエス・キリストを着るべきである。墮落した性質に活動の拠点を与えてはならない。

自由の律法 (14: 1-13)

14章1節から15章13節にかけて使徒パウロが取り扱っているのは、道徳的にはそれほど重要でないこと、すなわち、それ自体正しいとか間違っているとか言えない事柄に対するキリスト者の振る舞いに関してである。ある信者たちは、これらの事柄にやかまし過ぎるという意味で「弱い」かもしれない。一方、気がとがめることなく、こうしたことを自由にやれるという意味で「強い」信者たちもいる。ここには、この件に関して指針となるべき諸原則が記されている。

私たちは弱い信者を受け入れるべきである。彼らと議論しようなどと考えるべきではない(1)。強い信者は弱い信者を軽蔑してはならず、弱い信者は強い信者をさばいてはならない。私たちには、これらの事柄に関して主のしもべを批判する権利はない(2-4)。「食べ物」と「宗教上の休日を守ること」に関しては、各自、心の中で確信を持つべきである。重要なことは、「強い」人も「弱い」人も主を喜ばせようとすることである(5-9)。私たちは、キリストのさばきの座で、(他人のではなく)自分自身の申し開きをしなければならぬ。だから、他人をさばくようなことはせず、むしろだれをもつまづかせないように注意すべきである(10-13)。

愛の律法 (14: 14-23)

儀式上の汚れをもたらす食べ物は何ひとつないが、もし人が「これは汚れた食べ物だ」と思うならば食べるべきではない。「食べ物」はそれほど重要な事柄ではないのだから、私たちは、他の兄弟姉妹を悲しませたり、その霊的に幸いな状態を損なったりすべきではなく、また、このような二次的な事柄のために自分の評判を落としたりすべきではない。本当に大事なものは義と平和と喜びである。これらは神にも人にも受け入れられ、認められるものである(14—18)。私たちはキリスト者として交わる際に、平和と一致を保ちつつ、互いに啓発し合うよう努めるべきである。他人の人生における神のみわざを妨げるようなことは何ひとつすべきではない。もし人が自分自身の良心に背いて行動したとしたり悪いことである。他人をつまずかせたり、怒らせたり、他人に霊的な損害を及ぼしたりするくらいなら、肉を食べず、酒を飲まないほうが良い。もし、「それ自体は間違っていると言えないこと」を好き放題にできる自由があるなら、自分だけでそうすべきである。もし弱い信者が良心のとがめを感じながら食べるなら、彼は罪を犯したことになる(19—23)。

他の人々の重荷を負うこと(15: 1—4)

15章1節から13節までは、引き続き「道徳的にはそれほど重要でない事柄」を取り扱っている。強い者は、親切と思いやりをもって弱い人に接するべきである。そして、各自がキリストの模範に倣い、(自分ではなく)他人を喜ばせるために生きるべきである。キリストは御父を喜ばせるために生き、(詩篇作者の預言どおり)御父に対するそしりをご自分の身に負われた。

ともに神をほめたたえる(15: 5—13)

おそらく、「食べ物」と「日を守ること」に関して、ユダヤ人回心者と異邦人回心者との間に緊張状態が生じたのだろう。すなわち、「弱い人」とはユダヤ人回心者たちのことだったのだろう。パウロは、

双方がよく教えられることによって、主イエスの教えと模範に従って仲良く生活し、心をひとつにして神を礼拝し、神の栄光のために互いに受け入れるようにと祈っている（5—7）。主イエスの働きは、旧約聖書から引用された三つの聖句に見られるとおり、ユダヤ人と異邦人双方のためのものである。これには「広い心をもって互いに受け入れ合うべきである」という含みがある。パウロはこの箇所を次の祈りで締めくくっている。「どうか、神が、信仰による喜びと平和を聖徒たちに与えてくださるように」と（8—13）。

12. 結びの説明、勧告、あいさつ (15章14節—16章27節)

パウロの執筆目的（15：14—16）

パウロは、ローマの信者たちがこの手紙の内容をもう1度心に留めたうえで、パウロを「異邦人のための神のしもべ」と認めることを確信していた。

パウロの過去の宣教：エルサレムからイルリコまで（15：17—21）

パウロは、神が他の人々をとおしてなされたことを誇ろうとはせず、異邦人に対する彼の宣教において力強くなしとげてくださったことのみを誇ろうとしている。彼の方針は、他人の土台の上に建てることではなく、むしろ、未開拓の地域に福音を宣べ伝えることであった。このようにして、異邦人伝道に関するイザヤの預言が成就した。

パウロのローマ訪問計画（15：22—29）

これまでパウロは、過密なスケジュールのためにローマを訪れることができなかったが、異邦人諸集会からの救済基金をエルサレムの貧しい聖徒たちに届けた後、スペインに行く途中でローマに立ち寄りとうと計画する。ちなみに、その救済基金は霊的な「借り」に対する物質的な「返済」である。

祈りを求めるパウロ（15：30—33）

パウロは祈りを懇願してこの区分を書き終えている。その祈りとは、パウロが狂信的なユダヤ人たちから守られるように、ユダヤ人の聖徒たちが救済基金を快く受け取るように、パウロのローマ訪問が喜ばしいものとなるように、パウロ自身もそこで元気づけられるように、というものであった。

力になってくれた姉妹を助ける（16：1，2）

この手紙には様々なことが記されているが、フィベという姉妹を「ケンクレヤにある集会の忠実なしもべ」としてローマにいる聖徒たちに紹介している。

ローマの聖徒たちへのあいさつ（16：3—16）

3節から16節には、パウロが知っていた様々な信者たちへのあいさつのことばが記されている（パウロはまだ1度もローマに住んだことはなかったのだが）。「パウロは女性排斥者だ」という不当な非難のことを考えるとき、パウロが、キリストにある多くの姉妹たちに、それぞれの真価を認めたくえであいさつを書き送っている事実に注目すべきである。すなわち、マリヤ、ユニア（別訳）、ツルパナ、ツルボサ、ペルシス、ルボスの母、ユリヤ、ネレオの姉妹、オルンバ。そして言うまでもなくフィベ。彼女が「ローマ人への手紙」をローマへ届けたのである！

この章を「キリストのさばきの座」の縮図にたとえる人々もいる。

破壊的な人々に関する警告（16：17—20）

パウロは、この手紙を書き終える前に、集会にこっそりと忍び込むにせ教師たちに対する警告を記さずにはおれなかった。

パウロの友人たちからのあいさつ（16：21—24）

パウロは、自分といっしょにいるキリスト者の友人たちからのあいさつも記している。その中には、この教義的かつ実践的なすばらしい書簡の筆記者であるテルテオの名も含まれている。

祝福を求める最後の祈り（16：25—27）

パウロは、同労者たちのあいさつを書き加えた後、神への賛美をもってこの手紙を終えている。彼は、神が新約時代の預言者たちをとおして、からだなる教会の奥義を啓示してくださったことをほめたたえている。

コリント人への手紙 第一

はじめに

コリントの集会の起源

パウロが初めてコリントを訪れたのは第2次伝道旅行のときだった(使徒18章)。彼は最初、同業者(天幕作り)であったプリスキラとアクラとともにユダヤ人たちに伝道した。その大部分が彼のメッセージを拒んだので、今度は異邦人に福音を伝えた。その福音宣教をとおして多くの人々が救われ、その結果、キリスト者の集会が形成されたのである。

本書簡の起源と執筆年代

それからおよそ3年後、パウロがエペソで宣教していたときにコリントから1通の手紙を受け取った。その手紙には、コリントにある群れが抱えていた諸問題と、キリスト者としての行いに関する様々な質問が記されていた。この手紙はその返答として書かれたのである。執筆年代は紀元54年から55年頃であろう。

本書簡の概要

1. あいさつ(1章1—3節)
2. パウロの感謝(1章4—9節)
3. 集会内の分裂(1章10節—4章21節)
4. 集会における懲らしめ(5章)
5. 信者間の訴訟(6章1—11節)
6. 善悪を判断するための諸原則(6章12—20節)
7. 結婚と独身に関する教え(7章)

8. 偶像に供えられた肉を食べること（8章1節—11章1節）
9. 姉妹のかぶり物に関する教え（11章2—16節）
10. 主の晩餐（11章17—34節）
11. 御霊の賜物と集会内での用い方（12—14章）
12. 復活を否定する者たちへのパウロの回答（15章）
13. 献金に関する教え（16章1—4節）
14. パウロ個人の計画（16章5—9節）
15. 結びの勧めとあいさつ（16章10—24節）

1. あいさつ（1章1—3節）

パウロは手紙を書きはじめの際にたいいてい、自分の使徒職、そばにいる同労者、もしくはあて先の集会（もしくは個人）の何らかの特徴に言及した。そして、「恵み」と「平安」という、いつもどおりのあいさつのことばを付け加えた。コリントの信者たちの特徴は、「聖徒として召され、キリスト・イエスにあって聖なるものとされた」であった。彼らの「立場」は聖徒であったが、彼らの「行い」は（やがて明らかになるとおり）必ずしも聖徒にふさわしいものではなかった。ここで改めて覚えさせられることは、「私たちの状態はますますその立場にふさわしいものにならなければならない」ということである。

2. パウロの感謝（1章4—9節）

パウロは、コリントの信者たちに聖霊の賜物（特に「ことば」と「知識」の賜物）が豊かに与えられていることを感謝していた。これは、彼らのうちに神が働いておられることの確かな証拠だった。パウロは、神が彼らを最後まで堅く保ってくださることを確信していた。

3. 集会内の分裂（1章10節—4章21節）

コリントの党派心（1：10—17）

最初に取り上げられた問題は「コリント集会の分裂」である。それ

それぞれのグループが自分たち独自の指導者の正当性を主張していた。これは「キリストのからだ」の一体性を否定することであり、自分たちのために十字架につけられたお方を軽んじることであり、バプテスマの意味を否定することであった。パウロはほんの数人にしかバプテスマを授けなかったが、それは、人々の忠誠心がキリストにではなく、自分に向けられることを恐れたためだった。また、彼は雄弁術やレトリック（修辞法）には頼らなかったが、それは「キリストの十字架がむなしくならないため」だった。今日、人気のある説教者たちが、このような用心深さと謙虚さをもっと身につけてくれたら、どんなによいことだろう！

神の知恵と力（1：18—25）

どうやらコリントには、十字架という「不快の種」を取り除いたり、その主張をトーンダウンしたりすることによって、福音を学者や哲学者たちにとってもっと受け入れやすいものにしたいと願う信者たちがいたようである。パウロは、十字架のことば（メッセージ）は次のようなものだと断言した。すなわち、「人々が『真の知恵』と考えているもの」とは根本的に異なったものだ。十字架のことばは滅びに向かっている人々には愚かであるが、神はそれを用いて信じる人々を救われる。それは、しるしを愛するユダヤ人にとっては「つまずき（の石）」（信仰にとっての障害物）であり、知恵を愛するギリシャ人にとってはバカげたことであるが、神が召される人々にとっては神の力であり、神の知恵である。神は、人間の知恵と力が決してなし得ないことをなさるために、この「愚かさ」と「弱さ」をお用いになるのである。

主にある栄光（1：26—31）

なぜ、コリントの信者たちはこれほどまでに「哲学」や「世的な知識」に敬意を払ったのだろうか。彼らは知的な上流階級の出身ではな

かった！ 神はご自分の目的を達するために、愚かで、弱い、身分の低い、見下されている、無に等しい者たちをお選びになる。それは神の御名があがめられるためであり、「御前でだれをも誇らせないため」である。キリストは私たちの知恵であり、義であり、聖さであり、贖いである。もし何か誇るつもりならば、キリストのことを誇るべきである！

十字架につけられたキリストを宣べ伝える（2：1—5）

パウロは、自分が述べたことの実例として自分自身を引き合いに出した。彼は「雄弁」や「すぐれた知恵」を用いてコリント人たちを感動させようとはしなかった。彼は、十字架につけられたキリストという単純なメッセージを宣べ伝えた。パウロ自身には何の力もなかった。彼は弱く、恐れおののいていた。コリントの信者たちは、自分たちの人生に起こったことがパウロによるものではないことを知っていた。いかなる栄誉も主に帰さなければならない。

神の御霊による啓示（2：6—10前半）

だからといって、福音が愚かだというわけではない。霊的に成熟した者にとって、福音は神の知恵である。神はその知恵を、「時間」が生じる前からずっと秘密にしてこられた。イザヤは、神がいつの日か「人間の想像を超えたすばらしい真理」を啓示してくださることを預言した。今や神はそれらを御霊によってパウロたちに啓示されたのである。

啓示（2：10後半—12）

まず第1に「啓示」があった。神の御霊が、パウロを始め、新約聖書の著者たちに、これら「神の深い真理」を啓示したのである。私たちには完全に理解することのできない何らかの方法で、御霊だけが神のみどころを知っておられるのだから、御霊だけが神の真理を神の民

に啓示できるのである。

靈感（2：13）

次に「靈感」があった。パウロたちは、自分たちに啓示された真理を、聖霊から与えられたとおりのことばで書き記した。彼らは「自分が選んだことば」も「人間の知恵が教えたことば」も用いなかったのである。

啓蒙（2：14—16）

最後に「啓蒙」があった。福音は神によって啓示され、神によって靈感されるだけでなく、神の御霊の力によってのみ理解され得るものである。生まれながらの人間は神の真理を受け入れることができない。それらの真理は彼にとって愚かなことだからである。「霊の人」はキリストの心を持っており、これらのすばらしい真理をはっきりと認めることができる。たとえ、その人自身は未信者たちから理解されなくとも。

肉の性質から生じた党派心（3：1—4）

コリントの信者たちの肉の性質のゆえに、パウロは彼らに深い真理を伝えることができないでいた。彼らの間にねたみや争いがあるという事実こそ、彼らが肉に属している証拠だった。人間を中心に分派を形成していた彼らは、単に人間のレベルで行動していたにすぎない。

働くことと水を注ぐこと（3：5—9）

アポロやパウロのような人間はただのしもべにすぎないのであって、主人ではないことを、コリントの信者たちは悟るべきであった。しもべとして彼らにできることは、ただ「植えたり」「水を注いだり」することだけであった。神だけが霊的ないのちをもたらすことができた。来たるべき日に彼らの働きは評価され、報酬を受ける。それまで

の間、彼らは、コリントの信者たちに仕える同労者であった。パウロはコリントの信者たちを「神に耕される畑」「神の建物」だと述べている。

3種類の「建てる者」(3:10-17)

パウロはコリントへ「賢い建築家」としてやって来て、真の土台——「キリストご自身」と「そのみわざ」に関する真理——を据えた。他の教者たちがパウロのあとに続き、その土台の上に建てた。すべての教えは、「永遠に価値あるもの」か、「一時的な価値しかないもの」か、「有害なもの」かのいずれかであり、働きの人はそれに応じて報いを受けることになる。良い教者は金、銀、宝石で建てる。つまり、その教えは堅固で、いつまでも変わることがない。木、草、わらで建てる教者がいるかもしれない。つまり、その奉仕は実質のないものであり、一時的な価値しかない。3番目の教者は、悪い教義で集会をつぶすかもしれない。最初の働きの人は報酬を受ける。2番目の働きの人は損害を被る(彼自身は救われるが)。最後の「働きの人」は滅ぼされてしまう。名前だけの信者だからである。

キリストにあって、すべてのものは私たちのもの(3:18-23)

「キリストのしもべ」にとっての真の知恵は、自分自身が無に等しい者であるということに悟ることにある。主の民にとっての真の知恵は、神のしもべたちが自分たちのものであることを悟ることにある。主の民は自分たちの「お気に入りの人物」を選んだり、そのような人物を中心に分派を形成したりすべきではない。

神の奥義の管理者(4:1-5)

キリスト者の指導者はキリストのしもべであり、神の真理の管理者である。彼らには忠実であることが要求される。他の者がこれをさばくことはできない。しもべは自分自身の忠実さをさばくことさえでき

ない！ 神だけがさばくことができる。したがって、さばきは神にゆだねるべきである。

分裂の原因（４：６，７）

コリントの集會に生じた分裂の原因は「高慢」であった。しかし、それは愚かなことだった。もし、ある教者が他の教者よりも賜物が豊かであるとしたら、神が彼にその賜物をお与えになったにすぎないからである。

「キリストのために愚かな者」（４：８—１３）

コリントの信者たちは自己を過信し、高慢で、「豊か」であり、ゼいたくで快適で気楽な生活を送っていた。彼らは王のように羽振りをきかせていた。一方、パウロたちは飢え、渇き、ぼろ服をまとい、残酷な扱いを受け、住む家もなく、迫害され、中傷され、「人間のかす（世間のくずども）」のように扱われていた！

「父親」らしいパウロの配慮（４：１４—２１）

パウロは信者たちをはずかしめるために皮肉を言っているのではないと説明した。彼らの「信仰の父」として、パウロは彼らに自分を見習うようにと勧めた。パウロは、自分の生き方を彼らに思い起こさせるためにテモテを遣わそうとしていた。だからといって、パウロにコリントに行くつもりがなかったというわけではない。彼はそこへ行く計画を立てていた。そのときに、分裂を引き起こした者たちがことばだけの者たちなのか、それとも、靈的な力も持っている者たちなのかを知ることになるだろう。そのときのパウロの気持ちはコリントの信者たち次第だろう。

４．集會における懲らしめ（５章）

集會内の不品行（５：１—８）

次にパウロは集会における別の問題を取り上げている。ある男が自分の父の妻（継母だったようである）と「近親相姦」の罪を犯していた。それなのに集会は嘆き悲しむどころか誇り高ぶっていた。パウロはその男の「肉が減ぼされるため」に、つまり、彼の性質のうちにあるこのような罪深い傾向が正されるために、彼をサタンに引き渡すべきだと考えた。集会内部の罪はパン種のように作用する。すなわち、それは広がり、多くの人を汚し、全体に悪影響を及ぼすのである。したがって、それを取り除くべきである。信者の生活は常に「種なしパンの祭り」のようなものでなければならない。つまり「純粹」および「真実」ということばの生きた見本でなければならない。

不品行はさばかれなければならない（5：9—13）

日常生活において不品行な者との接触を避けることは不可能である。しかし、集会内においては、邪悪な振る舞いをしている者をとがめずにおくのは悪いことである。不道德な未信者のさばきは神にゆだねることができるが、信者であると公言している者が性的な不品行、貪欲、偶像礼拝、ひどい中傷、アルコール中毒（依存症）、詐欺の罪を犯したことが立証されたときには、私たちにはその者たちを除名する責任がある。罪の生活を送っている（信仰告白している）信者と社会的な交わりを持つことは禁じられている。

5. 信者間の訴訟（6章1—11節）

異教徒の法廷での訴訟事件（6：1—5）

コリントにあったもうひとつの問題は信者間の訴訟事件だった。パウロはそれを「キリスト者としての道義に反すること」とみなした。聖徒はいつの日か、世界を、そして御使いをもさばくようになるのだから、この世のことをさばくことができて当然である。このような問題を処理することのできる人物が少なくともひとりには地域集会の内部にいるべきである！

罪を犯すよりも被害者であるほうがよい（6：6—11）

兄弟を告訴するよりは、むしろ自分が害を受けたり、だまされたりしたほうがよい。それなのに、コリントの信者たちは、他人に不正を行ったり、他人をだましたりしていた。彼らは、神の国を相続できない、邪悪で不敬虔な人々のように振る舞っていた。彼らはすでにきよめられ、聖別され、義と認められたのだから、それにふさわしく行動すべきであった。

6. 善悪を判断するための諸原則（6章12—20節）

パウロはこの箇所では、個人がどのように振る舞うべきかという基準をいくつか提示している。物事の中には、「許されてはいるが、益にならないこと」がある。「許されてはいるが、人をとりこにしまうもの」もある。また、「許されてはいるが、一時的な価値しかないもの」もある。しかし、（性的な）不品行のためにからだを用いることは常に悪いことである。「からだは主のためであり、主はからだのためである」。キリストのからだはよみがえったように、私たちのからだもよみがえる。私たちのからだはキリストのからだの一部である。姦淫は（ほかの罪とは違って）からだに対する罪である。からだは「聖霊の宮」であり、キリストによって買い取られたものであり、神の所有物である。

7. 結婚と独身に関する教え（7章）

コリントの信者たちは以前に「結婚」と「独身」に関する様々な質問を書き送っていた。それに対するパウロの回答がここに記されている。

結婚に関する諸原則（7：1—6）

原則から言えば、独身のままでいるほうがよい。けれども、不品行

に陥る危険があるので結婚するほうが望ましい。結婚は「一夫一婦」であるべきである。また、夫婦はそれぞれ自分の配偶者に対して「結婚生活に関する義務」を果たすべきである。なぜなら、夫婦は相互に依存しているからである。祈りに専念するためならば性生活を控えてもかまわない。ただし、その場合も一時的なものでなければならず、しかも合意のうえでなければならぬ。これは容認されたことであって、命令されたことではない。

独身者とやもめへの助言（7：7—9）

パウロは、独身でいるほうが「より望ましい状態」だと考えたが、それが神の御力によってのみ可能なことを悟っていた。パウロは、未婚者とやもめに独身のままでいることを勧めたが、その一方で、もし自制心を欠くならば結婚したほうがよいと認めた。

結婚している信者たちのための諸原則（7：10, 11）

夫も妻もともに信者である場合は結婚の絆^{きずな}を断ち切ってはならない。もし離婚したならば再婚してはならない。そうすれば、いつでも和解できるからである。

配偶者が信者でない場合の諸原則（7：12—24）

配偶者が未信者であったとしても、別れるべきではない。未信者であるその配偶者は（信者とはまた違った意味で）「特権ある立場」に置かれているからである。信者である妻（もしくは夫）との親密な関係によって、絶えず福音に触れ、クリスチャン生活の美徳に接しているからである。もし信者でない配偶者が別れたいと願うなら、平穩に別れることは許されるが、その人が最終的には救われるという希望を持ち続けるべきである。全体に共通して言えることは、「クリスチャンになったからといって、すでに存在している絆^{きずな}——文化的なもの、民族的なもの、社会的なもの^{いづれであれ}——をことごとく断ち切

らなければならぬわけではない」ということである。

未婚者への助言（7：25—28）

パウロは次に（男女を問わず）未婚者への助言を記している。「現在の危急」——つまり、この世の人生における苦悩——を考慮すると、「独身である」というのは（概して）良いことである。この場合の「危急（苦悩）」とは、パウロの時代にだけあったものではなく、いつの時代にもあるものを指す。これは、明らかに、既婚者は離婚すべきだという意味でもなければ、結婚することは罪だという意味でもない（たとえ、その結婚があらゆる困難を伴ったとしても）。

独身でいることの利益（7：29—38）

独身の状態が望ましいのは「時が縮まっている」からであり、また、それによってひたすら主に仕えることができるからである。もし、ある人が、独身であるがゆえに見苦しい振る舞いをするならば（もし性的自制心を働かせることができないならば）、その人には結婚が許される。しかし、自制心を働かせて純潔を保つことができるならば、そのほうが望ましい。

信者であるやもめへの助言（7：39, 40）

死によって結婚の絆は断ち切られるので、やもめには再婚する自由がある。しかし、もしやもめのままでいるならば、そのほうがもっと幸いである。

8. 偶像に供えられた肉を食べること

（8章1節—11章1節）

知識と愛（8：1—3）

このような問題を解決に導くに当たっては、知識だけでは十分ではない。知識はとかく人を高ぶらせる。愛が大いに必要である。

唯一の神、唯一の主（8：4—6）

まず第1に、偶像に関する基本的な事実がいくつか記されている。実際に偶像の神々が存在するわけではない。いわゆる「神々」（神話の神々）は天にも地にもあると言われている。しかし、真の神はただおひとり、真の主イエス・キリストもただおひとりである。

他人の良心に対する敏感さ（8：7—13）

偶像にささげた肉を食べることには大きな危険が伴う。それは、弱い兄弟のつまずきになるかもしれないということである。そのような状況の下では、肉を食べないことは小さな犠牲にすぎない。弱い兄弟をつまずかせるのは重大なことである。その兄弟が良心のとがめに逆らって、してはいけないと考えていることをしてしまったとしたら、（キリストが彼のためにも死んでくださったほどの）ひとりの兄弟が自分のあかしを台無しにしてしまう結果となるのである。兄弟をつまずかせることは、キリストに対して罪を犯すことである。兄弟をつまずかせるくらいなら、肉を食べないほうがよい。これは酒を飲むことにも当てはまる。他人の霊的進歩を妨げるくらいなら、正当な権利を放棄したほうがよい。

自己否定の模範を示すパウロ（9：1—14）

パウロはここで、自分自身の自己否定に（他人のためを思って）言及している。「主を見た」使徒として、また、その宣教が祝福されてきた使徒として、パウロには経済的な援助を受ける権利があった。彼はその論拠を次のように6つ挙げている。（1）他の使徒たちは援助を受けている。（2）兵士、ぶどう園で働く者、羊飼いは自分たちの分け前をもらう。（3）モーセの律法には、働き人は収穫を分け合うべきだと記されている。（4）当時、コリントの信者たちから援助を受けている人々がいた。（5）神殿で仕える者たちは生活を支えられ

ている。(6) 主は、福音を宣べ伝える者が福音の働きから生活の支えを得るように定められた。

無報酬で福音を宣べ伝える(9:15—18)

しかし、パウロはその当然の権利を辞退していた。彼は福音を宣べ伝える際に誇ることができなかった。そうするよう神に強いられていたからである。だから彼は、福音を他人に無料で聞かせるために自ら生計を立てている事実を誇ろうとしたのである。

すべての人に仕える(9:19—23)

キリストに対する忠誠を保てる限り、パウロは福音のために当然の権利を放棄した。律法の下にあるユダヤ人たちのために、律法を持たない人々のために、そして弱い人々のために——要するに、すべての人のために。

賞を受けるために走る(9:24—27)

自己訓練が欠如すれば報酬をもらい損なってしまうが、パウロはその危険をひしひしと感じていた。陸上競技の走者は賞を獲得するために走るが、私たちもそうすべきである。彼らは朽ちる冠を獲得するために自分を鍛えるが、私たちは朽ちない冠を獲得するためにそうすべきである。パウロは、目的地もなしに走ることも、「シャドーボクシング」をすることもなかった。最後に失格者とならないように、自分のからだを打ちたたいて従わせた。それは、彼が救いにもれるかどうかの問題ではなく、働き人として「お払い箱になる」かどうかの問題であった。

旧約聖書の戒め(10:1—13)

イスラエルの歴史は、「偶像礼拝」と「放縦」に陥る危険性がありありと示した実例である。イスラエル人はみな、紅海を渡ったときも、

荒野を旅したときも、驚くべき恩恵にあずかったが、彼らの大部分は神のみこころを損ね、荒野で滅んでしまった。なぜか。彼らが悪いことを渴望し、偶像礼拝と姦淫の罪を犯し、主を試み、不平を言ったからである。これらのことが起こったのは私たちを戒めるためである（「戒め」の文字どおりの意味は「見本」）。それは自信のある者にとっては警告であり、試練に直面している者にとっては慰めである。

主の食卓は比類なきものであり、偶像の食卓とは相いれない

(10：14—22)

パウロはここで、偶像にささげられた肉に関する明確な指示を与えようとしている。信者は、偶像の宮でその食卓にあずかることを禁じられている。主の食卓で食べることが主との交わりを意味するのと同様、また、供え物を食べたイスラエル人が祭壇にあずかったのと同様、偶像の宴で食事をする者は、実際にはその偶像と結びついている悪霊どもと交わっているのである。主と同時に悪霊とも交わることは、道義上不可能である！ そうしようとする者は主にねたみを起こさせ、そのさばきの力を知らされることになる。

3つのテスト (10：23, 24)

その他の状況に関しては、キリスト者は次のように自問すべきである。それは「許されたこと（してもよいこと）」だろうか。それは有益なことだろうか。それは徳を高めること——つまり、他人のためになること——だろうか。

神の栄光と他人の幸い (10：25—11：1)

市場で売られている肉は、たとえ偶像に供えられていた肉であったとしても、食べてよい。たとえ偶像に供えられていた肉であったとしても、弱い兄弟の良心をつまずかせることさえなければ、自分の家で食べてよい。つまずきをもたらすことは、自分自身に不必要な非難を

もたらし、そしられる原因となる。私たちはすべてのことを「神の栄光」と「他人の幸い」のためにすべきである。

9. 姉妹のかぶり物に関する教え (11章 2—16節)

かぶり物の意味 (11：2—10)

パウロは、称賛のことばを述べたあとで、「姉妹のかぶり物」という主題に入る。彼はまず、万物には3つのかしらがあることを指摘している。すなわち、人間のかしらであるキリスト、女のかしらである男、キリストのかしらである神である。男は頭にかぶり物をしないで祈りや預言をすべきだが、女は従順の象徴として頭にかぶり物をしなければならない。もしそうしなければ、自分の頭をはずかしめることになる。女にとってかぶり物をしないことは恥ずべきことである。「女が男に従属する」というテーマは創造のときにまでさかのぼる。そのとき女は男をもとにして、男のために造られた。これによって、かぶり物に関する命令がパウロの時代に限られていないことは明らかである。女は従属の象徴として——そして、見守っている御使いたちのためにも——かぶり物をすべきである。

男と女の相互依存 (11：11, 12)

男と女は相互に依存しているが、それぞれの立場は神の定めによるものである。

自然からの類推 (11：13—15)

自然が「女はかぶり物をすべきである」と教えている。男が長い髪をしていたら恥ずかしいことであると同様、女の長い髪は女の光栄である。

パウロの教えを実行すること (11：16)

使徒たちと諸集会の習慣は、女がかぶり物をするということであっ

た。

10. 主の晩餐 (11章17—34節)

主の晩餐の席での悪習 (11:17—22)

主題はここで、主の晩餐に関連して生じた悪習に移る。まず第1に、信者たちが集まるとき、彼らの間には分裂があった。第2に、彼らは「主の晩餐」と「普通の食事」とを混同していて、他人を待とうともせず先に食べはじめる者もいれば、空腹のまま放っておかれる者もあり、酒に酔っている者もいた。

主の晩餐の意味 (11:23—26)

主の晩餐の真の目的は、主の命令に従って、主が来られるまで主の御死を覚えることである。パンは、ささげられた主の「みからだ」を表し、杯は、流された主の御血を表している。

主の晩餐にあずかる前の反省 (11:27—34)

もし、ふさわしくないままで主の晩餐にあずかると、主のみからだと御血に対して罪を犯し、神のさばきを招くことになる。だから信者は、パンと杯にあずかる前に、自分をさばき、心に知れる罪をすべて始末すべきである。また、主の晩餐のために集まるときには互いに待ち合わせるべきであり、その席を祝宴や宴会騒ぎの場としてはならない。

11. 御霊の賜物と集会内での用い方 (12—14章)

12章から14章までには「御霊の賜物」、特に「預言と異言の賜物」というテーマが取り扱われている。

聖霊の基準 (12:1—3)

霊の現れには異なった形があることを信者は知っておくべきであ

る。すなわち、「悪霊の現れ」と「聖霊の現れ」がある。聖霊の真の基準は、「イエスは主である」と心から告白することである。

統一性の中の多様性（12：4—6）

御霊の賜物には様々な種類があるが、それらは3つの面で統一されている。すなわち、そのすべてが同じ御霊によって導かれる。そのすべてが同じ主に奉仕する。そのすべてが同じ神から発している。

「同じ御霊」の「異なった現れ」（12：7—11）

御霊の賜物の共通の目的は「集会全体の益」である（7）。その中には知恵のことば、知識のことば、信仰、いやし、奇跡、預言、霊を見分ける力、異言、異言を解き明かす力などがある（他の箇所には、これ以外の賜物も記されている）。御霊が、ご自分の主権に基づいて、これらの賜物を分け与えてくださる（8—11）。

人間のからだとの類似（12：12—20）

パウロは、御霊の働きの統一性と多様性を説明するために人間のからだを用いている。ひとつのからだに多くの部分（器官）があるのと同様、多くの（すべての）信者もバプテスマを受けてキリストのからだに連なり、すべての者が同じ御霊にあずかる。どのようなからだにも多くの器官が必要である。ある器官が別の器官をねたむとしたら、ばかげたことである。どの器官にも神から割り当てられた独自の働きがあるからである。ひとつの器官だけではからだにならない。多くの器官があって初めてからだとして機能するのである。

ひとは全体のために、全体はひとりのために（12：21—26）

他の器官から独立している器官はひとつもない。どの器官も必要である。実際、弱い器官ほどしばしば重要なものであり、それほど重要でないと思われる器官ほど特に大切にされなければならない。神は、

「協調性」と「相互のいたわり」があるようにと、魅力的な器官とそうでない器官を取り混ぜてからだをお造りになった。ひとつの器官に影響することは全体にも影響する。

信者にはそれぞれ異なった賜物がある（12：27—31）

キリスト者はキリストのからだを形成しており、ひとりひとりがその器官である。神はからだなる教会の中に様々な賜物を振り分けられたのであって、全員に同じ賜物をお与えになったのではない。地域集会は、その集会独自の必要に最も役立つ賜物を求めるべきである。「さらにまさる道」ということばは、「愛の章」と呼ばれる13章の導入部分となっている。

愛の卓越性（13：1—3）

賜物そのものよりもさらに大切なことは、愛をもってこれらの賜物を用いることである。愛は常に自分のことよりも他人のことを考える。それゆえ、愛はその賜物を他人の益のために用いる。これが12章31節の「さらにまさる道」である。

愛の特質（13：4—7）

愛をもって自分の賜物を活用する人は、キリストに似た性質によって特徴づけられる。たとえば、ここに列記されている寛容、親切、謙遜、礼儀正しさ、忍耐などである。

愛の永続性（13：8—11）

異言や預言や知識の賜物は、いずれ必ず終わりを迎えるが、愛は永遠である。パウロは11節で次のことを示唆しているのかもしれない。すなわち、自己顕示欲を満たしたり、人の注意を引いたりするために賜物を用いることは、玩具で遊ぶ子どものようなものだ。霊的に成熟した人は「子どものことをやめる」。

愛の偉大さ (13:12, 13)

いつの日か、「一部分しか」は「完全に」に道をゆずるようになる。ぼんやりと映っていたものが、はっきりと見えるようになる。しかし、愛は常に、キリスト者の美德の中で最もすぐれたものである。

預言は異言にまさる (14:1-5)

預言の賜物は、解き明かしのない異言にまさっている。預言は聞く人々の益になるからである。預言は自分たち自身のことばで話されるから、人々はそれを理解できる。異言は、解き明かしがないと、だれの徳も高めることができない。

明瞭なメッセージが集会を建て上げる (14:6-12)

もしメッセージを伝えようとするならば、明瞭で、明確で、理解できるものでなければならない。これは人間の言語にも、楽器の音にも、鳥や動物の鳴き声にも当てはまる。御霊の賜物が与えられるよう熱心に求めている集会は、徳を高めるこれらの賜物を願って求めるべきである。

理解されることの重要性 (14:13-20)

異言が人の徳を高めるのは、それが解き明かされるときだけである。異言によって祈ろうと、賛美しよう、祝福しよう、理解されるようにすべきである。そうでなければ、だれひとり「アーメン」と言うこともできなければ、徳を高められることもない (13-17)。だれにも理解されないことばで話すよりは理解されるほうがずっとよい (18, 19)。私たちは、異言を始めとした賜物を、子どもが玩具がんぐを使うようにして用いるべきではない。悪事に関してのみ、子どもの無邪気さや純真さを持つべきである (20)。

しるしとしての異言と預言（14：21，22）

神がイザヤの時代のイスラエルに対するしるしとして外国語（アッシリア語）を用いられたように、異言の賜物は不信者（神のことばを拒み、真理に心を閉ざした者たち）のためのしるしである。一方、預言は信者のためのしるしである。

預言は罪の自覚を生み出す（14：23—25）

解き明かされないままの異言は、福音を聞こうとしている未信者の心に罪の自覚をもたらすこともないが、預言の場合は話の内容が理解できるので、それを聞いた者の心に罪の自覚が生じる。

異言の賜物のための取り決め（14：26—28）

パウロは異言の賜物を用いる際の規則を定めている。そのメッセージによって徳が高められなければならない。1回の集会で話すことができるのは多くとも3人までで、しかも順番に話すべきであり、同時に話してはならない。そして、必ずそれを解き明かす者がいなければならない。

預言の賜物のための取り決め（14：29—33）

パウロは預言の賜物を用いる際の規則も定めている。どのような集会であろうと、1回の集会で話してよいのは2人か3人の預言者だけである。聞く者たちはその話を吟味すべきである。もし別の人に黙示が与えられたら、話をしている人は、自分の話を打ち切って、その人と交代すべきである。預言者たちは、教え、勧めるために、ひとりずつ順番に話すべきである。預言者は、まるで睡眠術にかかったかのように恍惚状態トランスに陥ったりすることなく、自分自身を制御しなければならない。

女は集会で黙っていなければならない（14：34—36）

女は集会の集まりでは黙っていなければならない。質問することすら許されない。これに異議を唱える者は次のように問われるべきである。「あなたがたが神のことばを造り出したのか？ あなたがたは神のことばを受け取ったにすぎないのではないか？」と。

パウロの教えは神の命令である (14:37, 38)

パウロは「すべての預言者および霊的な兄弟たちは、前述の教えが主の命令であることを認めるべきである」と述べている。

賜物は、バランスのとれた、秩序あるものとなるべきである

(14:39, 40)

パウロは、この箇所を締めくくるにあたって、預言がより有益なものとして好まれるべきこと、異言を禁じてはならないこと、すべてのことを適切に、秩序をもって行うべきことを繰り返し述べている。

12. 復活を否定する者たちへのパウロの回答 (15章)

15章に記されているパウロの回答は、実際にコリントの集会内にいた、復活を否定する者たちに対するものである。

復活と福音 (15:1-11)

キリストの復活は福音にとってきわめて重要なテーマである。旧約聖書には復活が預言されており、多くの「新約の証人」たちも復活の主を目撃した。パウロの使徒職は復活に基づいたものであったし、使徒たち全員が承認するものであった。

復活がなければキリスト信仰はない (15:12-19)

もし「からだの復活」がなければ、キリストも復活されなかったのであり、したがって、パウロの宣教も実質のないものとなり、私たちの信仰もむなしなものとなる。使徒たちは人をだましたのであり、罪

からの救いもない。信仰をもって死んだ人々は滅びたのであり、まだ生きている信者たちは、すべての人の中で最もあわれな者たちである。

キリストの復活は私たちの復活を保証する（15：20—22）

キリストが復活されたのはもちろん事実である。キリストの復活は、キリストにあって死んだすべての人のよみがえりを保証する。

復活の順番（15：23—28）

復活は3つのグループに分かれる。すなわち、初穂であるキリスト、キリストの再臨のときキリストに属している者、そして終わりのときの不信者たち。終わりのときには、すべての敵が主の足の下に置かれ、仲介者としてのキリストの働きは完成する。

復活のゆえに苦難は「経験するに値するもの」となる（15：29—32）

パウロは、「もし復活がなければ、キリストのために苦難や殉教を耐え忍ぶほど愚かになれるはずがないではないか」と問う。「殉教者たちの隊列を満たす」ためのバプテスマは意味のないものになるだろう。クリスチャンとしてのパウロの苦難は無益なものとなるだろう。気楽に楽しく暮らしたほうが賢明といえるだろう。

復活と道徳（15：33, 34）

復活に関する間違った教えは道徳に悪影響を与える。したがって、それを容認してはならない。もしこの世の生活がすべてならば、道徳などどうでもよい問題になってしまうだろう。

復活のからだの説明（15：35—41）

復活のからだは（生来のからだといくつかの共通点はあるものの）栄光に輝くものとなる。このことが様々な「違い」によって説明されている。すなわち、「種」と「種から生じる植物」、「人間の肉」と「他

の生き物の肉]、「地上のからだ」と「天上のからだ」、[太陽]と「月」と「星」の輝きの違いによって。

栄光ある復活のからだ（15：42—49）

信者のからだは朽ちない、栄光ある、強いからだ、すなわち、キリストのからだと同じ霊のからだになる。それは天での生活に適したものであり、生来のからだとは異なったものである。

復活と栄化（15：50—57）

主の再臨のとき、キリストにあって死んだ者はよみがえらされ、生きている信者は栄光の姿に変えられる。

報酬の約束（15：58）

信者は「主が来られるときに確かな報酬が与えられる」という確信を持つべきである。

13. 献金に関する教え（16章1—4節）

パウロは、エルサレムの貧しい聖徒たちへの献金に関して次のように指図している。すなわち、ささげ物は「計画性のある」「収入に応じた」ものであるべきで、土壇場で決めるようなものではないと。パウロは、その献金を集会によって選ばれた兄弟たちに届けさせるつもりだった。場合によっては彼もいっしょに行くことになるだろう。

14. パウロ個人の計画（16章5—9節）

エベソにいたパウロは次のような計画を書き記した。すなわち、海を渡ってマケドニアに行き、そこから南方のコリントに行き、もしかしたらそこで冬を越すかもしれないと。しかし、五旬節まではエベソに滞在するつもりだった。そこに働きのための広い門が開かれていたからである。

15. 結びの勧めとあいさつ (16章10—24節)

テモテとアポロに関する助言 (16:10—12)

パウロは「テモテが到着したら、彼を温かく迎えるように」と勧めた (10, 11)。パウロはアポロに、コリントに行くようにと強く勧めたが、アポロは (要するに) 「今すぐ行くつもりはないが、いずれ行くつもりではいる」と言った (12)。

最後の勧め (16:13—18)

一般的な勧めをいくつか書き記した後、パウロが聖徒たちに強く勧めたことは、「ステパナの家族を始め、熱心に奉仕している人たち全員に服従しなさい」ということだった (13—16)。パウロは3人の兄弟が来てくれたことによって元気づけられた。コリントの信者たちにはできなかったことを、彼らがパウロのためにしてくれたからである (17, 18)。

終わりのあいさつ (16:19—24)

パウロは、エペソにいる聖徒たちからのあいさつと彼自身のあいさつを書き記した後、「来たるべき主イエスを愛さない者はみなろわれよ」「主を愛する者全員に祝福と愛があるように」と付け加えて手紙を書き終えている。

コリント人への手紙 第二

はじめに

本書簡の背景

パウロは、先に書き送った手紙（特に「罪を犯している信者」の懲らしめに関する箇所）に対してコリントの信者たちがどのように反応したのか知りたいと切望していた。そこで、彼は、エペソを発ってトロアスへ向かい、そこでテトスに会おうとしたが、会えなかったので、海を渡ってマケドニヤへ行った。そこへテトスが良い知らせと悪い知らせを持ってやって来た。聖徒たちが罪を犯した者を処罰した結果、その者は霊的に立ち直った。これが良い知らせだった。しかし、彼らがエルサレムの貧しい聖徒たちに送るつもりでいた献金を彼らはまだ送っていなかった。これが悪い知らせだった。テトスは、「コリントではにせ教師たちの動きが活発で、彼らはパウロの評判を傷つけたり、キリストのしもべとしての彼の権威に異議を唱えたりしている」とも報告した。これもまた心の痛む知らせだった。

本書簡の概略と執筆年代

こうした事情のために、この手紙を書く必要が生じ、マケドニヤにおいて57年頃、執筆されたのである。この手紙は次のように大きく3つに区分できる。

- (1) パウロの任務に関する記述（1—7章）
- (2) エルサレムの貧しい聖徒たちへ、約束どおり献金を送るようという訴え（8，9章）
- (3) 自分の使徒職に関するパウロの弁明（10—13章）

本書の概要

1. パウロに最近起こった、死からの救出（1章1—11節）
2. コリントの除名問題に対するパウロの関心（1章12節—2章13節）
3. パウロ、新しい契約に関する自分の使命について説明する（2章14節—6章10節）
4. 愛を取り戻してほしいという、コリントの信者たちへのパウロの訴え（6章11節—7章16節）
5. 「エルサレムの貧しい聖徒たちへ、約束どおり献金を送るように」というパウロの訴え（8、9章）
6. パウロ、自らの権威を擁護する（10章1節—12章18節）
7. 結びの勧めと^{しゆくとう}祝祷（12章19節—13章13節）

1. パウロに最近起こった、死からの救出 （1章1—11節）

あいさつ（1：1，2）

パウロは「使徒」として自己紹介し（彼はこの事実に対して異議を唱えられていた！）、テモテを共同発信者としている。そして、コリントとアカヤ全土にいるすべての聖徒たちの上に恵みと平安があるようにと祈っている。

「神の慰め」を伝える（1：3—7）

パウロは、苦しみ悩むときに神が慰めを与えてくださることを感謝していた。それによって、試練の中にいる人々を慰めることができることを知っていたからである。パウロが経験した「キリストゆえの苦難」と、そこから生じた慰めは、キリストゆえに同じ苦難を経験している他の人々を慰め、励ますために、神があらかじめ備えられたものだった。

パウロ、死から救い出される（1：8—11）

パウロは、アジア州で経験した非常に激しい苦難を回想している。事態はあまりにも深刻だったので、彼は死を覚悟した。もはや死者をよみがえらせてくださる神にしか希望がなかった。しかし、主は彼を救い出してくださった。その結果、彼のために祈ったコリントの信者たちは、祈りが答えられたことを感謝することができた。

2. コリントの除名問題に対するパウロの関心 （1章12節—2章13節）

パウロの誠実さ（1：12—14）

パウロを批判する者たちの中には、彼が計画どおりコリントに来なかったことを指摘して、その不誠実と不正直を非難する者たちがいた。しかし、実際には、彼はコリントの信者たちに対していたって正直で、何ひとつ隠し立てなどしていなかった。主が来られるとき、パウロが彼らのことを誇るのと同様、彼らもパウロを誇ることができる。パウロは、彼らがこのことを悟るようにと望んだ。

パウロの信頼性（1：15—20）

パウロの当初の計画は、「まずコリントに行ってから北方のマケドニアに向かい、ユダヤに発つ前にもう1度コリントを訪れる」というものだった。けれども、実際にはエペソからトロアスへ行った。そこでテスに会えなかったので、訪問予定地からコリントを外し、直接マケドニアへ行ったのである。パウロは気まぐれな性格だったのだろうか。言うこととすることが一致しない、いいかげんな人間だったのだろうか。いや、決してそうではなかった。パウロが宣べ伝えた神の御子が信頼できるお方であるのと同様、彼も信頼できる人物だった！神の約束はキリストによってすべて成就されるのであり、パウロはそのようなお方のみもとへコリントの信者たちを導いたのである。

パウロがコリントへ行かなかった理由（1：21—24）

では、なぜ彼は計画どおりコリントを訪れなかったのか。それはコリントの信者たちに対する「思いやり」のためだった。パウロは彼らの信仰を支配する者ではなく、手助けする者にすぎなかった。彼らは神に対して責任があった。

パウロがコリントへ手紙を書いた理由（2：1—4）

パウロは、訪問する代わりに手紙を書こうと決心した。自分に喜びを与えてくれるはずの人々によって悲しい思いをさせられるような、つらい訪問を避けるためだった。彼は、この手紙によって望みどおりの結果が得られることを期待した。

罪を犯した者を赦すこと（2：5—11）

コリントの集会は、罪を犯していた兄弟を（おそらく、除名することによって）懲らしめた。その結果、彼は心から悔い改め、主のみもとに立ち返った。だから、コリントの信者たちは彼を赦し、再び交わりに受け入れるべきである。サタンが彼を絶望的な悲しみに引きずり込むことのないためである。

福音のために開かれた門（2：12, 13）

すでに述べたように、パウロはエペソを発ってトロアスへ向かったが、そこでは福音のためのすばらしい門戸が開かれていた。しかし、彼は、コリントに関する知らせを一刻も早くテトスから聞きたかったので、エーゲ海を渡ってマケドニヤに行った。

3. パウロ、新しい契約に関する自分の使命について説明する（2章14節—6章10節）

勝利の福音（2：14—16）

たったひとつの集会（コリント集会）に関する知らせを聞くために、みすみす伝道の機会を逃したことは、キリストを宣べ伝えるうえでは敗北のように見えたかもしれない。しかしパウロは、自分を導いてくださる主の御姿を心に描いていた。エーゲ海を渡ってマケドニヤへと、勝利のうちに導いてくださる姿を。主が行かれる所には常に（主のしもべたちをとおして）勝利がある。神にとって彼らは「キリストのかぐわしい香り」である。人々がそのメッセージを受け入れるか、拒むかにかかわりなく。

パウロの福音の純粹さ（2：17）

パウロはこの箇所を締めくくるに当たり、「私は（多くの人がしているように混ぜ物をすることによって）メッセージの質を落とすようなことはしない」と断言している。彼のメッセージは、キリストの御名によって語られた、神からのうそ偽りのないメッセージだった。

パウロの「生きた推薦状」（3：1—3）

コリントにやって来たにせ教師たちは、パウロが「キリストの真のしもべ」であることを否定していた。彼らは「パウロは推薦状を持って来るべきだ」と提案したのかもしれない。パウロの答えは、「コリントの信者たち自身が私の推薦状だ。彼らを主のみもとに導いたのは私なのだから」というものだった。彼らがパウロの「信任状」——神の聖霊によって人の心の板に書かれたキリストからの「親書」——だった。

福音のさらにすぐれた栄光（3：4—18）

パウロは「新しい契約に仕える資格や能力は、自分自身のうちにあるのではなく、神から与えられたものである」と主張した（4—6前半）。「新しい契約」に言及した後、彼は律法と福音を対比した。おそらく「ユダヤ主義者」であったにせ教師たちが、信者たちをモーセの

律法の下に置こうとしていたからだろう。「文字（律法）」は殺し、「御霊（福音）」は生かす。古い契約は「死の務め」であり、新しい契約は「御霊の務め」である。律法にも栄光はあったが、福音にはさらにすぐれた栄光がある。律法の栄光はつかの間の栄光にすぎなかったが、福音の栄光は永遠に続くものである。モーセは自分の顔におおいを掛けたが、キリスト者は顔を隠したりはしない。かつて栄光はモーセだけの顔にあったが、今や栄光はすべての信者のためのものである（6 後半—18）。

福音の輝かしい光（4：1—6）

パウロは引き続き自分の務めについて述べ、「私には福音をはっきり伝える義務がある」と説明した。彼は「真理をあいまいにするようなことは決してしない」と固く決心していた。真理がはっきり知られていないとすれば、それはサタンが、滅び行く人々の心におおいを掛けているからにはかならない！ メッセージ自体は明白で分かりやすいものであり、「キリスト・イエスが主である」とはっきり告げている。神が福音を私たちに啓示されたのは、私たちがそれを他の人々に伝えるためである。

「土の器」の中の宝（4：7—18）

パウロは、人間の「器」（福音メッセージはこの「器」にゆだねられたのである）が本来は弱々しいものでありながら、栄光に輝く運命にあることに驚嘆した。そのからだは土の器のようなものであり、絶えず攻撃にさらされているが、敗北することはない。日々死ぬことによって、イエスのいのちが他の人々に明らかにされる。復活という確かな望みに支えられている信者は、キリストに仕える際の試練が「他者への祝福」と「神への感謝」につながることを知っている。信者の「現在の状態」と「未来の状態」は鮮やかな対照をなしている。「外なる人」は衰えるが、「内なる人」は日々新たにされる。「軽い患難」は

一時的なものであるが、「重い栄光」は永遠のものである。見えるものは一時的であり、見えないものはいつまでも続く。

復活についての確信（5：1—10）

パウロは信者の輝かしい運命についてさらに考えつつ、「キリスト者が3つの状態のいずれかで存在すること」を説明する。第1は「この幕屋にあって」、つまり肉体（地上にいる間の私たちの現在の状態）にある状態である。第2は「裸の状態（脱いでいる状態）」、つまり肉体から分離した状態であり、そのとき霊とたましいはキリストのみもとに行き、肉体は墓に行く。第3は「着ている状態」、つまり栄光のからだを与えられた状態である。第1の状態は良く、第2の状態はさらに良く、第3の状態は最も良い。私たちが待ち望んでいるのは、脱ぐことではなく、贖われたからだを着ることである。神は私たちをこのような運命にお定めになり、その保証として聖霊をお与えになった。キリストとともに栄化されるという確信は、主に大いに喜ばれる者になりたいという願いを起こさせる。私たちは、キリストのさばきの座で、主から「よくやった」と言われることを願っている。

キリストの愛によって駆り立てられた奉仕（5：11—15）

和解の務めに励み続けるようパウロを駆り立てたものは「主を畏れる心」だった。彼の生活は神の目には明らかだったが、彼はそれが人の目にも明らかになるのを望んだ。自慢したかったのではなく、自分を批判する者たちへの答えをコリントの信者たちに教えたかったのである。彼らは「パウロは気が狂っている」と言った。パウロは、「気が狂ってようがいまいが、それは神の栄光のためであり、人のためである」と答えた。彼はもはや自分のために生きることができないほどキリストの愛に圧倒されていた。イエスが彼のために死なれた以上、彼はイエスのために生きなければならなかった。

すべてが新しい（5：16，17）

パウロは、この世の基準で人々を判断したり、キリストを「単なる人間」とか「この世の政治的なメシヤ」とかみなしたりすることができなくなった。キリストのうちには「新しい創造」がある。これは「古いものが過ぎ去って、すべてのものが新しくなった」という意味である。

和解の務め（5：18，19）

これらのことはすべて神から新たに与えられたものである。神は私たちをご自分と和解させ、和解の務めをゆだねたうえで私たちを送り出された。すなわち、神はキリストによって、この世をご自分と和解させてくださるのである。

和解のメッセージ（5：20—6：2）

次に和解のメッセージが記されている。パウロが罪人たちに宣べ伝えたことが、簡潔な言い回しで述べられている。パウロは自分のことを「キリストの使節」だと述べたうえで、神と和解するよう人々に勧めた。そして、「キリストがあなたがたの代わりに罪とされたのは、あなたがたがキリストにあって神の義となるためである」と告げた（20，21）。主イエスを信じる者には、神の御前に完全に義なる立場が与えられる。それは天国にふさわしい立場である。

6章の1，2節まで続くメッセージは、パウロが未信者に向かって説いたものである。まだ信じていない者は、神の恵みを拒むことなく、その勧めにすぐに応じるべきである。「今は救いの日」なのだから。

宣教の務めの特徴（6：3—10）

ここでパウロは「自分のメッセージ」から「自分自身の振る舞い」へと話題を変える。彼は、主のための働きがそしられないように生きた。それは厳しい苦難を伴う務めであり、キリスト者の美德を表す務

めであり、一見矛盾するかのように見える感情と経験を伴う務めだった。

4. 愛を取り戻してほしいという、コリントの信者たちへのパウロの訴え（6章11節—7章16節）

心を開くようにというパウロの懇願（6：11—13）

パウロはこれらのことをコリントの信者たちに率直に話した。パウロは彼らに心を開いていたし、彼らにも愛をもって応えてほしいと願った。

罪からの分離（6：14—18）

コリントの信者たちは不信者たちから遠ざかるべきだった（パウロは、自分の評判を傷つけていたにせ教師たちのことを念頭に置いていたのかもしれない）。道徳上、相対する「人」や「もの」の間に交わりなどあり得ない。人生で生じるあらゆる関係において悪から遠ざかる人に対し、神は「特に近くにおり、特に親しくする」と約束しておられる。

霊と肉をきよめること（7：1）

このような驚くべき約束（6：17, 18）を得ている私たちは、霊肉の汚れから自分自身をきよめるべきである。

コリントの信者たちに対するパウロの積極的な態度（7：2—4）

パウロはコリントの信者たちの愛の欠如を痛切に感じていた。パウロが彼らに不正を働いたことは1度もなかった。彼らを愛し、彼らを信頼し、彼らを誇りとしていた。

パウロの満ちあふれる喜び（7：5—7）

パウロはすでに、トロアスを発ってマケドニヤに渡ったときのことを述べたが(2:13)、ここで再びその話に戻る。彼はマケドニヤに着いてからも精神的に動揺していた。しかし、それも、テトスがコリントから良い知らせを持って来るまでのことだった。そのとき彼の喜びは満ちあふれた。

「良心の^{かしのく}呵責」ではなく「悔い改め」を(7:8-12)

彼らに手紙を書いた後、パウロは不安を抱いた。しかし、今や彼は、その手紙が彼らを一時的に悲しませたものの、その手紙によって、単なる「世の悲しみ」(良心の呵責)ではなく、敬虔な悔い改めがもたらされたことを知った。彼らは、罪を犯した者を懲らしめることによって、自分たちの潔白を証明したのである。

テトスの喜びと愛(7:13-16)

パウロは「コリントの聖徒たちがとった行動」によって慰められたばかりか、「彼らのことで示されたテトスの熱意」によっても励まされた。パウロはテトスにコリントの信者たちのことを誇ったが、今やその正しさが立証され、彼らへの信頼もむだにはならなかった。彼らに対するテトスの愛は、彼らが心から迎えてくれたことによりますます深まった。

5. 「エルサレムの貧しい聖徒たちへ、約束どおり献金を送るように」というパウロの訴え(8, 9章)

マケドニヤの信者たち、惜しみなくささげる(8:1-5)

パウロはコリントの信者たちに、「エルサレムの貧しい聖徒たちへ約束の支援金を送るように」と訴えなければならなかった。彼らはマケドニヤの諸集会の模範に倣うべきだった。マケドニヤの諸集会は、自ら進んで、犠牲を払い、惜しみなくささげたからである。マケドニヤの信者たちはまず自分自身を神にささげたうえで、その献金の取り

扱いをパウロにゆだねた。

無私の施しの模範であるキリスト（８：６—９）

パウロはテトスに「献金が行われるよう手はずを整えるように」と勧め、一方、コリントの信者たちには「『惜しめない施し』という美德を自分たちの徳目に加えるように」と勧めた。彼は律法主義的な態度で命令したのではなく、彼らの愛の真実を確かめるためにそうしたのである。彼はイエスの模範を彼らに示した。主は、他の者たちを富ませるためにご自身を貧しくしてくださった（８，９）。

「与えること」と「受けること」のバランス（８：１０—１５）

１年前、コリントの信者たちは、進んで施したいという意向を表明した。だから彼らは、自分たちが持ちたいと願っている物ではなく、すでに持っている物で施すべきである。どの集会にも財政上の負担をかけないで、困っている人々のもとへ献金が届けられたとしたら、それは理想的な姿である。

ユダヤの聖徒たちのための献金（８：１６—２４）

まもなくコリントへ遣わされようとしていたテトスは、その使命を立派に果たそうと意気込んでいた。パウロも、ふたりの兄弟（名前は記されていない）を、献金を取り扱う手伝いをさせるために、ともに送り出そうとしていた。複数の者が取り扱うことによって、人から非難されるのを避けるためである。これら３人の使者を大いに称賛した後、パウロは、コリントの聖徒たちに、彼らを温かく受け入れ、彼らの使命が無事に果たされるよう、献金を彼らに託してほしいと述べた。

献金の準備（９：１—５）

パウロは、他の聖徒たちを援助したいというコリントの信者たちの熱意を、マケドニヤの信者たちに誇っていた。いまコリントの信者た

ちは、エルサレムに送るために惜しみなくささげることによって、パウロの誇りが間違っていなかったことを証明すべきである。さもなければ、マケドニヤの信者たちがパウロといっしょにコリントに来て、何も準備できていないのを見たら、パウロはさまりの悪い思いをすることになる。だからパウロは3人の兄弟を送り出して献金の準備を完了させておくことにしたのである。

「キリスト者の施し」に関する諸原則（9：6—11）

6節から8節までには「キリスト者の施し」に関する大原則がいくつか記されている。収穫の量は、種をまく量に比例する。ささげ物は、いやいやながらではなく、強いられてでもなく、喜んですべきものである。惜しみなくささげる者になりたいと心から願う信者は、ささげるための財源に事欠くようなことはないし、永遠の報酬を刈り取ることになる。与えることによって、キリスト者はすべての点で豊かな者とされ、さらに惜しみなく与える者となれるのである。

「キリスト者の施し」の恵み深い結果（9：12—14）

「与えること」は、他者の必要を満たすばかりか、神のみもとにまで立ち上る感謝を生み出す。人々は、私たちの「従順」と「惜しみなく与える姿」を見て、神をあがめる。彼らはまた、私たちのために大いなる愛をもって神に祈る。

神の最大の贈り物（9：15）

神は最も偉大な与え主であり、御子は最大の贈り物である。私たちはどのようにして神に感謝すべきだろうか！

6. パウロ、自らの権威を擁護する (10章1節—12章18節)

最後の4章は、おもに彼の使徒職を擁護するために費やされている。

パウロの霊の戦い（10：1—6）

パウロを批判する者たちは「パウロは、面と向かっているときは臆病だが、そうでないときは強気で、世的な策略を用いている」と非難した。けれども、彼は、これら「中傷する者たち」に会ったとき、強気に振る舞うつもりでいたのである。彼はコリントの信者たちに、「私は霊の武器で戦い、人間的な考えや推論を打ち砕き、すべてのことをキリストの教えに照らして判断している」と断言した。彼らの従順が確信でき次第、パウロはにせ教師たちに立ち向かうつもりだった。

パウロの権威の真実性（10：7—11）

コリントの信者たちの中には、「自分たちだけがキリストの従者であり、パウロたちはそうではない」と主張する者たちがいたのかもしれない。パウロはキリストに属していただけでなく、「聖徒たちを（脅すのではなく）建て上げるための権威」を主から授けられていた。彼を批判する者たちは、「パウロが書いた手紙は力強いが、その話しぶりは『なっていない』（印象的ではなく、感動を与えない）」と想像していた。彼らはパウロに会ったときに真実を知るだろう！

パウロの権威の限界（10：12—18）

パウロを中傷する者たちは「パウロは他人と比べて劣っている」と言って非難した。彼は「彼らが自分たちの中で自分を比較し、いい気になってうぬぼれているのは愚かなことだ」と答えた。パウロは、神が自分に与えてくださった「奉仕の領域内」でのみ誇ろうと心に決めていた。そして、その領域内には当然コリントの信者たちも含まれていたのである。彼は常に「新たな土地」を切り開こうとした。彼は他人の働き領域内に侵入しようとはしなかった。彼の最大の目標は（「自分自身の推薦」ではなく）主に推薦されることだった。

使徒か、それとも「大使徒たち」か(11:1-6)

愚かにも誇っているかのように見えるパウロをコリントの聖徒たちがなぜ我慢すべきなのか、パウロはその理由を3つ挙げている。第1は、彼らの「霊の戦い」についてパウロが心の底から気遣っているからである。第2は、彼らがだまされ、キリストに対する献身の道からそらされないかとパウロが恐れているからである。第3は、以前、彼らにせ教師たちの話を進んで聞こうとしたことがあったからである。それなら、彼らが「愚かな自慢屋」の話を聞いて悪いはずがない。彼は「大使徒たち」に少しも劣ってはいない。訓練を受けた語り手ではなかったが、知識において欠けたところはなかった。

パウロの誇り(11:7-12)

パウロは、コリントにいたとき、そこの信者たちから経済的な援助を受けず、マケドニアの諸集会によって支えられていた。コリントの信者たちは、パウロがそうしていることは罪なのではないかと考えたのかもしれない。しかし、パウロは、彼らに経済的な負担をかけないことを誇りにしようと決心していたのである。それは彼らを愛していないからではなく、自分に敵対する者たちを黙らせるためであった。

「サタンの手下ども」(11:13-15)

「大使徒たち」とはにせ教師たちのことである。彼らは「人を欺く働き人」であり、「義のしもべ」であるキリストの使徒に変装していたのである。

パウロ、不本意ながら自慢する(11:16-21)

パウロは自慢するほど愚かではなかったが、たとえそうであったとしても、歓迎されるべきであった。主は誇るようなことはなさらなかったが、コリントの信者たちは他の者たちが誇るのを許した。だから、パウロも当然誇ってよいはずである。彼らは自分たちを虐待する者た

ちを我慢していたが、パウロはあまりにも「弱かった」ため、そのようなことはできなかった！

キリストのためにパウロが受けた苦難（11：22—33）

パウロには我慢できることがたくさんあった。血筋、奉仕、キリストのために受けた特別な苦難、諸集会への絶え間ない心遣い、ダマスコからの屈辱的な脱出など。

パウロが見たパラダイスの幻（12：1—6）

パウロが最後に誇ったものは「主の幻と啓示」についてであった。彼はパラダイスに引き上げられ、ことばでは言い表せないことを聞いたことを3人称で語った。「弱さ」を誇る時のパウロは自分自身のことを進んで話したが、この種の特別な経験を述べる際には、別の人物に起こったこととして述べようとした。実際には彼自身が経験したことなのだから、「ひとりの人を知っている」どころではなかったのである（1—5）。たとえ誇るのが当然だったとしても、彼はそれ以上誇るのを控えた。人から過大評価されたくなかったからである（6）。

パウロの「肉体のとげ」（12：7—10）

高慢にならないように、神は、サタンが何らかの（慢性的な）病でパウロを絶えず悩ますのをお許しになった。パウロはそれが取り除かれるよう3度も神に祈ったが、その祈りは聞かれず、代わりに主はそれに耐えるための恵みを約束された。パウロはその病を受け入れ、その病を誇りとした。「神の力は人間の弱さのうちに完全に現れる」ことを知ったからである。

パウロの使徒職のしるし（12：11—13）

パウロが誇る必要など本来なかったはずである。コリントの信者たち自身がパウロを推薦すべきであった。彼はあの「大使徒たち」に決

して劣ってはいなかった。彼は使徒としてあらゆる奇跡を行った。おもな違いは、彼らに経済的負担をかけなかったことである。しかし、これは許されて当然の「不正」である！

パウロの利他的な精神 (12: 14—18)

パウロはまもなくコリントを訪れようとしていたが、それは「受け取る」ためではなく「与える」ためだった。それまで彼や彼が遣わした者たちがしてきたように。

7. 結びの勧めと祝^{しゆくとう}禱 (12章19節—13章13節)

この書簡の目的 (12: 19—21)

この手紙は、「悲しい訪問ではなく、喜ばしい訪問になるよう、コリントの信者たちに準備させる」ことを目的として書かれた。

使徒の権威を携えての訪問 (13: 1—6)

パウロがやって来たときには、徹底的な調査が行われるだろう。彼は、罪を犯した者たちを厳しく処罰するだろう。コリントの信者たちは、パウロの使徒職の証拠を求める前に、まず自分自身を吟味すべきである。彼らを主に導いたのはパウロであった。キリストは「弱さ」のゆえに十字架につけられたが、彼らのうちで力強く働いておられた。同様に、パウロの宣教においても「弱さ」と「力」とが結びついていた。

パウロは穏やかに対処できることを望んだ (13: 7—10)

パウロの願いは、「私^{しつせき}があなたがたを築き上げることができるような行動をとってほしい。私が叱責しなければならぬような振る舞いはしてほしくない」というものだった。

あいさつと祝^{しゆくとう}禱 (13: 11—13)

パウロは、終わりのあいさつで、「行いを改め、私の忠告を心に留め、ひとつ心になり、平和を保ちなさい」と勧めた（訳注：英語欽定訳による）。そして、「主イエスの恵み、神の愛、聖霊の交わりがあなたがたとともにあるように」と祈った。これは、三位一体の神の名が並べられている（今日に至るまで）有名な「祝祷」である。

ガラテヤ人への手紙

はじめに

本書簡の背景

第1次および第2次伝道旅行の際、パウロは、小アジアの中央部にあるガラテヤ地方に諸集会を設立した。その後、にせ教師たちがエルサレムからこれらの集会にやって来た。彼らは、「救われ、きよめられるためには、信仰だけではなく、律法を守ることも必要だ」と教えた。彼らのメッセージは、キリスト信仰とユダヤ教、すなわち「恵み」と「律法」が混じり合ったものだった。彼らは、パウロが正真正銘の使徒であることも否定した。

本書簡の目的

こうした誤りに^{はんぱく}反駁するために、パウロは、非常に激しい語調でこの手紙を書いたのである。彼は、この手紙の中で、自分の「メッセージ」と「学び」の正しさを主張し、福音の偉大な真理を明らかにしている。その真理とは、「救いは律法を守ることによってではなく、キリストを信じる信仰をとおしてのみ与えられる恵みである」というものである。彼は律法の目的を説明した後、その下にとどまり続けたいと願うクリスチャンたちがいかに愚かであるかを指摘している。彼らがすべきことは、「律法主義」という危険を避け、キリスト者としての真の「自由」と「敬虔」の中に生きることであった。

執筆年代

この手紙は、エルサレム会議（使徒15章）以前の49年頃に書かれたものかもしれない。もしそうであれば、「テサロニケ人への手紙第一」

よりもさらに早い時期に書かれたことになる。聖書学者たちの中には、これより後の時期（52年から58年までの間のいつか）と考える者たちもいる。

本書簡の概要

1. 執筆の目的（1章1—10節）
2. パウロ、自らの使徒職を弁明する（1章11節—2章10節）
3. パウロ、ペテロを叱責する（2章11—21節）
4. 福音の偉大な真理（3章1—18節）
5. 律法の目的（3章19—29節）
6. 未成年と成年、すなわち奴隷と「(神の)子」（4章1—16節）
7. 「束縛」か「自由」か（4章17—31節）
8. 律法主義という危険（5章1—15節）
9. 敬虔に生きるための力（5章16—26節）
10. 実際的な勧め（6章1—10節）
11. 結び（6章11—18節）

1. 執筆の目的（1章1—10節）

あいさつ（1：1—5）

パウロがこの手紙を書き始めるに当たって主張したことは、「自分の使徒職は人間から出たことではなく、人間の手を通したことなく、イエス・キリストと父なる神から直接受けたものだ」ということだった。彼は、最初の数節の中で、キリストの「身代わりの死」と「復活」に言及している。まるで私たちの救いの根拠を強調するかのよう。

福音はただひとつ（1：6—10）

使徒パウロは、ガラテヤの信者たちが、ゆがめられた福音をいとも簡単に受け入れたことに驚いている。彼は、「神の恵みの福音とは違

う別の『福音』を宣べ伝える者の上には神ののろいが下る」と彼らに警告している。

2. パウロ、自らの使徒職を弁明する (1章11節—2章10節)

パウロの回心と召命(1:11—24)

パウロの回心と回心後の歩みについて記された短い記述を読むと次のことが分かる。すなわち、パウロが宣べ伝えた福音は主から直接啓示されたものであり、他の使徒たちをとおして得たものではないということが(もちろん、パウロの福音は、他の使徒たちが宣べ伝えたのと同じ福音だったが)。彼は、自分が熱心なユダヤ教徒であったこと、ダマスコへの途上で(メシヤとしての)イエスに回心したこと、その後、アラビヤに行き、またダマスコに戻ったことについて語っている。それから3年後、ようやくエルサレムに上り、ペテロのもとに滞在したが、それもわずか15日間だけのことだった。そこからシリアおよびキリキヤの地方に行った。ユダヤの諸集会には顔を知られていなかったにもかかわらず。

エルサレムでの「恵みの勝利」(2:1—10)

14年後、パウロとバルナバは、テトスという名の異邦人信者をアンテオケからエルサレムに連れて来た。それはエルサレムの指導者たちを試すためであった。すでにアンテオケに来ていたユダヤ主義者たちは、「救われるためには(『律法を守ること』の象徴としての)割礼が必要だ」と主張していた。パウロとバルナバは「『割礼』は『福音』の要素ではない」と主張し、エルサレムの指導者たちもそれに同意した。真の福音とは、ユダヤ人にとっても異邦人にとっても、「恵みにより、信仰をとおして与えられる救い」であり、律法を守ることとは全く無関係であった。

3. パウロ、ペテロを叱責する（2章11—21節）

その後、アンテオケに来たペテロは、「キリスト者の自由」という喜びに満たされながら、異邦人信者たちといっしょに食事をしていました。しかし、ある人々が、エルサレムにいるヤコブのもとからやって来ると、ペテロは異邦人信者たちと交わるのをやめた。自分の振る舞いがエルサレムに報告されるのを恐れたからである。バルナバさえもペテロと行動をとともにした。パウロはその偽善的な行為を福音の真理に対する攻撃と見た。「神の御前における異邦人信者たちの立場はまだ不完全なものだ」と言っているのと同じだったからである。パウロはペテロを公然と非難し、その言行不一致を責めた。ペテロが、「人は信仰によってのみ義とされる」と口では言いながら、まるで律法の行いも必要であるかのように行動したからである。ペテロは、キリストの死によって律法の下から救い出されたにもかかわらず、その律法の下にあと戻りしていたのである。パウロは、「もし義が律法を守ることによって得られるとすれば、キリストの死は無意味だったのだ」と指摘した。ペテロはこの叱責を快く受け入れたようである。後に、パウロのことを「私たちの愛する兄弟」（Ⅱペテロ3：15）と言っているからである。

4. 福音の偉大な真理（3章1—18節）

義と認められるのは信仰による（3：1—5）

パウロは、「救いは、律法を守ることによってではなく、信仰による」ということの証拠を3つ挙げている。第1の証拠は、ガラテヤの信者たち自身の経験である。彼らは、信仰によって新しく生まれたときに聖霊を受けたのであり、わざによって受けたのではなかった。わざによっては、救われることも、きよめられることもできなかったのである！

旧約聖書と信仰（3：6—14）

第2の証拠は旧約聖書の証言である。アブラハムは、律法によってではなく、信仰によって義と認められた（創世記15：6）。律法は、人を救うどころか、完全かつ継続的にそれを守らない者を全員のろうのである（申命記27：26）。ハバクク書2章4節は、「律法の要求は『信じること』ではなく『行うこと』である」と、はっきり教えている。パウロは、申命記21章23節をキリストに適用したうえで、「キリストは、私たちの代わりにのろわれた者となることによって、私たちを律法ののろいから贖い出してくださったのだ」と教えている。

変わることのない約束（3：15—18）

第3の証拠は、「人間どうしの契約でさえ神聖な義務を伴う」という事実に基づいている。その論旨は次のとおりである。創世記22章18節で、神は、「キリストによってすべての国民を祝福する」という無条件の約束をされた。だから、その430年後に登場した律法がその契約を変更できるわけがない。遺言に1度署名し、封印したら変更できないのと同じである。神の約束は律法に基づくものではなかった。それは信仰によって受け取るべき「恵みの契約」であった。

5. 律法の目的（3章19—29節）

律法の目的は、罪の本質が「違反」であることを明らかにすることであった。律法は、二者間の条件つき契約であったため、「仲介者」を必要とした。それはキリストが来られるときまでの一時的な養育係として意図されたものだった。しかし、今やキリストを信じる信仰が現れたので、信者は養育係の下を離れ、神の家族の中の「成人した子ども」として取り扱われる。人種差別や社会的地位、性別による差別は（神の御前における立場上は）キリストにあって消滅する。

6. 未成年と成年，すなわち奴隸と「(神の)子」 (4章1—16節)

神による相続人(4:1—7)

律法の下にあるイスラエルの民は、まだ成人していない子どもたち
のようであった(彼らは、まるで奴隸のように後見人や管理人たちに
こき使われた)。しかし、恵みの下にある信者は、成人した「あと取
り息子」として扱われる。彼らには相続人としてのすべての特権と責
任がある。

「束縛」と「いやしい身分」は信者のためのものではない

(4:8—11)

束縛されるだけにすぎない律法の下にもう1度戻りたいと願うこと
は、キリスト者にとって愚かなことである。パウロは、キリストを見
捨てて、宗教儀式に戻ろうとしている者たちのことを心配している。

律法主義によって失われた愛(4:12—16)

ガラテヤ人たちは、パウロが初めてやって来たとき、まるで御使い
かイエス・キリストご自身のようにして彼を受け入れた。しかし、律
法にこだわるにせ教師たちが来てから、彼らの態度は変わってしまっ
た。

7. 「束縛」か「自由」か(4章17—31節)

自分が導いた回心者たちに関するパウロの困惑(4:17—20)

これらユダヤ主義者たちは、ガラテヤの信者たちをパウロから引き
離すことに懸命だった。彼らに対する信者たちの反応はパウロを悩ま
せた。

「律法」と「恵み」が混じり合うことはない(4:21—31)

ここでパウロは、創世記にさかのぼってひとつの章からアブラハムの家庭の歴史を取り上げる。その章の内容は、律法主義が束縛であり、恵みとは相いれないものであることを明らかにしている。サラとイサクは「恵み」を表しており、ハガルとイシュマエルは「律法」を表している。ハガルが女奴隷であったように、律法も奴隷の状態を生み出す。イシュマエルがイサクを迫害したように、律法も恵みを迫害する。サラとハガルが同じ屋根の下で生きることができなかったように、恵みと律法も混じり合うことができない。イシュマエルが相続人になれなかったように、律法の下にある者たちも神の偉大な御救いを相続することができない。

8. 律法主義という危険（5章1—15節）

律法を守ることは自由を抑圧する（5：1—5）

信者は自由のうちにしっかりと立つべきである。キリストが信者を解放してくださったのは自由を得させるためであり、律法の下に置くためではなかったのだから。たとえ少しでも律法に頼るとすれば非常に罪深いことである。律法主義は「奴隷のくびき（束縛）」である。それはキリストを無益なものとする。それは、（律法全体を守るという）人間には不可能なわざを要求する。それは、義と認められるための唯一の望みであるキリストを見捨てることである。

律法主義という悪いパン種（5：6—12）

律法主義は全く役に立たない。それは真理にそむくものである。それは神の教えではない。それは、さらなる悪へと導くものである。それを教える者の上にはさばきをもたらされる。それは十字架のつまずきを取り除く。パウロは、ユダヤ主義者たちがガラテヤの信者たちと手を切ることを望んでいる。あるいは、「いっそのこと自ら去勢してしまえばよい」（新共同訳）と！

キリスト者の自由（5：13—15）

キリスト者の自由は、仕えるための自由であって、罪を犯すための自由ではない。批判したり争ったりするための自由ではなく、互いに愛し合うための自由である。

9. 敬虔に生きるための力（5章16—26節）

聖霊は、信者が敬虔に生きるための力である。もし御霊によって歩むなら、肉の欲望を満たすことはない。肉と御霊は絶えず争っているが、御霊は肉に打ち勝つ力を私たちに与えてくれる。「肉の行い」をしている者たちが御国を相続することはない。肉を十字架につけた者、つまり真の信者は、御霊の実をはっきりと示す。私たちは御霊によって生まれたのだから、御霊に導かれて歩むべきである。他人と張り合ってばかりいる律法主義者たちの「ねたみ」からは遠ざかるべきである。

10. 実際的な勧め（6章1—10節）

成熟した信者たちがすべきことは、あやまちに陥った人を正し、互いの問題を負い合い、みことばを教える人々を支え、すべての人（特にクリスチャンの交わりのうちにある人々）に善を行うことである。

11. 結び（6章11—18節）

律法主義者たちの誇り（6：11—14）

にせ教師たちの目的は、たくさんの支持者を得ることによって自分自身を誇示することであった。そうすることは簡単である。「自分自身の行いによって——ここでは割礼によって——神の恩寵おんちゆうが得られる」と人々に思わせればよいのだから。

パウロの誇り（6：15—17）

パウロが誇る根拠は、人の肉にはなく、キリストの十字架にあっ

た(15)。大事なのは割礼を受けているとかいないとかではなく、新しく創造されたという証拠である。「新しい創造」という「この基準」に従って歩む人々には、平安とあわれみが与えられる。パウロのからだには、主イエスが所有者であることを示す「焼き印」が残っていた。それは、迫害する者たちがつけた傷あとのことである。

恵みを求める祈り(6:18)

この手紙は、恵みを求める祈りで終わる。「恵み」は、パウロの福音を適切に特徴づけることばである。それは、さばかれて当然の者たちに無代価で与えられるすべてのものを意味している。

エペソ人への手紙

はじめに

コールリッジ（訳注：英国の詩人，批評家。1772—1834年）は，この手紙を「人間が書いたものの中で最も神々しい作品」と呼んだ。ウンガー（訳注：ドイツの文学史家。1876～1942年）は，「パウロの全書簡の中で最も崇高なものかもしれない」と述べた。

本書簡の概観

パウロは，この手紙で，からだなる教会に関する輝かしい真理を明らかにしている。その新しい共同体の中では，主を信じるユダヤ人と主を信じる異邦人はキリスト・イエスにあってひとつである。彼らは共同相続人であり，同じ交わりのうちにある者であり，キリストにあって神の約束にとともにあずかる者である。

本書簡の大要

前半の3章では，キリストにある信者の立場が明らかにされている。後半の3章では，その立場にふさわしい行いについて記されている。

本書簡の本来の受信人

昔の写本の中には，1章1節にある「エペソの」ということばが省略されたものがあるため，多くの人々は「この手紙は回状であり，エペソ集会だけでなく，その近辺のいくつかの諸集会へも宛てて書かれたものだ」と信じている。

本書簡の起源と執筆年代

この手紙は、パウロがローマで監禁されている間に書かれた4つの書簡（いわゆる「獄中書簡」）の中のひとつである。他の3つは、ピリピ人への手紙、コロサイ人への手紙、プレモンへの手紙である。本書簡は62年頃に書かれた。

本書簡の概要

1. あいさつ（1章1, 2節）
2. パウロ、恵みの祝福のゆえに神をほめたたえる（1章3—14節）
3. 聖徒たちのためのパウロの感謝と祈り（1章15—23節）
4. 異邦人とユダヤ人の救いにおいて明らかにされた神の力（2章1—10節）
5. 主を信じるユダヤ人と異邦人、キリストにあってひとつとなる（2章11—22節）
6. からだなる教会の奥義に関する補足説明（3章1—13節）
7. 聖徒たちのためのパウロの祈り（3章14—19節）
8. 神に対するパウロの賛美（3章20, 21節）
9. 召しにふさわしく歩むようにとの勧め（4章1節—6章9節）
10. キリスト者の戦いに関する勧め（6章10—20節）
11. パウロの個人的なあいさつ（6章21—24節）

1. あいさつ（1章1, 2節）

パウロがこの手紙を書き始めるに当たって用いた自己紹介の内容は「神によって任命された使徒」である。彼は、「キリスト・イエスにある忠実な聖徒たち」（これは真の信者全員にふさわしい表現である）に手紙を書いていたのである。（だれかが言ったとおり）彼のあいさつは、「取るに足りない者への恵みを、不安な者への平安を」表明している。

2. パウロ、恵みの祝福のゆえに神をほめたたえる (1章3—14節)

この手紙は神への賛美をもって始まっている。神は「キリストにおいて、天にあるすべての霊的祝福をもって」ご自分の民を豊かに富ませてくださった。これは、この地上における物質的な祝福のことではなく、キリストのうちに見いだされる霊的な祝福のことである。これらの祝福には、「私たちが永遠の昔から『聖く、傷のない者』として選ばれていたこと」、「私たちが『(神の)子』となることが、あらかじめ定められていたこと」、「私たちがキリストの血によって贖われ、赦されたこと」も含まれる(3—7)。また神は、(ずっと秘密にされてきた)ご計画を私たちに啓示してくださった。その計画とは、「天にあるものも地にあるものも、いっさいのものが、キリストにあって」成就し、完成し、実現するということである(8—10)。主を信じるユダヤ人たちは、キリストとひとつにされたことに基づいて、この壮大な神のご計画にあずかっている(11, 12)。異邦人信者たちも、この啓示された神の「みこころの奥義」にあずかっている。なぜなら、彼らは、福音を聞き、主イエスを信じ、「聖霊をもって証印を押された」からである。聖霊は、「すべての信者が相続分を完全に受け継ぐ」ことの保証である(13, 14)。

3. 聖徒たちのためのパウロの感謝と祈り (1章15—23節)

パウロは、聖徒たちの信仰と愛を神に感謝した後、「彼らが霊的な理解力を持つように」と祈っている。それは、彼らが、「永遠の栄光という望み」や「キリストが聖徒たちのうちに持っておられる豊かな宝」(訳注：英語欽定訳)、「神が目的を達成するためにお用いになる力」を正しく評価するためである。その力によって、イエスは死者の中からよみがえり、神の右の座にお着きになり、すべてを支配する権威を

手にされ、からだなる教会のかしらとなられたのである。

4. 異邦人とユダヤ人の救いにおいて明らかにされた神の力（2章1—10節）

「神の恵み」というトロフィー（2：1—7）

私たちの主を死からよみがえらせたのと同じ力によって、異邦人とユダヤ人はいのちを与えられたのである。異邦人は、靈的に死に、墮落した、極悪非道の、不従順な者たちだった。ユダヤ人は、肉の欲に生き、不道徳で、有罪の判決を受けた者たちだった（1—3）。神は、その大きなあわれみによって私たちを生かし、よみがえらせ、天の場所に座らせてくださった。私たちは、ある注解者のことばどおり、「神の恵みを永遠にあかす者」となるのである（4—7）。

分かりやすい福音（2：8—10）

私たちは、「恵みのゆえに、信仰によって」救われるのであり、行いによって救われるのではない。救いは神からの賜物であり、したがって私たちが誇れる余地などない。私たちは良い行いによって救われるのではなく、良い行いをするために救われるのである。つまり、良い行いは、私たちが救われた結果、当然期待されるものなのである。

5. 主を信じるユダヤ人と異邦人、キリストにあってひとつとなる（2章11—22節）

キリストの血によって近い者とされた（2：11—13）

主を信じるユダヤ人と異邦人はキリストにあってひとつとなり、以前あったすべての区別は廃止される。これは、この時代における神のご計画に関するひとつの特徴である。たとえば、かつて異邦人は軽蔑され、キリストから離れ、イスラエルの国から除外され、神の契約については他国人であり、何の望みもなく、神もない者たちであった（11, 12）。けれども、今は「キリスト・イエスの中にあることにより、

キリストの血によって近い者とされた」のである (13)。

キリストこそ私たちの平和 (2 : 14—18)

律法はユダヤ人と異邦人との間に障壁と区別を設けたが、それらはキリストのみわざによって取り除かれた。今や両者は「キリストにおいて新しいひとりの人」になった。その結果、昔からの敵意は葬り去られ、平和がもたらされた。キリストこそ私たちの平和であり、平和を実現されたお方である。そして、キリストは来られて、平和を宣べられた。主を信じるユダヤ人も異邦人も、「このキリストによって、……御霊において」神のみもとに近づくのである。

神の御住まい (2 : 19—22)

主を信じる異邦人は、もはや「のけ者」ではなく、神の民であり、神の家族であり、神の御住まいの一部である。

6. からだなる教会の奥義に関する補足説明 (3章1—13節)

啓示された奥義 (3 : 1—7)

神はすでに「からだなる教会の奥義」に関する特別な啓示をパウロにお与えになっていた。この真理は以前には知られていなかったが、今や使徒たちと新約の預言者たちに啓示されたのである。その真理とは、「主を信じる異邦人も共同相続人であり、同じからだの部分であり、福音に約束されたすべての事柄にとともにあずかる者である」というものである。パウロは、同胞だけでなく、異邦人にも仕える者とされたが、彼はそれを「神の大きな恵みのみわざ」とみなした。

奥義の目的 (3 : 8—13)

パウロの偉大な使命は、キリストの福音を異邦人に宣べ伝えることであり、からだなる教会の輝かしい真理をすべての人に教えることで

あった(8, 9)。この奥義に関する神の当面の目的のひとつは、神の豊かな知恵を天の御使いたちに示すことである(10, 11)。もうひとつの目的は、すべての信者が、祈りをとおして、いつでも神の御前に、大胆に、確信をもって近づく特権を持つことができることである(12)。自分の働きの尊さと、それから生じるすばらしい結果を考えて、パウロは「聖徒たちが入獄中の自分のことを思って落胆しないように」と願った(13)。

7. 聖徒たちのためのパウロの祈り(3章14—19節)

再びパウロは聖徒たちのために祈る。彼は御父に次のように祈っている。「彼らが霊的に強められるように」、「彼らがキリストの内住を楽しむように」、「彼らが愛のうちに建て上げられるように」、「奥義の広さ、長さ、高さ、深さを理解できるように」、「人知をはるかに超えたキリストの愛を知ることができるように」、また、「神ご自身の満ち満ちた状態にまで彼らが満たされるように」と。パウロの願いは、その祈りが神の栄光の豊かさに従って答えられることであった(16)。彼の祈りに「けちな了見」は何ひとつなかった。

8. 神に対するパウロの賛美(3章20, 21節)

祈りは「頌栄」^{しょうえい}をもって終わる。人間の願いや思いをはるかに超えて豊かに働いてくださる神の力を賛美している。そして、教会により、また、教会のかしらであるキリストによって、永遠の栄光を神に帰している。

9. 召しにふさわしく歩むようにとの勧め (4章1節—6章9節)

本書簡の前半では、身分、教理、立場、啓発といったテーマが取り扱われていた。後半では、実践、義務、状態、勧告といったテーマが取り上げられている。

キリスト者がひとつに結ばれて生きる（４：１—６）

パウロはまず、信者が一致を保つようにと勧めている。聖徒は、３章までに述べられた崇高な召しにふさわしく歩むべきである。そのためのひとつの方法は、いつも和合して暮らすことである。信者に共通する７つの事柄（４—６）によって、すべての信者がひとつに結ばれていることを思い出すべきである。信者は謙遜、^{けんそん}柔和、寛容、忍耐をもって御霊の一致を保つべきである。

霊の賜物によって、からだなる教会を建て上げる（４：７—１６）

次にパウロが述べたことは、「キリストのからだに属するひとりひとりに役割を与える」という神のご計画についてである。どの信者にも賜物とそれを用いる能力が与えられているが、その一方で、よみがえられたキリストは、からだなる教会の成長のために、ある特別な奉仕をさせるための賜物——使徒、預言者、伝道者、牧者、教者——もお与えになった。これらの賜物の（大半の）目的は、すべての聖徒たちを整え、強め、神への奉仕をさせることであり、そのようにしてキリストのからだを建て上げ、ついにはからだなる教会が完全な成熟に達し、キリストのご性質に完全に似たものとなることである。もし聖徒たちが各自の賜物を積極的に用いることを怠れば、彼らは成熟することなく、不安定で、だまされやすい者となる。「からだ」の各部分がそれぞれの役割を果たし、愛のうちに真理を保つならば、それぞれがあらゆる点において成熟した者となる。

新しい人を着ること（４：１７—３２）

信者は、古い異教的な生き方を捨てるべきである。それは無目的で盲目的な生き方であり、不敬虔で、無恥で、したいほうだいのことをする、卑劣で^{どんよく}貪欲な生き方である（１７—１９）。キリストによって教えられたキリスト者の生活に要求されるものは、「墮落した古い生き方

を捨て去ること」、「心の霊が新しくされること」、「義と聖潔において『新しい人』が示されること」である（20—24）。信者は、自分のうちに生じた変化を生活の中で示すべきである。うそをつくのをやめて真実を語り、罪深い怒りではなく正義の怒りを発し、盗むのではなく与え、低俗な会話ではなく人の徳を養う話をし、短気で怒りっぽい人から心の優しい人になることによって（25—32）。

愛と光の生き方（5：1—14）

信者は神に倣うべきである。キリストが私たちを——大きな犠牲を払って——愛されたように、互いに愛し合うべきである（1，2）。また、いかなる形の性的不道徳や扇情的な話からも遠ざかるべきである。不品行な者は神の御国を相続することができず、神の怒りを招くことになるのを忘れてはならない（3—6）。神の民はこのような者たちの仲間になってはならない。聖徒たちの特質は、以前は道徳的、霊的な「暗やみ」であった。しかし、今は「光」である。だから、光の子として歩み、善意、正義、真実といった特質を示すべきである（7—10）。実を結ばない、恥ずべき暗やみのわざを非難すべきである。光の生活することによって暗やみのわざを明るみに出し、そうすることによって、霊的に死んで眠っている者たちをキリストの光のもとに連れて来るべきである（11—14）。

賢明に歩むこと（5：15—21）

信者は、与えられた時間を最大限に活用することによって、（愚かな者のようではなく）賢い者のように生きるべきである。また、自分の意志に従うような愚かなことはせず、神のみこころを見いだし、そのみこころを行うべきである。酒に酔うことなく、絶えず御霊に満たされるべきである。そうすれば、人の徳を高める話をし、主に喜ばれる礼拝をささげ、絶えず感謝をささげ、主を畏れ尊ぶ心をもって互いに従うことができる。

自分の夫に対する妻の従順（５：22—24）

キリスト者の家で服従が示されるべき特定の領域が3つある。第1に、妻は夫に従うべきである。キリストがからだなる教会のかしらであるように、夫は妻のかしらだからである。教会がキリストに従うのと同様、妻は夫に従うべきである。

自分の妻に対する夫の愛（５：25—33）

しかし、このことは、「夫は、キリストが教会を愛されたように、自分の妻を愛すべきである」という高い標準によって釣り合いが保たれている。ある学び手はかつて次のように語った。「妻を愛している男は何人か知っているが、この標準に達するまで妻を愛している男はひとりも知らない」と。

キリストは、かつて、その自己犠牲によってご自分の愛を明らかにされた。現在は、きよめのみわざによって、その愛を示しておられる。その愛によって、やがて教会は、しみひとつない美と栄光のうちにキリストの前に立つ。「キリストと教会の関係」と「夫と妻の関係」との間にはすばらしい類似点がある。キリストと（その器官である）信者たちとがひとつのからだであるように、夫と妻も一心同体である。妻を愛することで、夫は自分自身を愛しているのである。夫を敬うことで、妻は自分のかしらに従っているのである。

両親に対する子どもの服従（６：1—3）

服従するよう命じられている2番目の領域は、親に対する子どもの場合である。子どもは親に従わなければならない。なぜなら、それは正しいことだから。それは聖書に基づくものであり、子ども自身にとって最も益になることであり、地上での長寿を促進するものである。

父親による忍耐強い訓練（６：4）

父親のほうも、子どもを怒らせてはならない。子どもたちが主を愛し、主に従うように育てるべきである。

自分の主人に対する奴隷の服従（6：5—8）

服従が求められる3番目の領域は、主人に対する奴隷の場合である。信者である奴隷は従順であるべきであり、主人を敬い、誠実に仕えるべきである。彼らは、ちょうどキリストに仕えているかのようにして働くべきである。すべての奉仕を神聖なものとし、神の報酬を確信しつつ、喜んで勤勉に仕えるべきである。奉仕に関するこれらの原則は、今日における雇用関係にも当てはまる。

奴隷に対する主人の優しさ（6：9）

主人のほうも、奴隷たちに親切にすべきである。彼らを脅すようなことがあってはならない。自分たちも「奴隷」であり、自分たちの「主人」が公平なお方であることを忘れてはならない。

10. キリスト者の戦いに関する勧め（6章10—20節）

神のすべての武具（6：10—17）

キリストの兵士としての信者に必要なのは神の力と神の武具である。それはサタンに立ち向かい、サタンと闘い、その攻撃に抵抗し続けるためである（10—13）。この武具は防具であり、「清廉潔白なキリスト者の品性」によってもたらされる。個々の意味は以下のとおりである。「帯」——神の真理に対して正直かつ忠実であること。「胸当て」——実生活において清廉潔白であること。「はきもの」——平和の福音を携えていつでも出かけられる態勢。「大盾」——主と主のみことばに対する全幅の信頼。「かぶと」——勝利を信じて疑わない確信。「御霊の与える剣」——神のみことば（14—17）。

秘密兵器——祈り（6：18—20）

キリストの兵士は祈りという場において敵と向かい合う。パウロは祈りについて次のように主張している。すなわち、「聖霊に導かれて絶えず祈るべきであり、油断することなく、(自分自身も含め)すべての聖徒のために、辛抱強く祈るべきだ」と。この手紙の読者たちは、パウロが福音を流暢かつ大胆に宣べ伝えることができるように祈るべきであった。パウロは仲間の信者たちの「祈りの援護」を求めた。彼は自己を過信することなく、主の力と守りが自分に必要なことを知っていた。

11. パウロの個人的なあいさつ (6章21—24節)

手紙はパウロからの個人的なあいさつで終わる。彼はすでにテキコを遣わしていた。パウロ自身の様子を知らせ、聖徒たちを励ますためである。パウロは、「聖徒たちの上に、平安と、信仰に伴う愛と、(パウロの太鼓判とも言える)恵みがあるように」と祈っている。

ピリピ人への手紙

はじめに

本書簡の背景

ピリピの集会は、パウロの第2次伝道旅行の際に設立された、ヨーロッパにおける最初の（キリスト者の）集会である。テアテラ市の紫布の商人、ルデヤが最初の回心者であった。パウロがある若い女から悪霊を追い出すと、彼女の主人たちはひどく立腹し、パウロとシラスを訴えた。その結果、彼らは捕らえられ、むち打たれ、牢に入れられた。その夜、彼らを見張っていた看守とその家族が回心し、集会に加えられた。その地方の長官たちは、ローマ市民であるパウロたちを虐待してしまったことに気づき、「町から立ち去ってほしい」と頼んだ。その後、しばらく経ってから、これら宣教者たちはテサロニケに向けて出発した。ピリピにおける自分たちの使命は終わったと感じたからである。

執筆年代

パウロは第3次伝道旅行の際にピリピを2度訪れた（使徒20：6）。その地の集会に宛てたこの手紙は、おそらく61年頃、彼の最初のローマ幽閉期間中（使徒28：30, 31）に書かれたものだろう。当時、彼はローマの監視下において一種の自宅軟禁状態におかれていた。

本書簡の概観

パウロはすでにエパフロデトからピリピの信者たちの贈り物を受け取っていた。このように、彼らが主の働きを實際面で援助したことに對して、パウロは感謝の手紙を書いたのである。キーワードは「喜び」

で、動詞も含めると約17回も用いられている。クリスチャンは、本来、周囲の状況とは無関係に喜ぶことができるものである。

本書簡の概要

1. パウロのあいさつ、称賛、祈り（1章1—11節）
2. パウロの投獄とその後の見通し、忍耐の勧め（1章12—30節）
3. キリストのへりくだりと自己犠牲を模範とした一致の勧め（2章1—16節）
4. パウロ、テモテ、エパフロデトを模範とした一致の勧め（2章17—30節）
5. にせ教師たちに対する警告（3章1—3節）
6. 先祖から受け継いだものと自分が達成したものをキリストのために捨て去ったパウロ（3章4—16節）
7. パウロのように天国にふさわしく歩めという勧め（3章17—21節）
8. 一致、協力、喜び、寛容、よく祈ること、正しい考え方をすることの勧め（4章1—9節）
9. 聖徒たちからの援助金に対するパウロの感謝（4章10—20節）
10. 結びのあいさつ（4章21—23節）

1. パウロのあいさつ、称賛、祈り（1章1—11節）

ピリピの信者たちに対するパウロのあいさつ（1：1，2）

あいさつの中で気づくことは、「パウロの愛弟子テモテが共同発信人であること」、そして、「ふたりともキリスト・イエスのしもべであること」である（ピリピにはパウロの使徒職きとくに異議を唱える者はいなかったもので、彼はこの手紙ではそのことに言及していない）。また、新約時代の集会が聖徒たちと監督（長老）たちと執事たちによって構成されていることにも気づく。パウロ独特のあいさつのことばである「恵みと平安」は、ギリシャ語とヘブル語双方の祝福のことばを結び

つけたものである。パウロは、これらの祝福の源として、主イエスと父なる神の双方に言及している。そうすることによって、御父と御子が等しいことを強調しているのである。

ピリピの信者たちに対するパウロの称賛（1：3—8）

パウロは常にできる限り相手をほめようとした。ここでも、ピリピの信者たちのことを神に感謝している。彼らが祈りと（犠牲を払ったうえで）贈り物によって自分を支えてきてくれたからである。神は、主の再臨のときまで彼らを成長させることによって、彼らのうちに始められた良い働きを完成される。パウロはピリピの信者たちに強い愛情を感じている。投獄されているときも、福音を弁明し立証しているときも、彼らが自分と同じ恵みにあずかっていることを知っているからである。彼は主イエス・キリストのすべての愛をもって彼らを慕っていた。

ピリピの信者たちのためのパウロの祈り（1：9—11）

称賛はここで祈りに変わる。その祈りは次のようなものである。「彼らの愛が理解力のあるものとなり、真にすぐれたものを見分けることができるように」。「彼らが純真で非難されるところのない者となるように」。「彼らがキリストに似た者となり、その実を示すことができるように」。

2. パウロの投獄とその後の見通し、忍耐の勧め （1章12—30節）

キリストを宣べ伝えること（1：12—18）

さて、ここで一言説明が加えられている。パウロの投獄は福音にとって敗北とはならず、勝利をもたらした。（ローマ皇帝の）親衛隊の隊員たちが「良い知らせ」を聞いたからであり、また、キリストにある兄弟たちが、ますます勇気をもってそのメッセージを宣べ伝えるよ

うになったからである。確かに、ある者たちの動機は疑わしかったが、それでもパウロは、福音が前進しているのを喜ぶことができた。大切なことはキリストが宣べ伝えられることだったのである。

生きるにしても、死ぬにしてもキリストのため（1：19—26）

パウロはやがてまもなく自分が解放されることを確信していたが、その結果が「生」と「死」のどちらであろうと、彼にとっては全く問題ではなかった。「生きること」であれば、聖徒たちの間でさらに豊かな実を結ぶ働きができるからである。「死ぬこと」であれば、キリストとともにいられるからであり、しかも、そのほうがはるかにまさっているからである。

キリストのために戦い、苦しむこと（1：27—30）

パウロは、自分自身が投獄されていたにもかかわらず、ピリピの信者たちのことを心配し、彼らが福音にふさわしく歩み、迫害に勇敢に耐えているかどうか気遣っていた。

3. キリストのへりくだりと自己犠牲を模範とした一致の勧め（2章1—16節）

けんそん謙遜による一致（2：1—4）

ピリピ集会の中には、性格の違いに端を発した争いが起こっていた（4：2）。そこで、パウロは、「一致」と「愛」、「自分よりも他人を優先させ、自分以上に他人を重視すること」を勧めた。

低くされ、高く上げられたキリスト（2：5—11）

聖徒はキリストの態度や物の見方、考え方を見習うべきである。キリストは、神であられるお方なのに、自ら進んで天から下り、しもべとして、本当の「人間」としてこの世界に來られた。そして、ご自分を卑しくされ、他の者たちのために死なれ、しかも十字架につけられ

て死なれた。この「ご自分を無にされた」ことのゆえに、神はキリストを高く引き上げられた。そして、万物が（遅かれ早かれ）ほめたたえなければならぬ御名をお与えになった。

暗い世界における光の担い手（2：12—16）

問題（性格の違いに端を発した争い）を明確に提示し、その解決策（キリストの心）を教えた後、パウロは彼らに「解決された状態」（救い）を達成するようにと勧めている。彼は、神がそのための願いと能力を与えてくださることを保証している（12, 13）。彼らはずぶやいたり、疑ったりすべきではなく、暗い世の光として輝くべきである。そうすることによって、自分たちの救いを達成することができるのである。もし彼らがいのちのことばをしっかりと握っているなら、パウロは、キリストのさばきの座で喜ぶことだろう（14—16）。

4. パウロ、テモテ、エパフロデトを模範とした一致の勧め（2章17—30節）

パウロの模範（2：17, 18）

パウロは、キリストの心を持っていた3人のキリスト者の模範を2章の後半に記している。彼らは、自分よりも他人をすぐれた者とみなし、自ら進んでへりくだった。

パウロは、自分のいのちよりも（礼拝者としての）ピリピの信者たちのいのちのほうが大切だと考えた。彼らがしていたことは、主にささげる驚くべき犠牲の供え物のようであったからである。パウロは彼らのためなら、単なる「注ぎの供え物」になったとしても（すなわち殉教したとしても）満足だった。

テモテの模範（2：19—24）

テモテはピリピの信者たちのことを心から心配していたし、自分自身のことよりもキリストのことをまず第1に考えていた。パウロはピ

リピの聖徒たちの世話をさせるためにテモテを遣わすつもりだった。パウロ自身も近いうちにピリピに行くことを望んでいた。

エパフロデトの模範（2：25—30）

エパフロデトは、ピリピからローマへの長旅の結果、死ぬほどの病気になる。けれども、その病気以上に彼を悩ませたのは、そのことがピリピの聖徒たちに伝わったということであった。エパフロデトは彼らがそれを自分たちのせいにはしないようにと願った。エパフロデトがこの手紙を携えて帰ってきたら、ピリピの信者たちは心から彼を迎え、彼に敬意を払うべきだった。彼は自分のいのちを危険にさらしただけでなく、彼らに代わってパウロに贈り物を届けてくれた人物だったからである。

2章のキーワードは「他の人」（3，4，20）である。キリストは、自ら発する光でさんぜんとして輝く太陽のようなお方であり、ここに記された3人の従者たちは、その光を反射する月のような存在である。

5. にせ教師たちに対する警告（3章1—3節）

「喜ばなさい」と励ました後、パウロは、ユダヤ主義者たちを警戒するようピリピの信者たちに告げている。パウロは彼らを「犬」、「悪い働き人」、「肉体だけの割礼の者（この単語の原語は『割礼』の類義語である）」と呼んでいる。反対に、真の信者とは、御霊によって礼拝し、自分の肉ではなくキリストを誇る者たちのことである。

6. 先祖から受け継いだものと自分が達成したものをキリストのために捨て去ったパウロ（3章4—16節）

自然な流れの中で、パウロは、もし自分が誇ろうと思えば誇ることができた人間的な長所を列記した。すなわち、出生、血筋、正統派的信仰、熱意、律法による義を（4—6）。しかし、彼は、キリストを得るためにこれらのものを捨て去り、忘れ、価値のないものとみなし

た。彼は、たとえどれほどの犠牲を払おうとも、力と、苦しみと、死と、よみがえりにおいてキリストとひとつになりたいと願った。パウロは人生を（運動競技における）競争と見なし、賞を得るためにゴールに向かって邁進した。彼は、キリストから与えられた使命を果たそうと堅く決心していた。靈的に十分成長した人は、このような考え方をするものである。神は、教えてほしいと願う者を決して失望させられることはない。もしこれと違った考え方をする者がいたら、神は必ずそのことも明らかにしてくださる。それまで、各自は、すでに達している基準に従って、それに恥じない行動をすべきである（7—16）。

7. パウロのように天国にふさわしく歩めという勧め （3章17—21節）

対比されたふたつの道（3：17—19）

ユダヤ主義者たちの手本とは異なり、パウロの手本は見習う価値があった。宗教的詐欺師たちは、キリストの十字架とそれが意味するもののすべてを嫌悪した。彼らは金もうけのために説教し、自分たちの恥ずべき振る舞いを誇り、この世のことにのみ注意を払っていた。

天にある私たちの国籍（3：20, 21）

信者の国籍は天にあり、したがって信者の関心も天的なものである。信者は、「救い主が来られること」と「救い主の御力によって栄化されたからだ」を今か今かと待ち望んでいる。

8. 一致、協力、喜び、寛容、よく祈ること、正しい考え方をすることの勧め（4章1—9節）

次にパウロはピリピの信者たちに様々な訴えをしている。すなわち、信仰に堅く立つこと、争っているふたりの姉妹が和解すること、いつも喜んでいること、互いに寛容であること、祈りと感謝によって思い煩いから解放されること、純粋で前向きな考え方をすること、パ

ウロを模範とし、その教えに従うことを。

9. 聖徒たちからの援助金に対するパウロの感謝 (4章10—20節)

次にパウロは、ピリピの聖徒たちがエパフロデトに託して送ってくれた贈り物に感謝している。彼らはもっと早く送りたかったのだが、届けてくれる人がいなかったのである。パウロは、投獄されてはいたが、満ち足りていた。豊かさに対しても貧しさに対しても対処する方法を会得していたからである。彼は、キリストのみこころである限りは、どんなことにでも対処できることを知っていた。パウロは、テサロニケにいたときに2度、コリントにいたときに1度、ピリピの信者たちの厚意にあずかった。それを回想して彼らを称賛している。パウロはつい先頃受け取った彼らからの贈り物に感謝する一方で、神が彼らに豊かに報いてくださることのほうにもっと関心を持っている。パウロは彼らの贈り物を「香ばしいかおり」、「神に喜ばれる供え物」とまで称賛している。彼らは忠実な管理人だったので、パウロは、神が彼らにすべての必要な物をありあまるほど与えてくださると確信している（金銭を出し惜しみする信者のために文脈を無視してこの節を引用するようなことをすべきではない！）

10. 結びのあいさつ（4章21—23節）

この手紙は、神への賛美、パウロとともにいた聖徒たちからのあいさつ、彼のいつもどおりの「^{しゅくとう}祝福」をもって終わる。

あいさつの中には、カイザルの家にいる聖徒たちからのものもあり、このことから、福音には私たちが思いもよらない所にまで達する力があることを、改めて思い知らされる！

コロサイ人への手紙

はじめに

本書簡の執筆年代

この手紙が書かれたのは、パウロがローマで最初の獄中生活を送っていた頃（60年頃）だと広く信じられている。

本書簡の背景

コロサイは小アジアの西部（現在のトルコ）に位置していた。パウロはその町に1度も行ったことがなかった（2：1）。コロサイの集会はエパfrasによって設立されたのかもしれない（1：7）。

本書簡のメッセージ

手紙の内容から明らかなおと、コロサイの信者たちは、儀式尊重主義、禁欲主義、哲学、律法厳守、（神と人間との中間にある存在である）御使い礼拝を熱狂的に支持する者たちに乗っ取られる危険にさらされていた。

そこで、エパfrasたちは、こうした教えに関する助言を求めて、ローマにいるパウロに連絡を取ったようである。それに対するパウロの答えは、一言で言えば、「キリスト」——至高にして至上なるお方、すべてを完全に満たすお方——であった。

テキコとオネシモがこの手紙をコロサイに持ち帰った。

「コロサイ人への手紙」と「エペソ人への手紙」

この手紙は「エペソ人への手紙」と非常によく似ている。54におよぶ節がほとんど同じである。しかし、「エペソ人への手紙」が「キリ

ストのからだ」としての「からだなる教会」を強調しているのに対し、この書簡は「からだなる教会のかしら」としてのキリストを明らかにしている。

本書簡の概要

1. コロサイの信者たちへのあいさつ、感謝、祈り（1章1—14節）
2. 「からだなる教会のかしら」であるキリストの栄光（1章15—23節）
3. パウロにゆだねられた務め（1章24—29節）
4. 哲学、律法尊重主義、神秘主義、禁欲主義に対するキリストの卓越性（2章）
5. 信者の新しいいのち、古い人を脱ぎ捨てて新しい人を着ること（3章1—17節）
6. 家族の一員としての、キリスト者にふさわしい振る舞い（3章18節—4章1節）
7. 信者の「祈りの生活」と「生き方とことばによるあかし」（4章2—6節）
8. 手短な報告とあいさつ（4章7—18節）

1. コロサイの信者たちへのあいさつ、感謝、祈り （1章1—14節）

いつもどおりのあいさつのことばを書き記した後（1, 2）、パウロは、コロサイのクリスチャンたちの信仰と愛と望みのゆえに神を賛美して、この手紙を書きはじめている（3—8）。賛美は祈りへと続き、次のことを願求めている。すなわち、聖徒たちが神のみこころに関する真の知識に満たされること（9）、主のものとしてふさわしい歩みをする（10）、あらゆる力をもって強められること（11）、神がキリストにあって彼らのためにしてくださったことを感謝すること（12—14）を。

2. 「からだなる教会のかしら」であるキリストの栄光 (1章15—23節)

パウロは「神の愛する御子」に言及した結果、キリストの驚くべき栄光の数々を列挙したくなった。彼は、キリストご自身とそのみわざの両面にわたって詳細に語りはじめる。キリストは「神のかたちであり、造られたすべてのものより先に生まれた方」である(15)。また、万物の設計者であり、創造者であり、目的であり、保持者である(16, 17)。また、からだなる教会のかしらであり、死者の中から最初に生まれた方である(18)。御子のうちには満ち満ちた神の本質が宿っている(19)。将来、万物と神とを和解させてくださるお方であり(20)、現在、信者と神とを和解させてくださるお方である(21—23)。

3. パウロにゆだねられた務め(1章24—29節)

「からだなる教会」(18)と「福音」(23)に言及したパウロが、自分の務めについて記しはじめるのは当然のことである(24—29)。それは「福音」と「からだなる教会」のために受ける苦しみを伴う務めであった。その目的は、すべての人をキリストにある成人として立たせるためであった。その務めは主の御力によって続けられた。

4. 哲学、律法尊重主義、神秘主義、禁欲主義に対する キリストの卓越性(2章)

パウロは再び聖徒たちのために祈る(1—3)。彼が特に願い求めたことは、危険にさらされている彼らが強められること、彼らの心が愛によって結び合わされること、彼らが理解をもって全き信仰の確信を得ること、神の奥義、すなわちキリストを真に知ることであった。もし彼らがキリストの真価を正しく認めたらば、異端の教えにだまされることもないだろう。キリストはあらゆる知恵と知識の源なのだから(4, 5)。

彼らは「すべてを満たすお方」として主イエス・キリストを受け入れた。だから彼らは、信仰を堅く保って主のうちにとどまり続けるべきである（6，7）。

8節のフィリップス訳（意識）は引用する価値がある。「世的な知識や仰々しい『たわごと』によって自分の信仰を台無しにするような者がだれひとりいないように、注意しなさい。そのようなばかげた考えは、せいぜい、この世界に関する世的な人間の考えに基づいたものであり、キリストを無視したものである」。

信者が偽りの教えに対抗するための力の源はキリストである。キリストのうちには満ち満ちた神性が形を取って宿っている。信者はキリストにあって完全な者である（神の御前における完全な立場を得るために、キリスト以外の何ものも必要としないという意味において。9，10）。キリスト者は「キリストの割礼」（キリストの死）によって「割礼を受けた」（肉の性質の支配から救い出された）。肉の性質には、キリスト以外の方法で義を得ようとしたり、義に値する者になろうとするあらゆる努力も含まれる。バプテスマが表しているものは、「古い人の死」と「肉によって神を喜ばせようとする試みの死」であり、「新しいいのちへのよみがえり」でもある（11，12）。信者は、悪の軍勢に勝利されたお方によって、すべての罪を赦され、ユダヤ教の儀式から救い出されたのである（13—15）。

2章の残りの部分から、パウロが戦っていた偽りの教えがいくつか明らかになる。

- （1）食物と聖日に関する規定を守ることによって救いを獲得しようとする努力（16，17）。
- （2）グノーシスの教え。すなわち、偽りの^{ほんもん}謙遜、神と人間の中間の存在である御使いを礼拝すること、幻をとおして得るすぐれた知識、キリストを「いのちと成長の真の源」として認めないこと（18，19）。
- （3）神の承認を得るための手段として禁欲主義を実践すること。こ

のような行為は外面的には敬虔に見えるが、肉の性質から生じるたんでき耽溺を統御する際には何の価値もない (20—23)。

5. 信者の新しいいのち、古い人を脱ぎ捨てて新しい人を着ること (3章1—17節)

2章で学んだことは、神が信者を「キリストとともに死に、キリストとともによみがえった者」とみなしてくださることである (2:11, 12)。これがキリストにある信者の立場である。3章からは実践的な勧めが記されている。すなわち、「キリストとともによみがえらせ、そのいのちがキリストとともに神のうちに隠されている者として生きよ」と (1—4)。これは「古い自己の悪徳」という衣を脱ぎ捨てることを意味する。つまり、邪悪なものに対する愛 (5—7)、悪意に満ちた憎しみ (8)、偽りのことば (9) を捨て去ることである。積極的な面では、「新しい人の美德」という衣を着ることを意味する。つまり、深い同情心、慈愛、謙遜、けんそん柔和、寛容 (12)、忍耐、赦し合うこと (13)、愛 (14) を身につけることである。

信者がすべきことは、キリストの平和が自分の心を支配し、キリストのことばが自分のうちに豊かに住むことによって、互いの徳を高めることである。また、すべてのことを主イエスの御名により、感謝の心をもってなすべきである (16, 17)。

6. 家族の一員としての、キリスト者にふさわしい振る舞い (3章18節—4章1節)

パウロは次に、信者が家庭でどのように振る舞うべきかについての指示を与えている。すなわち、妻には従順を、夫には愛を、子どもには服従を、父親には「怒らせないこと」を、奴隷には服従を、主人には公正を求めている。

7. 信者の「祈りの生活」と「生き方とことばによるあかし」（4章2—6節）

祈りの生活は大切である。だからパウロはコリントの信者たちに、たゆみなく、目を覚まして、感謝をもって、また特に私のためにも祈ってほしいと切に求めている（2—4）。彼らは賢明に歩み、与えられた機会を最大限に用いるべきである（5）。語ることばは親切で、信仰の心を（いい意味で）刺激するものであり、適切なものでなければならぬ（6）。

パウロは自分が獄中でこの手紙を書いていること、自分の「罪状」はキリストの奥義を宣べ伝えていることであることを、コロサイの信者たちに再認識させている。その奥義とは、からだなる教会に関する偉大な真理であり、その「からだ」において、ユダヤ人と異邦人はキリストにあって「新しいひとりの人」に造り上げられるのである。

8. 手短な報告とあいさつ（4章7—18節）

7節から14節までにわたって、パウロは何人かの友人の様子を簡潔に述べている。個人的なあいさつと指示の後（15—17）、自筆で結びの文句を記している（18）。

テサロニケ人への手紙 第一

はじめに

テサロニケ集会の起源

第2次伝道旅行のとき、使徒パウロは、タルソから西に向かって小アジアを横断し、トロアスからエーゲ海を渡ってマケドニヤ（現在のギリシャ北部）へ行った。一行がテサロニケに着くと、パウロはユダヤ人の会堂に行ってキリストを宣べ伝えた。この宣教は3つの安息日にわたって続けられた。その結果、信じる者たちも現れたが、他の者たちは、パウロの一行をもてなした人々に対して反感を抱き、町のならず者たちを扇動して暴動を起こさせた。そこで兄弟たちは、パウロとシラスをベレヤに送り出した。

本書簡の起源と執筆時代

パウロはベレヤからアテネに行った。彼はそこで、テサロニケの信者たちが迫害されているという知らせを受け取った。パウロは彼らのもとに行こうとしたが、妨げられたため、代わりにテモテを遣わした。その後、テモテが持ち帰った報告に励まされ、パウロはこの手紙を書いたのである。この手紙は、新約聖書に収められている27の書巻の中で最も初期に書かれたものである可能性もある。また、パウロが靈感によって書き記した何通かの書簡の中で最も初期のもののひとつであることは確かである（51年頃）。

本書簡の概略

パウロは多くの主題を取り扱っているが、最も重要なもののひとつは「主イエスの再臨」である。これについては各章で取り上げられて

いる。パウロは再臨を次のような観点からとらえている。すなわち、奉仕の動機、さばきの座で報酬を受けるといふ希望、愛による一致へと向かわせるもの、慰めとなる希望、霊とたましいとからだを聖別するようにとの訴え。

本書簡の概要

1. あいさつと感謝（1章1—3節）
2. 聖徒たちに関するパウロの確信（1章4，5節前半）
3. テサロニケの信者たちが模範的なキリスト者となった経緯（1章5節後半—10節）
4. パウロのテサロニケ回顧録（2章1—12節）
5. 福音に対するテサロニケの信者たちの応答（2章13—16節）
6. パウロがテサロニケに戻れなかった理由（2章17—20節）
7. テサロニケに遣わされたテモテの使命（3章1—10節）
8. テサロニケ集会のためのパウロの祈り（3章11—13節）
9. 聖潔な生活（4章1—8節）
10. 兄弟愛に満ちた、秩序ある生活（4章9—12節）
11. 信者を慰める希望（4章13—18節）
12. 「主の日」（5章1—11節）
13. 聖徒たちへの様々な勧め（5章12—22節）
14. テサロニケの信者たちへの終わりのあいさつ（5章23—28節）

1. あいさつと感謝（1章1—3節）

パウロは、いつもどおりの書き出しの中で、シラスとテモテの名前をともに記している（1）。そして、予想どおり、いきなり聖徒たちのことを神に感謝している。彼らが神に回心し、神のために愛の労苦をし、忍耐強く主イエスを待ち望んでいることを（2，3）。

2. 聖徒たちに関するパウロの確信 (1章4, 5節前半)

彼らが神に選ばれた者であることには疑いの余地がなかった。それは、彼らがパウロの福音を初めて聞いたときの反応によって明らかだった。

3. テサロニケの信者たちが模範的なキリスト者となった経緯 (1章5節後半—10節)

テサロニケの信者たちは、パウロと主とに倣う者となった。迫害の真ただ中でさえ喜びをもってみことばを受け入れたからである。彼らは模範的なキリスト者となり、ギリシャだけではなく至る所に主のみことばを知らしめた。彼らがどのようにして偶像から神に立ち返ったのか、どのようにして主に仕えているのか、救い主が戻って来られるのをどのようにして待っているのか、という知らせはすぐに広まった。

4. パウロのテサロニケ回顧録 (2章1—12節)

苦闘の中でのパウロの成功 (2:1, 2)

パウロはテサロニケに行ったときのことを振り返りながら、それがむだでなかったことを聖徒たちに再認識させている。彼は、ピリピで打たれ、投獄されたばかりだったが、少しもおじけづいてはいなかった。多くの反対にもかかわらず大胆に語り続けた。

テサロニケの信者たちへのパウロのメッセージ (2:3, 4)

彼のメッセージについて言えば、その源は真実なものであり、その動機は純粹なものであり、その方法は信頼できるものだった。彼は、福音に関する自分の務めを、神からゆだねられた神聖な「管理の職務」とみなし、人を喜ばせるのではなく、神を喜ばせようという決意をも

ってその働きを続けた。

テサロニケでのパウロの振る舞い（2：5—12）

パウロは自分自身の振る舞いを大いに強調している。「人そのもの」が「メッセージ」であることに気づかせようとしたのである。彼はへつらいのことばに訴えたりはしなかった（5前半）。彼は金銭を得るために奉仕したのではなかった（5後半，6）。彼は優しく（7），愛情深く，献身的で（8），労苦して自活し（9），敬虔で，正しく，責められるところがなく（10），立派な霊的父親としての特徴に満ちていた（11，12）。

5. 福音に対するテサロニケの信者たちの応答 （2章13—16節）

しかし、パウロは、テサロニケの信者たちが福音に応答したいきさつも思い起こしている。彼らはそれを人間のことばとしてではなく、神のことばとして受け入れた（13）。彼らは、救われた後、自国の人々から迫害された。ユダヤの諸集會がユダヤ人の手によって迫害されたのと同様に。ユダヤ人による反対は特に激しいものだった。彼らは神の預言者たちを殺し、主イエスを殺害し、パウロを行く先々で追い立て、彼の異邦人伝道を妨害するためならどんなことでもした。より重罪となった彼らの罪のゆえに、神の怒りが今にも彼らの頭上に下ろうとしていた。この表現は、間近に迫っていたエルサレムの滅亡（紀元70年）を指しているのかもしれない（14—16）。

6. パウロがテサロニケに戻れなかった理由 （2章17—20節）

終わりに、パウロはテサロニケに戻れなかった理由を説明している。彼は2度も戻ろうとしたのだが、サタンが妨げたのである。テサロニケに行けなかったのは、聖徒たちへの愛や配慮が欠けていたから

ではなかった。パウロは彼らをキリストに向かわせた。だから、彼らがみな天において主の御前に立つとき、彼らはパウロの喜びとなり、栄光の冠となるのである。

「私たちは天でも（地上ですでにいたとおり）お互いを認識し合うのだろうか」。19節はこの問いに答える手がかりとなる。パウロは、天でもテサロニケの信者たちを認識できると考えていたに違いない。

7. テサロニケに遣わされたテモテの使命 (3章1—10節)

アテネにおけるパウロの心配(3:1—5)

聖徒たちの所へ行く願いがくじかれたパウロは、代わりにテモテを遣わし、「迫害があっても前進し続けるように」と彼らを励ました。「あなたがたはキリストのために苦難に遭わなければならない」と、パウロは彼らに前もって警告していたのではなかったか(1—4)。パウロは、彼らがどのようにして難局を切り抜けているのか、また、信仰を誠実に守り通しているかどうか知りたいと願った。「あなたがたの信仰」という表現が本章を解き明かすカギである(5)。

テモテの報告に励まされる(3:6—10)

テモテが持ち帰った知らせは良い知らせだった。聖徒たちは信仰と愛とを堅く保っていたし、(パウロと同様に)彼らも再会を切望していた(6)。これを聞いたパウロはどれほど安心したことだろう！彼らの変わらぬ信仰を知ったパウロは、まるでいのちを吹き込まれるかのように感じた。

8. テサロニケ集会のためのパウロの祈り (3章11—13節)

パウロは、彼らが自分にもたらしてくれたすべての喜びのゆえに主に感謝した。そして、「再び彼らのもとに行き、みことばの奉仕をと

おして彼らの徳を高めることができるように」と絶えず祈った。彼は、「彼らが来たるべき世において責められるところのないものとなるために、彼らの愛が増し加えられるように」とも祈った。キリストがこの地上を治めるためにご自分の聖徒たちとともに来られるとき、彼らの報酬も明らかになるだろう。

9. 聖潔な生活（4章1—8節）

4章は、聖潔な歩みによって神を喜ばせるようにという勧めで始まり、聖徒が天に引き上げられることの記述で終わる。パウロは、性的不道徳を避けることによって神のみこころを全うするよう、すでに彼らに命じていた。だれもが婚前交渉を慎み、結婚後は節操を保つべきである。神が私たちを召されたのは、情欲にふけるためではなく、聖潔な生活を送るためだったのだから。この命令に背くことは神のみことばを軽んじることであり、内住の聖霊を悲しませることである。

1節を書き記したとき、パウロはエノクのことを考えていたのかも知れない。エノクは神とともに歩み、神を喜ばせ、神によって一瞬のうちに天に引き上げられた。

10. 兄弟愛に満ちた、秩序ある生活（4章9—12節）

パウロは再び愛というテーマを取り上げる。聖徒たちは「愛するよ

うに」と教えられていた。実際、彼らは、互いに愛し合うことで有名になっていたのである。彼らはこの恵みを示し続けなければならない（9, 10）。けれども、彼らの中には、主の再臨を待つあまり働くのをやめてしまった者もいたようである。これは無責任というものだった。そのような者たちは、他人のやっかいになるようなことはせず、勤勉に働くことによって良い証し人となるべきであった（11, 12）。

11. 信者を慰める希望（4章13—18節）

キリストにあって死んだ者（4：13, 14）

信者の中には、「キリストがご自分の王国を打ち建てらるためにこの地上に戻って来られるとき、キリストにあってすでに死んだ愛する者たちが報いにもれることはないのだろうか」と心配する者たちもいたようである。パウロは「そのようなことはない」と言っている。キリストが再び来られるとき、神がそのような聖徒たちをキリストとともに連れて来られることは、キリストが死んで復活されたのと同じくらい確かなことである。しかし、それは一体どのようにして行われるのだろうか。彼らの遺体や遺骨は墓の中にある。神はどのようにして彼らを天からこの地上に連れて来られるのだろうか。

携挙けいきよの際の出来事の順序（4：15—18）

その答えは、もちろん、「その間に携挙が起こる」というものである。そのとき、地上に生き残っている信者たちが、すでに死んだ信者たちに優先することはない。主は天から空中にまで下りてこられる。そして、キリストにあって死んだ者たちがまずよみがえり、次に生き残っている信者たちが変えられ、こうしてみなが引き上げられ、空中で主と会うのである。こうしていつまでも主とともにいることになる。これこそ神の民の、慰めに満ちた希望である。

12. 「主の日」（5章1—11節）

それはいつか、どういう時か（5：1—5）

さて、主題は「携挙けいきよ」から「主の日」に移る。特に、患難時代として知られている期間に。それは携挙に続く、7年にわたるさばきの期間のことである。テサロニケの信者たちはすでにそのことについて教えられており、その日が夜中の盗人のように来ることを知っていた（1, 2）。だれもが平和について話しているときに突然滅びが襲ってくる。しかし、パウロは読者たちに、「あなたがたは（夜ではなく）昼に属する者だから、恐れる必要はない」と保証している。主の日が襲いかかるのは、道徳的、霊的暗やみの中にいる者たちだけである（3

—5)。

キリスト者の主要な美徳 (5 : 6—8)

信者は、常に警戒を怠らず、しらふでいることによって、また、キリスト者としての基本的な美徳——信仰と希望と愛——を示すことによって、光の子どもらしく生きるべきである。

御怒りではなく御救い (5 : 9—11)

信者は「主の日」の神の御怒りを被るように定められたのではない、とパウロは断言している。それどころか、救い主がご自分のもののために来られるとき、彼らは救いを得るのである。私たちはそのとき、主とともに生きようになるのだから、今は互いに力を合わせて生きるべきである。

13. 聖徒たちへの様々な勧め (5章12—22節)

12節から22節には、信仰の家(集会)の中の様々な立場の人々に対する実際的な勧めが記されている。キリスト者は霊的指導者たちを認め、尊敬し、互いに平和を保つべきである(12, 13)。指導者は、気ままな者、つまり働かない者を戒め、気弱な者を励まし、弱い者を助け、すべての人に対して寛容であるべきである(14)。聖徒は、人に仕返しをすべきではなく、積極的に善を行うべきである(15)。信者は、喜び、祈り、感謝することによって神のみこころを行うことになる(16—18)。集会を始めとした様々な場所で、御霊を消したり、預言をないがしろにしてはならない。すべての教えをみことばによって見分け、本当に良いものを保つべきである。どのような種類の悪からも遠ざかるべきである(19—22)。

14. テサロニケの信者たちへの終わりのあいさつ (5章23—28節)

手紙を書き終えるに当たって、パウロは、「イエスの来臨のとき、テサロニケの信者たちが責められるところのないように、神が彼らを完全に聖なるものとしてくださるように」と願っている。彼は、私たちの真実な神がそれをしてくださるものと確信している。自分のためにも祈ってほしいと頼んだ後、すべての兄弟たちに聖なる口づけをもってあいさつすることと、この手紙を公の場で読むことを命じてから、「恵み」というパウロ独特のあいさつのことばを付け加えている。

テサロニケ人への手紙 第二

はじめに

本書簡の背景と執筆年代

この手紙は、テサロニケ人への手紙第一の執筆後まもなく（51年頃）コリントで書かれたと一般に信じられている。パウロ、シルワノ、テモテがまだいっしょにいるし（1：1）、コリントは（聖書に記されている限りでは）彼らがいっしょにいた唯一の町だからである（使徒18：1，5）。

本書簡のねらい

2通の書簡がこれほど立て続けに記された理由は3つあった。聖徒たちが迫害されていたので、彼らを励ます必要があった（1章）。「主の日」に関して惑わされていたので、彼らを啓発する必要があった（2章）。主がまもなく来られるからといって仕事もせずに暮らしている者たちがいたので、そのような者たちの誤りを正す必要があった（3章）。

本書簡の概要

1. あいさつと、パウロの感謝の表現（1章1—5節）
2. 神の正しいさばき（1章6—10節）
3. 聖徒たちのためのパウロの祈り（1章11，12節）
4. 主の日に先立つ出来事と主の日に起こる出来事（2章1—12節）
5. パウロ、聖徒たちがさばきを免れることを感謝する（2章13，14節）
6. 聖徒たちへのパウロの勧め（2章15節）

7. 聖徒たちのためのパウロの祈り（2章16, 17節）
8. パウロ、祈りの援護を求める（3章1, 2節）
9. 聖徒たちに関するパウロの確信（3章3—5節）
10. 不従順な者たちの扱いに関する指示（3章6—15節）
11. 祈り（3章16—18節）

1. あいさつと、パウロの感謝の表現 （1章1—5節）

あいさつのことば（テサロニケ人への手紙第1の書き出しのあいさつと驚くほどよく似ている）に続き、パウロは、聖徒たちのゆえに、神に感謝の意を表明している。彼は、迫害と苦悩の中での彼らの信仰と愛と忍耐に特に言及している。彼らの希望については言及していない。おそらく、主の来臨に関して彼らがさらに教えられる必要があったからだろう。迫害に耐えていた彼らの姿が証明していたものは、来たるべき王国においてキリストとともに治めるのに彼らがふさわしい者たちであるということだった。

2. 神の正しいさばき（1章6—10節）

再臨のとき、聖徒たちを迫害した者たちは公に処罰され、迫害された神の民は安息を得る。キリストは燃え立つ炎の中に天から来られ、不信者たちを永遠に御前から退けられる。その日、聖徒たちは主の栄光をたたえ、主をあがめる。

3. 聖徒たちのためのパウロの祈り（1章11, 12節）

パウロの祈りは、「テサロニケの信者たちの生活がこのような気高い召命にふさわしいものとなるように」、そして、「神の御力によって、彼らが、善を行いたいというあらゆる衝動に従い、信仰をもって始めたあらゆる仕事を完成することができるように」というものだった。

た。

4. 主の日に先立つ出来事と主の日に起こる出来事 (2章1—12節)

キリスト来臨の慰め(2:1, 2)

テサロニケの信者たちは、ある「啓示」やうわさに悩まされていた。「主の日はすでに来たのであり、すでに患難時代が始まっている」というのである。ひどい迫害を経験していた彼らは、ますますそのうわさを信用するようになった。パウロは、「主の日がすでに来たかのように考えてはならない」と、携挙ひいきよに関する教えに基づいて主張している。その日が来る前に、彼らは天に引き上げられるからである。

大いなる背教(2:3—7)

主の日に先立って、(携挙以外に)3つの出来事が起こる。(1)大いなる背教(信仰を捨てること)が起こる。(2)「不法の人」(反キリスト)が現れる。(3)「引き止める者」が取り除かれる(私たちは聖霊のことだと信じているが)。携挙の際、「からだなる教会」と「個々の信者」に永続的に内住されるお方としての聖霊は取り除かれるのである。

反キリストと患難時代(2:8—12)

「不法の人」は、どのような宗教にも反対し、自分を礼拝するよう人々に命じ、奇跡を行って人々を欺く(4, 9, 10前半)。この「恵みの時代」にキリストを信じることなく、患難時代まで生き延びる者たちは、「自分こそ神である」という彼のうそにだまされる(10後半, 11)。キリストが力と栄光を帯びて地上に戻って来られるとき、反キリストもその崇拜者たちもさばかれる(8後半, 12)。

5. パウロ、聖徒たちがさばきを免れることを感謝する (2章13, 14節)

パウロは、聖徒たちがこのさばきを免れることに対して感謝の意を表明している。神は永遠の昔に彼らをお選びになり、時至って彼らを召され、やがていつかキリストとともに栄光を得させてくださる。

6. 聖徒たちへのパウロの勧め (2章15節)

だから、彼らは堅く立って、教えられたことをしっかり守るべきである。

7. 聖徒たちのためのパウロの祈り (2章16, 17節)

この章は、「神が彼らの心を慰め、励ましてくださり、彼らをあらゆる良いわざとことばとに進ませてくださいるように」というパウロの祈りで終わっている。

8. パウロ、祈りの援護を求める (3章1, 2節)

パウロは、「主のみことばが広まり、あがめられるように、そして、私が悪人どもの怒りや殺意から救い出されるように祈ってほしい」と頼んでいる。

9. 聖徒たちに関するパウロの確信 (3章3—5節)

パウロは、「真実な主が信者たちを守ってくださること」、そして、「彼らがみことばに従い続け、神が愛されるように愛し、キリストのように信仰に堅くとどまり続けること」を確信していた。

10. 不従順な者たちの扱いに関する指示 (3章6—15節)

テサロニケの信者たちの中には、だらしのない歩みをしている者、つまり、主の再臨を待つあまり仕事をやめてしまった者たちがいた。パウロは、残りの信者たちに、「反対の意を表明するために、そのような怠惰な兄弟たちとはつき合わないよう」と命じた(6)。パウロは身を粉にして働き、彼らに模範を示した。他人にたかってただで食事にありつくようなことはせず、自分自身で生計を立てた。彼は、自分が牧している人々から援助を受ける権利を用いていなかった(7—9)。

「働かざる者、食うべからず」というのがルールである。忠告も聞かず、他人のおせっかいばかりやいている怠け者であってはならない。静かに仕事をし、自活し、家族を養うべきである(10—12)。もしこれを拒む者がいれば、そのような者を締め出し、忠告すべきである。しかし、敵のように扱ってはならない(13—15)。

11. 祈り(3章16—18節)

パウロは「嵐あらしのような書簡を、穏やかな結びのことばで」締めくくっている。パウロは、自分の手でペンをとり、「聖徒たちに神の平和と臨在と恵みがあるように」と願っている。

テモテへの手紙 第一

はじめに

教会書簡

テモテとテトスへ宛てたパウロの手紙は「教会書簡」と呼ばれている。もしそれが、「集会の牧者たちのための教えが記されているから」という理由ならば、これは適切な呼び名である。しかし、もしそれが、「テモテとテトスは集会の牧者だったから」という意味にも取られるなら、適切な呼び名とは言えない。彼らは、実際には助手として仕えつつ、諸集会を巡回していた働き人たちだったからである。

本書簡の背景

パウロがテモテに出会ったのは初めてルステラを訪れたときだった。そのとき、テモテはすでに「弟子」であった（使徒16：1）。そのとき以来、ふたりはともに親しく働いた。パウロは彼のことを「わが子」と呼んでいるが、だからといって「彼をキリストに導いたのはパウロである」と断定する必要はない。「同じ心」になっているがゆえに「わが子」と呼んだのかもしれないからである。

本書簡の執筆年代

パウロがこの手紙を書いたのは、ローマでの自宅軟禁を解かれた後のことであると一般に信じられている。つまり、63年から67年までの間であり、したがって「使徒の働き」に記されている出来事の後である。

本書簡の主題

この手紙のテーマは3章15節に記されている。「……神の家でどの

ように行動すべきかを、あなたが知っておくためです。神の家とは生ける神の教会のことであり、その教会は、真理の柱また土台です」。

本書簡の概要

1. テモテへのあいさつ（1章1，2節）
2. 「にせ教師たちを黙らせるように」との命令（1章3—11節）
3. 神の真の恵みに対する感謝（1章12—17節）
4. 再びテモテへの命令（1章18—20節）
5. 集会生活に関する教え（2，3章）
6. 近づいている背教に対する警告（4章1—5節）
7. 迫り来る背教を考慮したうえでのテモテに対する実際的な指示（4章6—16節）
8. 様々な立場にある信者たちに関する教え（5章1節—6章2節）
9. 「にせ教師たち」と「金銭を愛すること」（6章3—10節）
10. テモテに対する終わりの命令（6章11—21節）

1. テモテへのあいさつ（1章1，2節）

冒頭に記されたテモテへのあいさつからは非常に温かなぬくもりを感じる。パウロは彼を「信仰による真実のわが子」と呼んでいる。

2. 「にせ教師たちを黙らせるように」との命令 （1章3—11節）

パウロが命じた目的（1：3—5）

パウロはさっそくテモテに「神話や果てしのない系図を言い広めているにせ教師たちを黙らせるように」と命じている。パウロはテモテにすでにこのことを命じていた（3，4）。このように命じた究極的な目的は、「きよい心と正しい良心と偽りのない信仰から生じる愛」をもたらすためであり、単なる「正統派的信仰」をもたらすためでは

なかった (5)。

律法の目的 (1:6—11)

にせ教師たちは、「律法を守ることは神の恩寵^{かんちゆう}を得るための手段である」と主張していた (6, 7)。彼らは、「律法は、もし正しく用いられるならば良いものであること」、そして、「律法を正しく用いれば罪の自覚がもたらされること」を理解すべきであった。律法は、正しい人のためではなく、律法を無視する不従順な者のために与えられたのである。そのような者たちの例をパウロは13列挙している (8—11)。

3. 神の真の恵みに対する感謝 (1章12—17節)

罪に関するこの一覧表によって、パウロは、「自分自身の回心」と「自分を神の奉仕へと召してくださった神の恵み」とを思い出したようである。彼は以前は神をけがす者、迫害する者、暴力をふるう者——実に罪人のかしらであった。しかし、キリストは彼のような罪人たちのために死なれたのであった。そして、神の恵みが人の人生においてなし得ることの見本として、まず彼に大きなあわれみを示された。このことを思ったパウロの心からは、神をほめたたえる雄弁なことばが自然とあふれ出た。

4. 再びテモテへの命令 (1章18—20節)

「主の働きのためにテモテを選ぶように」という預言が以前になされてきたようである。パウロはテモテにこのことを思い起こさせ、「にせ教師たちをしっかりとつけるように」という命令を繰り返している。勇敢に戦い抜くために、若い兵士であるテモテは、信仰と正しい良心をしっかりと保っていなければならなかった。パウロの知人の中には、正しい良心を捨て、神を冒瀆^{ぼうとく}し、信仰の破船に遭った者たちもいた。パウロは、彼らを処罰し、矯正するために彼らをサタンに引き渡した。

5. 集会生活に関する教え（2，3章）

2章と3章には、集会の秩序や規律に関する教えが記されている。

すべての人のための祈り（2：1—7）

すべての人のために、特に支配者のために祈るべきである。それは、信者が平安で静かな生活を送るためである。このことは、「すべての人が救われる」という神の願いにも調和している。信者は神に近づくかぎを持っている。パウロは「私こそ、神がすべての人の救いを望んでおられる、さらに確かな証拠である」と述べている。異邦人にメッセージを届けるために、主が彼を任命されたからである。

集会での男の役割（2：8）

パウロは、「男が公の場での祈りを導くべきである」と教えている。ただし、平和を愛するきよい心をもって、そうすべきである。

集会での女の役割（2：9—15）

パウロは、女に関しては、次のように教えている。女はつつましい身なりをし、人目を引くような服装を避けるべきである。けれども、さらに大切なことは、良い行いによって示される内面的な品性である。集会では、女は黙っていて、よく従う心をもって教えを受けるべきである。女が教えたり、男に与えられた権威を奪ったりしてはならない。これは文化の問題ではなく、「創造の順序」と、「エバが欺かれたことをとおして人類に罪が入ったこと」にまでさかのぼらなければならない問題である。けれども、女に従順が要求されているからといって、「女には何ら重要な役割が与えられていない」というわけではない。女には子どもを産み、神のために養い育てるという大切な務めが与えられている。ここで述べられている「救い」は、集会における女の立場に関する「救い」である。言い換えれば、女を、取るに足り

ない立場から「救い」、大いに栄光ある立場へと引き上げるものである。

長老の資格（3：1—7）

パウロはここで、地域集会における長老の資格についてテモテに教えている。長老になりたいと熱望している人はすばらしい仕事を求めているのである。長老は次のような人でなければならない。すなわち、非難されるところがなく、ひとりの妻の夫であり、自分を制し、慎み深く、行儀が良く、よくもてなし、教える能力があり、酒飲みでなく、暴力をふるわず、金銭に無欲で、温和で、争いを好まず、自分の家庭をよく治め、回心してまもない人でなく、社会的な評判も良い人でなければならない。

執事の資格（3：8—13）

執事とは、長老とはまた別の立場で集会に仕える人々のことである。執事は次のような人でなければならない。すなわち、威厳があり、2枚舌を使わず、大酒飲みでなく、^{どんよく}食欲でない人である。また、教義においても生活においても、健全でしっかりした人でなければならない。彼らが非難されるところのない者であるかどうか確かめるために、まず審査を受けさせるべきである。彼らは、ひとりの妻の夫であり、家庭をよく治める人でなければならない（8—10, 12）。婦人執事（女性の執事か、もしくは執事の妻）も威厳があり、悪口を言わず、自分を制し、すべてに忠実な人でなければならない（11）。立派に務めを果たしている執事は他の人から尊敬を受け、キリスト者の信仰について語る際に強い確信を得る（13）。

信仰の偉大な奥義（3：14—16）

パウロは、手紙に記されているとおり、テモテにすぐに会いたいと思っていたが、自分が行くのが遅れたときでも、集会でどのように行動すべきか「真実のわが子」に知っていてほしいと願っていた。集会

は真理の柱、また土台である。パウロは、この真理、つまりキリスト者の真理を、彼が「敬虔の奥義」と呼んでいる短い文章の中で要約している。その中には、受肉されたキリストに関する基本的な陳述が含まれている。キリストは、受肉された際に「肉において現れ」、バプテスマ、^{へんぼう}変貌、復活、昇天の際に「霊において義と宣言され」、誕生、誘惑、ゲツセマネの園での苦悩、復活、昇天の際に「御使いたちに見られ」、使徒の時代から今日に至るまで「諸国民の間に宣べ伝えられ」、「世界中で〔全世界によって〕ではない）信じられ」、昇天の際に「栄光のうちに上げられた」。

6. 近づいている背教に対する警告（4章1—5節）

パウロは、「主の日が近づくと背教が起こり、人々は心霊術や悪魔信仰に惑わされ、真理を捨ててしまう」と予見している。彼はこうした者たちを、良心がまひした、偽善的な「うそつきども」と断定している。彼らの教義の中には、結婚や様々な食べ物を強制的に断つことも含まれていた。パウロはテモテに、「すべての食べ物は良いもので、神からの賜物であり、神のことばと祈りによって聖別されるのであり、感謝して食べるべきである」と告げている。

7. 迫り来る背教を考慮したうえでのテモテに対する実際的な指示（4章6—16節）

テモテは、迫り来る背教をよく考慮したうえで、信者たちにその危険を常に警告すべきである。また、自分自身も敬虔な生活を送り、他人の模範となるべきである。ほかにも彼がすべきことは、聖書を公の場で朗読することに注意を払うこと、与えられた賜物を十分に活用すること、心を尽くして自分の務めに励むこと、自分自身の生活にも注意を払うこと、他人に教えたことの結果にもよく注意することなどがあつた。

8. 様々な立場にある信者たちに関する教え (5章1節—6章2節)

5章1節から6章2節までには、クリスチャンの交わりのうちにある様々な立場の兄弟姉妹たちに関する教えが記されている。

様々なグループに属する兄弟姉妹たちに対する適切な対応

(5:1, 2)

テモテのような「若い人たち」は年寄りをしかるべきではなく、父親に対するように懇願すべきである。また、若い人たちには兄弟に対するように、年取った婦人たちには母親に対するように、若い女たちには姉妹に対するように対応すべきである。

*やもめに対する適切な対応 (5:3—16)

やもめの世話に関して言えば、もしそのやもめに親族がいるなら、彼女はその親族によって養われるべきである。ここで述べられている「ほんとうのやもめ」とは親族がいないやもめのことである。もし、そのやもめが60歳以上で、キリスト者として立派な女性であり、キリストと御民とに仕えてきた姉妹であれば、集会がそのようなやもめたちの世話をすべきである。若いやもめは再婚したほうがよい。情欲にひかれたり、怠惰になったりして、やっかいな問題を引き起こすことが多いからである。

長老たちに対する適切な対応 (5:17—20)

よく指導の任に当たっている長老は、尊敬とともに経済的支援をも受けるに値する。長老に対する非難は、ふたりか3人の証人によって確認されなければならない。罪を犯している者は公の場で責められるべきである。

テモテに対するパウロの個人的な助言（５：21—25）

テモテは、偏見を持つことなく、これらの指示に従わなければならない。奉仕に当たる人を選ぶときに軽々しく即断したり、他人の罪にかかわったりしてはならない。また、汚れた水（彼がからだをこわした原因だと思われる）を飲むのをやめ、健康のために少量のぶどう酒を用いるべきである。また、「罪」も「良い行い」も、遅かれ早かれ、いずれ明らかにされることを忘れてはならない。

主人に対する適切な対応（６：１，２）

未信者の主人を持つ（信者である）奴隷は、主をあかしするために、尊敬をもって主人に仕えるべきである。信者である主人を持つ（信者である）奴隷は、主人が信者仲間だからといって主人を軽く見たり、それに付け込んだりしてはならない。この教えは、いかなる時代、いかなる地域においても、キリスト者である従業員に当てはまる。

9. 「にせ教師たち」と「金銭を愛すること」 （６章 3—10節）

間違いを教える者たちの邪悪な性質（６：3—5）

パウロは次に、にせ教師たちに激しい非難を浴びせている。「彼らは高慢で、無知で、議論好きであり、その結果、ねたみ、争い、そしり、悪意の疑り、不和を生じている」と。「そのうえ彼らは、みことばの奉仕を利得の手段と考えている」と。

「信仰ゆえの満足」という富（６：6—8）

実際には、満ち足りる心を伴う敬虔こそ、大きな利益を受ける道である。なくてはならない生活必需品さえ備えられていれば、十分満足できるはずである。

あらゆる悪の根（６：9，10）

金銭欲がもたらすものは、誘惑、わな、心配、恐れ、愚かな欲、信仰の墮落、多くの悲しみである。金銭を愛することこそ、あらゆる悪の根である。

10. テモテに対する終わりの命令（6章11—21節）

すばらしい告白（6：11—16）

テモテに対する終わりの命令の中で、パウロは、「避けなさい。求めなさい。戦いなさい」と言っている。富に関する危険を避けなさい。「正しさ」を始めとしたキリスト者の美徳を求めなさい。信仰の戦いを立派に戦い、自分が召された目的である永遠のいのちを全うしなさい。パウロはテモテに、「主が来られるまで真理に忠実であるように」とも命じている。

富んでいる者たちへの命令（6：17—19）

テモテは金持ちたちに、「高ぶることも、自分の富に頼ることもしてはならない」と恐れずに訓戒すべきだった。彼らは、神に頼り、他人のために自分の富を用いるべきである。そうすれば、永遠の宝を手にすることになる。

信仰を守れ（6：20, 21前半）

最後にパウロは、テモテに次のように命じている。「自分にゆだねられた『信仰の真の教理』を守り、無益な論争や、聖書の教えと矛盾する知識を避けなさい」と。これらは人々を信仰から遠ざけるものである。

しゆくとう 祝祷（6：21後半）

終わりの祝祷に用いられていることばは「恵み」である。この祝祷は、テモテを始め、この手紙のすべての読者に向けて記されている。この場合の「恵み」は、「(私たちが) 受けるに値しない (御救いとい

う) 神の^{おんちよう}恩寵」というよりもむしろ、「キリスト者に注がれる神の力と助け」である。

テモテへの手紙 第二

はじめに

本書簡の執筆年代

この手紙は、紀元67年から68年頃、ローマでの最後の投獄中に書かれたパウロの最後の手紙である。

本書簡の背景

自分がまもなく処刑されることを悟っていたパウロは、テモテを教え、励ましたいと切に願った。からだなる教会にとっての暗黒時代が待ち受けていた。問題が山のように押し寄せてくるだろう。テモテは、自分に与えられた任務を、恥じることなく、勇敢に遂行しなければならなかった。暗やみが周囲に深まったときも、彼は他の人々を訓練し、困難に耐え、悪から離れていなければならない。邪悪な時代にあって、テモテが（実生活と教理において）拠り頼むべきものは聖書である。彼は、忠実に仕え、みことばを宣べ伝え、見張り、耐え忍ぶ——つまり、神のしもべとしての自分の使命を果たすべきである。

本書簡の概要

1. 始めのあいさつ（1章1—5節）
2. テモテに対する勧め（1章6節—2章13節）
3. 信仰を守ることが特に必要な理由（2章14—26節）
4. 来たるべき背教の描写（3章1—13節）
5. 背教と戦う「神の人」が拠り頼むべきもの（3章14節—4章8節）
6. 個人的な依頼と人物評（4章9—22節）

1. 始めのあいさつ（1章1—5節）

「愛する子」へ最後の手紙を書いているパウロの胸にこみ上げてきたに違いない深い感情を考えてみよ！（1，2）彼は、この若い兄弟に関する思い出——（おそらく彼らが最後に別れたときの）テモテの涙、彼の純粋な信仰、彼の敬虔な母と祖母——を神に感謝している（3—5）。

2. テモテに対する勧め（1章6節—2章13節）

福音を恥じるな（1：6—12）

テモテへの熱心な勧めが次々と矢継ぎ早に続く。テモテは臆病^{おくびょう}であってはならない。力強く、愛に満ち、訓練されていなければならない（6，7）。福音を恥じたり、パウロが囚人であることを恥じたりせず、福音のために進んで苦しまなければならない（8）。「福音の崇高な本質」と「神が私たちのためにしてくださったこと」を思うとき、それは私たちがとるべき当然の態度だろう。パウロ自身は苦しんでいたが、少しも恥じることなく、神の守りの御力を確信していた（9—12）。

信仰に対する忠誠（1：13—18）

テモテは、パウロから伝えられたとおりに信仰を保つべきである（13，14）。彼はクリスチャンの友人たちを援助しなければならない（15—18）。アジア州にいるパウロの友人たちは彼を見捨てたが、ただひとり、オネシポロだけは、投獄されていた彼に忠実に仕えた。

恵みによって強く（2：1—10）

父親のような忠告は続く。テモテ自身について言えば、キリスト・イエスの恵みによって強くなるべきである。また、他の人にも伝える力のある忠実な人々を教えるべきである（1，2）。キリストの兵士として、困難に耐えるとともに、この世の雑事やいざござから解放さ

れていなければならない(3、4)。競技者として、規定に従わなければならない(5)。農夫として、収穫の分け前にあずかるという確信をもって働かなければならない(6—10)。

信頼すべきことば(2:11—13)

パウロは初期の(クリスチャンの)賛美歌を引用しているようである。それは要約すると次のようになる。「もし私たちが救い主に真実であるなら、主は豊かに報いてくださる。もし主を知らないと言えば、主も私たちを知らないと言われる。主は常に首尾一貫した真実なご性質をもって行動される」。この場合の「否む」は不信者による否認のことであり、ペテロのような真の弟子による否認のことではない。主がご自分の民を「否まれる」ことは決してないからである。

3. 信仰を守ることが特に必要な理由 (2章14—26節)

承認された働き人(2:14, 15)

テモテは他の教者たちに「ことばについてのつまらない議論に巻き込まれないように」と警告すべきである(14)。テモテ自身は、真理のことばを正しく取り扱う、承認された、恥じることのない働き人になることを目指すべきである(15)。

承認されない働き人(2:16—19)

パウロは、不敬虔な教義によって人々をますます不敬虔に導くにせ教師たちのことに絶えず話を戻す。彼は、「復活はすでに起こった」と教えて、ある人々の信仰を台無しにしてしまったふたりの人物の名を挙げている(16—18)。彼は、「神は打ち負かさず、ご自身のものを知っておられる」という事実を慰めとする。「神に属している」と主張する者はみな、きよい生活によってそれを証明すべきである(19)。

キリスト教界という大きな家（２：２０，２１）

キリスト教界は、本物とにせ物が混じり合った大勢の人々で構成されている。主人にとって有益なしもべとなるためには、悪い人々からも、悪い教えからも離れなければならない。

聖潔、忍耐、平和（２：２２—２６）

テモテにとって大切なことは、悪しき欲望を避け、自らの聖潔と誠実を追い求めることである（２２）。彼は、無益な議論や口論を避け、自分に反対する人々を根気よく教えるべきである。彼らがいつか悪魔のわなを逃れ、主の真理に立ち返るという希望をもって（２３—２６）。

４．来たるべき背教の描写（３章１—１３節）

危険な時代と危険な者たち（３：１—５）

パウロは終わりの日の困難な時代を予見している。背教者たちの性格が詳しく述べられているが、それらは決して美しいものではない。テモテは彼らとかわりを持つべきではない。

異端の行商人（３：６—９）

彼らの策略は、だまされやすい女たちの前で「店を張る」ことである。彼女たちは自分の罪の重荷に気づいており、どのような偽りの救済策でも、目の前に差し出されると、進んで受け入れようとするが、真理は決して受け入れない。背教者たちは、モーセに逆らったふたりのエジプトの呪法師じゆほうしたちのような者であり、彼らの企てが失敗に終わるのは当然のことである。

「神の人」の生き方（３：１０—１３）

こうしたにせ教師たちとは対照的に、使徒パウロの生涯が、奉仕と受難に関する９つの特徴によって特色づけられている（１０，１１）。パウロはテモテに「迫害は、敬虔に生きようと願う者には避けられない

ものである」と告げている。不敬虔な者はますます悪くなっていく(12, 13)。

5. 背教と戦う「神の人」が拠り頼むべきもの (3章14節—4章8節)

完全な「神のことば」(3:14—17)

背教の時代にあつて「神の人」が大いに拠り所とすべきものは、神のことばにしっかりとどまり続けることである。テモテは子どもの頃からみことばを知っていた。聖書は神の靈感によるもので、「神の人」をあらゆる良い働きに備えさせる際に有益なものである。みことばは、何よりもまず、救いを受けるための知恵を与えることができる。

背教が増大する中での奉仕(4:1—8)

パウロはテモテに最後の命令を与えている。まず彼は、メッセージを積極的に宣べ伝えるよう求めている(1, 2)。ふたつの理由が記されている。ひとつは、世間の人々が健全な教えに耳を傾けない時代が来るからであり、もうひとつは、パウロがこの世を去る時が近づいたからである(3, 4)。次にパウロは自分の若い助手(テモテ)に、「冷静さを失わず、困難に耐え、伝道し、自分の義務をすべて果たすように」と勧めている(5—8)。

6. 個人的な依頼と人物評(4章9—22節)

パウロ自身の消息(4:9—13)

ここでパウロは個人的なことをいくつか書き加えている。彼は、テモテがマルコを伴ってローマに来てくれることを待ちあぐんでいる。パウロの仲間のひとりには彼を見捨て、ほかの者たちはよそへ行ってしまい、パウロとともにいるのはルカだけになった。パウロは、自分の上着と巻き物、特に羊皮紙のを持って来てほしいとテモテに頼んでいる。「巻き物」とは聖書のことだったのかもしれないし、手紙を書く

ためのものだったのかもしれない。

不忠実な者たちに囲まれた忠実な師（４：１４—１８）

アレキサンデルは（パウロの裁判で）パウロをひどく苦しめた。偽って彼を告発し、パウロの証言を否定したのかもしれない。パウロの最初の弁明の際、彼のために証言した者はひとりもいなかったが、主が彼のそばに立ち、彼を支持してくださったので、彼は刑の執行を猶予された。彼は、「信仰を否定することのないよう、主が私を救い出してください、天の御国に至るまで守ってください」と確信していた。

パウロの最後の「別れのあいさつ」（４：１９—２２）

個人的なことをいくつか書き加え、テモテに「冬になる前に来てほしい」と迫った後、パウロは、「**真実**のわが子」および彼とともにいるすべての人々のために最後の祝^{しゆくとう}をささげている。彼の執筆は終わった。やがて彼の人生そのものも終わる。しかし、彼のかぐわしい生涯とみことばの奉仕がもたらす祝福は、今なお私たちとともにある。私たちはどれほどの恩恵を被っていることだろう。パウロと、彼が神の息吹^{いぶき}によって書き記した何通もの手紙に！

テトスへの手紙

はじめに

本書簡の背景

パウロは、ローマで最初に投獄されてから再び投獄されるまでの間、クレテにテトスを残し、「この地の諸集会の秩序を確立し、それを維持するように」と命じた。テトスは、パウロとともに巡回する同労者であると同時に、集会の諸問題を解決するために派遣された、パウロの使者でもあった。

本書簡の主旨

テトスへの手紙には、秩序ある集会にとって必要不可欠なものがいくつかりストアップされている。まず第1に、長老は、ある一定の資格を備えていなければならない。第2に、にせ教師たちを黙らせなければならない。第3に、健全な教えが説かれ、信者たちがそれに従わなければならない。最後に、聖徒たちはこの世の支配者にも従い、くだらない^{おぼろ}憶測にふけることなく、良いわざに励むべきである。

本書簡の執筆年代

この手紙は紀元65年頃、すなわち「テモテへの手紙第二」の前に書かれた。

本書簡の概要

1. テトスへの「始めのあいさつ」（1章1—4節）
2. 地域集会の長老たち（1章5—9節）
3. 地域集会内の誤り（1章10—16節）

4. 地域集会のなすべき行動（2章）
5. 地域集会における勧め（3章1—11節）
6. 終わりのあいさつ（3章12—15節）

1. テトスへの「始めのあいさつ」（1章1—4節）

いつもより長い書き出しの中で、使徒パウロは、自分の務めを「宣教」「教育」「待望」の3つに要約している。彼は人々を信仰に導き、彼らに真理を教え、来たるべき栄光の望みを示した。彼の福音は、永遠の昔から約束されたものであり、宣教によって明らかにされたものであり、彼に（もちろん他の人にも）ゆだねられたものであった。彼はテトスを「信仰による……わが子」と呼んでいる。

2. 地域集会の長老たち（1章5—9節）

すでに述べたとおり、パウロはテトスをクレテに残した。自分がやり残したことを完成させ、諸集会に長老たちを任命させるためであった。6節から9節に記されている資格は、「長老は家庭で、あるいは集会でどのような人物でなければならないか、また長老自身はどのような人物でなければならないか」を示している。彼らには霊的に成熟した性格と、指導者としての実際的な能力が要求される。

3. 地域集会内の誤り（1章10—16節）

「人を惑わす者」をしかること（1：10，11）

テトスにはせ教師たち、特にユダヤ主義者たちを叱責しなければならぬ。彼らは「律法」と「恵み」とを結びつけようとした。彼らの目的は金をもうけることであった。

クレテ人たちをしかること（1：12—16）

クレテ人たち自身も非難しなければならなかった。彼らは「うそつき、悪いけだもの、なまけ者の食いしんぼう」だったからである。ま

た、ユダヤの伝説や、すでに廃棄された「食べ物に関する律法」をうのみにしないよう彼らに警告しなければならない。クレテ人は、概して攻撃的で、他人の言うことを聞かず、善を行うには不向きな民であった。

4. 地域集会のなすべき行動（2章）

健全な集会の特質（2：1—10）

パウロはここで人々を5つに分類し、——すなわち老人、年をとった婦人、若い婦人、若い男、奴隷——それぞれに「健全な教えを実生活に生かすための指示」を与えている。

「人を救う恵み」による訓練（2：11—15）

私たちが救われた大きな目的のひとつは、きよい生活を送るためである。救いをもたらしたのと同じ恵みが私たちに次のことを教えている。すなわち、救い主が再び来られるのを待つ間、模範的な生き方をするようにと。キリストがこの世に来られて、ご自分を犠牲にされた目的のひとつは、私たちを不法から贖い出し、良いわざに熱心なご自分の民を、ご自分のためにきよめるためであった。テトスはこのことを教え、勧め、恐れることなくしかるべきであった。

5. 地域集会における勧め（3章1—11節）

「恵みを相続する者たち」の気品と優しさ（3：1，2）

信者には、自国の政府に従い、進んで善行をする義務がある。他人の悪口を言ったり、口論したりしてはならない。礼儀正しく、思いやりのある人でなければならない。

神の恵みを「受ける前」と「受けた後」（3：3—8）

回心する前の私たちの特徴は、列記されている様々な悪徳だった（3）。しかし、神は、私たちの行いによってではなく、ご自分の恵み

によって私たちを救ってくださった。私たちは、「聖霊による、新生と更新との洗い」を経験し、永遠のいのちを相続する者となった。そのようなすばらしい救いによって、この上もない悪の状態から救い出されたのだから、良いわざに励むことによって、救われた者にふさわしく生きるべきである（4—8）。

論争と分派を避けること（3：9—11）

テトスは愚かな議論をさけるよう命じられた。また、分派を起こす者は、1、2度戒めた後、除名するよう命じられた。そのような者は、墮落しており、自分で悪いと知りながら罪を犯しているからである。

6. 終わりのあいさつ（3章12—15節）

この手紙は、テトスとその同労者に対して2、3の短い指示を与えた後、信者たちに「良いわざにひたすら励むように」と最後の訴えをして終わっている。この「良いわざ」という表現は、この短い書簡の中に7回も見られることから、重要な主題のひとつであると言える。

ピレモンへの手紙

はじめに

本書簡の背景

パウロは、ローマで投獄されていたとき、オネシモという名の逃亡中の奴隷と出会い、彼をキリストに導いた。何という“偶然”だろうか、パウロはその奴隷の主人を知っていた。それはピレモンという名のコロサイのキリスト者であった。

本書簡の目的

パウロは、ピレモンのもとにオネシモを送り返す際に、彼が奴隷としてだけではなく、主にある兄弟としても復職できるよう、とりなそうと決心した。この手紙は、気配りの利いたとりなしの傑作である。

本書簡の執筆年代

この美しくも丁重な手紙が書かれたのは、おそらく紀元62年頃、コロサイ人への手紙が書かれたのと同じ頃だろう。パウロはテキコに命じてその両方の手紙を届けさせ、彼といっしょにオネシモも送り返したのである（コロサイ4：7—9）。

本書簡の概要

1. 始めのあいさつ（1—3節）
2. パウロ、ピレモンのことを感謝し、祈る（4—7節）
3. パウロ、オネシモのことを懇願する（8—16節）
4. パウロ、ピレ蒙の従順を促す（17—20節）
5. 終わりのあいさつ（21—25節）

1. 始めのあいさつ（1—3節）

この手紙が書かれたとき、囚人であるパウロのそばにはテモテがいた。手紙の宛て先には、アピヤとアルキポ——ピレモンの妻と息子だと一般に信じられている——および、彼らの家で集まっていた地域集会も含まれている。

2. パウロ、ピレモンのことを感謝し、祈る （4—7節）

パウロはいつもどおり「恵みと平安」のあいさつを送っている。彼は、ピレモンの性格、特にその愛と信仰に対して心からの感謝を表明している。そして、彼の親切な行為によって、多くの人の心が「キリスト・イエスにあって私たちのものである良いもの」に向けられるようにと祈っている。ピレモンの寛大さと献身的な愛は、パウロに大きな慰めと励ましをもたらした。

3. パウロ、オネシモのことを懇願する（8—16節）

パウロは「オネシモを受け入れなさい」とピレモンに命じることもできたのである。しかし、そうする代わりに、年老いた、キリスト・イエスの囚人として、愛のこもった口調で、「オネシモを優しく受け入れてほしい」と懇願したのである（8—10）。オネシモという名には「役に立つ」という意味があるにもかかわらず、彼は主人の役に立つどころではなかった。しかし、回心したオネシモは、今や、ピレモンにも、信仰の父であるパウロにも役立つ者となった（11）。オネシモを送り返すとき、パウロは、まるで自分自身のからだの一部を失うかのように感じた。パウロは、信仰による「わが子」（オネシモ）を自分のもとにとどめておくことによって、結果的にピレモンがパウロに助手を提供していることにしたいと願っていた。しかし、ピレモンが心から同意しない限り、そうしようとはしなかった（12—14）。主

人であるピレモンは一時的には奴隷を失ったが、今や「しもべ」と「兄弟」を同時に、しかも永遠に獲得しようとしていたのである。その「しもべ」は自分の体力をもって彼に仕え、その「兄弟」は信者として彼と交わることになるだろう (15, 16)。これほどすばらしい社会的かつ道徳的な変化をもたらすことができるのは福音だけである。

4. パウロ、ピレモンの従順を促す (17—20節)

ピレモンは、パウロ自身を受け入れたのと同じようにして、オネシモを受け入れるべきであった。オネシモが盗みを働いていた場合は、パウロがそれをピレモンに賠償するつもりだった (ピレモンはパウロのおかげで回心したのだったが)。オネシモを受け入れることによって、ピレモンはパウロの心に大きな喜びと励ましをもたらすだろう。

5. 終わりのあいさつ (21—25節)

パウロは次のように確信していた。すなわち、ピレモンがオネシモに関する要請を尊重してくれるのはもちろん、この次に訪れるときの宿も提供してくれると (21, 22)。手紙は、パウロの同労者たち5名のあいさつと、「恵みが手紙の読者たちの霊とともにあるように」という祈りをもって終わっている (23—25)。

ヘブル人への手紙

はじめに

本書簡の著者と執筆年代

この手紙の著者は明らかではないが、執筆年代は、キリスト昇天（紀元30年頃）からエルサレム神殿の破壊（紀元70年）までの40年の間であることが、その内容から分かる。キリストはすでに神の右の座に着かれているが（10：12）、神殿はまだ損なわれていなかったからである（13：10, 11）。

ヘブル人たちの信仰にとっての危険

現在と同様、この当時も、キリストにある信仰を告白したユダヤ人たちは、ユダヤ教に戻るよう、とてつもない圧力をかけられていた。彼らは、栄光ある祭司職、壮麗な神殿、いけにえの儀式の壮観さを思い出した。名ばかりの信者は、キリストを否定して再び先祖伝来の儀式宗教に戻る危険にさらされていた。

本書簡のテーマ

この手紙のテーマは、「キリストが、旧約聖書のすべての型と影の成就である」ということである。キリストは、ユダヤ教のどの英雄よりもすぐれており、そのみわざは、いにしえのどの犠牲よりもまさっている。キリストのためにユダヤ教を捨てる者は、「儀式」から「現実」へと移行するのである。キリストを捨ててユダヤ教に戻る者は、背教という故意の罪を犯すのである。

本書簡の概要

1. 預言者にまさるキリスト（1章1—3節）
2. 御使いにまさるキリスト（1章4節—2章18節）
3. モーセにまさるキリスト（3章1節—4章13節）
4. アロンの大祭司職にまさるキリストの大祭司職（4章14節—7章28節）
5. アロンの務めにまさるキリストの務め（8章）
6. 旧約のささげ物にまさるキリストのささげ物（9章1節—10章18節）
7. 勧めと戒め（10章19節—13章17節）
8. 結び（13章18—25節）

1. 預言者にまさるキリスト（1章1—3節）

キリストは預言者にまさっている。神は多くの様々な方法で預言者たちに語られたが、今や御子によって語られた。御子は神が任命された相続者であり、万物の創造者であり、神の栄光の輝き、神の本質の完全な現れであり、万物を保持する全能者であり、罪をきよめるいけにえであり、王座に着かれた主である。

2. 御使いにまさるキリスト（1章4節—2章18節）

高く引き上げられた御子（1：4—14）

キリストは神の御子として御使いよりもまさっている。キリストは御使いよりもすぐれた地位と御名を有しておられる。キリストは御使いたちが礼拝すべき対象である。父なる神はキリストに「神よ」と呼びかけておられる。キリストは永遠の主権者であり、義なる王であり、偉大な創造主である。キリストには絶対的な主権が約束されているが、御使いは「仕える者」にすぎない。

これほどすばらしい救いを無視することの危険（2：1—4）

ここで最初の警告が挿入されている（この手紙には数か所にこのよ

うな警告が挿入されている)。キリスト者に与えられた啓示から「押し流されてしまう」危険は常にある。もし、律法を破った者が厳しく処罰されたとすれば、このすばらしい救い（この救いは、キリストによって紹介され、使徒たちによって証言され、神が奇跡によって確証されたものである）を無視する者には一体どれほどの罰が下るだろうか。

失われた後、回復された統治権（2：5—9前半）

キリストは、「神の子」としてだけでなく「人の子」としても御使いにまさっている。ここから話の筋は多少込み入ってくる。もともと神は地上の統治権を（御使いにではなく）人間にお与えになった（5—8前半）。けれども、人間は罪のためにその統治権を失った。そのため、私たちは今日、人間がすべてのものを完全に支配しているのを見ていない。しかし、栄光と誉れの冠をお受けになったイエスのことは見ている。私たちは、人間が最終的に地上を統治するためのカギをイエスのうちに見いだす。主はやがて「人」として世界を治めるために戻って来られ、アダムが失った統治権を始め、多くのものを回復してくださるのである（8後半—9前半）。

キリストの恥辱から生じた祝福（2：9後半—18）

キリストは、現在の栄光ある御座に着かれる前に、受肉において、受難において、死において、実際に御使いよりも低いものとなられた（9後半、10）。その人間性の完全さは、ユダヤ人の聖書（旧約聖書）によって十分確証される（11—13）。主が恥辱をお受けになった結果あふれ出た祝福の中には、サタンの滅び、恐れからの解放、罪の贖い、誘惑されている者への助けなどが含まれる（14—18）。

3. モーセにまさるキリスト（3章1節—4章13節）

「しもべ」と「御子」（3：1—6）

次に「キリストはモーセにまさる」ということが証明されている。ふたりとも与えられた本分において忠実であったが、主イエスは神の家の建設者として（モーセはその家で仕えたにすぎない）、神として、御子として、より偉大なお方である。

心をかたくなにする事の危険（3：7—19）

ここで2番目の警告が記されている。聖霊が警告しているのは、「心をかたくなにする」という、常に存在する危険に対してである。その罪のために、かつてのイスラエルは、カナンへの地における神の安息から締め出された（7—11）。信者であると公言する者はみな、邪悪で不信仰な心にならないよう、つまり罪に欺かれて心をかたくなにしないよう注意すべきである（12—15）。イスラエルの民のことに話を戻すと、エジプトから脱出した20歳以上の兵士たちはみな、神の御怒りを引き起こし、荒野で滅ぼされ、神の安息から締め出された。彼らは不信仰の罪ゆえに神の安息に入ることができなかったのである（16—19）。

神の安息に入るよう努めること（4：1—13）

2番目の警告が続く。私たちは神の安息に入り損ねないように注意しなければならない。ここでは、いくつかの異なった「安息」が言及されている。神は7日目に休まれた。その後、神は、「不信仰なイスラエルの民をわたしの安息に入らせない」と誓われた。もし、ヨシュアがカナンへの地で神の最終的な安息を彼らに与えていたら、後の時代のダビデが安息について語ることはなかっただろう。信じている私たちは、（今、現在も）安息に入る。そして、神の民のために安息日の休み（天での永遠の休み）が残されている。私たちはこの安息に入るよう努めなければならないし、不従順と不信仰は、「神のことば」と「すべてをご存じである主」によって必ず暴露されることを忘れてはならない。

4. アロンの大祭司職にまさるキリストの大祭司職 (4章14節—7章28節)

あわれみ深い私たちの大祭司(4:14—16)

警告は終わり、キリストの大祭司職というテーマに入る。キリストの大祭司職はアロンの大祭司職よりもまさっている(4:14—7:28)。私たちには、天高く引き上げられた、神の御子イエスという偉大な大祭司がおられる。イエスは実に思いやりのあるお方であり、徹底的に試みられたお方であり、罪のない完全なお方である。したがって、私たちは、信仰を堅く保ち、祈りにおいて大胆に恵みの御座に近づくべきである。そうすればあわれみを受け、時宜を得た恵みを見いだすだろう。

アロンの祭司職の資格(5:1—4)

ユダヤ教の大祭司は人々の中から選ばれ、彼らを代表して罪のためのささげ物といけにえをささげた。彼らは人間の弱さに同情し、自分自身と民のためにいけにえをささげた。彼らは神に召された者たちであった。

完全かつ永遠なる「キリストの祭司職」(5:5—10)

キリストは神によって任命された、メルキゼアクの位に等しい大祭司である。キリストの完全な人間性は「祈り」と「涙」と「神に対する信頼」によって明らかである(その信頼は復活によって報われた)。キリストは神の御子であるにもかかわらず、苦しみをとおして従順を学ばれ、ご自分に従うすべての者にとって完全な「救いの源」となられた。

失望させる霊的未熟(5:11—14)

3番目の警告は、「背教」や「信仰の墮落」といった危険に対する

ものである（5：11—6：20）。著者は、キリストの祭司職というテーマに沿ってさらに深く学びたかったのだが、読者が未熟であったために、神の真理を十分に理解させることができなかった。彼らはすでに教者になっていなければならなかったのに、いまだに「乳」を必要としていた。彼らは未熟な子どもであり、識別力のある大人ではなかった。霊的に成熟した信者は、ユダヤ教の祭司職とキリストの祭司職との優劣を見分けることができる。

進歩しないことの危険（6：1—8）

警告は続く。彼らは旧約の基礎的な教義、すなわち、悔い改め、神に対する信仰、儀式上のきよめ、いけにえの頭に手を置くこと、復活、さばきといった事柄をあとにし、クリスチャンとしての成熟を目指して進むべきである（1—3）。4節と5節で述べられている人々は、キリスト者であると公言しながら、真に新生していない人々のことである。彼らは光を受け（キリストについて多くのことを学び）、天からの賜物の味を知り（しかし、食べなかった）、聖霊にあずかる者となり（たとえば、罪の自覚という面において）、神のすばらしいみことばを味わい（しかし、それに従わなかった）、千年王国の時代に再び行われる奇跡を見た。もし、彼らが墮落し、神の御子を再び十字架につけ、恥辱にさらすならば、彼らを再び悔い改めに立ち返らせることはできない。彼らは（役立つ植物ではなく）、いばらやあざみをもたらす土地——やがて焼かれる運命にある土地——のようなものである。彼らは背教者である（4—8）。

キリストにある神の目的（6：9—20）

背教者とは違い、真の信者の特徴は「救いと同時に起こること」にある。彼らの信仰が本物であることは、彼らの行いと愛によって証明される。彼らがすべきことは、最後まで前進し続け、信仰と忍耐をとおして約束のものを相続することである（9—12）。族長であるアブ

ラハムはその一例である。神は、ご自分をさして誓われ、「数多くの子孫を与える」と彼に約束された。アブラハムは辛抱強く耐え、その結果、約束は成就した。神は、ご自分を信じる民に絶対的な確信を得させるために、永遠の救いの「約束」に「誓い」をお加えになった。神の約束と誓いは、私たちに絶対的な確信と力強い励ましを与える。私たちは滅ぶべきこの世界から天にある逃れの町へ逃れてきたからである。主イエスがすでに幕の内側に入られたという事実によって、私たちが最終的にはそこに入ることが保証されている（13—20）。

イエスとメルキゼデク（7：1—3）

著者は、「キリストの大祭司職がアロンの大祭司職にまさる」ということをさらに明らかにするために、メルキゼデクに関する歴史上の事実をいくつか述べている。彼はサレムの王であり、神の祭司であった。彼はアブラハムを祝福し、彼から「十分の一」を受け取った。彼の名前には「義の王」という意味があり、また「サレム」には（「シャローム」のように）「平和」という意味があるため、彼は「平和の王」でもあった。祭司職に関する限り、彼には系図もなく、生没に関する記録もない。このように、いつまでも祭司としてとどまっているという点で、彼は神の子に似ていた。

メルキゼデクの祭司職（7：4—10）

続いて著者は、「メルキゼデクの祭司職はアロンの祭司職にまさる」ということを証明する。まず第1に、アブラハムはメルキゼデクに「十分の一」をささげた。レビはアブラハムの直系の子孫だったから、ある意味ではレビがメルキゼデクに十分の一をささげたのと同じである。メルキゼデクがアブラハムを祝福したという事実は意義深い。上位の者が下位の者を祝福するからである。レビ系の祭司職は死をもって終わったが、メルキゼデクの祭司職は永遠に続く。

新しい祭司職の必要（7：11—22）

もしレビ系の祭司職がその目的を完全かつ最終的に果たしたのであれば、別の祭司職がそれに続く必要はなかつただろう。しかし、実際には別の祭司職が立てられた。キリストの祭司職がレビ系の祭司職を無効にしたのである。祭司職に関する律法そのものも一変した。キリストはユダ族出身であり、祭司が選ばれるべきレビ族出身ではない。キリストは、血筋によってではなく、固有の御力によって祭司となられたのである。キリストは永遠に存在される。古い律法は廃棄され、さらにすぐれた希望が導き入れられた。イエスは、「あなたを永遠に祭司にする」という神の誓いによって、その職務につかれた。これによってイエスはさらにすぐれた契約の保証となられた。

変わることはない「キリストの祭司職」（7：23—25）

ユダヤ教の祭司はみな、遅かれ早かれ死んでしまうので、その職務は代々引き継がれた。しかし、キリストは永遠に生きておられるので、その祭司職はいつまでも続く。つまり、キリストは、ご自分をとおして神に近づく人々をいつでも救うことができになる。キリストはいつも生きていて、彼らのために天でとりなしておられるからである。

完全な「キリストの祭司職」（7：26—28）

キリストの祭司職をアロンの祭司職よりもまさったものとする特徴がもうひとつある。それはキリストご自身の卓越性である。主は非の打ち所のない性格を持ち、最も高い所まで引き上げられ、ただ1度だけ完全ないけにえとなられ、さらにすぐれた任命によって祭司となられた。

5. アロンの務めにまさるキリストの務め（8章）

私たちの偉大な大祭司（8：1—3）

この箇所から、「キリストの務めがアロンの務めにまさっている」

ということが分かる（1—13）。まず、ふたつの聖所の違いによって。天の聖所には、神の右に着座された大祭司がおられる。その聖所は（人間によってではなく）主によって設けられたものである。すべての祭司同様、私たちの主も何かささげ物を持っていなければならなかった（このことについては後ほどじっくりと論じられる）。

さらにすぐれた務め、約束、契約（8：4—6）

地上の幕屋における祭司は律法による資格を備えていなければならなかった。ユダ族であったキリストは、その職務につく資格がなかった。地上の幕屋は天の幕屋の写しと影にすぎなかった。キリストは、さらにすぐれた約束に基づいて制定された、さらにすぐれた契約の仲介者だから、キリストの務めのほうがまさっている。

新しい契約（8：7—13）

契約のことを述べると、おのずと「律法」と「恵み」が対比されるようになる。新しい契約が存在するという事は、初めの契約が完全なものではなかったということになる。神ご自身が、最初の契約に対する不満を表明され、新しい契約を約束された。この新しい契約は、もっぱら神のみこころによるもので、「神についての知識を心にかきつけること」「罪の赦し」「神が罪を忘れ去ること」を約束している。

6. 旧約のささげ物にまさるキリストのささげ物 （9章1節—10章18節）

地上の幕屋（9：1—5）

次に私たちが学ぶことは、キリストのささげ物が旧約時代のささげ物よりもまさっているということである（9：1—10：18）。レビ系の祭司制度では「地上の聖所」があった。それは「聖所」と「至聖所」というふたつの部屋に分かれており、それぞれふさわしい備品が置かれていた。著者はそれぞれの部屋にあった物を列記しているが、いち

いち詳しく述べることはできない。

地上における奉仕の限界（9：6—10）

祭司たちは最初の部屋には絶えず入って行ったが、2番目の部屋には大祭司しか入ることができなかった。それも1年に1日だけであり、そのうえ自分の罪と民の罪のためにささげる血の入った鉢を携えなければならなかった。これらの厳しい制限から次のことが明らかだった。すなわち、第1の幕屋が存続している限り、神のみもとへ完全に近づくことはできないのである。また、ささげ物によって罪の意識が礼拝者から完全に取り除かれることもなかった。それらは儀式上のけがれを扱っていたにすぎず、一時的な規定にすぎなかった。

天の聖所（9：11—14）

これをキリストのみわざと比べてみよ（キリストは、さらにすぐれた幕屋で仕えておられる、さらにすぐれた大祭司である）。キリストは、ただ1度、天の聖所に入り、私たちのために永遠の贖いをなすとげられた。主は、動物の血ではなく、ご自分の血を携えて行かれた。旧約時代は雌牛の灰によって外面上、儀式上のきよめが与えられたが、キリストの血は内面上のきよめを与えるものであり、良心を死んだ行いからきよめて、人を生ける神に仕える者とする。

「血による贖い」の必要（9：15—22）

キリストは新しい契約の仲介者であり、その死によって、旧約時代の聖徒たちは、モーセの律法の下で犯した罪から贖われた。それで彼らは永遠の遺産を受け取ることができる。遺言は、それを作成した者が死んだときにのみ効力を生じる。同様に、初めの契約も、死によって、すなわち犠牲の動物の死によって承認された。モーセは血を手に取り、律法の書と民と幕屋に注ぎかけた。たいていの場合、きよめには血が必要であったし、罪の赦しには欠くことのできないものである。

キリストの犠牲のすばらしさ（9：23—28）

こうした儀式は、地上の聖所や器をきよめるには十分であったが、天の聖所はさらにすぐれたいけにえを要求した。その必要はキリストによって完全に満たされた。キリストは、人間の手による聖所ではなく、天そのものに入られたのであり、私たちのために神の御前に現れくださるのである。キリストは、動物の血を携えた昔の大祭司とは違い、いけにえを繰り返しささげたりはなさらなかった。それどころか、ご自分といういけにえによって罪を取り除くために、ただ1度だけ来られたのである。古い契約は、律法に違反した者たちに死とさばきを宣告した。新しい契約は、「キリストが罪の問題を処理するために来られたこと」と、「主を待ち望んでいる人々を救うために再び来られること」を告げている。

動物のいけにえの不十分な点（10：1—4）

旧約の法体系の弱点は「いけにえによっては、罪が赦されたという潔白な心が与えられない」ということであった。それどころか、年ごとに罪が思い出されたのである。動物の血は、たったひとつの罪さえ取り除かなかったのである。

キリストの死は神のみこころを全うする（10：5—10）

キリストは、この世に来られたとき、父なる神が古い制度に満足しておられないことを悟り、進んでご自分をいけにえとしておささげになった。そうすることによって、主は、かつてのいけにえの制度を廃止なさり、信じる者をただ1度で聖なるものとする偉大ないけにえとなられた。

キリストの死は聖別された人々を全うする（10：11—14）

レビ系の祭司は毎日立って、絶えずいけにえをささげたが、それら

は決して罪を取り除くことができなかった。一方、キリストは、永遠に有効な、たったひとつのいけにえをささげられたのである。それからキリストは神の右の座に着かれた。キリストは、たったひとつのいけにえによって信者に、「神の御前における完全な立場」と「罪に関する完全な良心」をお与えになった。

新しい契約の永遠の力（10：15—18）

聖霊は旧約聖書をとおして次のようにあかししている。すなわち、罪は、新しい契約の下では、事実上、ただ1度だけで処理されることになる。

7. 勧めと戒め（10章19節—13章17節）

神に近づくこと（10：19—22）

私たちは自信を持って聖所に入ることができるのだから、また、私たちに偉大な祭司（キリスト）がおられるのだから、きよめられた良心ときよい生活をもって、真心から、大胆に、神に近づくべきである。

告白をしっかりと保ち続けること（10：23—25）

また、私たちはしっかりと希望を告白すべきであり、互いに勧め合って愛と善行を实践すべきである。また、信者としてともに集い、交わること——集会——をやめるべきではない。この箇所の「集まることをやめる」には「集会に出席するのをやめる」という以上の意味がある。それは信仰を捨てて背教者になることを意味する。

背教に対する警告（10：26—31）

4番目の警告は、背教という故意の罪、つまり、キリストを捨てて別の宗教に走る罪を扱っている。自分はキリスト者だと公言し（しかし、本当に生まれ変わってはいない）、地域集会の交わりに加わって

いながら、わざと、しかも悪意をもってキリストを拒む者は背教者である。彼らが救われる可能性は全くない。あるのは「さばき」と「すさまじい炎」だけである。もし、モーセの律法を破った者がその罪ゆえに死んだとすれば、背教者にはどれほど厳しい処罰が下ることだろう。彼らは神の御子の申し出をはねつけ、尊い御血を冒瀆し、聖霊を侮る者たちである。その処罰は絶対に避けることができないものである、ことばで言い表すことのできないものである。

迫害の下での励まし（10：32—39）

迫害されている人々を励ます必要がある。ヘブル人信者たちは、試練の下でも、過去の経験に励まされて、辛抱強く耐え忍ぶべきである。報酬を得る日が近いことを励みとして信仰を守り通すべきである。神のみこころを痛めることを恐れて、信仰が後退するのを避けるべきである。

目に見えないものを見ること（11：1—3）

本章以降のキーワードは「信仰」と「忍耐」である。11章は信仰のビジョンと忍耐を取り扱っている。旧約時代にも、霊的にすばらしいビジョンを持っていた人々や、主を拒むことなく、途方もない恥辱とむごい苦しみに耐えた人々がいたが、本章はそのような男女のことを紹介している。信仰によって、神の約束は、まるですでに成就されたかのように現実的なものとなった。信仰は彼らの希望を実質的なものにし、目に見えないものを見ることを可能にした。信仰によって、私たちは「創造」と「源」と「物質の構成」を理解することができる。

歴史が始まった頃の信仰（11：4—7）

信仰によって、アベルは、神に喜ばれる（おそらく、いけにえの血が流されたからであろう）いけにえを携えて神に近づいた。神の約束を信じたエノクは神に喜ばれたので、死を経験することなく天に移さ

れた。信仰がなければ、神に喜ばれることはできない。信仰によって、ノアとその家族は、全世界にわたる大洪水から救われた。

忠実なアブラハム（11：8—12）

アブラハムは、目的地がどこかも分からないまま故郷を旅立ち、神が彼にすでに与えておられた地に、寄留者のように住むことによって自分の信仰を実証した。信仰によって、サラは、年老いた身でありながら子を宿す力を与えられた。このようにして、アブラハムは、死んでも同然のからだであったが多くの民族の祖先となった。

天の故郷（11：13—16）

これら族長たちは、約束されたものを手に入れることなく死んだが、神の約束は必ず成就すると心から信じていたので、郷里に引き返そうとはしなかった。彼らは自分たちの天の故郷を待ち望んでいた。

族長たちの信仰（11：17—22）

アブラハムの信仰が最も試されたのは、「イサクをささげよ」と命じられたときであった。彼は、神が（もし必要ならば）イサクを死者の中からよみがえらせることができることを知っていた。神は、イサクから数多くの子孫が生まれ出ると約束されたからである（17—19）。臨終に際してでさえ、イサク、ヤコブ、ヨセフは強い信仰を持ち、神がご自分の約束を果たされることを確信していた（20—22）。

モーセの信仰（11：23—28）

モーセの両親は、自分たちの子どもが、ある特別な運命をもって生まれてきたことを感じ、王の怒りに触れないようその子を隠した。モーセ自身は名声も、世の楽しみも、富も、この世の政治も、エジプトの宗教も捨て去り、虐げられた神の民とともに生きる道を選んだ。

信仰による勝利（11：29—35前半）

信仰によって、紅海の水は分かれ、エリコの城壁は崩れ落ち、ラハブとその家族は滅びを免れた（29—31）。信仰によって、諸外国の征服、道徳上の達成、霊的な到達、肉体上の救出、軍事上の勝利、からだの復活がもたらされた（32—35前半）。

信仰によって圧制に勝利すること（11：35後半—40）

しかし、信仰によって、ある信者たちには、殉教、あざけり、投獄、石打ちの刑、手足などの切断、大量殺人、財産を奪われ追い立てられること、社会からの排除を耐え忍ぶことも可能になった。彼らは神の約束が完全に成就するのを見ないまま死んだが、主が再び来られるとき、それがすべて成就するのを見るであろう。

信仰の競争（12：1—4）

私たちは、11章に記されていた旧約時代の証人たちの模範に心を奮い立たせるべきである。私たちは、何ものにも妨げられることなく、強い忍耐をもって、イエスの模範に倣い、走り続けるべきである。イエスは、私たちがまだだれも経験したことのないことを、血を流すまで、すなわち、死に至るまで耐え忍ばれたのである。

主による懲らしめ（12：5—8）

迫害と苦難は、神がご自分の子どもたちのために設けられた教育課程の一部である。こうした試練は、神が生み出されたものではなく、神が利用されるものである。真の神の子はみな、忍耐をもたらず訓練へと召されるものである。

親による懲らしめ（12：9—11）

人間の親は幼い子どもたちをしつけ、訓練する。たとえ、その訓練がしばしば不完全であったとしても、子どもは親を尊敬するようにな

る。それならなおさらのこと、私たちは神の訓練に服従すべきである！懲らしめは当座は喜ばしいものではないが、最終的には大きな実を結ぶものである。

靈的活力を取り戻す（12：12—14）

私たちは迫害に負けたり試練にへたばったりすることなく、そうした経験を、絶望しそうになっている他の人々の心を奮い立たせるための手段として用いるべきである。私たちは平和と聖潔を求めて常に努力すべきである。

背教に対する警告（12：15—17）

交わりのうちにいながら神の恵みに応答しない者、背教という苦い根から芽を出させる者、不品行な者、エサウのように靈的価値を軽んじる者たちに対して5番目の警告が与えられている。エサウは後に自分の考えを変えたが、そのときにはもう遅すぎたのである。

律法の恐ろしさ（12：18—21）

律法に戻りたいと思う者は、律法が与えられたときの、あの恐ろしい、近づきがたい状況を思い出すべきである。あのとき、すべてのものは、近づくことのできない距離と危険を物語っていた。実際、その声は「近づいてはいけない」と言った。モーセでさえ恐れたのである。

輝かしい一団（12：22—24）

これとは対照的に、新しい契約は、「神」と「恵みの歓迎」に近づいていることを物語っている。信仰によって、信者たちは天の聖所に入り、そこで無数の御使いたち、すでに死んだ集会の聖徒たち、神、旧約時代の聖徒たち、主イエス、主が流された御血のすべての価値の前に立つのである。

天と地を揺り動かす神の声（12：25—27）

神の御声が律法の中に聞こえたにもかかわらず、その声に聞き従わなかった者たちは、当然のことながら処罰された。特権が増せば増すほど責任も増す。神は、キリストにおいて、ご自分の最高かつ最終的な啓示をお与えになった。いま天から語られている神の御声を拒む者は、律法を破った者よりさらに責任がある。その処罰を免れることはできない。

揺り動かされない王国（12：28, 29）

真の信者は、決して揺り動かされない御国を持っている。この事実
に心を燃やし、慎みと神に対する畏れをもって、敬虔に神に仕えるべきである。

終わりの（道徳上の）勧め（13：1—6）

ここでの具体的な勧めは、キリスト者が育成すべき美点を取り扱っている。すなわち、兄弟愛、旅人をもてなすこと、投獄されている信者たちへの配慮、苦しみにあっている聖徒たちへの同情、結婚における聖潔、自分の持っているもので満足することである。この手紙はざっと、私たちがキリストにあって持っているもののすべてを思い起こさせて来た。私たちが満足できないなどということが果たしてあり得るだろうか。

終わりの（宗教上の）勧め（13：7—17）

私たちは、霊的な分野における指導者たちを尊敬し、その信仰に倣うべきである。異なった教えによって迷わされてはならない。私たちは、自分自身を聖別し、私たちの祭壇であるキリストにささげ、キリストのはずかしめを身に負って、宿営の外におられる主のみもとに出て行くべきである。私たちは祭司として、「賛美のいけにえ」と「持ち物」をささげるべきである（7—16）。最後に、私たちは指導者た

ちに従うべきである。彼らはやがて私たちの霊的状态を神に報告しなければならぬからである。彼らが喜んでそうしたとしたら、私たちにとって最大の利益となる (17)。

8. 結び (13章18—25節)

ヘブル人に宛てられた、他に比類なきこの手紙は、祈りを求める個人的な訴えと、手紙の読者たちのために神の祝福を求めるすばらしい祈りの後、あいさつをいくつか付け加えて終わっている。

ヤコブの手紙

はじめに

本書簡の執筆年代

この手紙は、ヤコブから（当時、知られていた）世界中に四散していたユダヤ人キリスト者に宛てて書かれたもので、新約聖書の書簡の中では最も早い時期（紀元45年頃）に書かれたものかもしれない。

本書簡のメッセージ

本書はきわめて実践的な書簡であり、「階級制度や身分差別、思ったことをそのまま口にする、ねたみ、争い、貧しい人々を虐げること」といった罪を犯している者を非難している。

本書簡の強調点

ヤコブが強調しているのは、「単なる口先だけの信仰」と「結果として良い行いが生じる信仰」との違いである。彼は「あなたの行いを私に見せなさい。そうすれば、私は、（救いをもたらす）信仰があなたにあることを信じよう」と言う。彼は、「救いは信仰のみによる」というパウロの教えを否定しているのではなく、「真の信仰には必ず良い行いが伴う」と主張しているのである。本書簡は「苦難の中でも耐え忍び、互いに祈り合いなさい」という勧めで終わっている。

本書簡の概要

1. あいさつ（1章1節）
2. 試練と誘惑（1章2—18節）
3. 神のことば（1章19—27節）

4. えこひいきすること（2章1—13節）
5. 信仰と行い（2章14—26節）
6. 舌を制御すること（3章1—12節）
7. 真実の知恵と偽りの知恵（3章13—18節）
8. 貪欲^{どんよく}——その原因と矯正法（4章）
9. 金持ちと、彼らに迫り来る悲惨（5章1—6節）
10. 忍耐の勧め（5章7—12節）
11. 「祈り」と「病人のいやし」（5章13—20節）

1. あいさつ（1章1節）

「ヤコブ」とは、おそらく、イエスの「兄弟」だったヤコブのことだろう。それにもかかわらず、彼は自分のことをイエスの「しもべ」と告げている。記されているとおり、彼は「ディアスポラの民」（訳注：バビロン捕囚後、四散したユダヤ人たちのこと）の中のユダヤ人信者たちに宛てて手紙を書いている。

2. 試練と誘惑（1章2—18節）

試練から得る利益（1：2—8）

ヤコブはまず、「きよい試練」という主題に自分の注意を向けたあとで、「けがれた誘惑」にも注目する。私たちは試練のうちにあっても喜ぶことができる。試練によって不動の信仰が生じることを知っているからである。もし終わりまで耐え忍ぶなら、私たちは、聖霊による美德をすべて備えた、成熟した、円満なキリスト者になる（2—4）。試練を耐え忍ぶには知恵がいるが、神は、信仰をもって願い求める者にそれを与えてくださる。信仰が揺らぐ者はそれを受けない（5—8）。

富む者の試練と貧しい者の試練（1：9—11）

人が富んでいるか貧しいかにかかわりなく、いつまでも残る霊的な

利益は人生における試練から得られる。貧しい人は自分の霊的な富を喜ぶことができ、富んでいる人は、自分のお金を失ったとき、喜ぶことができる。その人が、「自分も自分の富もはかないものであり、霊的に価値あるものだけが永遠に残る」ということを教えられている場合は特にそうである。

試練と誘惑に耐えること（1：12—18）

試練というテストに合格した人は「いのちの冠」を受ける（12）。ここで主題は「けがれた誘惑」に移る。それは神から来るのではなく、私たち自身の墮落した邪悪な性質から来る。それはまず心の中で始まり、次に罪深い行為を生じ、やがてその行為は死に至る。父なる神——すべての光の源であるお方——からは良いものだけが来る。そのうえ神は、（新生をとおして）私たちの父でもあり、私たちが模範的な聖徒であることを望んでおられる。

3. 神のことば（1章19—27節）

私たちは被造物の初穂になることができる。そのためにすべきことは、「聞くとき、語るとき、怒りを覚えるときに自制心を働かせること」、「進んで悪を捨て去ること」、「みことばを受け入れ、それに従うこと」、「自分の舌にくつわをかけること」、「孤児ややもめの世話をすること」、「この世から自分をきよく守ること」である。

4. えこひいきすること（2章1—13節）

キリスト者の信仰を実践する際に、人を分け隔てすべきではない。たとえば、裕福な人はよく目立つ席に案内しておきながら、貧しい人は後ろのほうの席に座らせるといったことをすべきではない。そのような不公平な態度は、「神は貧しい人たちを選ばれたのに、金持ちは（いかにも金持ちらしく）貧しい人をしいたげ、主の御名をけがしている」という事実を見落としている。最も大切な律法は、「自分の隣

人を自分自身のように愛しなさい」という命令である。もし人をえこひいきするなら、この律法を破ったことになり、その結果、すべての律法を犯したことになる。もし私たちが公平であれば、(この問題以外で罪を犯した結果) 私たちの上を下るさばきは、あわれみに代わることだろう。

5. 信仰と行い (2章14—26節)

行いのない信仰は死んでいる (2:14—20)

同情的なことばには、それを裏づける行いがなければ意味がないが、信仰も同じである。行いのない信仰によってはだれひとり救われない(14—17)。「私は信仰を持っている」と言うものの、それに伴う行いのない人は、自分の信仰を実証することができない。信仰は、良い行いを伴った生活を送ることによってのみ、証明することができる。「神はおひとりだ」と信じるだけでは十分ではない。行いのない信仰は役に立たない。これは「人は行いによって救われる」とか、「信仰プラス行いによって救われる」といった意味ではなく、「人を救うのは、必然的に良い行いを伴った生活をもたらすような信仰である」という意味である。

族長と遊女 (2:21—26)

忠実な者の父アブラハムは、イサクを祭壇にささげたとき、行いによって義と認められたが、それは彼が信仰によって義と認められてから何年も経った後のことであった(創世記15:6)。カナン人の遊女ラハブは、ユダヤ人の斥候たちを迎え入れたことによって、自分の信仰が本物であることを証明した。信仰を抜きにして考えれば、これら——殺人と裏切り——は悪い行いであったが、信仰の実であったがゆえに良い行いであった。生きているからだが霊の存在を指し示すのと同様、良い行いは信仰を目に見えるものにする。

6. 舌を制御すること（3章1—12節）

語るべきことばを理性をもってあやつることが基本となる。教師は特にこのことを忘れてはならない。自分の舌を制することのできる人は、自分の生活のあらゆる面を制御できる人である。馬のくつわや船のかじのように、舌は比較的小さなものだが、善にも悪にも発展する大きな可能性を秘めている。舌には山火事のような破壊力がある。舌は野生の動物には似ていない。野生の動物は飼いならすことができるからである。舌は泉にも似ていない。舌は、のろうことも賛美することもできるが、真水と塩水の両方が湧き出る泉はないからである。舌はいちじくの木やぶどうの木にも似ていない。いちじくの木はいちじくの実だけ、ぶどうの木はぶどうの実だけを結ぶからである。人間の舌のように、善悪双方に対して巨大な力を持つものは、この大自然の中にはひとつもない。

7. 真実の知恵と偽りの知恵（3章13—18節）

本当に賢い人と世間的な知恵しかない人とは対照的である。本当に賢い人は、へりくだった心を伴う良い生き方によって自分の知恵を示す。彼は純真で、平和を愛し、思いやりがあり、柔順で、あわれみと良い実とに満ち、公平で、偽善的なところが全くない。世間的な知恵しかない人は、嫉妬深く、利己的な野心を持っている。彼は冷酷で、人を裏切り、悪魔のように振る舞う。彼が行くところには混乱とあらゆる邪悪な行いがある。

8. 貪欲^{どんよく}——その原因と矯正法（4章）

「争いと高慢」を「恵みと謙遜^{けんそん}」によって克服する（4：1—6）

キリスト者同士が争う原因は、満たされない激しい欲望である。私たちは神に祈りもしないで、何かを手に入れようとする。たとえ祈ったとしても、その動機は利己的なものである（1—3）。この貪欲は

霊的な姦淫と言える。聖霊が貪欲な競争心を創り出されたわけではない。神はへりくだる者に「打ち勝つ恵み」を授けてくださる（4—6）。

積極的なキリスト者の生き方へのステップ（4：7—10）

真の悔い改めにおける6つの段階は次のとおりである。「神に従いなさい」。「悪魔に立ち向かいなさい」。「神に近づきなさい」。「手（行い）を洗いきよめ、心（動機）をきよくしなさい」。「罪を深く悲しみなさい」。「主の御前でへりくだりなさい」。

悪口という悪（4：11, 12）

兄弟の悪口を言うことは、それを禁じている律法を非難することであり、律法を定め、さばきを行うお方である神の役割を奪うことである。

高ぶりという悪（4：13—17）

ヤコブは次に自信過剰という罪を非難している。私たちは、神に頼りもせずに、誇り高ぶって計画を立てるようなことはせず、神のみこころに従って計画を立てるべきである。人生のあらゆる面で神を認めないとしたら罪深いことである。

9. 金持ちと、彼らに迫り来る悲惨（5章1—6節）

金持ちは、やがて全財産を失ってしまうのだから、嘆き悲しむべきである。彼らは労働者たちを食い物にすることによって富を蓄え、裕福になり、その富を、勝手気ままなぜいたくな暮らしのために用い、正しい人を傲慢な態度で虐げてきた。

10. 忍耐の勧め（5章7—12節）

虐げられた信者たちは、主が来られるまで耐え忍ぶべきである。心に惧みを抱いてはならない。旧約の預言者たちは苦難の中で耐え忍ん

だ。ヨブも忍耐の立派な模範である。彼の場合、「主の目的」は、「彼が以前に持っていた2倍のものを神が彼にお与えになる」ということだった（7—11）。信者は、たとえ自分の発言が真実であることを証明するためでも、主の御名を始め、どのようなことばも軽率に用いるべきではない。ただ「はい」、もしくは「いいえ」だけで十分である。

11. 「祈り」と「病人のいやし」（5章13—20節）

明確な必要を満たすこと（5：13—16）

苦しむとき、喜ぶとき、病気の時、何らかの必要を覚えるとき、私たちは祈りをとおして主のみもとに行くべきである。病気の人には集会の長老たちを招いて、（病気の原因だったかもしれない）罪を告白すべきである。長老たちは彼のために祈り、彼にオリーブ油を塗るべきである。信仰による祈り（すなわち、その人を立たせるための、神の明確な約束に基づいた祈り）は病人をいやす。文脈全体から判断すると、「罪」と「病気」と「罪の告白」と「祈り」と「いやし」との間には関連があることに注目せよ。

エリヤの祈り（5：17, 18）

エリヤの祈りは、3年半の間、罪深いイスラエルにかんばつをもたらし、彼が再び祈ると、神は雨を降らせてくださった。

道に迷った者を連れ戻すこと（5：19, 20）

不信仰に陥った人々のために祈るならば、私たちは、彼らを、神の懲らしめの御手による「早死に」から救い、彼らの罪が神に赦されるのを見ることになるかもしれない。

ペテロの手紙 第一

はじめに

本書簡の執筆年代と受取人

この手紙は、紀元63年頃、ひどい迫害を受けていた小アジアのキリスト者たちに宛てて書かれた。

本書簡のメッセージ

ペテロのメッセージは希望のメッセージである。キリスト者は苦難の向こうに栄光を見ることができる。必要なときに神の恵みが不足することはない。キリスト者の富は朽ちることがない。キリストの血、神のことは、未来に受け継ぐべき資産——これらは迫害によっても奪い去られることはない。

本書簡の強調点

それゆえ、ペテロは聖徒たちに次のように勧めている。すなわち、「堅く立つように」、「苦難を必要なもの、一時的なもの、役立つものとみなすように」、「自分自身の罪のためではなく、善い行いのために苦しむように」と。彼は、すべての者に対して、「きよい生活を送ることによってキリストの模範に倣うように」と励ましている。それから、特に、市民である者たち、奴隷である者たち、夫や妻である者たちに語りかけ、「近づきつつある、この世の終わりのことを考えたとき、あなたがたの振る舞いはどうあるべきか」を強調している。集会の長老たちには「忠実であるように」、また若い者たちには「従順に従うように」と勧めている。

本書簡の概要

1. 始めのあいさつ（1章1，2節）
2. 信者の特権ある立場（1章3—12節）
3. 信者の立場にふさわしい振る舞い（1章13節—2章3節）
4. 新しい「家」と「祭司職」における信者の特権（2章4—10節）
5. 寄留者であるキリスト者との世との関係（2章11，12節）
6. 市民であるキリスト者との世の政治との関係（2章13—17節）
7. キリスト者であるしもべとその主人との関係（2章18—25節）
8. キリスト者である妻とその夫との関係（3章1—6節）
9. キリスト者である夫とその妻との関係（3章7節）
10. キリスト者同士の関係（3章8節）
11. キリスト者と迫害者との関係（3章9節—4章6節）
12. 終わりの日のための緊急命令（4章7—11節）
13. 苦難に関する勧めと説明（4章12—19節）
14. 集会に対する勧め（5章1—11節）
15. 終わりのあいさつ（5章12—14節）

1. 始めのあいさつ（1章1，2節）

1節の「寄留している……人々」とは、ディアスポラの民（訳注：バビロン捕囚後に四散したユダヤ人たち）の中のユダヤ人クリスチャンたちのことか、もしくは、迫害によって小アジアの5つの州に散らされた、異邦人キリスト者たちのことだったのだろう。いずれの場合も、彼らは選ばれ、聖別され、回心した人々であった。

2. 信者の特権ある立場（1章3—12節）

天にある資産（1：3—9）

あいさつの後、ペテロはすぐに神を賛美する。神がそのあわれみによって私たちにすばらしい救いを与えてくださったからである。現

在、私たちは、キリストの復活によって生ける望みを持っている。将来、私たちは、朽ちることも、汚れることも、消えて行くこともない資産——保護された民のための保護された立場——を受け継ぐようになる（3—5）。キリスト者はその苦難にもかかわらず喜ぶことができる。信仰の試練は尊いものであり、将来、称賛と栄誉に至るということを知っているからである（6、7）。私たちは救い主を1度も見たことはないが、彼を愛しており、信じており、喜んでいる（8）。信仰の（当面の）結果は、たましいの救いである（9）。

メシヤに関する預言（1：10—12）

旧約の預言者たちは、このすばらしい救いに関して当惑した。特に、メシヤはだれか、いつ現れるのか、どのようにして苦難と栄光をともに経験するのか、ということが分からなかった。彼らは、自分たちのためではなく、私たちのために書いているのだと教えられた。それらのことは、御使いたちには隠されているが、私たちには使徒たちをとおして啓示されている。

3. 信者の立場にふさわしい振る舞い （1章13節—2章3節）

父なる神の御前に生きる（1：13—21）

このすばらしい救いを受けた者には、それにふさわしい振る舞いが要求される。私たちは心を引き締め、身を慎み、常に明るい希望を持つべきである（13）。そして、悪にではなく、きよさに従順に従うべきである（14—16）。御父が公平なさばき主であることを忘れることなく、敬虔に振る舞い、栄光ある贖いを常に心に留めるべきである。私たちはキリストの血によって無益な生き方から買い戻されたのである。すばらしい贖い主によって、私たちは神——彼をよみがえらせ、彼に栄光をお与えになったお方——を心から信じている（17—21）。

互いに熱く愛し合うこと（1：22）

私たちは愛する心を持つべきでもある。これが新生した目的のひとつだからである。私たちは互いに熱心に、心から愛し合うべきである。

生けるみことばによって生き返る（1：23—25）

新生の種は、朽ちることのない、生ける神のことばである。はかない人間や短命の草木とは違い、みことばは永遠である。

悪意を捨て、みことばの乳を愛する（2：1—3）

私たちは、愛のないあらゆる行いをやめなければならない。そして、新生児が飽くことなく乳を欲しがるように、みことばに対する「食欲」をさらに増進させなければならない。

4. 新しい「家」と「祭司職」における信者の特権 （2章4—10節）

尊い特権（2：4—8）

ペテロはここで勧めをいったん打ち切り、信者の特権について考察する。その特権とは、神の新しい家と、キリスト者の新しい祭司職におけるものである。キリストはその家の「生ける石」である。信者たちは「生ける石」であり、「霊の家」であり、「聖なる祭司」である（4，5）。キリストは「礎石（礎の石）」であり、聖書に預言されたとおり、神によって選ばれ、定められた、尊い、完全に信頼に足るお方である（6）。信者にとってキリストは尊い。不信者たちは彼を拒んだが、神は彼に最も高い地位をお与えになった。神の恵みの福音を拒んだ結果、滅びに定められた者たちにとっては、キリストはつまずきの石になる（7，8）。

回復された特権（2：9，10）

今日の信者が享受している特権は、イスラエルが旧約時代に持って

いた特権であり、彼らが不信仰のゆえに失ってしまったものである。キリスト者は選ばれた種族、王国の祭司、聖なる国民、神の所有とされた民である。彼らは、神のすぐれた特性を宣べ伝えるために、やみの中から光の中に招かれた。神の民ではなかったのに神の民とされ、あわれみを受けない者であったのに、あわれみの対象として召し出された（9, 10）。

5. 寄留者であるキリスト者とこの世との関係 (2章11, 12節)

この世の寄留者ではなく、この世にあって寄留者であるキリスト者は、きよさと、非難されるところのない振る舞いを特徴とすべきである。そうすれば神に栄光を帰し、批判を封じることになる。

6. 市民であるキリスト者とこの世の政治との関係 (2章13—17節)

信者は自国の政府に従うべきであり、そうすることによって反対者たちを黙らせるべきである。信者は自由に生きるべきであって、勝手気ままに生きるべきではない。また、すべての人に適切な敬意を払うべきである。

7. キリスト者であるしもべとその主人との関係 (2章18—25節)

キリスト者である奴隷は、たとえ自分の主人が理不尽な要求ばかりしたとしても、主人に従うべきである。神がお認めになるのは、不当に苦しめられている者たちであって、苦しみを受けて当然の者たちではない。私たちはキリストに倣うようにと召されている。キリストは罪を犯したことがなく、悪巧みをせず、忍耐強く、穏やかで、謙遜で、献身的であった。キリストが私たちの罪のために死なれたのは、私たちが罪に死に、義に生きるためであった。私たちはかつて絶えずさま

よっていたが、今は、私たちの牧者であり、監督者であるお方のもとに帰ったのである。

8. キリスト者である妻とその夫との関係 (3章1—6節)

キリスト者である妻は、自分の夫に従うべきである。もし夫が未信者ならば、妻の無言の振る舞いによって神のものとされるように努めるべきである(1, 2)。そして、外見や身なりを飾ることばかりに気を取られるのではなく、「内面を飾ること」に専念すべきである。それこそ、朽ちることのないものであり、神の御前に価値あるものである(3, 4)。サラは「従う心」で自分を飾った。今日の妻も、何事も恐れずに義を行うことによって彼女に倣うことができる(5, 6)。

9. キリスト者である夫とその妻との関係 (3章7節)

信者である夫は自分の妻を思いやり、彼女を「自分よりも弱い器」として、また、「いのちの恵みをともに受け継ぐ者」として扱うべきである。夫と妻には、この世に新しい生命をもたらすという能力が授けられている。これは驚くべき特権であるが、今日の利己的な世界にあっては、しばしば軽視される。互いに相手を思いやり、利己的にさええなければ、祈りが妨げられることはない。

10. キリスト者同士の関係 (3章8節)

信者同士の交わりに関して言えば、みな心をひとつにして、同情しあい、兄弟愛を持ち、あわれみ深く、謙遜であるべきである。

11. キリスト者と迫害者との関係 (3章9節—4章6節)

善と悪のために苦しむ（3：9—16）

ベテロはここで、迫害者たちに対するキリスト者の態度について語る。信者は報復するようなことはせず、善をもって悪に報い、そうすることによって祝福を受け継ぐべきである。これは詩篇34篇にも約束されている。普通、人々は正しい人に害を加えたりはしない。しかし、たとえキリスト者が不当に苦しむことがあったとしても、それは幸いなことである。恐れることなく行動し、キリストを主とあがめ、正しい良心をもって、だれにでも弁明できるよう準備しておくべきである。

キリストが私たちのために受けた苦しみ（3：17—22）

善を行って苦しみを受けるほうが、悪を行って苦しみを受けるよりもよいのは明らかである。そのうえ、キリストが私たちの模範である。正しいお方であるキリストが悪い者たちの身代わりとなって苦しまれたのは、私たちが神のみもとに導くためであった。キリストを死者の中からよみがえらせたのと同じ聖霊によって、キリストは、ノアの時代の不信仰な人々にみことばを宣べ伝えた（彼らは今では捕らえられている）。その当時、救われたのは、箱舟に入った4組の夫婦だけだった。バプテスマは外面的な汚れを取るものではなく、神への正しい良心を与えるものである。キリストが復活され、栄光をお受けになったことによって、私たちは、罪の問題がただ1度で解決したことを確信するからである。

キリストゆえの苦しみ（4：1—6）

キリストは不当な苦しみをお受けになったのだから、私たちも同じ心構えを持つべきである。罪よりもむしろ迫害と苦難を選ぶとき、罪の力は消え失せる。私たちは、官能的な欲望ではなく、神のみこころに支配されるようになる。かつて私たちは罪の生活、落ちぶれた生活をしてしたが、それは過去だけで十分である。私たちが罪深い快樂に加わらないので、この世は私たちをののしる。彼らは神に申し開きし

なければならなくなるが、私たちは神に弁護してもらうことになる。そういうわけで、迫害された後、殺された信者たちにも福音が宣べ伝えられたのである。人々は彼らを処刑したが、彼らは神に弁護され、今では神とともに永遠のいのちを楽しんでいる。

12. 終わりの日のための緊急命令（4章7—11節）

「万物の終わりが近づきました」という一文をもって一連の訓戒が始まる。これらの訓戒は、「落ち着いた祈り」、「絶えることのない愛」、「心からのもてなし」、「無私の奉仕」に要約できる。語ることであれ、奉仕することであれ、すべては神の栄光のためになされるべきである。

13. 苦難に関する勧めと説明（4章12—19節）

信者は、たとえ苦難や迫害に遭ったとしても、それがまるで異常なことのように驚くべきではない。キリストの苦しみにあずかるとき、信者は、キリストの栄光にあずかる日のことを確信する。また、聖霊が自分たちの上にとどまっておられることに慰められる。自分自身の罪のために苦しみを受けるのは恥ずかしいことだが、キリスト者として苦難に遭うことは特権であり、神をあがめる機会となる。主はご自分の民を最初に扱われる。その後、この世をおさばきになる。信者たちがいま苦しみを受けているなら、救われていない者たちは一体どれほどの苦しみを永遠に受けることだろう。だから、苦しんでいるキリスト者は善を行い、真実な創造者を信頼すべきである。

14. 集会に対する勧め（5章1—11節）

長老に対する勧め（5：1—4）

ペテロは、仲間の長老たちに、「神の群れを牧するように」と勧めている。それも、利得を求める心からではなく自発的に、また、駆り立てるのではなく導くことによって。彼らの報酬は、しばむことのない「栄光の冠」である。

群れに対する勧め（5：5—11）

若い信者たちは、自分の集会の長老たちに従うべきである。私たちはみな、「へりくだり、思い煩いから解放されているように」と勧められている。私たちは悪魔に立ち向かうべきである。また、現在の苦しみの向こうには永遠の栄光が待ち受けていることを忘れてはならない。

15. 終わりのあいさつ（5章12—14節）

使徒ペテロはシルワノ（シラスはシルワノの省略形）にこの手紙を口述し、手紙の読者たちに、「キリスト者の信仰が真の信仰であること」を確信させ、「その信仰に堅く立つように」と励ました。最後に、「愛」と「平安」をもって終わりのあいさつを書き送っている。

ペテロの手紙 第二

はじめに

本書簡のメッセージ

本書簡は、テサロニケ人への手紙第二およびテモテへの手紙第二と同様、「終わりの日」における集会の状態——そのとき、キリスト教界は徹底的に墮落するだろう——について語っている。ペテロは、「御国は確実に来るのだから（そのとき、報酬が明らかにされる）、キリスト者はその品性を磨くように」と訴えている。また、にせ教師たちは最終的にはさばかれるが、その前に多くの人を欺くと警告している。終わりの時代に「あざける者ども」が現れて、キリスト来臨に関する真理を否定することについても語っている。ペテロは、再臨とこの世のさばきに関する真理を再び主張する。そして、「キリストが再び来られるのだから、勤勉で、きよく、信仰を堅くし、恵みにおいて成長するように」と信者たちに勧めている。

本書簡の執筆年代

ペテロがこの手紙を書いたのは、おそらく紀元66年か67年であろう。

本書簡の概要

1. あいさつ（1章1，2節）
2. 「キリスト者のすぐれた品性を磨くように」という訴え（1章3—21節）
3. 預言されたにせ教師たちの出現（2章）
4. 預言された「あざける者ども」の出現（3章）

1. あいさつ（1章1，2節）

ペテロは自ら進んで「しもべ」となり，神に選ばれて「使徒」となった。彼は，主の「義によって」使徒たちと同じ信仰を受けたすべての人に宛てて，この手紙を書いている。そして，彼らの上に恵みと平安があるようにと祈っている。

2. 「キリスト者のすぐれた品性を磨くように」という訴え（1章3—21節）

実を結ぶ「信仰の成長」（1：3—11）

ペテロは，まず，「キリスト者のすぐれた品性を磨くように」と訴えている。神は，その力と約束によって，私たちがきよくなるための備えをしてくださった。キリスト者の8つの特質，すなわち，信仰，徳，知識，自制，忍耐，敬虔，兄弟愛，愛を養い育てることは私たちの責任である（3，4）。そうすれば私たちは，役に立たない者，実を結ばない者，近視眼の者，盲目の者，忘れっぽい者になることはない（5—9）。恵みのうちに成長することによって，私たちは，自分の召しと選びを確かなものとし，つまづくことなく，永遠の御国に入る恵みを豊かなものとする（10，11）。私たちが御国に入るのは新生によってであるが，豊かに入るのは，キリストに似た品性を磨くことによってである。

間近に迫ったペテロの死（1：12—15）

自分の死が近いことを知ったペテロは，キリスト者の品性が大切であることを聖徒たちに絶えず思い起こさせることを特に心がけた。メッセージを文書にしたためておけば，神の民は神の基準をいつでも思い起こすことができる。

近づいているキリストの来臨（1：16—21）

ペテロは、次に、来たるべき栄光の確かさについて語る。変貌^{へんぼう}の山での出来事は、キリストの再臨とその輝かしい王国を前もって少し経験させるものだった。ペテロの証言は、彼が実際に見たこと、聞いたこと、居合わせたことに基づいていた。キリストの変貌によって、再臨に関する旧約聖書の預言の正しさが立証された。これらの預言は、人間の解釈や一時の感情によるものではなく、神の靈感によるものであった。

3. 預言されたにせ教師たちの出現（2章）

有害な偽りの教義（2：1—3）

ペテロは、にせ教師たちが必ず現れると予告し、彼らのずる賢い策略、間違った教義、彼らの繁栄、彼らの好色、真理への中傷、貪欲^{どんよく}、人を欺いて食べ物にすること、彼らに差し迫った滅びについて述べている。

にせ教師たちの運命（2：4—10前半）

神は旧約時代に、3つの背教——罪を犯した御使いたち、ノアの大洪水以前の人々、ソドムとゴモラの人々——をおさばきになった。神は、敬虔な者を救い出すことも、不義な者（特に不品行な、反逆的な者）を懲罰の下に置くこともできる。

にせ教師たちの悪行（2：10後半—22）

にせ教師たちは尊大で、理性のない、無知な者たちである。彼らは滅びに定められている。彼らは浮かれて飲み騒ぎ、常にふしだらで、預言者バラムのように貪欲^{どんよく}の道にたけている（10後半—16）。彼らには真っ暗なやみが用意されている。彼らは自分を信奉する者たちの期待を裏切る。彼らは、仰々しいことばと官能的なわなをもって、よりよい人生を望む人々を誘惑する。人々に自由を約束しておきながら、自分自身が滅びの奴隷であるにせ教師たちは、「かも」にした人々を

以前よりもさらに悪い状態に導く。これら盲従者たちは、まるで、自分の吐いた物に戻る犬や泥の中ころがる豚のように、義の道を知ったあとでこの世の汚れに逆戻りした。そうなるくらいなら、最初から何も知らなかったほうが彼らにとってはよかったのである（17—22）。

4. 預言された「あざける者ども」の出現（3章）

預言者たちと使徒たちのことばを思い起こすこと（3：1，2）

ペテロは、この第二の手紙の中で、読者たちに、旧約聖書のみことばと新約聖書の命令を思い起こすようにと勧めている。

“^{せい}一論者” たちのでたらめ（3：3—7）

信者は次のことを知っておくべきである。すなわち、終わりの日に、あざける者どもが現れ、道徳的に墮落したその者たちがキリストの再臨を否定することを。彼らは「神が人間の歴史に介入することは決してない」と教えるだろう。彼らは、ノアの洪水によって当時の世界が滅びたことをわざと無視し、この世界がいつか火によって滅びることに心を留めない。

主の忍耐（3：8—10）

信者は、「主が時間によって制限されないこと」、「主は約束を守るお方であること」、「主の再臨が遅れているのは、できるだけ多くの人が悔い改めるためであること」を忘れてはならない。ここで用いられている「主の日」は、主の日の最終局面を意味しており、その日には宇宙と大気圏と地球が火によって滅ぼされる。

来たるべき「神の日」を待ち望むこと（3：11—18前半）

それまでの間、神の民は、きよく、敬虔であるべきであり、「神の日」、つまり新しい天と新しい地という永遠の状態を待ち望むべきである。また、神の民は温和で、汚れなく、鋭敏であるべきであり、神がさば

きを遅らせておられるのは、人が救われるためであることを理解すべきである。パウロも、神の忍耐は人に救いの機会を与えるためであると教えた。彼は、理解しにくい多くの真理を私たちのために書き記した。無知な、心の定まらない人々は、それらの真理を曲解し、自分自身に滅びを招いている。信者はそのような考え違いを警戒しなければならない。誤りに陥らないためにも、主イエスの恵みと知識において成長すべきである。

主を賛美する（3：18後半）

終わりのしょうがい頌栄は、「今も永遠の日に至るまでも」栄光を救い主に帰している。

ヨハネの手紙 第一

はじめに

本書簡の背景

この手紙が書かれたのは、グノーシス主義として知られている異端に反駁^{はんぱく}するためでもあった。この異端は、主イエス・キリストの神性と人間性を様々な形で否定した。グノーシス派の者たちは、「さらにすぐれた知識だ」と公言しながら、次のように説いた。つまり、キリストとは、神から発する放射物のようなものであり、イエスがバプテスマを受けたときにイエスに宿り、彼を感化し、ゲツセマネの園で彼から去ったのだと。したがって、イエスはキリストではないと彼らは教えた。死んだのは人間イエスであって、キリストではないのである。

真の交わりに関するテスト

こうした異端者と真の信者とを見分けるために、ヨハネは、実際的な基準をいくつか挙げている。すなわち、従順、愛、義、健全な教え、キリスト者としての交わりの継続、この世との訣別^{けつべつ}である。日常生活においてこうしたテストに合格した者だけが、神の家族における交わりを知っているのである。

本書簡の主題

この手紙のあらましを述べるのは難しい。いくつもの主題が織り込まれているからである。それらは、消えたかと思うと、すぐに再び現れる。これによって、「実生活におけるテストというものは、分類されるべきものではなく、『振る舞い』という名の織物そのものの中に

織り込まれるべきものである」ということが示唆されているのかもしれない。

本書簡の執筆年代

ヨハネはこの手紙をおそらく紀元90年から95年の間に書いたのだろう。

本書簡の概要

1. 序文——キリスト者の交わり（1章1—4節）
2. 交わりを保つ手段（1章5節—2章2節）
3. キリスト者の交わりのうちにいる人々の特徴——従順と愛（2章3—11節）
4. 交わりにおける成長の段階（2章12—14節）
5. 交わりにとってのふたつの危険——この世とにせ教師たち（2章15—28節）
6. キリスト者の交わりのうちにいる人々の特徴（続き）——交わりがもたらす義と愛と確信（2章29節—3章24節）
7. 真理と偽りを見分けることの必要性（4章1—6節）
8. キリスト者の交わりのうちにいる人々の特徴（続き）（4章7節—5章20節）
9. 終わりの訴え（5章21節）

1. 序文——キリスト者の交わり（1章1—4節）

キリスト者の交わりに関する教義上の土台はイエス・キリストご自身である。ヨハネが強調しているのは、主の永遠性であり、主が受肉され、聞くことも、見ることも、じっと見ることも、触れることもできる本物の「人」となられたことである。使徒たちの証言は、主にある信仰にとっての確かな基盤である（1—3前半）。御父、御子、および他の信者たちとの交わりは全き喜びに通じている（3後半、4）。

2. 交わりを保つ手段（1章5節—2章2節）

罪を認めること（1：5—10）

神との交わりのうちに歩むためには、やみの中ではなく光の中を歩まなければならない。また、自分自身に関する真理、すなわち、自分が罪深い者であり、罪を犯してきたことを認めなければならない。

罪人を弁護してくださるお方（2：1，2）

神の理想は、信者が罪を犯さないことである。しかし、罪を犯してしまった場合の備えがある。キリストは「罪人を弁護してくださるお方」であり、「なだめの供え物」である。

3. キリスト者の交わりのうちにいる人々の特徴 ——従順と愛（2章3—11節）

従順のテスト（2：3—6）

従順を試す3つの項目がある。すなわち、主の命令を守ること、主のみことばを守ること、主が歩まれたように歩むことである。私たちは、聖書に記されているみことば、主から知らされたみこころ、主の模範的な歩みに導かれて進むべきである。

愛のテスト（2：7—11）

次は兄弟愛のテストである。これは古くて、しかも新しい命令である。イエスは初めから愛を教え、愛に生きられたがゆえに、この命令は古い。また、愛は今でもイエスの従者たちのうちに見られるべきものであるがゆえに、この命令は新しい。愛は紛れもなく真の信者の特徴である。憎しみは、道徳的なやみの中にいる者たちの特徴である。

4. 交わりにおける成長の段階（2章12—14節）

交わりにおけるキリスト者の成長には異なった段階がある。すなわ

ち「父たち」、「若い者たち」、「子どもたち（小さい者たち）」である。御父と御子に関する理解や評価に様々な段階があり、信仰における戦いの程度にも様々な段階があるからである。

5. 交わりにとってのふたつの危険——この世と にせ教師たち（2章15—28節）

世俗的であることの危険（2：15—17）

世を愛することは、御父を愛することと全く相いれない。世俗的であることは、過ぎ去って行くものを愛することである。しかし、神のみこころに従えば永遠の報酬を得る。

にせ教師たちの危険（2：18—28）

にせ教師たちは反キリストの霊を持っている。彼らはキリスト者たちの交わりから離れて行くことによって、自分たちが真に生まれ変わっていないことを示す。真の信者は、与えられた聖霊によって真理を知ることができる（20）。「イエスはキリストである」と心から告白するかどうかで、その教えが本物かどうかが分かる。イエスとキリストとを区別しようとする者は「偽り者」であり、「反キリスト」である。神を御父と呼ぶ資格は彼らにはない（21—23）。キリスト者のメッセージは信者を過ちから守る。聖書が告げていることによって、すべてのものを試すべきである（24, 25）。キリスト者は、「私は聖書以外の、聖書よりもすぐれた知識を持っている」と主張する者たちにそそのかされる必要はない。聖霊が、神のみことばの真理のうちに神の民を導く。だから彼らには、聖書が告げていること以外の教えを説く者たちは必要ない（26, 27）。ヨハネは愛する子どもたちに「キリストのうちにとどまっているように」と勧めている。それは、救い主が戻って来られるとき、ヨハネを始めとした使徒たちが確信を持ち、恥じることののないためである（28）。

6. キリスト者の交わりのうちにいる人々の特徴 (続き) —— 交わりがもたらす義と愛と確信 (2章29節—3章24節)

義(2:29—3:10前半)

生活におけるもうひとつのテストは義である。義は神との関係を証立てる(29)。信者が神の子であることは、たとえこの世が認めなくとも真実である。私たちは、自分が今後どうなるのかは知らないが、道徳的に主イエスに似た者になることは知っている。この真理には私たちをきよめる効果がある(3:1—3)。キリスト者が習慣的に罪を犯すことはない。罪を犯すことは、神のみこころ、キリスト来臨の目的、キリストのご性質、キリストとの一体に関する真理に反するからである(4—6)。神の子どもたちは義を行い、一方、悪魔の子どもたちは習慣的に罪を犯す。悪魔のしわざを打ちこわすことがキリストの初臨の目的であった。神の子どもが習慣的に罪を犯すことは道徳的に不可能である。彼らは義を行うことによって悪魔の子どもとの違いを示す(7—10前半)。

愛のテスト(3:10後半—24前半)

愛のテストが再び登場する。愛は最初のときからずっと私たちの義務である。カインはその最初の違反者であった。この世は義人を憎むことによって彼の模範に倣ってきた。私たちは、キリスト者の兄弟を愛することによって、自分が死からいのちに移ったことを確信できる。憎しみは殺人であり、人殺しをする者はだれひとり永遠のいのちを持っていない。愛における最も偉大な模範は、キリストが私たちのためにご自身を犠牲にしてくださったことである。私たちは、自分のいのちを兄弟のために捨てることによって、また、自分の持ち物を貧しい人々に分け与えることによって、愛を示すことができる。そのとき、私たちの愛は真実で、生きたものとなる。そのような愛は、祈り

においても私たちに確信を与える。キリストに対する信頼と信者相互の愛によって、安らかな良心が与えられ、自責の念から解放され、求めるものを受けるといふ確信を得ることができる。

確信（3：24後半）

主の命令を守るとき、私たちは、主が自分のうちにおられることを内住の聖霊によって知る。

7. 真理と偽りとを見分けることの必要性 （4章1—6節）

テーマはここで「教義」に戻る。真の教者は、「イエスがキリストであり、神が人となって来られたお方である」と告白する。にせ教師たちは反キリストの霊を持っている。彼らは受肉に関する真理を否定する（1—3）。彼らに対する勝利は聖霊の力によるものである。反キリストたちはこの世から出た者たちであり、彼らの権威もこの世のものである。この世は彼らの言うことに耳を傾ける。真の信者は使徒たちの教えを認める（4—6）。

8. キリスト者の交わりのうちにいる人々の特徴 （続き）（4章7節—5章20節）

愛（4：7—21）

テーマは再び愛に戻る。愛は、神のご性質と一致する義務であり、神から生まれたことの証拠である。神の愛には3つの時制がある。すなわち、過去において、神は私たちに御子をお与えくださった。現在、神は私たちの内におられる。将来、神の愛は、さばきの日にも私たちに大胆さを与える。神への愛は、神がまず私たちを愛してくださったことに対する答えであり、兄弟を愛することによって証明される。もし神を愛するならば、兄弟をも愛さなければならない。

健全な教え（5：1前半）

教義という「糸」が再び「織物」の表面に現れてくる。

健全な教えによってもたらされる愛と従順（5：1後半—3）

「イエスがキリストである」と信じることから生じる結果は4つある。すなわち、新生、神に対する愛、信者仲間に対する愛、神の命令に対する従順である。

信仰（5：4，5）

信者は信仰によって世に勝つことができる。それは、目に見える、一時的なものの向こうに、目に見えない、永遠のものを見ることによる。真の信仰の土台は、「イエス・キリストが神の御子である」ということである。

健全な教え（5：6—12）

主の公生涯にはふたつの「終点」があった。主のバプテスマ（水）と十字架上の贖いの死（血）である。グノーシス派の者たちが教えていたように、バプテスマだけではなく、バプテスマと十字架である。御霊は常にこの真理をあかしする（7）。主イエス・キリストご自身とそのみわざに関する真理をあかしするものが3つある。すなわち、「聖霊」と「イエスのバプテスマ」——そのとき、神はイエスが御子であることを公にお認めになった——と「主が十字架上で流された血」である。御子に関する神の証言を信じることによって永遠のいのちがもたらされる。神を信じない者は、「神は偽り者だ」と言っているのに等しい。救いはキリストご自身のうちにある。キリストを持っていない者はいのちを持っていない（8—12）。

みことばによる確信（5：13）

キリストを信じている者は、神のみことばの権威に基づいて、自分

が救われていることを実際に知ることができる。

祈りにおける確信（5：14—17）

信者は、「神のみこころにかなう祈りは必ず聞かれる」という確信を持っている。不信仰に陥ったキリスト者も、祈りによって回復される。その罪は「死に至らない罪」である。しかし、グノーシス（異端）のような背教者は「死に至る罪」を犯したのである。私たちは、そのような者のために祈れとは命じられていない。

霊の世界に関する知識（5：18—20）

この手紙は、キリスト者の信仰に関する事実をいくつか述べて終わっている。それらはすばらしい事実であり、紛れもない事実である。キリスト者が習慣的に罪を犯すことはない。キリストが彼らを悪い者から守ってくださるからである。信者は神からのものであり、一方、不敬虔なこの世は悪い者の支配下にある。神の御子が来られ、私たちに神を啓示してくださった。私たちは御子のうちに、すなわち、まことの神のうちにいる。私たちは間違った神観念から自分を守るべきである。

9. 終わりの訴え（5章21節）

そうすることによって、私たちは偶像から自分を守ることになる。

ヨハネの手紙 第二

はじめに

本書簡の起源

有名な「長老」だった使徒ヨハネは、あるキリスト者の夫人とその子どもたちに宛てて、おそらくエベソからこの手紙を書いた。ある聖書学者たちは、「夫人とその子どもたち」とは（名前が記されていないのだから）ある地域集会とそのメンバーを指す文学的な表現だと信じている。

本書簡の概観と執筆年代

本書簡は、にせ教師たちに対して秘密主義的な方法を採用することを強調している。私たちは、キリストに関する教理——その絶対的な神性と罪のない人間性——を持っていない者をみな拒まなければならない。この手紙が書かれたのは、おそらくヨハネの生涯の晩年、つまり紀元85年から90年頃であろう。

本書簡の概要

1. あいさつ（1—3節）
2. 使徒ヨハネの喜び——従順な子どもたち（4節）
3. 使徒ヨハネの命令——愛のうちを歩むこと（5, 6節）
4. 使徒ヨハネの懸念——にせ教師たち（7—11節）
5. 使徒ヨハネの希望——直接会って語ること（12, 13節）

1. あいさつ（1—3節）

ヨハネは、あるキリスト者の夫人とその子どもたちに宛てて、キリ

スト者の歩みにおける真理と愛の重要性を強調しつつ、手紙を書いている。

2. 使徒ヨハネの喜び——従順な子どもたち（4節）

普通のあいさつの後、ヨハネは、彼女の子どもたちが神のみことばの真理に従って生きているのを知って喜びを表明している。真理は、単に信じるべきものではなく、そのために生きるべきものであることに注意せよ。私たちの生活は真理をあかしするものでなければならない。

3. 使徒ヨハネの命令——愛のうちを歩むこと （5, 6節）

ヨハネは彼女に、「信者仲間を愛し、主の命令に従って歩むように」と勧めている。

4. 使徒ヨハネの懸念——にせ教師たち（7—11節）

しかし、彼女は、主イエスご自身に関する真理を否定するにせ教師たちに気をつけるべきである。もし、彼女とその家族がその真理に堅く立っているなら、ヨハネの労苦はむだになることがなく、その家族は十分な報酬を得る。惑わす者であり、反キリストであるにせ教師たちは、聖書に書かれていることを逸脱しており、「後に付け加えられた、さらにすぐれた啓示を持っている」と公言していた。にせ宗教の特徴は次のようなものである。すなわち、「聖書プラス他の書物（もしくは教義）」である。彼女は、そのような宗教の崇拝者を自分の家に入れてはならない。そんなことをすれば、彼らの側について救い主にそむくことになる。それは不忠実というものである。

5. 使徒ヨハネの希望——直接会って語ること （12, 13節）

Ⅱ ヨハネ

ヨハネはもっと書きたかったが、彼らのもとにすぐに行きたかった。そうすれば、彼らはみな喜びに満たされる。だから彼は、選ばれた夫人の姪めいと甥せいたちからのあいさつをもって手紙を書き終えた。

ヨハネの手紙 第三

はじめに

本書簡の起源

この手紙は、ヨハネの手紙第二と同様、おそらくエペソで、愛する信者ガイオ（男性）だけに宛てて書かれたものであろう。

本書簡の概観と執筆年代

「秘密主義」が特徴であるヨハネの手紙第二とは異なり、ヨハネはこの手紙の中で、「巡回伝道者たちに門戸を開放するように」と勧めている。彼は、その集会におけるデオテレベスの独裁的な振る舞いを激しく非難している。そして、真理によっても、他の人々の判断によっても、その信仰の確かさが証明されていたデメテリオを推奨している。この手紙は、おそらくヨハネの生涯の晩年、つまり紀元85年から90年頃に書かれたものであろう。

本書簡の概要

1. 敬虔なガイオ（1—8節）
2. 独裁的なデオテレベス（9—11節）
3. 高潔なデメテリオ（12節）
4. 使徒ヨハネの計画と祝^{しゅくごう}（13—15節）

1. 敬虔なガイオ（1—8節）

ガイオの霊の健全さ（1—4）

ガイオは、ヨハネが大いに愛した兄弟であったが、彼の肉体上の健康はその霊的繁栄と釣り合うものではなかった。ヨハネの最大の喜び

は、彼がキリストに導いたガイオのような聖徒たちが、信仰に堅くとどまっているのを知ることであった。

ガイオのもてなしと氣前のよさ（5—8）

ガイオは「もてなし」という奉仕をすでに忠実に行っていた。彼の家は主のしもべたちのために常に開放されていた。自分の必要すべてを主に拠り頼んでいる人々を氣前よく援助し続けることによって、真理の前進に一役買っていたのである。

2. 独裁的なデオテレベス（9—11節）

ヨハネはここで、その集会の事実上の独裁者であった、横柄なデオテレベスを遠慮なく非難する。暴君のようなこの男は、集会宛てのヨハネからの手紙を横取りし、ヨハネを不当に非難し、敬虔な兄弟たちの受け入れを拒み、彼らを受け入れた人々をすでに除名していた。ヨハネは、次の訪問の際に、彼を処罰するつもりである。それまでガイオは、悪を見習わずに善を見習うべきである。悪を行う者は神を知らない者である。

3. 高潔なデメテリオ（12節）

デオテレベスとは対照的に、デメテリオの評判は（真理に関する限り）大変よいものだった。彼は真理について証言したが、さらに重要なことは、真理も彼について証言したのである。

4. 使徒ヨハネの計画と^{しゆくとう}祝禱（13—15節）

ヨハネは再び、これ以上書くのをやめることにした。すぐにガイオのもとに行きたいと願っていたからである。それまでは——平安があるように！

ユダの手紙

はじめに

著者について

ユダは、おそらく私たちの主の「異父兄弟」であったが、^{けんそん}謙遜にも自分のことを「ヤコブの兄弟」と述べている（ヤコブは初代教会においてよく知られていた）。けれども、彼らが自分たちの「異父兄弟」を信じたのは、主が復活された後のことであった。

著者の態度

ユダはこの短い手紙の中で警報を発している。集会の集まり、特に「愛餐」に侵入している反キリストの背教者たちに対して鋭い警鐘を高らかに鳴らしている。彼らは不道德な生き方をしていたにせ教師たちであった。

執筆年代

ユダの手紙とペテロの手紙第二との間には、ことばの上で密接な類似点があるため、ほとんどの聖書学者は、一方が他方を用いたと信じている（両者が共通の資料を用いたと信じている学者もいる）。おそらく、ユダがペテロのを用いたのだろう（ペテロは、1世紀の60年代半ばに殉教した）。ペテロの手紙第二で預言された背教は、ユダがこの手紙を書いた頃には、すでに広がりはじめていたようである。したがって、執筆年代は紀元66年から80年までの間と考えるのが妥当であり、その結果、本書簡は新約聖書の中で最も後の時代に書かれた書巻のひとつということになる。

本書簡の概要

1. あいさつ（1，2節）
2. 仮面をはがされた背教者たち（3—16節）
3. 背教に対する信者の防備（17—23節）
4. 壮麗な祝^{しめくとう}（24，25節）

1. あいさつ（1，2節）

ユダはおそらくイエス・キリストの「異父兄弟」であった。しかし、たとえ別のユダであったとしても、とにかく「ユダ」は主のしもべであった。彼は、「神に召され、愛され、イエス・キリストのために守られている人々」に手紙を書いている。彼があいさつに用いたことばは「あわれみ」「平安」「愛」である。彼は、この3つの祝福が（少しではなく）豊かに与えられるようにと祈っている。

2. 仮面をはがされた背教者たち（3—16節）

信仰のための戦い（3，4）

ユダは当初、どの信者にも共通するテーマである救いについて手紙を書くつもりだったが、代わりに、その集會にひそかに侵入したにせ教師たちのことを警告することにした。このにせ教師たちは、神の恵みを「罪を犯す自由」に変え、主イエスを否認し、主ご自身とのみわざを否定した（3，4）。

昔の背教者たちとその運命（5—7）

彼らの運命は、旧約時代の3つの背教と同じく、疑う余地のないものである。不信仰なイスラエルの民は、エジプトを脱出した後、荒野で滅ぼされた。神によって定められた自分たちの領域を捨て、神に反逆した御使いたちは永遠に閉じ込められている。ソドムとゴモラの同性愛者たちは永遠の火によって処罰された。

現代の背教者たちとその墮落（8—11）

現代の背教者たちは、不品行にふけり、權威にそむき、御使いのかしらでさえ悪魔の權威に対して言おうとしなかったような無礼なことを支配者たちに対して言っている。彼らは「カインの道」（わざによる救いの道）を行き、「バラムの迷い」（金が目当ての奉仕）に向かって突進し、「コラのようにそむいて」（神の代理人たちに反逆して）滅びた。

墮落し、滅びる運命にある背教者たち（12—16）

彼らは、暗礁、水のない雲、実を結ばない木、海の荒波、さまよう星である（12, 13）。彼らの運命はエノクによって預言された。彼らは、ぶつぶつ不平を言い、人を非難し、みだらな生き方をし、横柄に語り、へつらってばかりいるので、さばかれることになる（14—16）。

3. 背教に対する信者の防備（17—23節）

背教の時代における信者の役割は何か。彼らはまず、使徒たちが警告してきた危険を思い起こすべきである。次に、堅固な靈的狀態——築き上げ、祈り、保ち、待ち望むこと——のうちに自分自身を保つべきである。最後に、背教者たちの犠牲となった人々——疑いを抱く人々、危険にさらされた人々、汚された人々——に奉仕する際には識別力を働かせるべきである。

4. 壮麗な祝^{しゆくとう}（24, 25節）

ユダは、聖書の中で最もすばらしい祝^{しゆくとう}のひとつをもって、この手紙を終えている。この祝^{しゆくとう}は、今でも非常に広い範囲にわたって用いられている。この祝^{しゆくとう}は、私たちを守り、完全なものにしてくださるお方、私たちの救い主に、永遠に最高の榮譽を帰している。神は、私たちをつまづかないように守り、傷のない者として、この上ない喜び

ユダ

をもってご自分の栄光の御前に立たせることができになる。神は栄光、尊厳、支配、権威を、今も、またいつまでも受けるにふさわしいお方である。

ヨハネの黙示録

はじめに

本書の領域

これは「さばき」と「栄光」に関する書である。教会時代に始まり、患難時代、キリストの地上再臨、千年王国、大きな白い御座のさばき、永遠なる新天新地のことが順を追って記されている。

本書の著者と執筆年代

使徒ヨハネが本書を執筆したとき、彼は囚人としてパトモス島にいた。おそらく紀元81年から96年までの間のことだろう。神は、未来の出来事を驚くばかりに示すことによって、すなわち、聖なるみことばの最後の書巻を私たちに与えることによって、その投獄をも益と変えてくださったのである。

本書の概要

1. 序文（1章1—8節）
2. 裁判官のような衣を着たキリストの幻（1章9—20節）
3. アジアにある七つの集会への手紙（2, 3章）
4. 患難への序曲（4, 5章）
5. 患難時代（6—18章）
6. キリストの再臨と、栄光あるその王国（19章1節—20章6節）
7. サタンとすべての不信者に対するさばき（20章7—15節）
8. 新天新地（21章1節—22章5節）
9. 結びの警告、慰め、招き、^{しゅくとう} 祈禱（22章6—21節）

1. 序文（1章1—8節）

前書き（1：1—3）

序文の説明によると、これは、今にも起ころうとしている出来事に関して、イエス・キリストがヨハネに啓示されたものである。序文は、「そのメッセージを聞いて、それに従う者には祝福がある」と断言している。

あいさつ（1：4—8）

本書は、小アジアにある7つの集會に宛てられたものだが、いきなり主イエスに対する頌榮しょうえいが記されている。その終わりで、主は、「わたしはアルファであり、オメガである」と自己紹介しておられる。

2. 裁判官のような衣を着たキリストの幻 （1章9—20節）

ヨハネが見たもの（1：9—16）

使徒ヨハネは、「私がパトモス島で囚人であったとき、主が私に現れ、（金の燭台によって表された）7つの集會のための幻をお与えになった」と説明している。イエスは裁判官のような衣を身にまとい、（諸集會の御使いたちを表す）7つの星を持っておられた。

本書を理解するカギ（1：17—20）

ヨハネは最初、その光景に圧倒されたが、主は彼の不安を取り除かれ、「（彼が）見た事」（1章の幻）、「今ある事」（2、3章の7つの集會）、「この後に起こる事」（4章から22章までの、患難時代以降の出来事）を書き記すよう命じられた。7つの星は御使いたち、7つの金の燭台は7つの集會を表していた。

3. アジアにある7つの集会への手紙（2，3章）

審判者である主は、2章と3章で、7つの集会を綿密に調べておられる。これらの地域集会は、ヨハネの時代に実際に存在していたものである。しかし、私たちは、「これらによって写し出された集会の状態は、いかなる時代、いかなる地域においても見受けられるものであり、同時に、集会の歴史を7つに区分した場合のそれぞれを年代順に表したものである」と信じている。

これらの手紙には一定の形式がある。すなわち、まず、様々な角度から主を描写し、次に、それぞれの集会に対する称賛のことが続く（ラオデキヤは除く）。次に、不十分な点に対する非難と悔い改めの勧めがあり（スミルナとフィラデルフィヤは除く）、「御霊が……言われることを聞きなさい」と記されている。最後は、勝利を得る者に対する約束で終わる。

エペソへの手紙（2：1—7）

この集会は、その行い、労苦、忍耐のゆえに、また、悪い者たちを許さなかったこと、にせ教師たちを見抜いたこと、試練と逆境を耐え忍んだこと、そしてニコライ派の人々の行いを憎んだことのゆえに称賛された。けれども、この集会は初めの愛から離れてしまった。エペソの集会は、初めの頃の信仰を思い出し、正しい道からそれてしまったことを悔い改め、もう一度献身的に仕えはじめるべきである。さもないと、そのあかしは途絶えてしまう。勝利を得る者は、いのちの木の実を食べることになる。

この手紙は、使徒時代の終わり頃の集会の状況をよく表している。

スミルナへの手紙（2：8—11）

ここには、患難と貧困に苦しみながらも、霊的には富んでいる集会が記されている。行く手にはさらなる投獄と患難が待ち受けている

が、忠実に仕えた殉教者たちにはいのちの冠が与えられる。勝利を得る者は、決して「第二の死」を経験することはない。

スミルナは、コンスタンティヌス帝以前のローマ皇帝による迫害を非常によく描写している。

ペルガモへの手紙（2：12—17）

ペルガモという町は、アジアにおける皇帝礼拝の本拠地であったため、「サタンの王座」があったと言われている。この集会は、キリストに忠実であり続け、そのメンバーのひとりアンテパスはすでに殉教していた。しかし、彼らは邪悪な教義を教える者たちを大目に見ていた。だから、主が介入される前に悔い改めなければならない。勝利を得る者は、隠れたマナを食べ、（自分だけの名が記された）白い石を受ける。

この集会は、コンスタンティヌス帝から始まる時代——集会在国家によって保護され、異教の影響を黙認していた時代——を表している。

テアテラへの手紙（2：18—29）

このキリスト者の集会は、良い行い、愛、信仰、奉仕、忍耐において成長しつつあった。けれども、預言者だと自称するひとりの女が間違った教えを導入し、偶像礼拝と不品行を行わせた。神は彼女とその従者たちをおさばきになるだろう。残された忠実な信者たちは、「真理をしっかりと保つように」と命じられた。勝利を得る者は、千年王国の間、キリストとともに王国を統治することになる。

テアテラの集会は、中世の霊的暗黒時代（およそ、紀元600年から1500年まで）における集会の姿を描いたものであると多くの教者は考えている。しかし、テアテラの集会の特徴は、今日でも依然として私たちの周囲に存在している。

サルデスへの手紙（3：1—6）

サルデスの集会では、信者の大部分が「いのちのない信仰告白」をしていた。主はこの集会に、「新たな熱意をもって、(少数ではあるが)まだ残されている真の信者たちを励ますように」と呼びかけておられる。この集会がさばきを逃れるためには悔い改める以外に道はない。純粋な信仰を忠実に守り通した少数の信者たちは、白い衣を着てキリストとともに歩むことになる。勝利を得る者の名は、いのちの書から消されることなく、御父と御使いたちの前でキリストによって読み上げられる。

サルデスの集会は、宗教改革後の、形式的かつ儀式的な、国家による教会を常に連想させる。

フィラデルフィヤへの手紙(3:7-13)

主は、良い行い、少しばかりの力、主の御名に対する忠実さのゆえにフィラデルフィヤの集会を称賛しておられる。主は、敵対するグループの者たちが閉じることのできない門を、彼らの前に開けておかれる。また、彼らは来たるべき患難の時から救われる。彼らは、キリスト来臨の希望を支えとして、しっかり耐え忍ぶべきである。勝利を得る者は、力、栄誉、永遠の安全の象徴となり、神、キリスト、新しいエルサレムと公に関連づけられる。

フィラデルフィヤの集会は、伝道の活動が世界中に広がった18世紀および19世紀初期の、大いなる福音伝道の覚醒かくせいを生き生きと述べている。

ラオデキヤへの手紙(3:14-22)

ラオデキヤの集会の「なまぬるさ」は主に吐き気を催させた。この集会は高慢で、自信過剰で、ひとりよがり、無知でもあった。この集会には、神の義と、実地的な義と、真に霊的なビジョンが必要であった。キリストは、「熱心になって、悔い改めるように」と呼びかけておられる。「背教したこの集会を離れ、わたしとの交わりを楽しむ

ように」と招いておられる。勝利を得る者は、主とともに治めるようになる。

ラオデキヤの集会は、終わりの時代における背教した集会の姿を明瞭に描いている。これはキリスト再臨前夜の集会の姿である。この時点以降、黙示録において、集会が再びこの地上に現れることはない。

4. 患難への序曲（4，5章）

大患難時代におけるさばき（6—18章）に突入する前に、4章と5章で天における状況が詳しく述べられている。「この後に起こる事」（1：19）を覆っていたベールがいよいよ取り除かれる。

天の御座とその周辺の様子（4章）

霊において天に移されたヨハネは、栄光の神がさばきの御座に着いておられるのを見た（1—3）。彼は、24人の長老たち——天にいる贖われた人々を表しているのかもしれない——と、4つの生き物——神の御座を守る御使いたちのことかもしれない——も見た。その生き物たちは神のきよさを絶え間なく賛美し、24人の長老たちは神を力ある創造者として礼拝している（4—11）。

この幻は私たちに、これから起こることの準備をさせる。礼拝する被造物たちに取り囲まれた、万物のさばき主が、今にもこの地上にさばきを下そうとしておられる。

小羊はふさわしいお方（5章）

神は7つの封印で封じられた巻き物を持っておられる。それは、御子を拒んだこの世界に注がれる、神の激しい怒りの巻き物である。この巻き物を開くのに値するお方は主イエスのみである。キリストが巻き物を受け取られると、4つの生き物と24人の長老たちは、突然、贖い主としてのキリストを礼拝しはじめた。すると、天と地のあらゆる被造物までもが、永遠に生きておられる小羊を礼拝しはじめた。

5. 患難時代（6—18章）

第1の封印——征服者（6：1，2）

小羊が第1の封印を解くと、白い馬に乗った支配者が、弓を持って現れた。弓は戦争の脅威を感じさせるが、第2の封印が解かれるまで戦争は始まらない。この封印は、血を流すことなく権力を手中に収める、世界的な支配者を表しているのかもしれない。

第2の封印——地上の戦い（6：3，4）

火のように赤い2番目の馬に乗った者は、大きな剣を持ち、地上から平和を奪い去る。

第3の封印——地上のききん（6：5，6）

第3の封印が解かれると、黒い馬に乗った者が現れる。彼が持っている量りと、法外な食糧の値段によって、彼がききんを表していることがわかる。戦争のあとにはしばしばききんが続くものである。

第4の封印——地上の広範囲にわたる死（6：7，8）

4番目の馬は、病気のように青ざめている。乗り手の名は死、つき従う者はハデスである。戦争、疫病、野獣によって、死は地上の住人の4分の1の肉体を要求し、ハデスはそのたましいを要求する。

第5の封印——殉教者たちの叫び（6：9—11）

5番目の封印が解かれると、忠実にあかししたために殺されてしまった殉教者たちが、神に向かって血の復讐^{みくしゅう}を呼び求めている姿が見える。彼らは白い衣を与えられ、「待つように」と告げられる。主の御名のために殺される人々がほかにもいるからである。

第6の封印——天変地異（6：12—17）

第6の封印が解かれると、恐るべき天変地異が起こる。そのあまりのすさまじさのために、社会のあらゆる階層の人々がうろたえ騒ぐことになる。

印を押された14万4千人のイスラエルの民（7：1—8）

第6の封印が解かれた後、次の封印が解かれるまでにひとつの出来事が起こる。その間、2種類の信者の群れが紹介される。まず、イスラエルの各部族から1万2千人ずつ、合計14万4千人のユダヤ人がいる。大いなる神のさばきが地と海と草木の上の下る前に、彼らは額に印を押されなければならない。その印があれば、患難時代を生き延びることが保証される。

大きな患難から抜け出て来た、おびたしい群衆（7：9—17）

2番目の群れは、患難時代をとおして救われる、おびたしい異邦人の群衆である。彼らは、かつてない困難なこの時代を生き抜き、キリストの永遠の御国の祝福を享受する。御使いたちも、長老たちも、生き物たちも、彼らとともに神に礼拝をささげる。

第7の封印——7つのラッパへの序曲（8：1—6）

7番目の、つまり最後の封印が解かれるときには、天に半時間ほどの静けさがある。キリストが「ひとりの御使い」として現れ、悩み苦しんでいる患難時代の聖徒たちの祈りとともに香をささげる。その香は、キリストご自身とのみわざのかぐわしい香りである。復讐ふくしゅうを求める叫びにこたえて、主が燃えさかる香炉を地に投げつけられると、雷鳴といわずまと地震が起こる。

第7の封印は、それに続いて起こる7つのラッパのさばきの序曲であると同時に、おそらく、7つのラッパそのものでもある。

第1のラッパ——草木が打たれる（8：7）

第1のラッパが吹き鳴らされると、地上と木と草の3分の1が、血の混じった^{ひょう}雹と火によって焼き尽くされる。

第2のラッパ——海が打たれる（8：8，9）

第2のラッパが鳴り響くと、大きな燃える山のようなものが海に投げ込まれ、海の3分の1が血に変わり、海洋生物の3分の1が死に、船の3分の1が破壊される。

第3のラッパ——河川が打たれる（8：10，11）

第3のラッパを合図に、「苦よもぎ」という名の、赤々と燃える星が天から落ち、地上の水の3分の1はその源で苦くなり、多くの人が死んでしまう。

第4のラッパ——空が打たれる（8：12，13）

第4のラッパが鳴り響くと、太陽、月、星にまで影響が及び、それらは平常の光の3分の1を失ってしまう（12）。中天を飛んでいる1羽のわしが、「地に住む人々」、すなわち、この世的なものを見方しかない人々の上に下る3つのわざわいを宣言する（13）。

第5のラッパ——底知れぬ穴から出て来るいなご（9：1—12）

天から地上に落ちて来た星（おそらく、墮落した御使いのこと）が「底知れぬ穴」を開くと、煙幕が地上を覆い、恐ろしいいなごの大襲来が不信仰な者たちを5か月間苦しめる。しかし、そのいなごは人間を殺したり、草木に害を加えたりはしない。いなごは、ここでは勝ち進む軍隊のように生き生きと詳しく描かれており、おそらく悪霊どもを表しているのだろう（文字どおりのいなごだと考える人もいるが）。以上が第5のラッパであり、第1のわざわいである。

第6のラッパ——人類の3分の1が死ぬ（9：13—21）

第6のラッパが吹き鳴らされると、4人の御使いがユーフラテス川から解き放され、2億人（多くの写本には1億と記されているが）から成る騎兵隊がそのあとに続く。その結果、人類の3分の1が殺される。しかし、この第2のわざわいにもかかわらず、生き残った者たちは自分たちの悪行を改めようとはしない。

巻き物を持った強い御使い（10：1—7）

ひとりの強い御使い（主イエスかもしれない）が、小さな巻き物を持って天から降りて来る。彼がししのように叫ぶと、7つの雷が鳴り響く。ヨハネには雷の語ることが分かったようだが、それを書き記すことは許されなかった。その御使いは、片方の足を地の上に、もう片方の足を海の上に置いて、「もはや時が延ばされることはない」と誓った。第7のラッパが吹き鳴らされると、神の奥義が成就し、悪を行う者はみな罰せられ、私たちの主であり救い主であるイエス・キリストの栄光ある王国が打ち建てられる。

ヨハネ、小さな巻き物を食べる（10：8—11）

ヨハネが、天からの声に従って、その小さな巻き物を食べると、それは口には甘い、腹には苦かった（8—10）。したがって、預言を学ぶときも、さばきについて黙想する際にはつらい思いがするが、サタンとその軍勢に対する神の勝利を思うと楽しい気分になる。ヨハネは、多くの国民、国語、王たちについて預言する際に、これを経験することになる（11）。

神の聖所を測る（11：1，2）

ヨハネが聖所と祭壇を測り、礼拝者の数を数えたことは「保存、保護」を意味する。測られない「異邦人の庭」は、患難時代の後半の間、諸国民によって踏みにじられる。

ふたりの証人 (11: 3—10)

ふたりの証人がエルサレムに現れ、人々の罪を公然と非難し、神のさばきを警告する。3日半の後、底知れぬ穴から上って来る獣がふたりを殺すが、庶民は、未信者が「クリスマス」を祝うときのように浮かれ騒ぎ、贈り物を交換する。

ふたりの証人、よみがえる (11: 11, 12)

しかし、神はふたりを生き返らせ、人々が見ている前で彼らを天に引き上げられる。このふたりの証人はしばしばモーセとエリヤと同一視される。彼らの奇跡がとてもよく似ているからであるが、これもひとつの解釈にすぎない。聖書に明示されていない場合は、その預言が成就するまで待つのが一番よい。

大地震 (11: 13, 14)

大地震がエルサレムを襲い、都の10分の1を破壊し、7千人のいのちを奪う。生き残った人々は、これがすべて神のみわざであることを認める。第2のわざわい、すなわち、第6のラッパはここで終わる(10章および11章の1節から13節までは挿入部分となっている)。

第7のラッパ (11: 15—19)

第7のラッパ、すなわち第3のわざわいによって大患難時代は終わり、キリストの千年王国が始まる。天にいる24人の長老たちは、神がご自分の敵たちにすばらしい勝利を収められたことと、神に拠り頼む者たちに報酬を与えてくださることを覚えて神を礼拝する(15—18)。天にある開かれた神殿は、神がイスラエルとの契約を忘れておられないことを思い出させる(19)。

竜と悪魔と「男の子」(12: 1—6)

ひとりの女が天に現れ、今にも子を産もうとしている。すると、竜

も現れて、子が生まれたらすぐにその子を滅ぼしてしまおうと待ち構えている。女はイスラエル、竜は悪魔、子はメシヤ（救い主）である。その男の子は天に引き上げられ、女は3年半、つまり患難時代の後半の間、国外に逃れる（現在の教会時代は5節と6節の間にある）。

天における戦い（12：7—12）

天では、ミカエルの軍勢と竜の軍勢（御使いたち）との間に戦いが起こる。ミカエルの勝利によって、竜とその使いたちは地上に投げ落とされる。そして、神が勝利される日が来たことと、神の民が征服する日が来たことが告げ知らされる。この戦いは7年間に及ぶ患難時代の半ばに起こるだろう。

地上における戦い（12：13—18）

自分の敗北を悟った悪魔は、洪水によって女を滅ぼそうとするが、地が開いて水を飲み干したので、その企ては失敗する。するとサタンは、女の（ユダヤ人の）子孫の残りの者を滅ぼすために彼らを追いかける。

海から上って来た獣（13：1—10）

ここで、患難時代のふたりのおもな指導者、つまり、海からの獣（1—10）と、陸からの獣（11—18）が登場する。

最初の獣には10本の角と7つの頭があり、その角には10の王冠があり、頭のうちのひとつには致命傷があった。この獣は、ひょうと熊とししに似ている。この獣は、10の王国を持つ形で復活する未来のローマ帝国の統治者を表しているのかもしれない。彼は「海」（「海」はしばしば異邦人を象徴する）から上って来るのだから、おそらく異邦人なのだろう。この獣は、ダニエル書に述べられているように、かつての世界帝国——ギリシャ（ひょう）、ペルシャ（熊）、バビロン（しし）——の特徴を具体的に表現している。7つの頭は、存在し続けてきた、

旧ローマ帝国のいくつかの地方のことかもしれないし、致命傷を負った頭は、(1度は途絶えたものの)再現される帝政のことであると説明されることがよくある。

小羊のいのちの書に名前が記されていない者は、サタンと獣を拝む。その獣は、自分が治める3年半の間、神を冒瀆^{ぼうとく}することを言う。彼は地上を残酷に支配し、聖徒たちを迫害する。彼らは、自分たちを迫害する者たちがやがて捕らえられ、殺されることを確信しているので、忍耐と信仰をもって待つことができる。

陸から上って来た獣(13:11-18)

陸からの獣とはおそらくユダヤ人の指導者のことだろう。「陸」(もしくは「地」。このふたつは同じ原語)はしばしばイスラエルを象徴するからである。彼は、最初の獣とその像とを拝ませるために、その獣と緊密に協力しながら国際的な運動を推し進める。彼は小羊に似ているが、竜のようにものを言う。彼は奇跡を行い、天から火を降らせたり、偶像にものを言わせたりする。彼は人々に、その額か右手かに、その獣の刻印を受けるように要求する。それなしではだれも、買うことも売ることもできない。獣の数字は666である(6は人間に関する数字である)。獣の像を拝むことを拒否すれば死刑にされてしまう。

小羊と14万4千人の人々(14:1-5)

この章に現れる幻は、年代順に記されていない。

最初の幻では、14万4千人の人々がキリストとともに今にも王国に入ろうとしている。これは患難時代の終わりを待ち望む幻である。彼らは患難時代の初穂であり、千年王国の地に住むことになる。彼らは偶像礼拝にも不品行にも身を汚すことなく、小羊に従い、獣を拝むことを拒んできた。いま彼らは、エルサレムにある御座の前で新しい歌を歌う。

第1の御使いの宣言（14：6，7）

永遠の福音を携えた御使いが、地上に住む人々に向かって、「神が今にもこの世をさばき、すべてを正そうとしておられる」、つまり、「主イエスご自身が戻って来られ、世界を治められる」と警告する。

第2の御使いの宣言（14：8）

第2の御使いはバビロンの崩壊を宣言する。これは患難時代の終わり頃に起こる。これについては17章と18章に生き生きと描写されている。

第3の御使いの宣言（14：9—13）

第3の御使いは、「獣を礼拝する者はみな、永遠の地獄の苦しみを被ることになる」と警告する。この警告は、患難時代の後半、すなわち、大患難時代として知られる3年半の間になされる。殉教者として死ぬ信者たちは、その忠実さのゆえに特別な報酬を受ける。

地の収穫を刈り取る（14：14—16）

再臨のとき、キリストは、御使いたちを遣わして穀物の束（救われた者たち）を集め、ご自分の穀物倉（栄光ある王国）に納められる。もみ殻（不信者たち）は、消すことのできない火で焼かれる。

御怒りのぶどうを刈り取る（14：17—20）

地のぶどうの収穫が描写しているものは、イスラエル（「地のぶどう」）の中の不信仰な者たちに対する最後の恐ろしいさばきである。それはエルサレムの外で起こる。血は、およそ300キロ離れた所まで流れ出し、馬のくつわに届くほどになる。これも患難時代の終わり頃に起こる。

獣に対する勝利（15：1—4）

非常に短いこの章の中には、最後の7つの災害を携えた7人の御使いが登場する。これらの災害が地上に放たれるとき、神の怒りは終わる。言い換えれば、患難時代が終わるのである。ヨハネは、天にいる一群の人々が、火の混じった、ガラスの海のひとつりに立っているのを見る。それが、獣を拝むのを拒んだ人々であると悟る。彼らは確かに殉教の死を遂げたが、いま天でモーセの歌と小羊の歌とを歌っている。彼らは、自分たちを不当に処刑した者たちに下る神のさばきが正しいことを証言する。

鉢のさばきへの序曲（15：5—8）

それからヨハネは、7人の御使いが、天の聖所から祭司のような服装をして出て来るのを見る。4つの生き物のひとつが、それぞれの御使いに金の鉢をひとつずつ手渡す。神によるこの最後のさばきは、神の敵の（一部ではなく）全体に及ぶ。7つの災害が終わるまでは、だれもその聖所に入ることができない。

第1の鉢——ひどい悪性のはれもの（16：1，2）

これまでは、7つの封印のさばきと7つのラッパのさばきについて記されていた。ここからは、神の激しい怒りの7つの鉢、つまり、最後の7つの災害について記されている。7つのラッパのさばきが第7の封印に含まれていることはすでに示唆した。同様に、7つの鉢は第7のラッパに含まれているようである。

天からの声が、7人の御使いに神の怒りの鉢をおちまけるよう命じる。第1の鉢がおちまけられると、獣とその像を拝むすべての者のからだにひどい悪性のはれものができる。

第2の鉢——海が血に変わる（16：3）

第2の災害によって海水は血に変わり、海の生き物はみな死んでしまう。

第3の鉢——水が血に変わる（16：4—7）

第3の鉢のために、飲み水がすべて血に変わってしまう。ふたりの御使いは、「神がこうなさるのは正しい」と言明し、「邪悪な者たちは聖徒たちの血を流したゆえに処罰されているのだ」と述べる。

第4の鉢——人々が太陽に焼かれる（16：8，9）

第4のさばきによって、人間は異常なまでに日焼けし、深刻な太陽の放熱を浴びる。けれども、人間はそれでも悔い改めず、非常に苦痛を自分たちに与えた神をのろう。

第5の鉢——暗やみと苦痛（16：10，11）

神の怒りに苦しむ人々は、ますます心をかたくなにして神を憎む。

第6の鉢——ユーフラテス川が干涸ぶ（16：12—16）

第6の鉢がぶちまけられると、ユーフラテス川が干涸ぶ。東方の軍隊がイスラエルに進軍できるようにするためである。竜と獣とにせ預言者から出て来る、カエルのような3つの霊どもが、戦うために世界中の軍隊を集める。彼らはハルマゲドンの谷で主ご自身と会戦し、徹底的に負かされる。

第7の鉢——地が破壊される（16：17—21）

第7の鉢をもって患難時代は終わる。「事は成就した」のである。地表は地殻の大激変によって荒廃し、人々は神を冒瀆する。1タラント、つまり、約35キロほどもある雹が降って来るといふ恐るべき災害に遭うからである。

ふしだらな女と緋色の獣（17：1—8）

17章と18章には「すべての淫婦と地の憎むべきものとの母、大バビ

ロン』として知られる、宗教的、政治的、営利的巨大組織の滅亡が描かれている。この組織は地上の支配者たちに対して世界的な影響力を持つ。それは「緋色の獣」に乗っている。緋色の獣は、明らかに海からの獣（13：1—10）、すなわち、復活したローマ帝国のことである。バビロンは、富と偶像礼拝と不品行が結びついたものである。それは何世紀にもわたって（キリスト者である）殉教者の血を流すという罪を犯している。

女と獣の意味（17：9—18）

緋色の獣、つまり、復活したローマ帝国がここで詳しく説明されている。10の王国から成るこの帝国は、主イエスが患難時代の終わりに地上に戻って来られるとき、主に戦いを挑むが徹底的に打ち負かされる（14）。帝国は最終的には淫婦に敵対し、彼女を滅ぼしてしまう（16—18）。

大バビロンの滅亡（18：1—19）

この章の大部分は、悪霊の住みかであり、あらゆる悪の巢窟^{そうくつ}であるバビロンの滅亡を祝う葬送歌となっている。天からの声が神の民に、「この組織が滅ぼされる前に、そこを離れなさい」と警告する。自分たちの女主人を失った地上の王たちは嘆き悲しみ、商人たちは自分たちの市場が崩壊したために泣き悲しむ。

バビロン滅亡の最終局面（18：20—24）

しかし、不信仰な者たちが泣いている一方で、天には喜びがある。ひとりの御使いがひとつの石を海の中に投げ入れる。これはバビロンの滅亡を象徴するものである。この冷酷な組織は、数多くの人々の首にくくりつけられた「ひき臼」であった。それは彼らを地獄に引きずり下ろした。今や大淫婦がそれと同じ運命をたどる。それが活動するときの音も、響きも、すべて永遠に沈黙させられる。神は殉教の死を

遂げた聖徒たちの血に復讐^{ふくしゅう}しておられる。

6. キリストの再臨と、栄光あるその王国 (19章1節—20章6節)

天はバビロンの滅亡を大いに喜ぶ(19:1—5)

神は大淫婦に正しい処罰をお下しになった。それゆえに天の大群衆が神を賛美しているのをヨハネは聞く。24人の長老と4つの生き物は神を礼拝し、「神がなされたことは正しい」と叫ぶ。御座から声が聞こえ、「神のしもべはみな神を賛美するように」と求める。

小羊の結婚(19:6—9)

小羊の結婚は、「キリストのさばきの座」の後、天において行われる。からだなる教会が主の花嫁である。婚宴に招かれる者は、天にいる贖われた者たちの中でからだなる教会に属さない者たち、すなわち、旧約時代の聖徒たちと患難時代の聖徒たちである。花嫁は白い麻布を着ているが、これは聖徒たちの正しい行いを示している。御使いが、小羊の婚宴に招かれる者の幸いを告げる。

礼拝とあかし(19:10)

ヨハネがその御使いを拝もうとすると、御使いはそれを禁じる。礼拝すべきお方は神だけだからである。御使いはヨハネに、「すべての預言の真の目的は、主イエスご自身とそのみわざをあかしすることである」と教える。

キリストの再臨(19:11—16)

ついに、その出来事が現れる。それに向かって黙示録の全体が迅速に進んできた。すなわち、キリストがご自分の敵を鎮圧し、ご自分の王国を建て上げるために再びこの地に戻って来られるという出来事に向かって。キリストは、白い馬に乗り、力に満ちた勝利者として、栄

光に輝く衣服を身にまとい、天から来られる。主につき従うのは天の軍勢である。

神の大宴会（19：17，18）

ひとりの御使いが、主によって殺された者たちの肉を食べることをはげたかに勧める。神の大宴会とはこのことである。

反逆者たちの処罰（19：19—21）

ローマの獣とにせ預言者は主に反旗を翻すが、生け捕りにされ、火の池に投げ込まれる。残りの反逆者たちは主の剣で殺され、はげたかに食べられる。

サタン、千年の間縛られる（20：1—3）

千年王国が始まる前に、サタンは底知れぬ穴に投げ込まれ、千年間に及ぶキリストの支配の間、そこに閉じ込められる。

キリストによる千年間の統治（20：4）

ヨハネは、（おそらく教会時代の）神の民が、王座に座り、行政上の権力を握っているのを見る。また、患難時代の殉教者たちがよみがえって、キリストとともに千年間、御国を治めているのを見る。

復活と統治（20：5，6）

5節の前半で述べられているのは、千年王国の終わりによみがえる邪悪な者たちのことである。一方、「これが第1の復活である」という一文は、4節に記されていた聖徒たちの復活のことを指している。これは、実際には第1の復活の第2の局面と言える。最初の局面は、携拳（空中再臨）の際の復活（Iコリント15：51—54）である。第1の復活は祝福であり、第2の復活は永遠の滅びである。

7. サタンとすべての不信者に対するさばき (20章7—15節)

サタンの敗北とその運命 (20：7—10)

千年王国の終わりに、サタンは底知れぬ所から解き放たれ、軍勢を召集して、偉大な王の都エルサレムに進軍する。しかし、天からの火がその軍隊を焼き尽くし、サタンは火の池に投げ込まれる。

大きな白い御座のさばき (20：11—15)

天も地も火によって滅ぼされた後、邪悪な死者は大きな白い御座の前に立ち、キリストによって、それぞれ自分の行いに応じてさばかれる。彼らは、いのちの書に名が記されていないので、火の池に投げ込まれる。名前が記されていないということは、罪を悔い改めず、主を信じなかったということである。それぞれの行いによって、処罰の軽重が決定される。

8. 新天新地 (21章1節—22章5節)

黙示録の最後の2章の中には、ヨハネが千年王国のことを語っているのか、それとも永遠の御国のことを語っているのか、分かりにくい箇所が何箇所もある。両者には非常に多くの共通点があるからである。おもな相違は、千年王国にはまだ罪が存在するが、永遠の御国にはそれが全くないという点である。

新天新地に関する記述 (21：1—8)

ここで述べられているのは、永遠なる新しい天と新しい地である。天から下って来た新しいエルサレムが花嫁——小羊の妻——である。ヨハネは、「神の幕屋が人とともにあり」、「神は彼らの神として彼らとともに住み」、「死、悲しみ、叫び、苦しみは過去のものである」ということを聞く。邪悪な者は新しいエルサレムから永遠に閉め出され

る。

新しいエルサレム (21: 9—27)

次に、新しいエルサレムが天から下って来て、千年王国の間、空中にとどまる。その美しさが宝石に関する用語で述べられている。それは大規模で、この上なく純粹で、平和で、幸いな場所である。

いのちの川 (22: 1—5)

1節から5節に記されていることも、まだ千年王国の光景を描いたものだろう。諸国の民のいやしについて記されているからである。これは永遠の御国では不必要なものだが、この地上では、最後の反乱(20: 7, 8)の際の被害のゆえに必要である。新しいエルサレムには、いのちの水の川といのちの木がある。そこにはのろいも死もない。そこには神の御座があり、主の栄光が都を照らす。それは筆舌に尽くしがたいほど美しい光景である。

9. 結びの警告、慰め、招き、^{しゅくとう} 祝禱 (22章 6—21節)

この書の終わりには、「この信頼すべき啓示のことばを守る者に対する祝福」、「説明してくれた御使いを拜もうとしたヨハネに対する警告」、「預言はまもなく成就するという保証」、「主がすぐに戻って来られるという約束」が記されている。悔い改めない者の運命は、力強い「福音の招き」と結びつけて考えられている。最後ののろいが宣告されているのは、この書の内容を勝手に変更する者に対してである。

神の正しさはついに立証され、キリストは栄光をお受けになり、聖徒たちは永遠の安らぎのうちにおり、サタンは追放され、罪は消えてなくなる。もはや夜はなく、海もなく、太陽も月もいらぬ。のろいも、悲しみも、苦しみも、涙も、死も、汚すものもない。すべてが完結する輝かしいその日を、真の教会は心待ちに待つ。アーメン。

新約聖書ハンディー注解
新約聖書注解シリーズ

1998年11月20日発行
2,000部

著 者 ウィリアム・マクドナルド

訳 者 薦谷 茂夫

発行者 J. B. カリー

発行所 伝道出版社

〒183-0056 東京都府中市寿町 2 - 8 - 9

T E L 042-366-7760

F A X 042-366-7790

郵便振替 00140-9-27336

印刷所 明和印刷株式会社

*落丁本・乱丁本はお取り替えいたします。

伝道出版社の既刊書

過越の中のキリスト	シール&モイシエ・ローゼン	¥1,000
死とその後	H.A. アイアンサイド	¥600
主のいのちを生きる	J.W. ブラムホール	¥1,300
集会の真理と行動	PRECIOUS SEED 選集	¥1,942
姉妹のかぶり物と 神の栄光	ピーター・ウィー	¥292
神の集会への受け入れ	W・バンティング	¥300
日 々 の 光 朝夕のみことば選集	口語訳聖書より	¥2,233
新約聖書の奥義	T.E. ウィルソン著	¥1,000
御 使 い	J.B. カリー著	¥583
全 く 従 う	W. ギルモア著	¥971
らい病人のきよめ	G.C. ウイルス著	¥1,457
